實戰虎卷 新式圍碁祕傳 增訂全

特42
特42-440
1200800193650
440
255
235

始

特42-
440

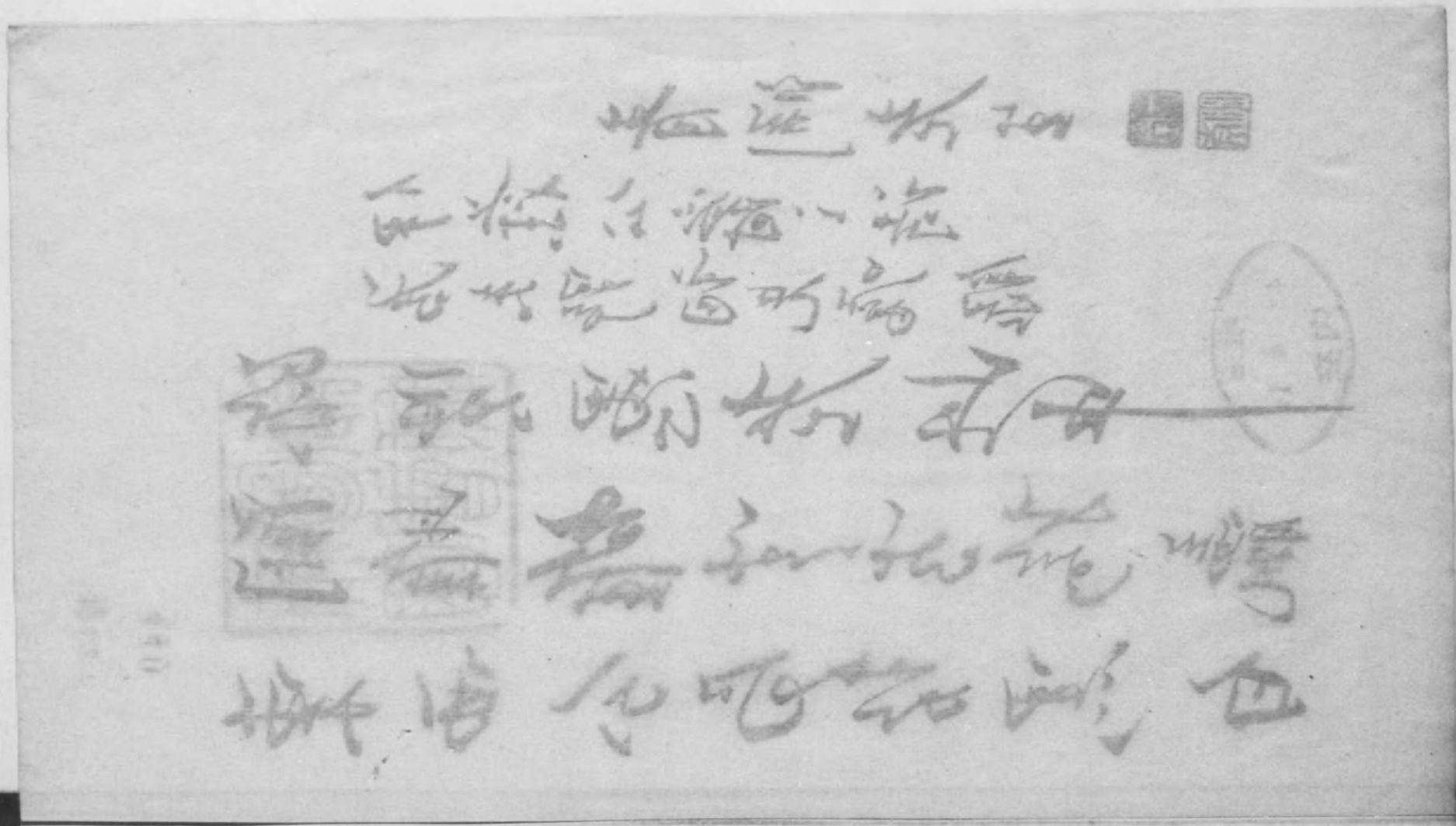
三版

實戰新式 虎卷圍碁祕傳

男爵 瀨澤青淵先生題字
六段 雁金準一先生講述
晃南 矢野由次郎 編
增訂
圍碁祕傳發行所藏版

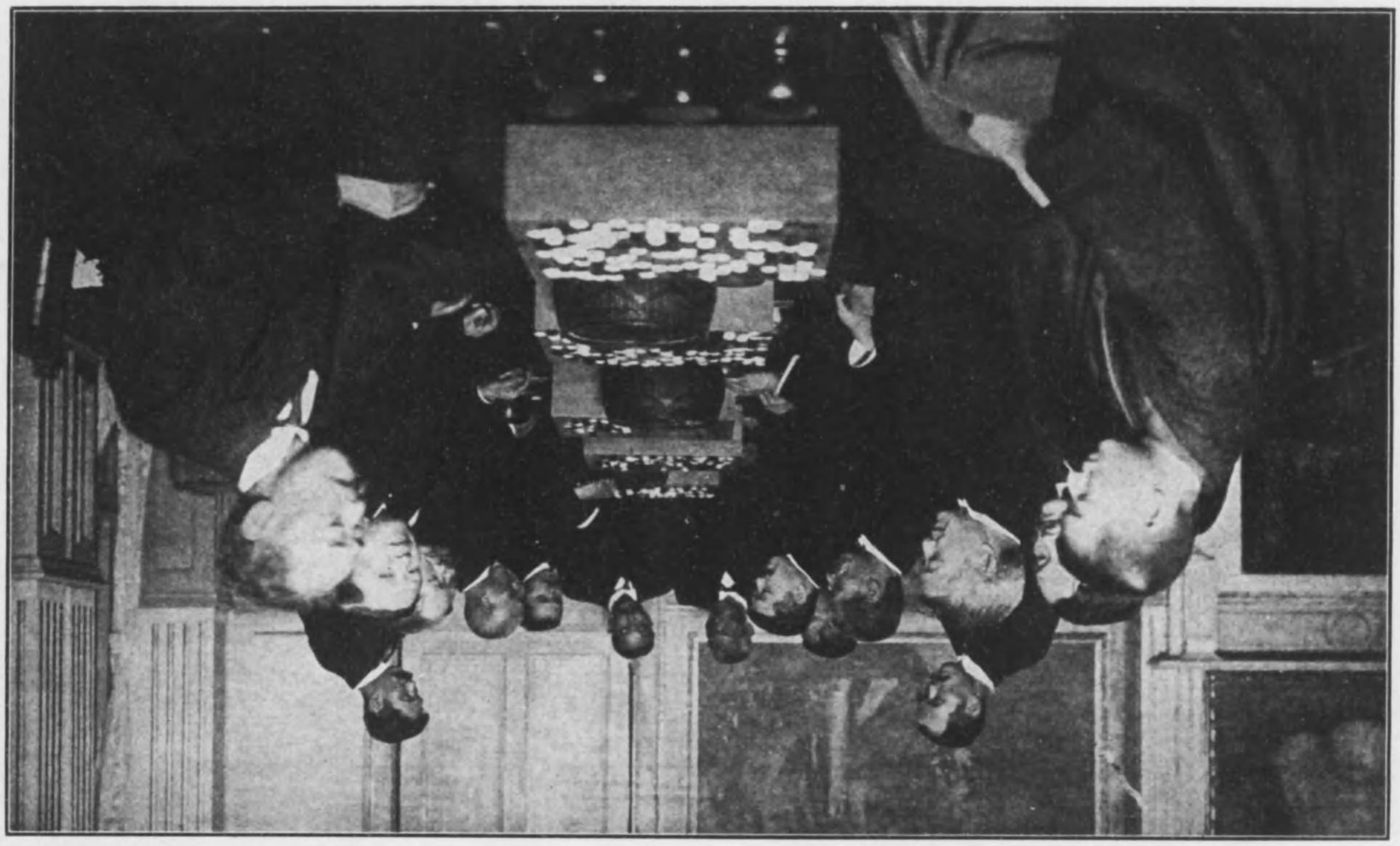
東西分局勢黑白
雄峙爭勝負老此中
為矢野由次郎先嘱錄伊藤公爵之詩
青淵老生

明治
42 4 14
内務



森下岩楠氏
小川鎗吉氏
石川彦太氏
志賀直溫氏
宮本芳之助氏
箕浦勝人氏
永井好信氏
矢野由次郎氏
北川禮弼氏
石沼博氏
石川藤太郎氏
阪田實氏
山田堯扶氏
莊田平五郎氏
山本軟太郎氏
六段 雁金準一氏

寫眞の會葬園社詢委



六圓 五十錢 金庫一 五

山本鎌太郎 五

山田榮井 五

平田平正郎 五

淵田實 五

川端太郎太 五

朝倉 石 五

川端龍 五

矢澤由次郎 五

未井技治 五

人藤部源 五

宮本吉之助 五

法貴直藏 五

小川龍吉 五

太吉川石 五

岩上榮 五

序

古來斯道の著書尠からずと雖も單に棋譜を示すに止りて審に略地攻防の定理を說きたるものとては一も之れあるなく偶〻善惡の批判を加へたるものなきに非ざれども肝腎の處に到れば口傳又は口授に讓るの例あるのみ、また初學者の便を圖りたるものあるを知らず予の之を遺憾とするや久し嘗て雁金先生に諮るに此事を以てす先生亦頗る同感にして後進の爲め**十年來の蘊蓄**を披瀝すべきの快諾を得隨て聽き隨て錄し刻苦年餘にして始めて脫稿するを得たり先生は夙に世人の熟知する如く明治の棋界に於ける屈指の高手にして其の技や殆ご神に入るものあり本書に收むる所古來の口傳秘法と稱して

世に傳へざるものまで悉く說き盡くして餘蘊なし虎ノ巻の稱
決して過分に非ざるを信ず今や先生の檢閲を經之を世に公に
するの機會を得たるは斯道の爲め滿足に堪へざる所なり

編者識

はしがき

●古今無比の小乘經　本編は極く初心の者にも解かり易きやう恰も老婆が愛孫の手を引きて道を辿るが如く親切に解說を施しあるは是れぞ編者が特に先生の勞を煩はしたる處にて高段の士より見れば或は多少煩瑣に過ぐる處なきに非ずこの評あるやも知れざれども幵は全く編者の責なり或棋家本書を評して曰く是れ實に棋界に於ける古今無比の小乘經なりと編者の目的も亦然らんことを希へるに在り然れども大乘の眞理亦恐らくこれに外ならざるを知らざる可らず

●虎の巻のいはれ　本書は第一編に乾坤巽艮の四隅に於ける黑白兩軍の陣立及び攻防の定理は勿論奇正兩道の變をも洩らさず收錄し第二編には古今の有らゆる著書に未だ曾て見ざる所又相應の力ある棋家も容易に斷案を下す能はざる所の單に片隅に止まらずして廣き局面に於ける黑白兩軍の配備幷に攻

防の定理を審に說き示したるは、蓋し破天荒の事例に屬し本書の獨特とする所虎の巻の稱豈に偶然ならんや第三編には是れ又古今の著書に多く見ざる所の然かも先生多年の實戰圖中より精選したる所の黑白兩軍の配備既に成りて戰ひ正さに酣なる刹那に於ける侵掠的秘術に屬するものゝみを收め第四編に於て結ぶに實戰「ヨセ」しらべ」を以てしたるは是れ又古今の著書と其撰を異にする所なるべく棋界に於ける古今無二の典範として後世に傳ふるに足るべきなり

●此隅彼隅の憾　此隅に於ては定石通り打つことを得れども他の隅に於ては然るを得ずとは初心者の口より屢〻聞く所なり未熟の致す所尙ほ一段の熟練を望むの外なけれども初心の者が本書を學ぶに就ては其多きを貪らんよりは一日の餘閑に二頁多くも四頁を限りとし一圖をば一隅二方面即ち四隅八方面に就て習熟の勢を吝まず順次に進みて全部の稽古を了し而して尙ほ温習以て會心する所あらんには最早や此隅彼隅の憾なかるべく力量自ら備はりて素

人の範圍を脫し得べきや疑ひある可らず

●棋客は皆一軍の總大將　人事一切を閑却して局に臨むときは我れ人ともに一軍に將たるの心得を以てせざる可らず全局の配備、攻防、結束、一に自己の方寸に因りて決するものなるが故に總大將の心得なくて適はぬは勿論、時には斥候、間諜、一兵卒の働きをも兼ぬるの技倆なかる可らず仙客の境涯もア、亦た多忙なる哉

目次

先着點定法

▲占領地點　▲兩軍の根據地

第一四隅攻守篇

第一節

●一間挾み定則（第一則）　▲不敗の陣立　▲白㊈の計略　▲白㊐の變化　（一丁）

▲白㊈の變化　▲注意（第二則）　（二丁）

▲切るは定法　▲黒㊀の變化（第三則）　（三丁）

▲肝心なるは十三（第四則）　▲黒八の變化　▲巧妙なる手筋　（四丁）

▲第七圖の急所（第六則）　▲白四の掛け　▲變則（第七則）　▲白㊎の飛は惡手（第五則）　（五丁）

▲輕妙なる手 ▲黒㊄の變化 ▲注意 (第八則)(變則)

第二節

●二間挾定則 (第一則)▲黒㊂の押は如何 (變則)▲「つけこし」と「しちやう」 (七丁)

(第二則)▲黒㊈の變化 ▲布石の前後 ▲黒㊂の變化

(第三則)(變則)▲白㊃と「しちやう」 ▲手筋と俗手 ▲白㊉の變化 (八丁)

(第四則)▲黒㊄の變化 ●白手拔の場合 ▲白㊂の竝びはカナメ石 ▲白㊇の變化 (九丁)

(第五則)▲白⑰の「あて」 ▲決してキカぬ劫 同上 ▲黒いのツケはへを切る手段 (十丁)

(第六則)▲無茶にコスムは不可

(第七則)▲押へとハネの門違ひ (第八則)▲ツケれば頭を抑へるが定法 ▲八のツケと「しちやう」 (十一丁)

▲黒白の注意 ▲ほとへ切りの應手

(第九則)▲白㊃の戰略 ▲無意味の押し ▲㊇の出切は如何 (第十則)▲黒㊂のコスミツケ

▲黒ろは攻守兩樣の意味 ▲注意

(變則)●黒㊂の出切 ▲出切は無理 ▲コスミとケイマ ▲黒㊂の變化 ▲㊂のハチ出しなし (十二丁)

(則)▲八の押へは俗手 ▲忘れてならぬ㊂ ▲ほの曲りは手筋 (十三丁)

(變則)●同上 ▲黒白兩軍の地位 ▲ハメ手の注意 ▲挾んで亘る手を忘るな (十四丁)

(則)▲黒二の變化

(變則)●同上 ▲黒㊂は惡手 ▲一手足らぬ ▲黒ほの變化 ▲黒いの變化 (十五丁)

●白手拔の場合 ▲黒いのツケは定法 ▲白㊇と㊈を前後するな ▲×印の切を狙ふ (十六丁)

▲白㊇のアテを忘るな ▲白㊄のツギ

●同上 ▲白一の變化 ▲注意 ▲白九のハチは肝要 ▲白十へアテぬ理由 ▲黒いの秘訣 (十七丁)

▲黒いの亘りと劫の用心 ▲黒かの抱へは得に似て損

●同上 ▲白㊆は良手 ▲白他に急場あれば ▲黒軍應戰の變化 ▲白ほのコスミは亘りを含む (十八丁)

▲白㊅の變化 ▲白㊆の變化 ▲黒二の變化

●同上 ▲黒㊂の變化 ▲黒いの取切は堅すぎる ▲白ほのコスミは亘りを含む (十九丁)

▲黒コスミ取ても尙ほ味殘る

●同上　▲白⑫の飛は手筋　▲肝心なるは㈡の突出し　▲黒㈨の變化　（二十丁）

第三節

●三間挟み定則　（第一則）▲黒㋑の曲りを急ぐな　▲黒㈥肝要　（第二則）▲黒の心得　▲白㈤の變化　（二十一丁）
▲白㈡の變化　▲白㈣の變化　▲黒㈩の秘傳　▲切處を違へては大變　▲黒㋺のハネさへあれば　（二十二丁）
（第三則）▲白㈣の掛け　▲黒㈢の變化　▲黒㈧の變化　▲黒㈢は要衝の地點　▲黒×印の附越に注意せよ　（二十三丁）
（第四則）▲黒戰略の變化　▲白⑫の變化　▲白㋥のハヂは大惡手　（第五則）▲白㈦の變化　（二十三丁）
▲黒㋑のフクレは重要の良手
（第六則）▲白㈦の變化　▲黒㋭のハザマは如何　（變則）▲黒㈤の變化　▲黒白兩軍地の利の爭ひ　（二十四丁）
▲ツケの代りに肩撃ち　▲打碁の參考
（第七則）白二間挟返し（其一）　▲黒軍封鎖の戰略　▲黒㈨のツケコシ　（二十七丁）
（第八則）●其二　▲黒㈨の變化　▲黒㈡の切と包圍の軍略　（第九則）▲兩軍攻守の變化　（二十八丁）
（第十則）▲黒㈨の計略　▲白㈠の變化　▲白「しちやう」の當りの効能如何　（第十一則）▲黒㈨の變化　（二十九丁）
▲黒㈡の變化
（第十二則）▲黒㈦の變化　▲白㈣の立ちは重し　▲白㈣へハネる理由　▲黒㋭は良手　（三十丁）
（變則）▲黒㈦の變化　▲黒㋑のツケは惡手　▲白㈤のツギ肝要　▲キ、目綴し　（三十一丁）
▲白㈧の變化
（第十三則）（其一）▲黒㈠の戰略　▲肝要なるは黒㈨の飛び　▲黒㈨手抜の結果　（其二）▲黒㈦の變化　▲注意　（三十二丁）
▲黒㈡の變化
（其三）▲白㋑付の變化　▲白㋭の變化　▲黒にも計略あり　（其四）▲白㈥附越の變化　（三十三丁）
（其五）▲兵法の常軌　▲緩急の機變　▲黒の用心　（其六）▲黒紛れを避くるの用意　（三十四丁）
（其七）▲黒先づ斥候を放て　▲白㈡ハヂの手段　▲白㋑のノビは大惡手

▲黒十手抜の場合
（其八）▲黒八の變化　▲黒八の再變化　▲黒白兩軍の計略　▲白應戰の變と㊽の秘略（三十五丁）
▲白もし取らば絞れ　▲敵軍誘惑の手段　▲古今攻守の變化　▲古今攻守の變化（三十六丁）

第四節

●こすみの定則（第一則）▲堅實なる良手　▲白㊹手抜の場合　▲陣立自ら法あり（三十七丁）
（第二則）▲黒い の出切は不可　▲黒ろ切の變化（第三則）▲白㊹と局面の模様　▲白い に高く陣取る理由　▲白三間展開の眞意　▲白㊹の二間開きは堅固（三十八丁）
▲白は の意味　▲白、血戰覺悟の場合（變其一）▲相尖みは損　▲白八の變化（三十九丁）
（第四則）▲黒ほ 打込の心得　▲白い 亘りの計略　▲黒ほ の變化
▲白征の當りなき卷め　▲白ち の變化　▲黒ほ の變化（四十丁）
（變其二則）▲黒他に非常の急場なくば　▲白い の詰めに油斷すな　▲黒ほ の變化　▲白二間詰は大惡手
▲白ち の詰め

（變則）●白二手抜の場合　▲堅壁の効果如何による　▲黒一へ掛くるは開くの趣向　▲白の策戰（四十一丁）
▲黒ろ の變化

小目高かゝり定則（第一則）▲黒七は封鎖を避くる趣向（第二則）▲白六カケツギの意味（四十二丁）
（第三則）▲白六のカケツギ肝要　▲白八の變化（第四則）▲白十の變化　▲白ろ突當りの結果（四十三丁）
（第五則）▲黒▲印の變化　▲注意　▲絞らるゝ苦さに（第六則）▲黒七の變化（四十四丁）
（第七則）▲黒白策戰の變　▲黒七のハネダシと秘略　▲白は のアテの變　▲歸結（四十五丁）
（第八則）▲黒三の挾み　▲白は へ掛けるは大損　▲白六の變化（四十六丁）
（第九則）▲白四の變化　（第十則）▲白四の內づけは常用　▲黒一のハヂダシを忘るな　▲黒ろ の突當りと白二の征（四十七丁）
（第十二則）▲黒ろ の押えは大惡手　▲白十のハヂ肝要　▲形勢互角　▲白亦手順を誤るな　▲黒ほ の變化（四十八丁）
（第十三則）▲黒ろ にハネ い に受くる手段肝要　▲白ち の變化　（第十五則）▲黒ろ へツケル妙味　▲黒ほ の切は通法

▲注意 (第一則) ▲黒㊀の切は悪い ▲白㊁のハネや善し ▲黒㊂にッグは損 (四十九丁)

第六節

●二間高かゝり定則 (第一則) ▲白高かゝりの戦略 (五十丁)
▲白㊃の変化 ▲注意 (第二則) ▲黒の策戦 ▲白㊃ツケの機会 (五十一丁)
(第三則) ▲黒㊂の戦略 ▲黒白の戦法 ▲注意 ▲黒の手抜は非なり (五十二丁)

第七節

●白大けいま掛りの定則 ▲白㊁の趣向 ▲白㊇のツケ ▲黒の戦法 (五十三丁)

第八節

●高目の定則 (第一則) ▲高構えの戦略 ▲黒の策戦 (五十四丁)
(第二則) ●白内づけの定則 ▲黒㊈㊉は不敗の固め ▲黒白互角の形勢 (五十五丁)

▲白の攻方に二策あり ▲白中原経営策 ▲注意 ▲ハメ手の注意 (五十五丁)
▲黒㊀切は大切
(第三則) ▲黒、敵の謀を伐つ ▲注意 ▲黒㊀の位低し (五十六丁)
(第四則) ●白外づけの定則 ▲黒㊅のハネ肝要 ▲黒㊉の押は古法 ▲黒白の参考
(第五則) (變則) ▲黒の位低し
▲白外廓を厚くする趣向 ▲白㊐の切と征 ▲黒三手うちの秘策 ▲黒㊄の計略 (五十七丁)
▲白㊄の變化 ▲黒へ幷に㊁は良手 ▲白㊈も手筋 ▲注意 (五十八丁)
(第六則) (變則) ▲白㊇の切捨は手順
(第七則) ▲白、封鎖の計 (第大則) ▲白軍封鎖の計略
▲黒㊂の秘策 ▲白㊍の飛び考慮を要す ▲注意 (五十九丁)
(第八則) ▲白㊄のはねだし ▲黒㊅のハチツギは最も肝要 ▲黒又㊆に飛ぶ手を忘るな
(第九則) ▲黒㊍の抑への結果 ▲白のハメ手防禦策 ▲注意 (六十丁)
▲白㊁づけの定法 ▲黒㊂の變化 ▲黒㊃のツケは損 (六十一丁)
(第十則) ▲黒㊀印のハネは自滅の基

(第十二則)▲黒、敵地侵略の計　▲黒ハの意味　▲黒ニの變化　▲注意　(六十二丁)

第九節

●目はづし定則　(第一則)▲黒の戰法二あり　▲白ホの變化　(六十三丁)

▲黒イの變化　(其一)▲白ニとハの關係　▲白ヘ印の切と征の關係　▲白、征の利く場合　(六十四丁)

(第二則)▲白ヒの戰略　(第三則)▲黒トのコスミツケは肝要　(第四則)▲白ルの下りを警戒す　(六十五丁)

▲黒チの變化　(其二)●大けいま掛り　(一)▲白リのかけ　(二)▲黒ヌのツケ　▲注意　(第五則)▲白ヲの變化　(六十六丁)

▲黒ヤの變化　(第六則)(其三)▲黒ヲのツギは奇道　▲黒白兩軍の形勢　(第七則)▲黒ワ切の變化　▲白カの變化　(六十七丁)

(變則)▲黒ヘ印は絶地　▲白ばうしは詐略　▲黒、敵のハメ手に罹るの圖　(六十八丁)

(第八則)▲白ヘ印の變化　▲黒ヤは良手　▲參考　(第九則)▲黒ニのノビは肝要　▲黒ヲの變化　(六十九丁)

▲黒ルのハ子の變化　(第十則)(變則)▲白ヘ印の變化　▲白ヘ印の再變　(第十一則)▲白一の押し　▲白一の變化　(七十丁)

▲黒白兩軍の激戰　▲黒イの切は至極大切　▲黒ルの切も大切　(七十一丁)

(參考)(其一)▲惡手の實例　▲黒ヘの變化　(其二)▲黒ヘ印の變化　▲黒一の變化　(七十二丁)

(參考)●ハメ手の注意　▲黒ヤのノビは筋違ひ　▲ハメ手破りの手段　(其三則)▲白ヘの幷びは肝要　(七十三丁)

▲黒、絞らるゝ覺悟にて

實戰虎の巻

第二爭地軍備篇

割地布石法則

(第一則)▲白の金城に對する策戰　▲懸軍急迫は挾擊の恐あり　▲ヘは要衝の地

(第二則) ▲白の防備地點 (七十五丁)
(第三則) ▲黒㊀の突貫 (第四則) ▲黒の單騎遠征 ▲犧牲は兵家の常 ▲白の應手如何 (七十六丁)
(第五則) ▲敵味方の要衝 ▲口傳白軍、乾城攻撃の作戦 (七十七丁)
(第六則) ▲敵に因り自ら變化あり ▲黒にも亦策あり ▲黒㋑脚下に受くるの趣向 (七十八丁)
(第七則) ▲黒軍の要地 (第八則) ▲白軍の要地 ▲單縦陣の戦列 (七十九丁)
(第九則) ▲黒白互角の形勢 ▲黒㋒の得失 ▲黒㊀は進軍の極地 ▲黒㋑は堅實の固め (八十丁)
▲白㋺は攻守中庸の位置 ▲黒軍攻守の機變 ▲注意 (八十一丁)
(第十則) ▲ハンマの陣取 (第十一則) ▲星下交地の得失 ▲白機先の戦法 ▲黒㋭の戦略—白の苦心 (八十二丁)
(第十二則) ▲黒㋭と白㋺ ▲黒打込を狙へ ▲白㊀の得失 ▲白の覺悟 (八十三丁)
(第十三則) ▲最急の場所は孰れか ▲白の打場 (第十四則) ▲白㋥の利害 (八十四丁)
(第十五則) ▲口傳白㊀の深謀

(第十六則) ▲黒白の打場 (第十七則) ▲黒の最要地二點 (八十五丁)
▲白の應手三樣 ▲白×印の抑えは不可 ▲白㋑の守りは肝要 (第十八則) ▲⑫は要衝
▲黒の締りと要地
(第十九則) ▲黒㋥の詰は格好 ▲白の釣合 (第二十則) ▲口傳必然の戦法と兩掛け (八十六丁)
(第二十一則) ▲白の高構えに對する戦法 (第二十二則) ▲黒白兩軍の戦法 (八十七丁)
(第二十三則) ▲白㋭は兩陣兼用の良手 (第二十四則) ▲先づ㋥に挟みて而して後 ▲口傳其理由如何 (八十八丁)
▲黒の凝形のお供
(第二十五則) ▲白、模様消しの手段 ▲白㋩の打込は急 ▲活石と活石の聯絡 (八十九丁)
(第二十六則) ▲白㋑の肩打と㋭の打込 ▲黒㋩へ曲るの意味 ▲注意 ▲黒㋩の變化 (九十丁)
(第二十七則) ▲黒㋑は急場 ▲白㋬の飛と×印のノビ ▲白㋬は劫争ひの覺悟 (九十一丁)
(九十二丁)

實戰機畧

第三 侵地軍爭篇

(其一)▲黒先づ探りを試みよ　▲黒へに覗く機會　(其二)
(其三)▲口白一は非常手段　▲對非常手段の黒の策戰　(其四)
(其五)▲白ろ棄石の意味　▲黒はは迂にして利　(其六)
(其七)▲白、高地占領の計　▲黒かの變化　▲白にも亦策あり　(其八)
(其九)▲白×印の守り肝要　▲黒、邊隅隱居の計　(其十)
(其十一)▲白の籠城策　▲敵の裏を掻くの計　(其二十)
(其十一)▲斥騎敵の動靜を窺ふ　▲白いの口傳　▲白ほといの變　(其四十)
(其三十)▲黒いの變化

(九十三丁)
(九十四丁)
(九十五丁)
(九十六丁)
(九十七丁)
(九十八丁)
(九十九丁)

(其五十)▲白ろのコスミ　(其六十)▲白ほの働き
(其七十)▲白ろ切の働き　(其八十)▲白はの意味
(其九十)▲黒白の戰法　▲黒ほの手筋　▲白はの變化　▲白いの效果　(其十二)▲黒白兩軍の戰略
(其一廿)▲白一の探り　(其二廿)▲白の削地手段
(其三廿)▲白劫仕掛の巧拙　▲黒一の口傳　▲黒の運命　▲白の成算　▲白口印の意味

(百　丁)
(百一丁)
(百二丁)
(百三丁)
(百四丁)

第四 掠地結束篇

實戰「よ　せ」しらべ（明確なる計算法）

(其一)▲黒白共に十目の得　(其二)▲黒いは先手二目の得
(其三)▲白いのツケは先手六目　(其四)▲白いのハチッギは先手四目
(其五)▲先手六目の得　(其六)▲白いのハネは先手六目

(百五丁)
(百六丁)
(百七丁)

▲黒⑦の狼狽りは先手九目　（其七）（百八丁）
▲白⑧は先手七目　（其八）（百九丁）
▲白⑧の取は十一目　（其九）（百十丁）
▲黒⑨は先手四目　（其十）（百十一丁）
▲黒X印の「ヨセ」（口傳）　（其一十）（百十二丁）
▲注意　▲黒白苦心の存する所　（其二十）（百十三丁）
▲白⑩のハネは先手五目　（其三十）（百十四丁）
▲白⑩のハネッギは後手十一目　（其四十）（百十五丁）
▲黒⑪は彙つぎの働き　（其五十）（百十六丁）
▲勝敗の決此一擧　（其六十）（百十七丁）
▲白⑫は手筋　（其七十）
▲白⑫のコスミ　（其八十）
▲白⑫は良手　（其九十）
▲白⑭の二段バネ　（其百）
▲白⑮の挟みは常用　（其一百）
▲白⑮を切るよりは㋒　（其二百）
▲「せき」は黒後手六目の得　（其三百）
▲注意　▲⑰のハネは白の勢力圏内　（其四百）
▲白⑱の下りは一目半得　（百十六丁）
▲黒白七目の得　▲白⑲打放しの手段　（目次終り）　（百十七丁）

增補 目次

▲一間挾み第四圖補遺　▲白㈠九の一隊陣發の圖　（一）（十丁）

通言圖解

▲三目中手の例　▲四目中手の例　（二）（丁）
▲五目中手の例　▲六目中手の例　（三）（丁）
▲隅の四中は例外　▲三劫は休戰　（四）（丁）
▲二目の頭　▲頭突と二目頭　（五）（丁）
▲ハネ殺しの一例　▲ハネ殺の二例　（六）（丁）

棄石の口傳

▲黒㈠は棄石　▲棄石の效果　▲白㈡の變化　▲白㈢の變化　（七）（丁）
▲二段ばね棄石の得失　▲白㈣の變化　▲白㈤の再變　（八）（丁）
▲白㈥はねの駈引　▲一目石を棄てるな＝犧牲の效果　（九）（丁）
▲內外亘りの利害　（十）（丁）

▲白先手の封鎖　▲黒㋑の變化　▲敢の備へに注意せよ　▲黒㊀と白㋐の打抜き　（十一丁）

疑形の實例

▲白㋒づけの働き　▲黒㋓の變化　▲黒㋔の變化　▲黒にも亦策あり　（十二丁）
▲黒㋕の打込は急　▲黒㋖の受と㋗の切り　（十三丁）
▲黒㋘敢の趣向を挫く　▲堅陣上塗りの形　（十四丁）

黒白の先手爭ひ

▲黒㋙敢の懐を衝る　▲覗きてこすむは輕妙　（十五丁）
▲猿辷りは後手　▲白㋚忠死の手拆　（十六丁）
▲白㋛二段ばねは手抜の趣向　▲一擧兩全の妙策　（十七丁）
▲黒一▲印の隙を狙よ　▲黒㋜づけの深意　（十八丁）
▲白㋝は良手　▲白の攻守手段　（十九丁）
▲黒㋞は敢の喉に及　▲白㋟づけの妙手　▲黒㋠の變化　（二十丁）

目次 畢

題圍棋圖

更轉機倍熱
子声還不驚
興亡一秤國
勝負與敎坤

實戰虎卷 新式圍碁秘傳

六段 雁金準一 講述
矢野由次郎 編

本書に掲ぐる所の棋譜は「はしがき」にも記したる如く雁金先生が二十餘年間棋界の諸名士と鎬を削りたる實戰圖中の精選に係り之を詳解するに古來定法とする所と先生が多年の研鑽により自得したる所の獨特の創見とを以てし一々口傳秘法の名を附せざるも心ゝ長閑に本書を研究したらんには如何に斯道の秘密が本書に暴露されあるかを知るに餘りあるべきなり

◉先着點定法

▲占領地點　先を持ちたる者が第一に占領すべき地點は一隅七ところ四隅合せて二十八ケ所なりとす

說明

▲兩軍の根據地　甲乙兩地いづれの地點にても黒白共に第一に占むべき要地は(い)(ろ)(は)(に)(ほ)(へ)(と)の七根據地にて(い)(ろ)の二點を小目(に)(は)を高目(ほ)(へ)を目はづし(と)を俗に星とは云ふなり

第一 四隅攻守篇

第一節

◉一間挾み定則

●第一則（第一圖）

▲不敗の陣立　第一圖の如く黒(二)とおもりしとき白(三)に挾撃せんか黒は先着の利味あるを以て成るべく堅固にうつ總面にて不敗の陣立に攻ふるを可とす

▲白(九)の計略　白(九)は時機を見て(十)へ下り(二)(四)(六)一隊の黒軍を攻めんとの戰略に出でたるものなるが故に黒は孫子の所謂其の謀を伐つの手段に出で(十)と飽くまで堅固に守る總面肝要なり

▲白(七)の變化　白若し第一圖の如く(七)へ打たずして(八)へはねたるとき黒(六)にあて白(四)へつぎ黒赤(は)へつぎ白(に)にはねしとき黒(ろ)へ三間に開くべし斯くなりては白軍の片隅に萎縮せるに反し黒軍の陣形の備はれるに若かざるべし依て白(八)のはねは協合による手と心得べきなり

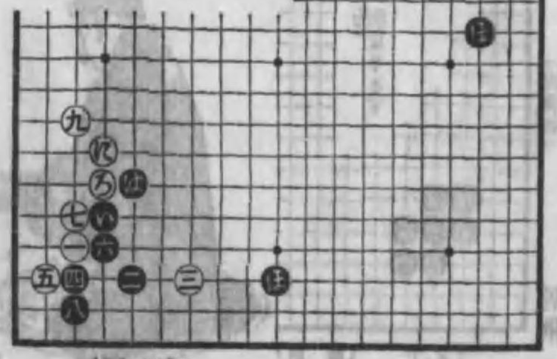
●第二則（第二圖）

▲白(九)の變化　白(九)第一圖の如くけいまに打たずして第二圖の如く二間に開くも絶妙なり若し然る時は黒手をぬきて他の要地を占むるもよし又此方面をうつを得策とすれば先づ(い)に押し白(ろ)へはねたるとき黒(六)へふくれる手を忘るべからず其時白(八)へはねれば前に述べたる如くうつを可とす然るに初心の人まゝ(六)にふくれずして單に(八)へ下るものあるを見受くれざ甚だ不可なり

▲注意　白(五)へはねたるとき黒(六)へふくれる手を忘るべからず其時白(八)へはねれば前に述べたる如くうつを可とす然るに初心の人まゝ(六)にふくれずして單に(八)へ下るものあるを見受くれざ甚だ不可なり

（第一圖）

（第二圖）



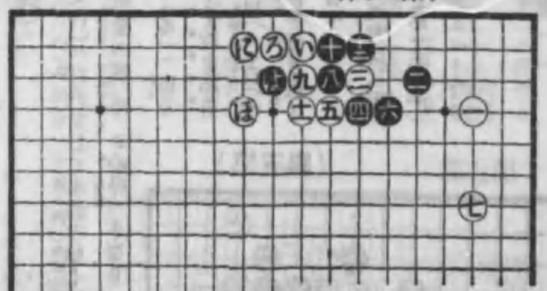
●第三則（第三圖）

▲切るは定法　白(七)へ展開きたるときは黒必ず(八)と戰るを定法とす

▲注意　次に白(十一)へつぐは先手を取る爲めいるに初心の者は何の考へもなく無造作に(い)へ下ることあり斯くては黒に(十二)へ曲がられ白の切が殘りて結局つがねばならい筈となり先手に仕るべきものが後手となるゆへ(い)の下りは惡手と知るべきなり

▲黒(十)の變化　又黒(十二)へ曲る手にて(い)に曲る場合ありそれは白(ろ)におさへ黒(は)に切りたる其一子をば「しちやう」にて捨にせらるゝ氣遣ひなきとき先づ(い)へ曲らんか白(ろ)、黒(は)を切り白(に)黒(十二)白(ほ)となり黒の先手となるべきなり

（第三圖）



▲變則（第四圖）

▲白(七)は變法　白(七)は(い)へ二間開きするが定法なれど場合に依り圖の如く(七)へかけつゝことあり若し然るときは黒(ろ)に掛けよ斯くて白、手を拔けば黒(は)に打つを普通とす

（第四圖）

●第四則（第五圖）

▲肝心なるは⑪⑫ 前圖の如く黒(六)の受手を(い)へ引かずして本圖の如く(六)と立つも亦定法なり斯くて黒(十)へつけ白(十一)と立ちしとき黒(十二)へ挾み攻勢を取るは最も肝要の戰略と心得べきなり

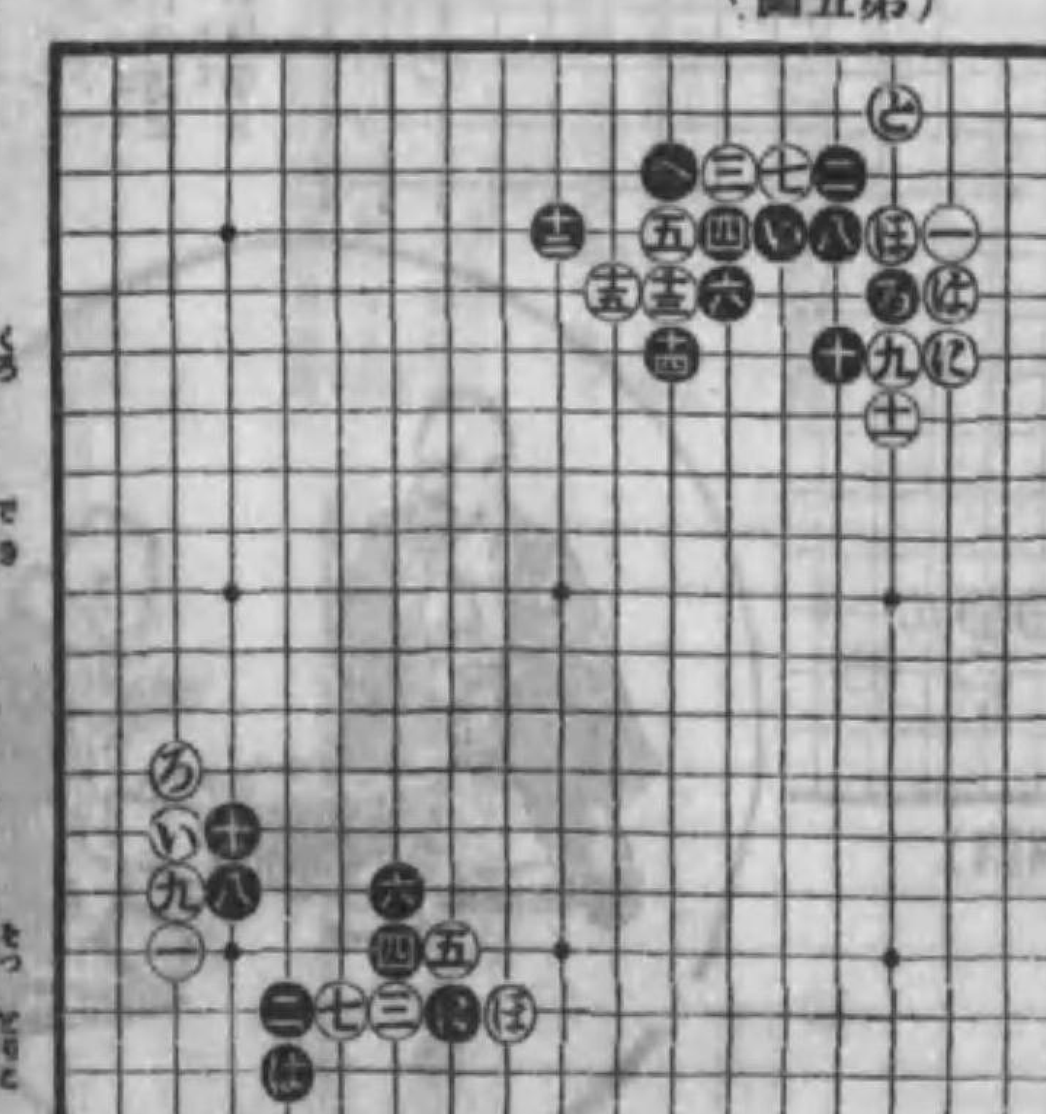
▲黒㈧の變化 黒(八)へ立つ代りに攻勢を取りて(ろ)へ掛るも亦一策なり此時白(は)、黒(九)、白(に)と三本に押す手段を忘るべからず次いで黒若し(い)に抑へなば白(ほ)に曲り黒(八)白(十一)へはねまくり黒(へ)を切りしとき白(と)に防禦線を張り輕く(三)(七)の二子を犧牲に供するも白の方は優勢なるべし

▲巧妙なる手筋 扨て黒(い)に抑へしとき白(三)(七)の二卒を棄る覺悟にて(ほ)へ曲り込み黒をして(八)へつがしめて(十一)へはねまくり次で(と)に備へたるは巧妙なる手筋と謂ふべきなり尙ほ口傳あり次の圖に就て見よ

●第五則（第六圖）

▲白㋺の飛は惡手 茲に最も注意せざる可らざるは黒(十)へ立ちたるときは必ず敵の戰線に沿うて(い)へ押すのが定法なるにウカと(ろ)へ飛ぶは大惡手なり何となれば其時黒(は)へ下りて(い)の出切りと(に)の切りを狙ふ隙あればなり詳言すれば白若し(ほ)にかけつかんか黒(い)に出切りて(一)(九)の二卒を擒にし又白左翼の出切を防げば黒(に)を切る手段あるべし但し白の(三)(七)と黒の(四)(六)の配りなく單に黒(二)へ掛かり(八)と單縦陣に掛けし場合ならんには白(九)と一本押し黒(十)と立ち白(ろ)に飛ぶは是れ又定法と知るべきなり

（第五圖）



（第六圖）

●第六則（第七圖）

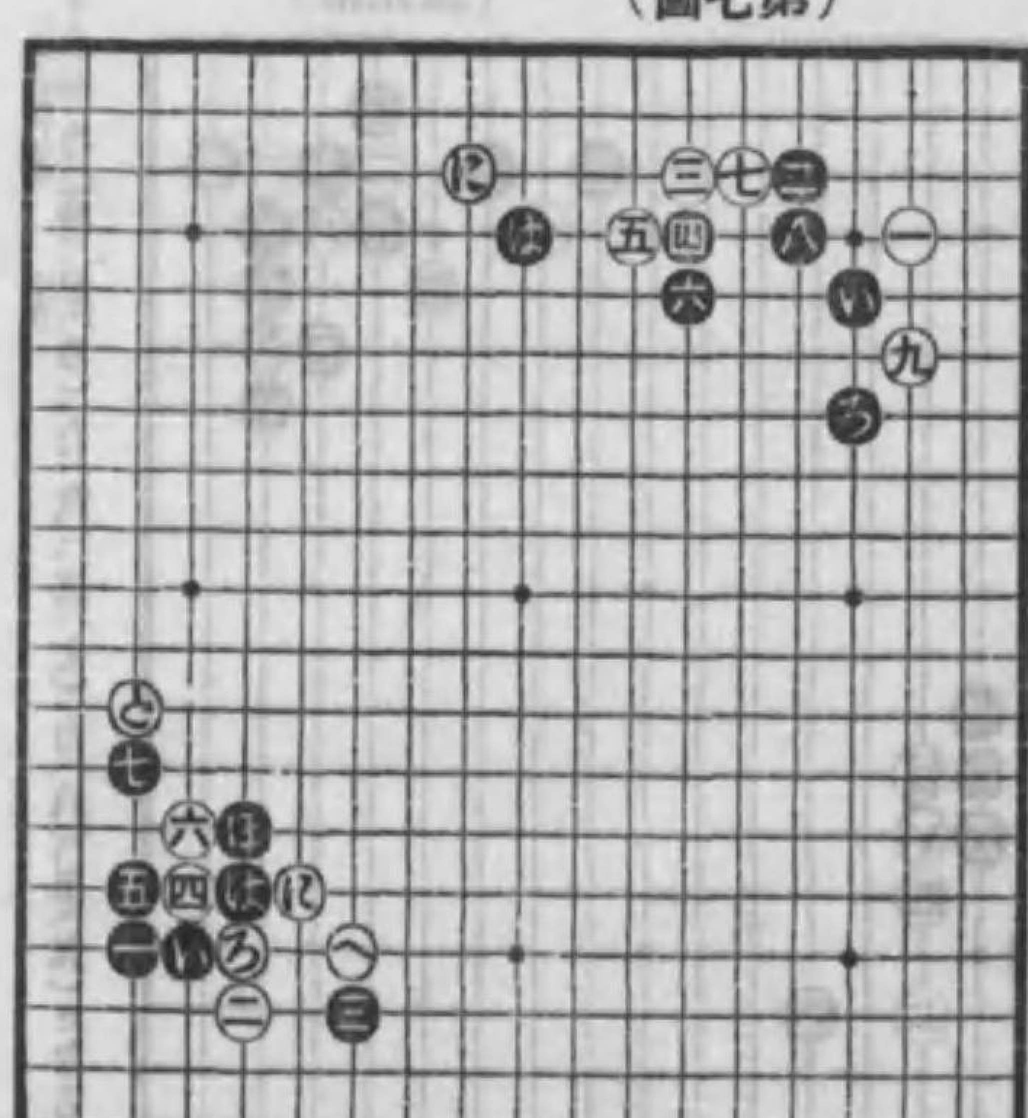
▲第七圖の急所 白(九)へ一間に展開したるときは黒(い)に覗くも一策なれど(ろ)へ掛くる手段ありと知るべし此陣立に於て急所とする所は(は)の地點にて此要地を占むると否とは全局の形勢に關する所少なしとせず扨て白が(九)へ一間に飛びたるは即ち敵を(い)に誘ひ轉じて(に)へ開き以て敵の(は)の急所に據るを防がん趣向なるに然るにウカと敵に誘はれて(い)へ覗くは敵の術中に陷るものと謂はざるを得ず、その機略を挫くには若かず(ろ)へ掛けんには、この時白もし敵の(は)に來るに先だち(に)へ開かんとせば勢ひ(一)(九)の一隊は右側面を衛はざるを得ず若し然らずんば(は)の要地を黒軍に占領せらるゝ虞あらんなり斯く襲ひ來れば白(九)は定石とは云ふものゝ大いに考慮を要すべきなり

●第七則（第八圖）

▲白㊃の掛け 第八圖の如く白(四)へ掛け次で(六)へ立ち其儘手を拔きて他方面の要地に據る趣向もあるべし

▲變則 白(四)へ掛けしとき黒圖の如く受けずして(い)へ出切りの趣向なきに非ず白(ろ)、黒(は)、白(に)、黒(ほ)、白(へ)へ掛けつぎ黒(六)へ(四)の一子を抱へるを手順とす又黒(三)へ挾みしとき白手を拔くこともあり或は場合により(と)へ三間に挾み返すこともなきにしもあらず

（第七圖）



（第八圖）

●第八則（第九圖）

▲輕妙なる手　白(四)とけいまに高飛びせしは此方面の競合を輕くさばきて先手を取らん意味を含めるなるべし

▲黒㊄の變化　黒(五)へ斜開せずして(い)印へ二間に開くことあり此時白(五)、黒(ろ)、白(六)、黒(七)、白(八)、黒(九)となるを通則とす

▲黒七の變化　又黒(七)へはねずして(八)へ並ぶこともあり白(は)、黒(に)へ押したるとき白手を抜きて他に轉ずること多し

▲注意　こゝに怠にすべからざるは白(六)のつけを打たずして直に(十)へ掛くることなり斯くすれば黒(は)につけ白(に)へ立てば黒(ほ)へはねつぎて輕く(三)の一子を棄てゝ十分なり▲白㊉の掛け　他に急場あれば(十)の掛けを打つに及ばず緩急の見計らひ肝要なるべし

（第九圖）

▲變則（第十圖）

▲敵の動靜を窺ふ　場合に依り白(四)へ立ちて黒の動靜を窺ふことなきに非ず然るに黒(五)へ防禦線を張りたる其時初心の人は無意味に(い)(は)へ押すことあれど中原經營の略なくして徒らに敵の左側領域を固むるは甚だ無益の沙汰なるべし

（第十圖）

本書中初心の方より最も多く質問を受けたるは一間挾み定則第四頁第六圖黒(十四)出切の運びなりとす如何にも尤もの問にて本書の目的は主として初心の方の力を養ふに在るを以て其問に（一圖）を（二圖）に於て出切の運びを示すことゝせり

▲鑑み增補第二圖

增補 第一圖

（第一圖）

▲一間挾み第四圖補遺　既に本書に於て說明したる如く黒(八)は(い)(ろ)孰れにも備へても白は無論圍ざるも時として一路遠く(ろ)に包圍の戰略を運らす事なきに非ず(い)(ろ)場合に依る手段あるを以て强ひてこれを取らん心持にて兵の配置を爲すは不可なり草に敵を後隔に封ずるの計畫に出づるを可とすべし一步を進めて言へば黒一段低く(い)にかけ白タトロ手を拔き黒更に(は)に敵の出路を塞ぐも白(二)の一子は容易に死ぬものに非ず無理なり左りとて白も亦城外の敵味方に如何なる反響を及ぼすやを考慮せず隅に活く手段ありと强ひて其身を孤城に保つの計を爲さんには從ひ敵の外壁を固くして城外の味方を窮地に陷らしむるの覺悟なきを得ず生死共に戰機を見るの注意肝要なるべし

增補 第二圖

（第二圖）

▲白(一)(九)一隊陣營の圖　本圖の如く白(十五)と押えたらん其時は黒多くは外側の(い)を切るを通則とす白(ろ)に抱えなば黒先づ(は)に(に)につぎ白(ち)へ(ほ)へはね黒(る)を切り白(を)に二子取り黒(る)を打ち白(わ)に一子取り黒(ぬ)におうて(る)に白(る)になり▲白(ヌ)の變化　黒(は)にあてしとき白もし(に)につがずして直に(へ)へあてたるとき白(い)につがずして(ほ)へはねたらんには黒は無論劫を取るべし縱し此劫に負けたりとて黒近の味方に左程の影響なしと認めたるときは(は)のあてを略して直に(に)につぐ印へのびて善し又黒(に)へあてたるとき白(い)につがずして(ほ)へはねたらんには黒は無論劫を取るべし縱し此劫に負けたりとて黒近の味方に左程の影響なしと認めたるときは(は)のあてを略して直に(に)につぐ印へのびて善し又黒(に)へあてたるとき白(い)につがずして(ほ)へはねたらんには黒は無論劫を取るべし縱し此劫に負けたりとて黒

▲印につき茲にて決して置くことを云ふことなし▲黒(ほ)のあての注意　黒もし(い)の一子を敵の爲に所謂四ヲ目に打拔かれても外部附近の味方に左程の影響なしと認めたるときは(は)のあてを略して直に(ほ)(い)を切る手段ありとす▲黒(い)の變化　前段の意味と反對に黒(い)の一子を四ヲ目に拔かるゝより其結果の有利なるは言ふまでもなきことなり然れども白もし切られたる方を取るの通則に從ひ(と)に(ほ)の一子を抱えて隅に活くる手段に出でんには黒又(い)を(と)に(ほ)の一子を打拔きたるとき黒(に)へ掛けて(十一)の一子を「しちやう」に掛くべきなり併し(十一)の一子を四ヲ目に拔かるゝの辛き場合とても(ほ)を切る手段なしと知るべし要するに(ほ)(い)の切りありて取り得ぬときは如何に(い)の一子を四ヲ目に拔かるゝの辛き場合とても(ほ)を切る手段なしと知るべし要するに(ほ)(い)の切ありて前後孰れかの味方を窮にせらるゝ處あるが故に黒の備へ(十)―(八)―(二)と單一の斜陣にあらずして(六)―(四)の變陣あるときに白(十一)へ飛ぶは最大惡手と知るべく返すくも(十四)と三本に押すことを忘る可らざるなり

◉通言圖解

三三、四五、五八、六十二

增補第一圖（三三の例圖）

▲三目中手の例　三三と云ふは三目中手は三手と云ふの意味にて並び三目（○○○）も曲り三目（●●）も等しく三手なり此の九九を覺え居らんには攻合のさき一々手數を算する面倒なかるべく初心者の注意までに一々例圖を示すべし本圖の如く三目中手の場合に於ては（い）のおうてを起點とし（一）と算することゝ心得よとは寧ろ變心に過ぎたる注意なるべし黒白共に三手なるが故に先手の時に歸するは自明の理にて固より說明するまでもなき事なり

（圖一第）

增補第二圖（四五の例圖）

▲四目中手の例　四五と云ふのもやはり四目中手は五手と云ふ意味にて本圖に於ける黒の圍内には既に㊀㊁㊂三子の缺陷の存れるあり共に攻合ふ外なけれども白が先手にて數の圍内のダメを埋立つる其手數の算法に就てマヽ誤見を抱くものあり是れ又變心の箇所かは知らざれども假に白（い）のダメを埋めておうてし之を一手と算するからは次に打つ一子を二手と數ふるは言ふまでもなく二重の計算たるを免かれず何となれば白（い）と一手を費したる其代償さして數をして自ら（ろ）のダメを埋めしめたればなり要するに白（い）と黒（ろ）即ちおうてと取りの交換は手數計算の中より省き次に打つ一子を一と數へざる可らざるは無論の事なりとす

（圖二第）

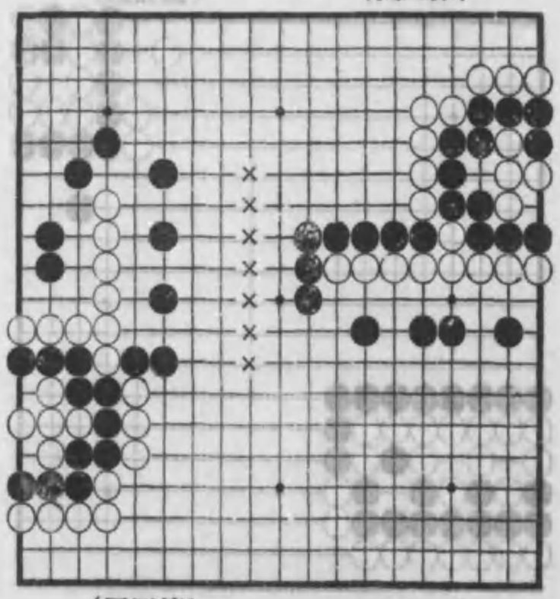
增補第三圖（五八の例圖）

▲五目中手の例　俗に五目中手は十三手と云へど本圖の如く既に數の圍地に四子の詰めある以上は其手數は八手と知るべきなり

增補第四圖（六十二の例圖）

▲六目中手の例　俗に之を「ははろく」と云ふ六目中手の十二手なることを知り置かんには戰ひ正に開なるの際一、二、三と手數を算むの煩なく尙ほ一局を樂むの閑を得ん

（圖三第）



（圖四第）

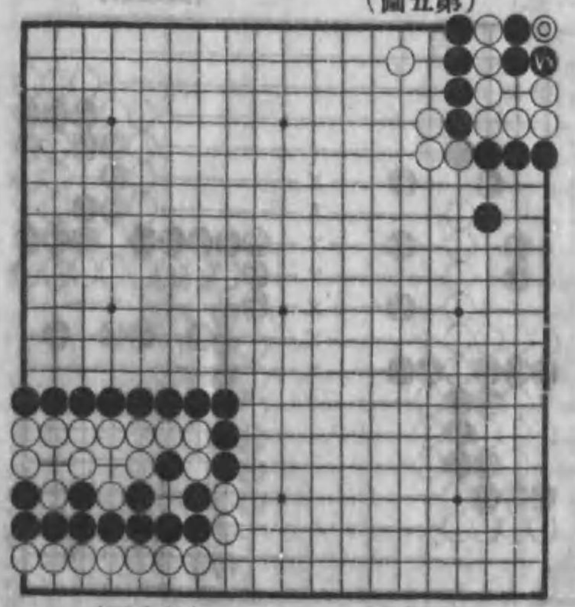
増補第五圖（四五の例外圖）

▲隅の四中は例外　隅の四目中手の中には所謂四五の例外に屬するものあり　即ち其一例を擧れば本圖の如きもの是なり　其手數は五手に非ずして三手なりと云ふ次第は黒(い)のダメを詰めて取らしめ更にダメを詰めて攻合ふときは◎印の絶地を埋立つる要なければなり五目、六目中手赤然り通言にも亦例外あることを知らざる可らず

増補第六圖（三劫引分）

▲三劫は休戰　天正以降對局上三劫の生じたるときは引分として戰ひを休むるの例なりと云ふ本能寺の故事は仮令其一例を示さんに本圖（黒先）の如く三劫の生じたるときはいづれ其勝敗が全局の運命を決する場合多かるべく彼取れば我れ取り何時までも果しなきことゆゑ三劫勝負なしとの通言を生ずるに至れるものなるべし

（圖五第）



（圖六第）

第二節

◉二間挾み定則

●第一則（第一圖）

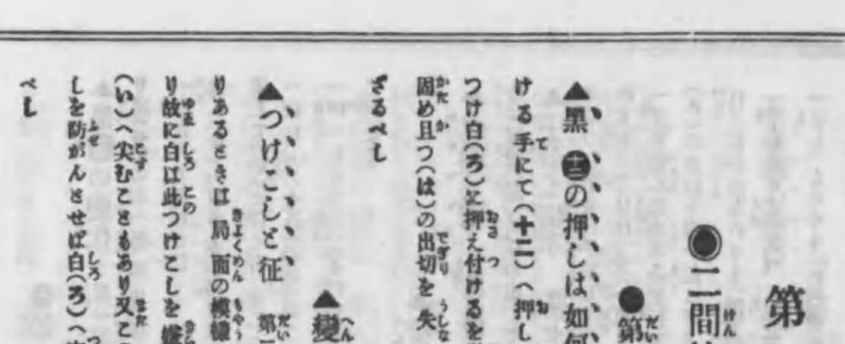
▲黒㊀の押しは如何　古碁に於ては黒(十一)（こすみつける手にて(十二)）（押し白(い)）へのびしさき黒(十一)にこすみつけ白(ろ)と押え付けるを以て常法とせしかど斯くては敵陣を固め且つ(は)の出切を失ふが故に只輕く(十一)（つけるに若かざるべし

▲變則（第二圖）

▲つけこしと征　第二圖の石立に於ては黒「しちやう」の當りあるときは局面の模樣に依り(い)のつけこしを試みる筋あり故に白は此つけこしを嫌ふて(八)（けいまに冠せずして單に(い)へ尖むこともあり又この圖の如き形にて後に(い)のつけこしを防がんさせば白(ろ)（突當りて自己の陣立を固むるを可とすべし

（圖一第）

（圖二第）



●第二則（第三圖）

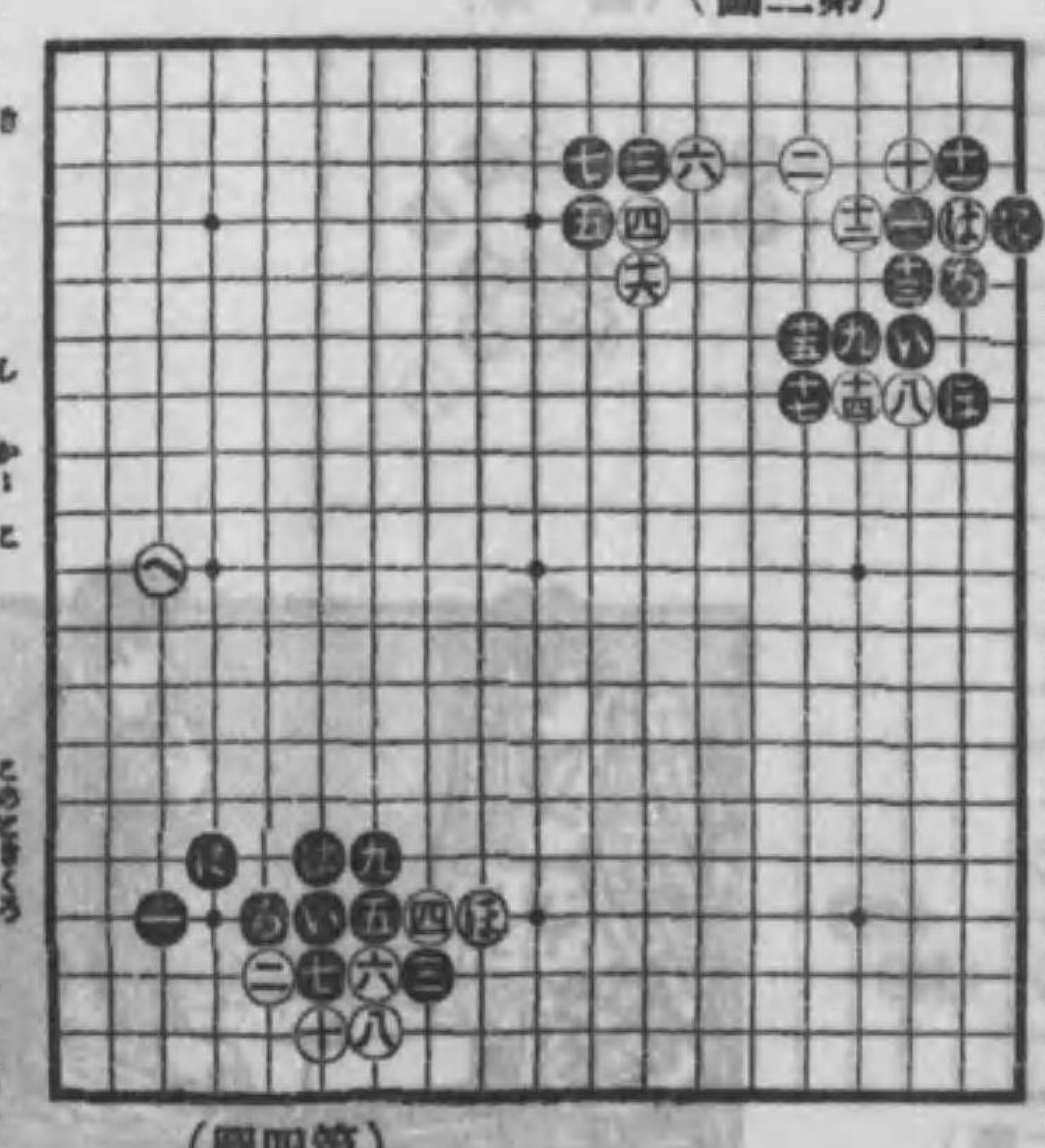
▲黒㊈の變化　第一圖の如く黒（九）とこすむときは白の爲に一隅に封じられて中原發展の途を失ふが故に局面の模様により黒（九）の肩へ敵軍遮斷の計に出づるは極めて肝要の手段なり▲布石の前後　黒（九）のとき白先づ（十四）に押え然る後に（十）へつけるもあれど斯くては白の方少しく重くなるが故に單に圖の如く（十）へつける方可ならん▲黒⑪の變化　黒（十一）へはねずして（い）に押え白（十二）にふくれ、黒（ろ）、白（は）にあて、黒（に）へはね、白（十三）の時（ほ）へはねべし▲黒⑪の變化　又黒（い）へ押へしとき白（十二）へふくれずして（十一）へ下れば黒手を拔きて可なり

▲變則（第四圖）

▲白㊃と征　白の（四）の一子を「しちやう」にて擒にし得る場合には黒（五）とはね出して聯絡を絶つ趣向亦一策と云ふべし

▲手筋と俗手　黒（七）へはねこみ白（八）へ下りしとき黒（九）と立つは肝要の手筋なり然るに初心の人は往々（い）につぐことあれど斯くては白（十）へ亘りしとき黒（ろ）に押えんとすれば（三）の一子を敵に乗せざるを得ず然らば（三）の一子を逃ぐるとせんか（ろ）の出路を塞ぐ能はざるに非ずや▲白㊉の變化　白（十）へ亘るは普通なれども（四）の一子を「しちやう」にて取らるゝを防ぐ爲め（い）へ切り（七）の一子を抱へ込むことあり此時黒（は）、白（十）に一子をとり黒（に）、白（ほ）へ竝びしとき黒（へ）へ開きて充分なり▲機を見て取りを急げ　圖の如き形にて黒に於て（四）の一子を「しちやう」に掛けしときは手のすき次第取り置く方敵に牽制せらるゝ掛念なかるべきなり

（第三圖）



（第四圖）

●第三則（第五圖）

▲黒㊄の變化　黒（五）は（い）へこすみつけ白（ろ）へ立ちしとき（は）へ一間飛ぶもあれど場合によるべし

●第四則（第六圖）

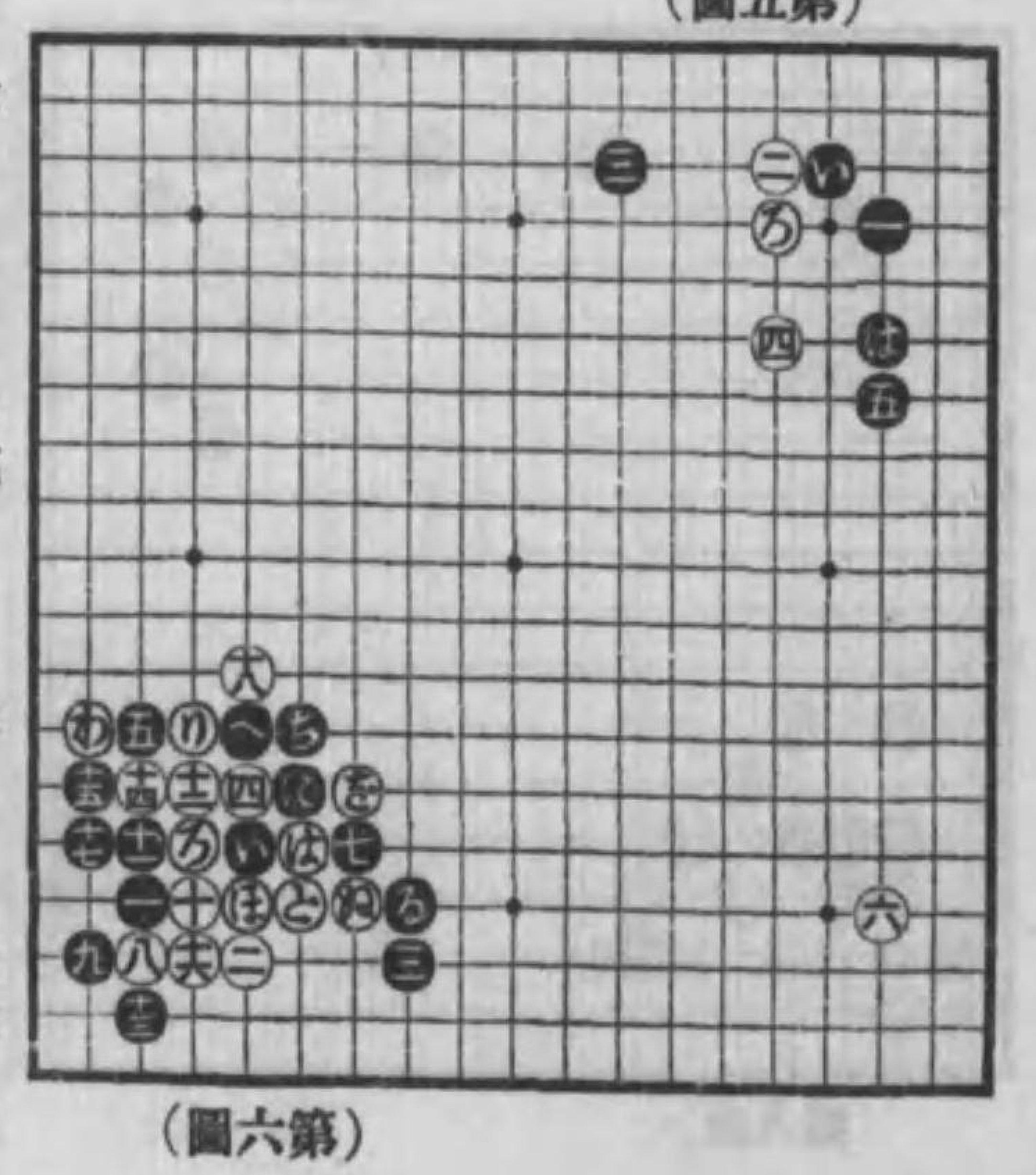
白㊅手拔の場合（一）

▲白⑫の竝びはカナメ石　初心のものは白（十二）へ竝ぶ手を閑却して黒（七）の着點なき場合の定法に泥み（十三）へ下ることあり然れども黒（七）の睨みあるときに白（十三）へ下れば得たり賢しと黒より直ちに（い）に附越され、白（ろ）、黒（十二）、白（は）、黒（に）、白（ほ）印へ一子取りたるとき黒より（へ）に壓へられて一局部に封じ込めらるゝを以て平常の如く（十三）へ下るは戰法の辨へなき拙手と謂つべきなり即ち白（十二）へ竝びて此附越を防ぐ必要ある所以なり

▲白㋺の變化　黒附越の場合白もし（は）にはね込まば黒（ろ）につがずして必ず（に）に切るべし此時白（と）へ引けば黒（ち）に立つが手筋なり

▲白㋷のあて　本へ戻りて黒（い）、白（ろ）黒（十二）のとき白先づ（り）にあてれば黒（十四）へつぎ白（は）黒（に）、白（ほ）へ一子を取り黒（へ）に押へてよし▲決してキカぬ劫　此時白もし（ち）を切れば劫になれど決して打つべき手に非ず黒は如何なる處にても棄て（は）の一子を打拔くべきなり併し白（ち）の惡劫をさけて（ぬ）へはねることあり此時黒（る）に押へては大變なり（を）に切られて（に）（七）の一子いづれか打拔かれん依て（る）に抑へず唯劫を取るべし白（を）へつげば黒（る）に押へ又白（る）へ逃げ出せば（は）の一子を打拔き先手を取りて充分なるべし▲白㋻のはね　圖の如き形にて白（十四）へ突出したるとき黒（八）の一子を取れば白は必ず（わ）にはねべきなり

（第五圖）



（第六圖）

●第五則　（第七圖）

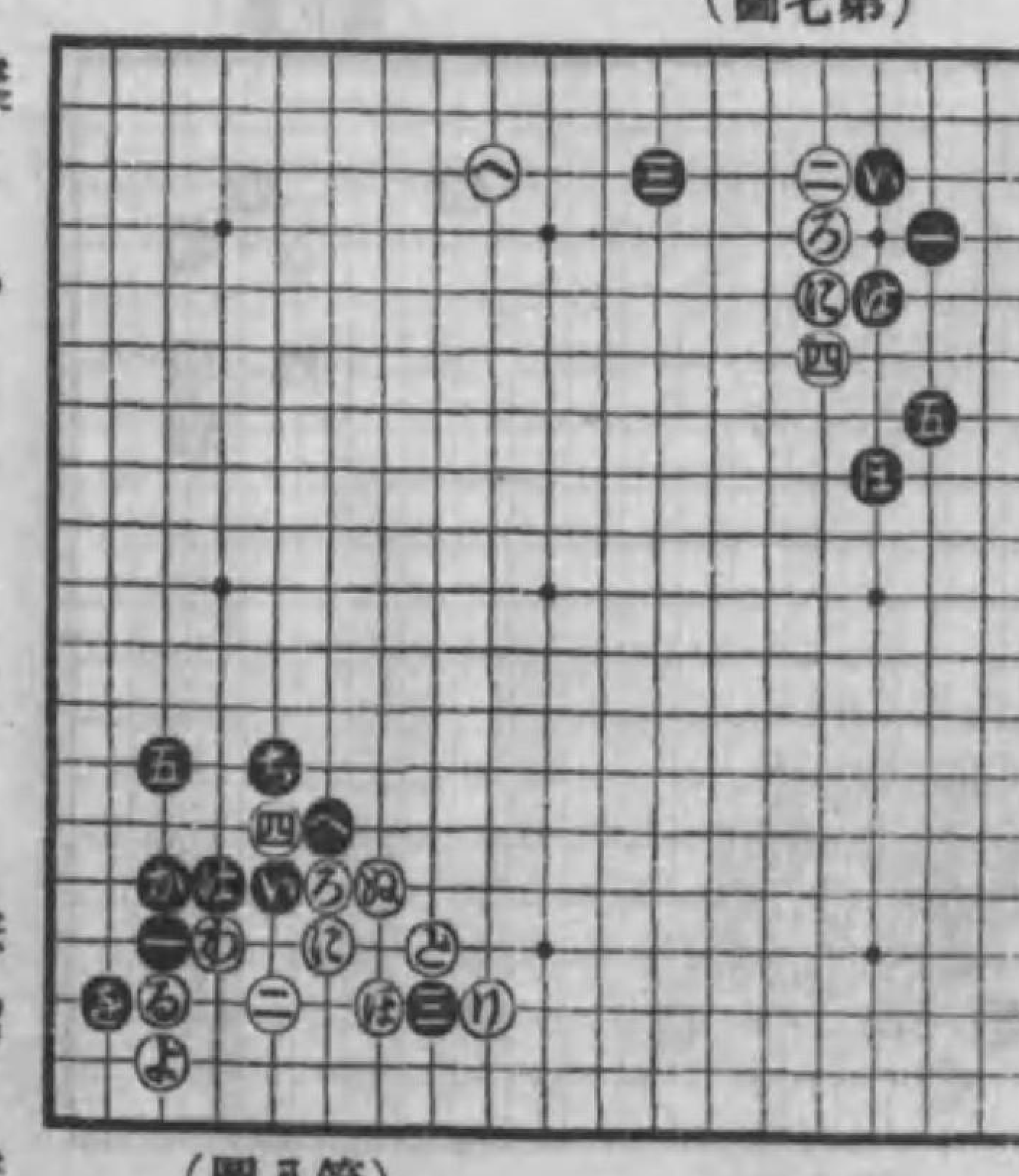
白㊅手拔の場合

▲無茶にこすむは不可　黒、白より（へ）の邊に挾擊ちされて（三）の一子逃路に窮む如き憂なきときは黒（い）にこすみつけ白（ろ）に立ち黒（は）にのぞき白（に）につぎ黒（ほ）にこすむ定石もあれど左側前面に白の挾みあるにも拘はらず無茶にこすみつけて（三）の一子を孤立の地に陷らしむるは名將の爲さゞる所なるべし（へ）に白の配置あるときは尙更ら（い）へこすみつくる手なしと知るべし尙は變化あり第八圖に就て説明すべし

●第六則　（第八圖）

▲黒㋑のつけは㋬を切る手段　白（四）と二間に飛ぶは多くは黒に（五）と受けさせ而して手を拔かん趣向なり故に黒に於ても（五）と受けずして（い）につけ白（ろ）黒（は）白亦（に）に引は尋常の形なるべし▲白㋥の變化　白（に）に引かずして（ほ）につけなば黒（へ）を切り白（と）、黒（ち）、白（り）となり白又（と）へはねずして（ぬ）へ竝びても黒は矢張り（ち）に（四）の一子を抱へるを可とす又黒（五）と受けたるとき白もし（二）（四）の一隊を收めんと欲せば（る）へつけ黒（を）、白（わ）、黒（か）、白（よ）へ下りて己れを護るに若かざるなり

（第七圖）



（第八圖）

●第七則　（第九圖）

▲おさへとはねの門違ひ　白（八）へつけし時黒（九）と（い）に押へるが定法なるにお門を違へて（ろ）にはねるは不可なり何となれば白（は）に出で（に）に押へれば（ほ）に切らるゝ手あればなり

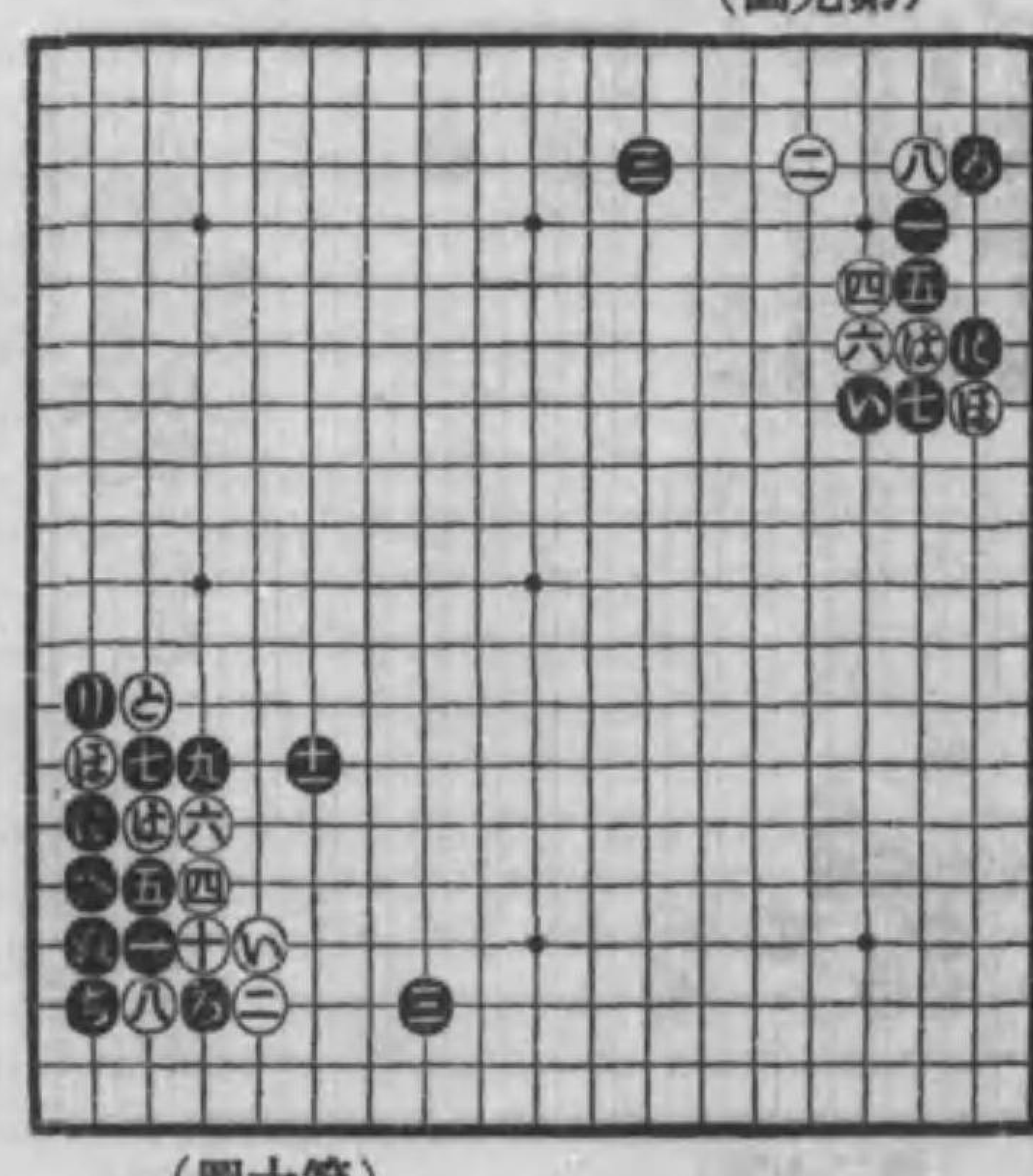
●第八則　（第十圖）

▲つければ頭を押へるが定法　第八圖の如く白（八）とつけるは（二）（四）（六）一隊を收めん趣向に外ならず依て白（八）とつけたるときは黒は必ず（九）と敵の頭を壓へ付くるを法とす

▲㊇のつけと征　白（八）のつけは（七）の一子を「しちやう」に取り得る場合に限るべし即ち白（八）黒（十）に出で、白（い）、黒（ろ）、白（は）、黒（に）、白（ほ）に切り黒（へ）につぎ白（と）に掛けて（七）の一子を擒にし得る時ならざる可らず

▲黒白の注意　然るに初心の者は勿論相應の打手にても黒（七）の一子の「しちやう」にて取れるや否やを見極めず漫然（八）へつけることなきに非ず黒に於ても亦（七）の一子が「しちやう」の便りなきとき（白）より（八）へつけられたらんには必ず（九）へ押へることを忘る可らず　▲㋭と㋬切りの應手　圖の如き形にて白もし（は）に出で黒（に）に押へしとき白（ち）に下れば無論黒は（一）（五）の二子を棄て又白（ほ）に切ればやはり（一）（五）の二子を犧牲に供し以て（り）に（ほ）の一子を抱へよ其又反對に白（へ）を切れば（ぬ）にまがり（へ）の一子を擒にして孤壘ながらも片隅に一廓を構へるを可とすべし

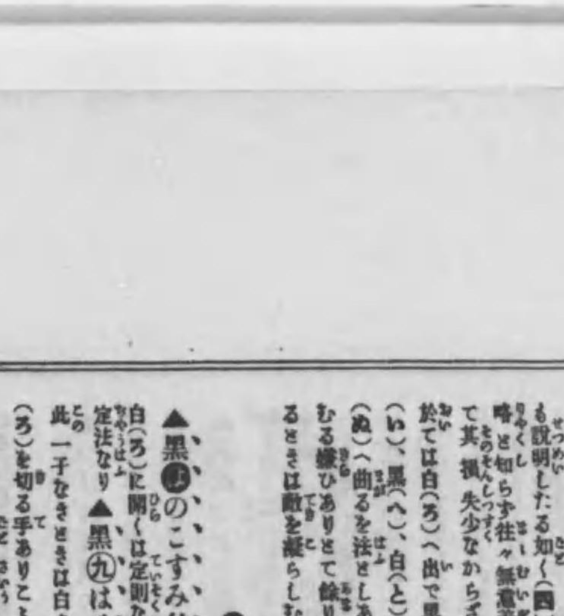
（第九圖）



（第十圖）

●第九則（第十一圖）

▲白㊃の戰略は先づ黒の(一)に壓迫を加ふると同時に自己の陣立を堅固にし而して圖の如く(八)と挟みて(三)の一子を攻立つることも出來又手を抜くも自己の自由なるを以て斯くは掛くるなり△無意味の押し　然るに初心の者は一間挟みの第十圖に於ても說明したる如く(四)の掛けは手抜き若くは(三)の黒を攻むる戰略なり▲㋑の出切りは如何　古碁に於ては白(ろ)へ出で黒(は)に押へしとき白(に)を切り黒(ほ)、白(い)、黒(へ)、白(と)、黒(ち)に一子を取りしとき白(り)へつけ黒(ぬ)へ曲るを法としあれど當今に於ては(ろ)の出切りは敵陣を固むる據ひありて餘り流行せず但し(る)或は(を)の邊に敵勢あるときは敵を凝らしむる利あるを以て斯く打つを可とすべし



（第十一圖）

●第十則（第十二圖）

▲黒㋩のこすみ付け　後圖にも示す如く白(四)と挟み返したるときは黒(七)にこすみ付けるも亦白(ろ)に開くは定則なれど時に依り黒(七)に尖ますして本圖の如く(五)にこすみ付けるも亦定法なり▲黒㋭は攻守兩樣の意味　本圖中最も肝要なるは黒(九)の手なり、もし此一子なきときは白より(い)に突込まれ黒(ろ)につげば白(は)を切り(ろ)を切る手ありこゝに於てか黒(九)を壓行し(は)の切りを防ぐ其一方に鷲鳥の將さに捕たんとする如く左右の白軍を睥睨し倘は且つ中原騰騰の業地を占め得たる緊要の着手と云ふべきなり▲注意　但し白(八)の一子なくばタトと黒(九)の一子なくとも直に(い)へ突込む手なし、もし強ひて(い)へ突込まば黒(ろ)につぎ白(は)を切らば黒(に)に押へ白(ほ)へ下れば黒(へ)へはね白の(い)×(六)×(二)の三子を攻にすべし

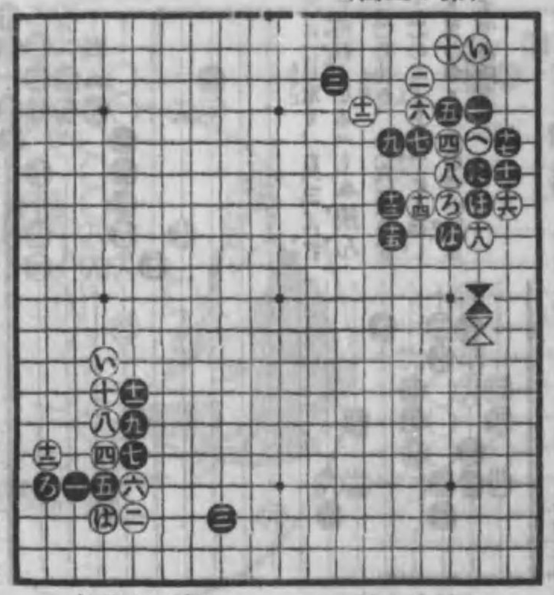
（第十二圖）

▲變則

黒㋭の出切り（一）第十三圖

▲出切りは無理　星下▼印或は×邊に黒の配石あるときは(四)を掛けられて第九圖の如く(五)(七)と運ぶは損ゆえ(五)の出切りを試ることあり併し通常は損なり念の爲め出切りの要方を示すべし▲こすみとけいま　黒(三)三間挟みのときは白は(い)へケイマに打つを法とすれども二間挟みのときは(十)へこすみ(十二)に出づる趨向肝要なり此場合(い)へ走りては(十二)の出を失ばなり▲黒㋥の變化　黒圖の如く(十三)と打たず(十四)へ打たば白は(十六)へつけるが手筋にて(ろ)へ展るは俗手なり何となれば(は)に頭を叩かれて壓迫せらるればなり▲㋥のハネ出しなし　白(十六)へつけたるとき黒もし(ね)へ突當れば白㋭に出で又黒(は)へはね出せば白(十七)へ附越し(一)(五)の二子を攻殺すべし▲㋬の押へは俗手　白(八)と立つべきを(へ)に押へる者もあれど斯くては黒より(十七)へはねられ如何に變化するも白の不利に歸すべし

（第十三圖）



黒㋮の出切り（二）第十四圖

▲忘れてならぬ㋯　黒(十一)のとき初心のものは(い)の頭を叩かれるを恐れて無意味に(い)へのびることあれど甚だ不可なり今や職棋時さに熟せんとするの際漫然(い)へのびたらんには(四)(十)の一隊は安全なるべきも(二)(六)の味方の危地に陷るを奈何せん須らく白(十二)に反撃して敵の壓手如何により前後の白軍を一擧に攻ぐの策に出づべきなり▲㋦の曲りは手筋　白(十二)のとき黒もし(ろ)に防がば白(は)へ曲るは眞き手筋なり以下黒白攻守の變化は次に示すべし

（第十四圖）

黒㊂の出切り　（三）　第十五圖

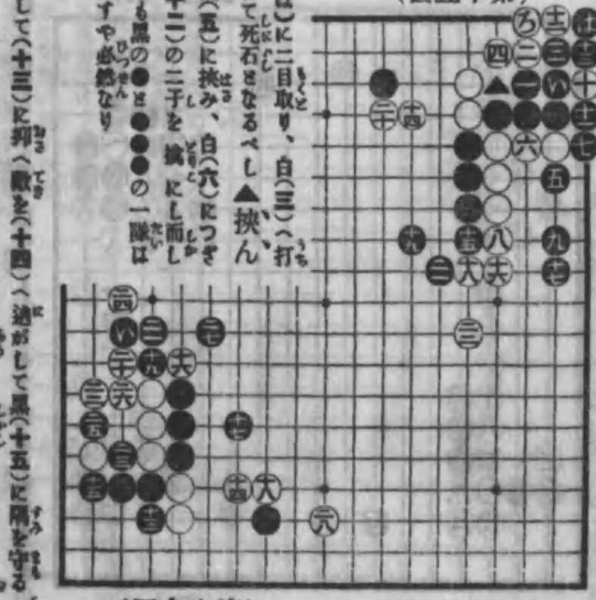
▲黒白兩軍の地位　第十二圖の如く白◎（曲りたるとき黒（一）と受くれば其攻守の結果は當さに圖の如くなるべし黒白兩軍とも各々十八箇兵數に於ては同一なれど絵に兩軍の對勢を看取せよ黒は三手に分れ右側面の大部隊は辛ふじて片隅に活を保ちて其領域す地を有するに過ぎず而して當初（二）の白を挟み擊たんとしたる（三）の一團は殆ど危地に陷り中央の一團は前後に其陣列堂堂たる强敵を控えて戰はざる可らざる不利の地に立てるに非ず寧ろ斯く解說し來れば（五）（七）の出切りの無理なるを知るに足るべし

▲ハメ手の注意　第十三圖の如く黒（一）と受けずして（二）へ受けるは悪手にて損なり此時白（一）へ突出し、黒（い）に押へ白（三）を切り、黒（十三）にはね、白（十二）に下るは强ちハメ手と云ふに非ざるも此時黒るし（ろ）へ下りては大變、是れぞ敵の術中に陷り自ら死地に就くものに非ずして何ぞや、此時白（十一）、黒（は）に二目取り、白（三）へ打かう、黒（十二）へ一手取りしとき白（六）へつぐを以て黒は一手の不足にて死石となるべし▲挾んで亘る手を忘るな　故に白（十二）へ下らばイヤ其手は喰はぬと黒（七）へ亘り白（八）へのびしとき絵ろに黒（ろ）へ下りて白の（三）と（十二）の二子を捕にし而して白（十四）へ逃出したるとき黒（九）へ飛べば隅の石は死を免れ得べきも黒の●と●●●の一團は絆足と爲るべく如何に變ずるも黒（五）（七）の出切り丘不利の結果を來たすや必然なり

黒㊃の出切　（四）　第十六圖

▲黒㊂の變化　黒、白の曲を防ぐ爲め前圖の如く（十五）に邦へ（十六）して（十三）に邦へ數を（十四）へ逃がして黒（十五）に隅を守る手段あり斯くては白は前後兩軍とも其備へ未だ全からざるが故に先づ（十六）へ押したら手順肝要なり然に白もし右翼を援くるに急にして早に（十八）へ押したらんには黒より（十九）へはねられ白（二十）へはね返たるとき（い）に二段ばねされて左軍は悉ち窮地に陷らんそれゆへに白一應（十六）にはね置かんには左右兩軍とも圖の如く終ゃ脫出するを得べきなり

（第十五圖）



（第十六圖）

黒㊄の出切　（五）　第十七圖

▲黒㊃は悪手　黒（十一）は形を成せども本圖の場合にては（一）（五）の一軍が敵の爲に殺了さるゝが故に決して打つべき手に非ず（一）（五）の黒軍は如何にして逃にせらるゝか其手順を示すべし

▲一手足らぬ　黒もし（い）につければ白（ろ）に引き黒亦（は）に引けば白（に）の肩に迫り黒（は）の裏門へ攻來れば白（へ）に突入り黒（と）に聯絡せしとき白（ち）にはねよ五手に四手、黒一手の不足となりて苦戰の効なく空しく〳〵に陣滅せざるを得ざるべし

▲黒㊁の變化　黒又（は）に攻寄せずして（ち）に下れば白（は）にこすむべし黒は（り）に防ぎ線を張りて攻むるの外なかるべく左すれば白（へ）にあて黒（と）につぎたるとき白（ぬ）に押へるを以て此攻合は無論白の勝に歸するや必せり

▲黒㊀の變化　尤も黒（い）へつける手にて（ろ）へ附逃す手段なきに非ず斯くすれば白（る）に押へ（黒（と）、白（を）、黒（い）、白（わ）に黒の（ろ）の一子を取りしとき黒先づ（か）へ（ケイマし白（よ）に押へれば其儘棄置て黒（ち）に下れば辛ふじて殘落を免かれ得べきも白も亦優に活きを保ち得るを以て孰れにしても黒（十一）は包圍の甲斐なかるべきなり

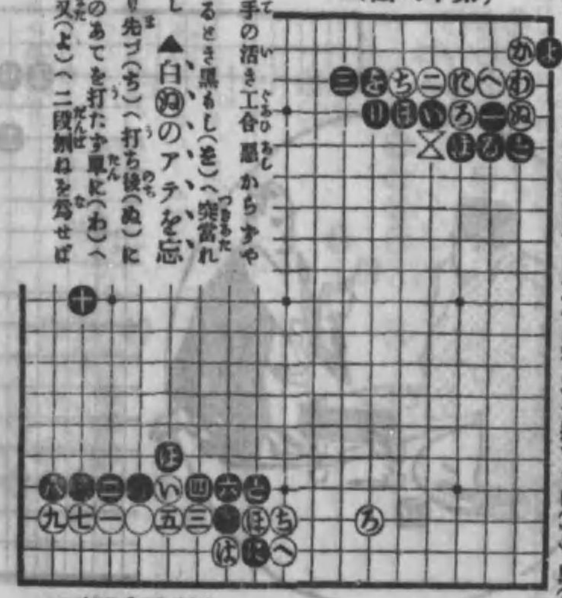
（第十七圖）

白四手抜の場合　其一　（第十八圖）

▲黒ろのつけは定法　白(四)手抜きの場合は黒(い)につけ白(ぬ)にあて黒(る)へつぎを定法とす　▲白ろの一子コミと黒いの征　黒のいの一子が「しちやう」にて取れる場合に非ざれば白(ろ)のハネコミは不可なり其次第は白もし(ろ)へハネコメば黒は(は)に押へすして(に)を切り白(は)へのびれば　黒(へ)のつぎを爲りて白の石は切られ黒(い)の一子を「しちやう」にて　取る能はざる結果を生ずればなり　▲白ちと以を前後するな　初心の者は白(ち)へのぶべき手にて能く(ぬ)へあてゝ後(ち)へのびれば黒は前に説明したる如く(り)へ(ぬ)の一子を取られなば如何かすして(を)に突あたらん斯くて後に(ぬ)の一子を取られなば如何白後手の活き工合悪からずや　▲以印の切を狙ふ　白(ぬ)へあてすして(わ)へ下り以印の切りを狙ふ手あり　と知るべし　▲白以のアテを忘るな　黒(と)に掛つぎたるとき素人は能く(わ)へ下ることあれど不可なり先づ(ち)へ打ち後(ぬ)にあてれば隅は其儘置きても活きあるゆへ先手にて他を打つべし白(ぬ)のあてを打たず直に(わ)へ下れば後手となり又其儘置けば黒(わ)へはね白(ぬ)に押へたるとき黒又(よ)へ二段跳ねを爲せば白は死石となるべし

（第十八圖）

其二　（第十九圖）

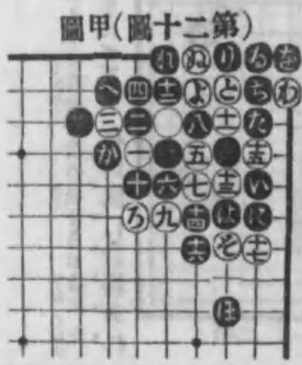

（第十九圖）

▲白五のつぎ　第十六圖に就て説明したる如く黒の一子を「しちやう」に取り能はぬときは第十七圖の如く打つべし白(五)は四圖の模様に依り(い)へハネコメことあり一例を擧げれば(ろ)印邊に白石あるときは全局の模様に依り白、本圖の如く(五)とつぎたるとき黒も亦ピシンと(い)につぎ白(は)にはぬれば黒は(に)に二段ばねれば黒(と)に押し白をして(ち)につがしめたる後の形を見よ如何にも白の石は緩りて(ろ)の一子に接近し徒つて(ろ)の一子は働きなき地位を占めたる姿となれるに非ずや斯る場合に白は(い)にハネコミ黒(は)に押へ白(五)につぎたるとき白(七)に押す手段肝要なるべし

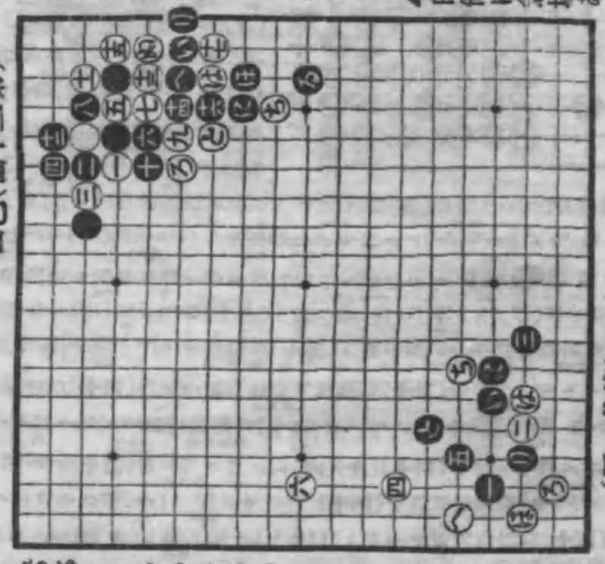
其三　（第二十圖）（甲圖）

▲白一の變化　白(五)にハネコメ手なく又第十七圖の如く捨らるゝときの不利なるときは本圖の如く白(一)はねだすを定則とす

▲注意　黒(二)と切りしとき白(三)へはね込ずして單に(五)へつぎ白(四)へはね黒(三)につぎ白手を拔く手順となる可も斯くては白の方損なり故に本圖の如くすべし　▲白九のハ子は肝要　白(九)へはねたるとき黒(十)へ曲らずして(十二)へ一子を取れば白は(十三)にて本圖の如くなれども黒(十)へ曲らずして(十五)へのびなば白(十)へあて黒〇印（つぎたるとき白(ろ)のつぎとなりて白の方割合よし斯くて黒もし(十四)の處を切らば(五)(七)(十三)の三子を棄て打つ方可なり　▲白十へあてぬ理由　白(九)へはね黒(十二)へ白(十)へあてれば黒は局面の部合により二目をつがずして(十三)にあて白二目取れば黒は(十六)の處へケイマに飛出ず手あるが故なり　▲黒十四の秘訣　黒(十二)へ白の一子を取り白(十三)へ押へしとき黒單に(十四)へ切る筋あり此切りは古來未だかつて碁經に見ざる所なり黒もし(十四)へ切らんか白は直に(十)にあて黒二目つぎ白(十一)へ切り黒(は)に押へ白(い)にのび黒(に)に押へ白(十五)へ黒の一子を取り黒(ほ)へ二間に開きたるとき白(ろ)につぐ筋あり斯くなりては白の方悪からずリと劫の用心　斯くて黒(へ)に亘れば隅に劫手が殘るゆゑ白は用心して(と)に下ることを忘る可らず白もし(と)に下らずば黒(ち)に打ち白(と)に押へ黒(り)にはねたるとき白單に(ぬ)に押へられて黒の不利となるが故に黒は打続きたるとき黒(を)に(る)の一子を取れば白より(ぬ)に押へられ(ぬ)に引くべし左すれば白(わ)にはねて劫と爲すの外途なかるべし即ち(と)の下りの肝要なる所以なり　▲黒かの抱へは得に以て損　但し黒(へ)に亘る手にて(わ)に白(三)の一子を抱へるは一寸得に似たれども其實は隅の劫手を失ふ故損と知るべし何となれば白は此時手を拔きて他に打たん其時黒(ち)に打ち白(と)に下り黒(り)にはね白(ぬ)に押へ黒(る)につぎ白(よ)につぎ黒(た)に押したるとき白(へ)に下るを以て黒は悲(哉)にあてる手なく遂に一手不足となりて隅の四子は徒死せざるを得ず然れども黒(か)の抱へは如何なる場合にても必ず損と斷定すべきに非ず又他に好着ある機縁に依り時に(か)に打置くことなきにしも非ず又他に好着あるときは(へ)に打つこともあるべく要は只次の着手如何に因て其得失を斷ずべきなり


（第二十圖）甲圖

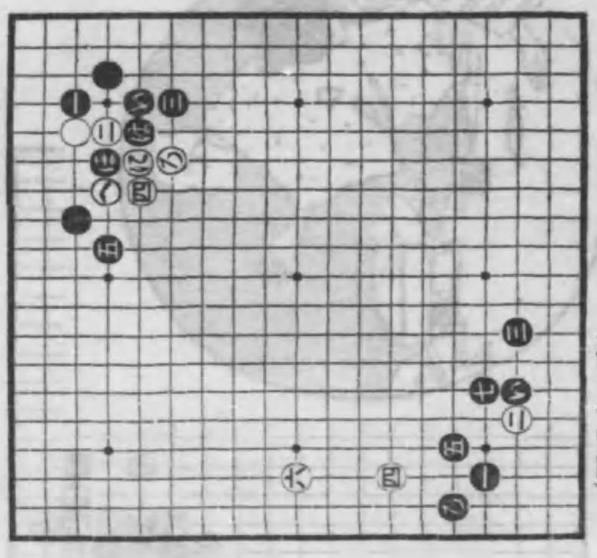
（第十一図）



（第十一図）

白他に急所あれば　本図は白(十)に対し黒(一)と打ち込んだ場合で白(ろ)と受けるのは黒(は)と打ち込まれ白(に)と受けるのは黒(ほ)と打ち込まれ白(へ)と受けるのは黒(と)と打ち込まれ白(ち)と受けるのは黒(り)と打ち込まれ白(ぬ)と受けるのは黒(る)と打ち込まれ白(を)と受けるのは黒(わ)と打ち込まれ白(か)と受けるのは黒(よ)と打ち込まれ白(た)と受けるのは黒(れ)と打ち込まれ白(そ)と受けるのは黒(つ)と打ち込まれ白(ね)と受けるのは黒(な)と打ち込まれ白(ら)と受けるのは黒(む)と打ち込まれ白(う)と受けるのは黒(ゐ)と打ち込まれ白(の)と受けるのは黒(お)と打ち込まれ白(く)と受けるのは黒(や)と打ち込まれ白(け)と受けるのは黒(ま)と打ち込まれ白(こ)と受けるのは黒(け)と打ち込まれ白(え)と受けるのは黒(ふ)と打ち込まれ白(て)と受けるのは黒(こ)と打ち込まれ白(あ)と受けるのは黒(え)と打ち込まれ白(さ)と受けるのは黒(て)と打ち込まれ白(き)と受けるのは黒(あ)と打ち込まれ白(ゆ)と受けるのは黒(き)と打ち込まれ白(め)と受けるのは黒(さ)と打ち込まれ白(み)と受けるのは黒(ゆ)と打ち込まれ白(し)と受けるのは黒(め)と打ち込まれ白(ひ)と受けるのは黒(み)と打ち込まれ白(も)と受けるのは黒(し)と打ち込まれ白(せ)と受けるのは黒(ひ)と打ち込まれ白(す)と受けるのは黒(も)と打ち込まれ白(ん)と受けるのは黒(せ)と打ち込まれ白(京)と受けるのは黒(す)と打ち込まれ白(東)と受けるのは黒(ん)と打ち込まれ白(大)と受けるのは黒(京)と打ち込まれ白(阪)と受けるのは黒(東)と打ち込まれ白(名)と受けるのは黒(大)と打ち込まれ白(横)と受けるのは黒(阪)と打ち込まれ白(浜)と受けるのは黒(名)と打ち込まれ白(神)と受けるのは黒(横)と打ち込まれ白(戸)と受けるのは黒(浜)と打ち込まれ白(福)と受けるのは黒(神)と打ち込まれ白(岡)と受けるのは黒(戸)と打ち込まれ白(長)と受けるのは黒(福)と打ち込まれ白(崎)と受けるのは黒(岡)と打ち込まれ白(熊)と受けるのは黒(長)と打ち込まれ白(本)と受けるのは黒(崎)と打ち込まれ白(鹿)と受けるのは黒(熊)と打ち込まれ白(児)と受けるのは黒(本)と打ち込まれ白(島)と受けるのは黒(鹿)と打ち込まれ白(沖)と受けるのは黒(児)と打ち込まれ白(縄)と受けるのは黒(島)と打ち込まれ白(以)と受けるのは黒(沖)と打ち込まれ白(下)と受けるのは黒(縄)と打ち込まれ白(略)と受けるのは黒(以)と打ち込まれ白(す)と受けるのは黒(下)と打ち込まれ白(る)と受けるのは黒(略)と打ち込まれ白(ん)と受けるのは黒(す)と打ち込まれ白(だ)と受けるのは黒(ん)と打ち込まれ白(ぢ)と受けるのは黒(だ)と打ち込まれ白(ば)と受けるのは黒(ぢ)と打ち込まれ白(ぱ)と受けるのは黒(ば)と打ち込まれ白(ぴ)と受けるのは黒(ぱ)と打ち込まれ白(ぷ)と受けるのは黒(ぴ)と打ち込まれ白(ぺ)と受けるのは黒(ぷ)と打ち込まれ白(ぽ)と受けるのは黒(ぺ)と打ち込まれ白(ぽ)と受けるのは黒(ぽ)と打ち込まれ

（第十二図）



（第十二図）

白㋑手抜の場合　（第十二図）

黒❶手抜の場合　（第十一図）

白㋐の変化　黒(ち)に白(り)と受けるのは黒(ぬ)と打ち込まれ白(る)と受けるのは黒(を)と打ち込まれ白(わ)と受けるのは黒(か)と打ち込まれ白(よ)と受けるのは黒(た)と打ち込まれ白(れ)と受けるのは黒(そ)と打ち込まれ白(つ)と受けるのは黒(ね)と打ち込まれ白(な)と受けるのは黒(ら)と打ち込まれ白(む)と受けるのは黒(ゐ)と打ち込まれ白(の)と受けるのは黒(お)と打ち込まれ白(く)と受けるのは黒(や)と打ち込まれ白(け)と受けるのは黒(ま)と打ち込まれ白(こ)と受けるのは黒(け)と打ち込まれ白(え)と受けるのは黒(ふ)と打ち込まれ白(て)と受けるのは黒(こ)と打ち込まれ白(あ)と受けるのは黒(え)と打ち込まれ白(さ)と受けるのは黒(て)と打ち込まれ白(き)と受けるのは黒(あ)と打ち込まれ白(ゆ)と受けるのは黒(き)と打ち込まれ白(め)と受けるのは黒(さ)と打ち込まれ白(み)と受けるのは黒(ゆ)と打ち込まれ白(し)と受けるのは黒(め)と打ち込まれ白(ひ)と受けるのは黒(み)と打ち込まれ白(も)と受けるのは黒(し)と打ち込まれ白(せ)と受けるのは黒(ひ)と打ち込まれ白(す)と受けるのは黒(も)と打ち込まれ白(ん)と受けるのは黒(せ)と打ち込まれ白(京)と受けるのは黒(す)と打ち込まれ白(東)と受けるのは黒(ん)と打ち込まれ白(大)と受けるのは黒(京)と打ち込まれ白(阪)と受けるのは黒(東)と打ち込まれ白(名)と受けるのは黒(大)と打ち込まれ白(横)と受けるのは黒(阪)と打ち込まれ白(浜)と受けるのは黒(名)と打ち込まれ白(神)と受けるのは黒(横)と打ち込まれ白(戸)と受けるのは黒(浜)と打ち込まれ白(福)と受けるのは黒(神)と打ち込まれ白(岡)と受けるのは黒(戸)と打ち込まれ白(長)と受けるのは黒(福)と打ち込まれ白(崎)と受けるのは黒(岡)と打ち込まれ白(熊)と受けるのは黒(長)と打ち込まれ白(本)と受けるのは黒(崎)と打ち込まれ白(鹿)と受けるのは黒(熊)と打ち込まれ白(児)と受けるのは黒(本)と打ち込まれ白(島)と受けるのは黒(鹿)と打ち込まれ白(沖)と受けるのは黒(児)と打ち込まれ白(縄)と受けるのは黒(島)と打ち込まれ白(以)と受けるのは黒(沖)と打ち込まれ白(下)と受けるのは黒(縄)と打ち込まれ白(略)と受けるのは黒(以)と打ち込まれ白(す)と受けるのは黒(下)と打ち込まれ白(る)と受けるのは黒(略)と打ち込まれ白(ん)と受けるのは黒(す)と打ち込まれ白(だ)と受けるのは黒(ん)と打ち込まれ白(ぢ)と受けるのは黒(だ)と打ち込まれ白(ば)と受けるのは黒(ぢ)と打ち込まれ白(ぱ)と受けるのは黒(ば)と打ち込まれ白(ぴ)と受けるのは黒(ぱ)と打ち込まれ白(ぷ)と受けるのは黒(ぴ)と打ち込まれ白(ぺ)と受けるのは黒(ぷ)と打ち込まれ白(ぽ)と受けるのは黒(ぺ)と打ち込まれ白(ぽ)と受けるのは黒(ぽ)と打ち込まれ

白㋒手抜の場合　（第十三図）

白㋓手抜の場合　（第十二図）

黒❷の変化　本図の白(ろ)に黒(い)と取切るのは白(は)と打ち込まれ黒(ろ)と取るより仕方がない白(に)と打ち込まれ黒(ほ)と取るより仕方がない白(へ)と打ち込まれ黒(と)と取るより仕方がない白(ち)と打ち込まれ黒(り)と取るより仕方がない白(ぬ)と打ち込まれ黒(る)と取るより仕方がない白(を)と打ち込まれ黒(わ)と取るより仕方がない白(か)と打ち込まれ黒(よ)と取るより仕方がない白(た)と打ち込まれ黒(れ)と取るより仕方がない白(そ)と打ち込まれ黒(つ)と取るより仕方がない白(ね)と打ち込まれ黒(な)と取るより仕方がない白(ら)と打ち込まれ黒(む)と取るより仕方がない白(ゐ)と打ち込まれ黒(の)と取るより仕方がない白(お)と打ち込まれ黒(く)と取るより仕方がない白(や)と打ち込まれ黒(け)と取るより仕方がない白(ま)と打ち込まれ黒(こ)と取るより仕方がない白(け)と打ち込まれ黒(え)と取るより仕方がない白(ふ)と打ち込まれ黒(て)と取るより仕方がない白(こ)と打ち込まれ黒(あ)と取るより仕方がない白(え)と打ち込まれ黒(さ)と取るより仕方がない白(て)と打ち込まれ黒(き)と取るより仕方がない白(あ)と打ち込まれ黒(ゆ)と取るより仕方がない白(き)と打ち込まれ黒(め)と取るより仕方がない白(さ)と打ち込まれ黒(み)と取るより仕方がない白(ゆ)と打ち込まれ黒(し)と取るより仕方がない白(め)と打ち込まれ黒(ひ)と取るより仕方がない白(み)と打ち込まれ黒(も)と取るより仕方がない白(し)と打ち込まれ黒(せ)と取るより仕方がない白(ひ)と打ち込まれ黒(す)と取るより仕方がない白(も)と打ち込まれ黒(ん)と取るより仕方がない白(せ)と打ち込まれ黒(京)と取るより仕方がない白(す)と打ち込まれ黒(東)と取るより仕方がない白(ん)と打ち込まれ黒(大)と取るより仕方がない白(京)と打ち込まれ黒(阪)と取るより仕方がない白(東)と打ち込まれ黒(名)と取るより仕方がない白(大)と打ち込まれ黒(横)と取るより仕方がない白(阪)と打ち込まれ黒(浜)と取るより仕方がない白(名)と打ち込まれ黒(神)と取るより仕方がない白(横)と打ち込まれ黒(戸)と取るより仕方がない白(浜)と打ち込まれ黒(福)と取るより仕方がない白(神)と打ち込まれ黒(岡)と取るより仕方がない白(戸)と打ち込まれ黒(長)と取るより仕方がない白(福)と打ち込まれ黒(崎)と取るより仕方がない白(岡)と打ち込まれ黒(熊)と取るより仕方がない白(長)と打ち込まれ黒(本)と取るより仕方がない白(崎)と打ち込まれ黒(鹿)と取るより仕方がない白(熊)と打ち込まれ黒(児)と取るより仕方がない白(本)と打ち込まれ黒(島)と取るより仕方がない白(鹿)と打ち込まれ黒(沖)と取るより仕方がない白(児)と打ち込まれ黒(縄)と取るより仕方がない白(島)と打ち込まれ黒(以)と取るより仕方がない白(沖)と打ち込まれ黒(下)と取るより仕方がない白(縄)と打ち込まれ黒(略)と取るより仕方がない白(以)と打ち込まれ黒(す)と取るより仕方がない白(下)と打ち込まれ黒(る)と取るより仕方がない白(略)と打ち込まれ黒(ん)と取るより仕方がない白(す)と打ち込まれ黒(だ)と取るより仕方がない白(ん)と打ち込まれ黒(ぢ)と取るより仕方がない白(だ)と打ち込まれ黒(ば)と取るより仕方がない白(ぢ)と打ち込まれ黒(ぱ)と取るより仕方がない白(ば)と打ち込まれ黒(ぴ)と取るより仕方がない白(ぱ)と打ち込まれ黒(ぷ)と取るより仕方がない白(ぴ)と打ち込まれ黒(ぺ)と取るより仕方がない白(ぷ)と打ち込まれ黒(ぽ)と取るより仕方がない白(ぺ)と打ち込まれ黒(ぽ)と取るより仕方がない白(ぽ)と打ち込まれ

黒❸の変化　本図の白(ろ)に黒(い)と取切るのは白(は)と打ち込まれ黒(ろ)と取るより仕方がない白(に)と打ち込まれ黒(ほ)と取るより仕方がない白(へ)と打ち込まれ黒(と)と取るより仕方がない白(ち)と打ち込まれ黒(り)と取るより仕方がない白(ぬ)と打ち込まれ黒(る)と取るより仕方がない白(を)と打ち込まれ黒(わ)と取るより仕方がない白(か)と打ち込まれ黒(よ)と取るより仕方がない白(た)と打ち込まれ黒(れ)と取るより仕方がない白(そ)と打ち込まれ黒(つ)と取るより仕方がない白(ね)と打ち込まれ黒(な)と取るより仕方がない白(ら)と打ち込まれ黒(む)と取るより仕方がない白(ゐ)と打ち込まれ黒(の)と取るより仕方がない白(お)と打ち込まれ黒(く)と取るより仕方がない白(や)と打ち込まれ黒(け)と取るより仕方がない白(ま)と打ち込まれ黒(こ)と取るより仕方がない白(け)と打ち込まれ黒(え)と取るより仕方がない白(ふ)と打ち込まれ黒(て)と取るより仕方がない白(こ)と打ち込まれ黒(あ)と取るより仕方がない白(え)と打ち込まれ黒(さ)と取るより仕方がない白(て)と打ち込まれ黒(き)と取るより仕方がない白(あ)と打ち込まれ黒(ゆ)と取るより仕方がない白(き)と打ち込まれ黒(め)と取るより仕方がない白(さ)と打ち込まれ黒(み)と取るより仕方がない白(ゆ)と打ち込まれ黒(し)と取るより仕方がない白(め)と打ち込まれ黒(ひ)と取るより仕方がない白(み)と打ち込まれ黒(も)と取るより仕方がない白(し)と打ち込まれ黒(せ)と取るより仕方がない白(ひ)と打ち込まれ黒(す)と取るより仕方がない白(も)と打ち込まれ黒(ん)と取るより仕方がない白(せ)と打ち込まれ黒(京)と取るより仕方がない白(す)と打ち込まれ黒(東)と取るより仕方がない白(ん)と打ち込まれ黒(大)と取るより仕方がない白(京)と打ち込まれ黒(阪)と取るより仕方がない白(東)と打ち込まれ黒(名)と取るより仕方がない白(大)と打ち込まれ黒(横)と取るより仕方がない白(阪)と打ち込まれ黒(浜)と取るより仕方がない白(名)と打ち込まれ黒(神)と取るより仕方がない白(横)と打ち込まれ黒(戸)と取るより仕方がない白(浜)と打ち込まれ黒(福)と取るより仕方がない白(神)と打ち込まれ黒(岡)と取るより仕方がない白(戸)と打ち込まれ黒(長)と取るより仕方がない白(福)と打ち込まれ黒(崎)と取るより仕方がない白(岡)と打ち込まれ黒(熊)と取るより仕方がない白(長)と打ち込まれ黒(本)と取るより仕方がない白(崎)と打ち込まれ黒(鹿)と取るより仕方がない白(熊)と打ち込まれ黒(児)と取るより仕方がない白(本)と打ち込まれ黒(島)と取るより仕方がない白(鹿)と打ち込まれ黒(沖)と取るより仕方がない白(児)と打ち込まれ黒(縄)と取るより仕方がない白(島)と打ち込まれ黒(以)と取るより仕方がない白(沖)と打ち込まれ黒(下)と取るより仕方がない白(縄)と打ち込まれ黒(略)と取るより仕方がない白(以)と打ち込まれ黒(す)と取るより仕方がない白(下)と打ち込まれ黒(る)と取るより仕方がない白(略)と打ち込まれ黒(ん)と取るより仕方がない白(す)と打ち込まれ黒(だ)と取るより仕方がない白(ん)と打ち込まれ黒(ぢ)と取るより仕方がない白(だ)と打ち込まれ黒(ば)と取るより仕方がない白(ぢ)と打ち込まれ黒(ぱ)と取るより仕方がない白(ば)と打ち込まれ黒(ぴ)と取るより仕方がない白(ぱ)と打ち込まれ黒(ぷ)と取るより仕方がない白(ぴ)と打ち込まれ黒(ぺ)と取るより仕方がない白(ぷ)と打ち込まれ黒(ぽ)と取るより仕方がない白(ぺ)と打ち込まれ黒(ぽ)と取るより仕方がない白(ぽ)と打ち込まれ

白㋔の変化　黒(ち)に白(り)と受けるのは黒(ぬ)と打ち込まれ白(る)と受けるのは黒(を)と打ち込まれ白(わ)と受けるのは黒(か)と打ち込まれ白(よ)と受けるのは黒(た)と打ち込まれ白(れ)と受けるのは黒(そ)と打ち込まれ白(つ)と受けるのは黒(ね)と打ち込まれ白(な)と受けるのは黒(ら)と打ち込まれ白(む)と受けるのは黒(ゐ)と打ち込まれ白(の)と受けるのは黒(お)と打ち込まれ白(く)と受けるのは黒(や)と打ち込まれ白(け)と受けるのは黒(ま)と打ち込まれ白(こ)と受けるのは黒(け)と打ち込まれ白(え)と受けるのは黒(ふ)と打ち込まれ白(て)と受けるのは黒(こ)と打ち込まれ白(あ)と受けるのは黒(え)と打ち込まれ白(さ)と受けるのは黒(て)と打ち込まれ白(き)と受けるのは黒(あ)と打ち込まれ白(ゆ)と受けるのは黒(き)と打ち込まれ白(め)と受けるのは黒(さ)と打ち込まれ白(み)と受けるのは黒(ゆ)と打ち込まれ白(し)と受けるのは黒(め)と打ち込まれ白(ひ)と受けるのは黒(み)と打ち込まれ白(も)と受けるのは黒(し)と打ち込まれ白(せ)と受けるのは黒(ひ)と打ち込まれ白(す)と受けるのは黒(も)と打ち込まれ白(ん)と受けるのは黒(せ)と打ち込まれ白(京)と受けるのは黒(す)と打ち込まれ白(東)と受けるのは黒(ん)と打ち込まれ白(大)と受けるのは黒(京)と打ち込まれ白(阪)と受けるのは黒(東)と打ち込まれ白(名)と受けるのは黒(大)と打ち込まれ白(横)と受けるのは黒(阪)と打ち込まれ白(浜)と受けるのは黒(名)と打ち込まれ白(神)と受けるのは黒(横)と打ち込まれ白(戸)と受けるのは黒(浜)と打ち込まれ白(福)と受けるのは黒(神)と打ち込まれ白(岡)と受けるのは黒(戸)と打ち込まれ白(長)と受けるのは黒(福)と打ち込まれ白(崎)と受けるのは黒(岡)と打ち込まれ白(熊)と受けるのは黒(長)と打ち込まれ白(本)と受けるのは黒(崎)と打ち込まれ白(鹿)と受けるのは黒(熊)と打ち込まれ白(児)と受けるのは黒(本)と打ち込まれ白(島)と受けるのは黒(鹿)と打ち込まれ白(沖)と受けるのは黒(児)と打ち込まれ白(縄)と受けるのは黒(島)と打ち込まれ白(以)と受けるのは黒(沖)と打ち込まれ白(下)と受けるのは黒(縄)と打ち込まれ白(略)と受けるのは黒(以)と打ち込まれ白(す)と受けるのは黒(下)と打ち込まれ白(る)と受けるのは黒(略)と打ち込まれ白(ん)と受けるのは黒(す)と打ち込まれ白(だ)と受けるのは黒(ん)と打ち込まれ白(ぢ)と受けるのは黒(だ)と打ち込まれ白(ば)と受けるのは黒(ぢ)と打ち込まれ白(ぱ)と受けるのは黒(ば)と打ち込まれ白(ぴ)と受けるのは黒(ぱ)と打ち込まれ白(ぷ)と受けるのは黒(ぴ)と打ち込まれ白(ぺ)と受けるのは黒(ぷ)と打ち込まれ白(ぽ)と受けるのは黒(ぺ)と打ち込まれ白(ぽ)と受けるのは黒(ぽ)と打ち込まれ

黒❹の変化　本図の白(ろ)に黒(い)と取切るのは白(は)と打ち込まれ黒(ろ)と取るより仕方がない白(に)と打ち込まれ黒(ほ)と取るより仕方がない白(へ)と打ち込まれ黒(と)と取るより仕方がない白(ち)と打ち込まれ黒(り)と取るより仕方がない白(ぬ)と打ち込まれ黒(る)と取るより仕方がない白(を)と打ち込まれ黒(わ)と取るより仕方がない白(か)と打ち込まれ黒(よ)と取るより仕方がない白(た)と打ち込まれ黒(れ)と取るより仕方がない白(そ)と打ち込まれ黒(つ)と取るより仕方がない白(ね)と打ち込まれ黒(な)と取るより仕方がない白(ら)と打ち込まれ黒(む)と取るより仕方がない白(ゐ)と打ち込まれ黒(の)と取るより仕方がない白(お)と打ち込まれ黒(く)と取るより仕方がない白(や)と打ち込まれ黒(け)と取るより仕方がない白(ま)と打ち込まれ黒(こ)と取るより仕方がない白(け)と打ち込まれ黒(え)と取るより仕方がない白(ふ)と打ち込まれ黒(て)と取るより仕方がない白(こ)と打ち込まれ黒(あ)と取るより仕方がない白(え)と打ち込まれ黒(さ)と取るより仕方がない白(て)と打ち込まれ黒(き)と取るより仕方がない白(あ)と打ち込まれ黒(ゆ)と取るより仕方がない白(き)と打ち込まれ黒(め)と取るより仕方がない白(さ)と打ち込まれ黒(み)と取るより仕方がない白(ゆ)と打ち込まれ黒(し)と取るより仕方がない白(め)と打ち込まれ黒(ひ)と取るより仕方がない白(み)と打ち込まれ黒(も)と取るより仕方がない白(し)と打ち込まれ黒(せ)と取るより仕方がない白(ひ)と打ち込まれ黒(す)と取るより仕方がない白(も)と打ち込まれ黒(ん)と取るより仕方がない白(せ)と打ち込まれ黒(京)と取るより仕方がない白(す)と打ち込まれ黒(東)と取るより仕方がない白(ん)と打ち込まれ黒(大)と取るより仕方がない白(京)と打ち込まれ黒(阪)と取るより仕方がない白(東)と打ち込まれ黒(名)と取るより仕方がない白(大)と打ち込まれ黒(横)と取るより仕方がない白(阪)と打ち込まれ黒(浜)と取るより仕方がない白(名)と打ち込まれ黒(神)と取るより仕方がない白(横)と打ち込まれ黒(戸)と取るより仕方がない白(浜)と打ち込まれ黒(福)と取るより仕方がない白(神)と打ち込まれ黒(岡)と取るより仕方がない白(戸)と打ち込まれ黒(長)と取るより仕方がない白(福)と打ち込まれ黒(崎)と取るより仕方がない白(岡)と打ち込まれ黒(熊)と取るより仕方がない白(長)と打ち込まれ黒(本)と取るより仕方がない白(崎)と打ち込まれ黒(鹿)と取るより仕方がない白(熊)と打ち込まれ黒(児)と取るより仕方がない白(本)と打ち込まれ黒(島)と取るより仕方がない白(鹿)と打ち込まれ黒(沖)と取るより仕方がない白(児)と打ち込まれ黒(縄)と取るより仕方がない白(島)と打ち込まれ黒(以)と取るより仕方がない白(沖)と打ち込まれ黒(下)と取るより仕方がない白(縄)と打ち込まれ黒(略)と取るより仕方がない白(以)と打ち込まれ黒(す)と取るより仕方がない白(下)と打ち込まれ黒(る)と取るより仕方がない白(略)と打ち込まれ黒(ん)と取るより仕方がない白(す)と打ち込まれ黒(だ)と取るより仕方がない白(ん)と打ち込まれ黒(ぢ)と取るより仕方がない白(だ)と打ち込まれ黒(ば)と取るより仕方がない白(ぢ)と打ち込まれ黒(ぱ)と取るより仕方がない白(ば)と打ち込まれ黒(ぴ)と取るより仕方がない白(ぱ)と打ち込まれ黒(ぷ)と取るより仕方がない白(ぴ)と打ち込まれ黒(ぺ)と取るより仕方がない白(ぷ)と打ち込まれ黒(ぽ)と取るより仕方がない白(ぺ)と打ち込まれ黒(ぽ)と取るより仕方がない白(ぽ)と打ち込まれ

黒❺の変化　本図の白(ろ)に黒(い)と取切るのは白(は)と打ち込まれ黒(ろ)と取るより仕方がない白(に)と打ち込まれ黒(ほ)と取るより仕方がない白(へ)と打ち込まれ黒(と)と取るより仕方がない白(ち)と打ち込まれ黒(り)と取るより仕方がない白(ぬ)と打ち込まれ黒(る)と取るより仕方がない白(を)と打ち込まれ黒(わ)と取るより仕方がない白(か)と打ち込まれ黒(よ)と取るより仕方がない白(た)と打ち込まれ黒(れ)と取るより仕方がない白(そ)と打ち込まれ黒(つ)と取るより仕方がない白(ね)と打ち込まれ黒(な)と取るより仕方がない白(ら)と打ち込まれ黒(む)と取るより仕方がない白(ゐ)と打ち込まれ黒(の)と取るより仕方がない白(お)と打ち込まれ黒(く)と取るより仕方がない白(や)と打ち込まれ黒(け)と取るより仕方がない白(ま)と打ち込まれ黒(こ)と取るより仕方がない白(け)と打ち込まれ黒(え)と取るより仕方がない白(ふ)と打ち込まれ黒(て)と取るより仕方がない白(こ)と打ち込まれ黒(あ)と取るより仕方がない白(え)と打ち込まれ黒(さ)と取るより仕方がない白(て)と打ち込まれ黒(き)と取るより仕方がない白(あ)と打ち込まれ黒(ゆ)と取るより仕方がない白(き)と打ち込まれ黒(め)と取るより仕方がない白(さ)と打ち込まれ黒(み)と取るより仕方がない白(ゆ)と打ち込まれ黒(し)と取るより仕方がない白(め)と打ち込まれ黒(ひ)と取るより仕方がない白(み)と打ち込まれ黒(も)と取るより仕方がない白(し)と打ち込まれ黒(せ)と取るより仕方がない白(ひ)と打ち込まれ黒(す)と取るより仕方がない白(も)と打ち込まれ黒(ん)と取るより仕方がない白(せ)と打ち込まれ黒(京)と取るより仕方がない白(す)と打ち込まれ黒(東)と取るより仕方がない白(ん)と打ち込まれ黒(大)と取るより仕方がない白(京)と打ち込まれ黒(阪)と取るより仕方がない白(東)と打ち込まれ黒(名)と取るより仕方がない白(大)と打ち込まれ黒(横)と取るより仕方がない白(阪)と打ち込まれ黒(浜)と取るより仕方がない白(名)と打ち込まれ黒(神)と取るより仕方がない白(横)と打ち込まれ黒(戸)と取るより仕方がない白(浜)と打ち込まれ黒(福)と取るより仕方がない白(神)と打ち込まれ黒(岡)と取るより仕方がない白(戸)と打ち込まれ黒(長)と取るより仕方がない白(福)と打ち込まれ黒(崎)と取るより仕方がない白(岡)と打ち込まれ黒(熊)と取るより仕方がない白(長)と打ち込まれ黒(本)と取るより仕方がない白(崎)と打ち込まれ黒(鹿)と取るより仕方がない白(熊)と打ち込まれ黒(児)と取るより仕方がない白(本)と打ち込まれ黒(島)と取るより仕方がない白(鹿)と打ち込まれ黒(沖)と取るより仕方がない白(児)と打ち込まれ黒(縄)と取るより仕方がない白(島)と打ち込まれ黒(以)と取るより仕方がない白(沖)と打ち込まれ黒(下)と取るより仕方がない白(縄)と打ち込まれ黒(略)と取るより仕方がない白(以)と打ち込まれ黒(す)と取るより仕方がない白(下)と打ち込まれ黒(る)と取るより仕方がない白(略)と打ち込まれ黒(ん)と取るより仕方がない白(す)と打ち込まれ黒(だ)と取るより仕方がない白(ん)と打ち込まれ黒(ぢ)と取るより仕方がない白(だ)と打ち込まれ黒(ば)と取るより仕方がない白(ぢ)と打ち込まれ黒(ぱ)と取るより仕方がない白(ば)と打ち込まれ黒(ぴ)と取るより仕方がない白(ぱ)と打ち込まれ黒(ぷ)と取るより仕方がない白(ぴ)と打ち込まれ黒(ぺ)と取るより仕方がない白(ぷ)と打ち込まれ黒(ぽ)と取るより仕方がない白(ぺ)と打ち込まれ黒(ぽ)と取るより仕方がない白(ぽ)と打ち込まれ

白㋕の変化　黒(ち)に白(り)と受けるのは黒(ぬ)と打ち込まれ白(る)と受けるのは黒(を)と打ち込まれ白(わ)と受けるのは黒(か)と打ち込まれ白(よ)と受けるのは黒(た)と打ち込まれ白(れ)と受けるのは黒(そ)と打ち込まれ白(つ)と受けるのは黒(ね)と打ち込まれ白(な)と受けるのは黒(ら)と打ち込まれ白(む)と受けるのは黒(ゐ)と打ち込まれ白(の)と受けるのは黒(お)と打ち込まれ白(く)と受けるのは黒(や)と打ち込まれ白(け)と受けるのは黒(ま)と打ち込まれ白(こ)と受けるのは黒(け)と打ち込まれ白(え)と受けるのは黒(ふ)と打ち込まれ白(て)と受けるのは黒(こ)と打ち込まれ白(あ)と受けるのは黒(え)と打ち込まれ白(さ)と受けるのは黒(て)と打ち込まれ白(き)と受けるのは黒(あ)と打ち込まれ白(ゆ)と受けるのは黒(き)と打ち込まれ白(め)と受けるのは黒(さ)と打ち込まれ白(み)と受けるのは黒(ゆ)と打ち込まれ白(し)と受けるのは黒(め)と打ち込まれ白(ひ)と受けるのは黒(み)と打ち込まれ白(も)と受けるのは黒(し)と打ち込まれ白(せ)と受けるのは黒(ひ)と打ち込まれ白(す)と受けるのは黒(も)と打ち込まれ白(ん)と受けるのは黒(せ)と打ち込まれ白(京)と受けるのは黒(す)と打ち込まれ白(東)と受けるのは黒(ん)と打ち込まれ白(大)と受けるのは黒(京)と打ち込まれ白(阪)と受けるのは黒(東)と打ち込まれ白(名)と受けるのは黒(大)と打ち込まれ白(横)と受けるのは黒(阪)と打ち込まれ白(浜)と受けるのは黒(名)と打ち込まれ白(神)と受けるのは黒(横)と打ち込まれ白(戸)と受けるのは黒(浜)と打ち込まれ白(福)と受けるのは黒(神)と打ち込まれ白(岡)と受けるのは黒(戸)と打ち込まれ白(長)と受けるのは黒(福)と打ち込まれ白(崎)と受けるのは黒(岡)と打ち込まれ白(熊)と受けるのは黒(長)と打ち込まれ白(本)と受けるのは黒(崎)と打ち込まれ白(鹿)と受けるのは黒(熊)と打ち込まれ白(児)と受けるのは黒(本)と打ち込まれ白(島)と受けるのは黒(鹿)と打ち込まれ白(沖)と受けるのは黒(児)と打ち込まれ白(縄)と受けるのは黒(島)と打ち込まれ白(以)と受けるのは黒(沖)と打ち込まれ白(下)と受けるのは黒(縄)と打ち込まれ白(略)と受けるのは黒(以)と打ち込まれ白(す)と受けるのは黒(下)と打ち込まれ白(る)と受けるのは黒(略)と打ち込まれ白(ん)と受けるのは黒(す)と打ち込まれ白(だ)と受けるのは黒(ん)と打ち込まれ白(ぢ)と受けるのは黒(だ)と打ち込まれ白(ば)と受けるのは黒(ぢ)と打ち込まれ白(ぱ)と受けるのは黒(ば)と打ち込まれ白(ぴ)と受けるのは黒(ぱ)と打ち込まれ白(ぷ)と受けるのは黒(ぴ)と打ち込まれ白(ぺ)と受けるのは黒(ぷ)と打ち込まれ白(ぽ)と受けるのは黒(ぺ)と打ち込まれ白(ぽ)と受けるのは黒(ぽ)と打ち込まれ

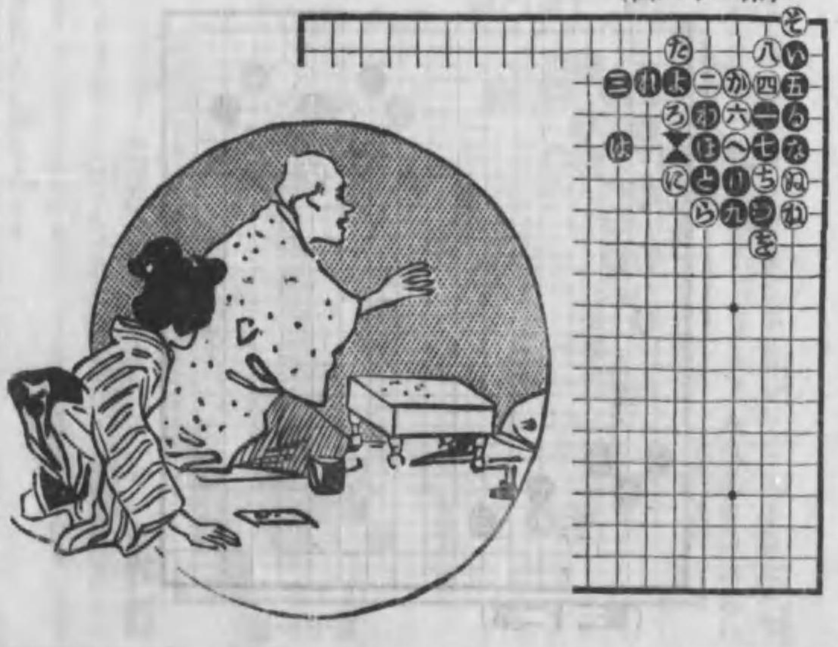
黒❻の変化　本図の白(ろ)に黒(い)と取切るのは白(は)と打ち込まれ黒(ろ)と取るより仕方がない白(に)と打ち込まれ黒(ほ)と取るより仕方がない白(へ)と打ち込まれ黒(と)と取るより仕方がない白(ち)と打ち込まれ黒(り)と取るより仕方がない白(ぬ)と打ち込まれ黒(る)と取るより仕方がない白(を)と打ち込まれ黒(わ)と取るより仕方がない白(か)と打ち込まれ黒(よ)と取るより仕方がない白(た)と打ち込まれ黒(れ)と取るより仕方がない白(そ)と打ち込まれ黒(つ)と取るより仕方がない白(ね)と打ち込まれ黒(な)と取るより仕方がない白(ら)と打ち込まれ黒(む)と取るより仕方がない白(ゐ)と打ち込まれ黒(の)と取るより仕方がない白(お)と打ち込まれ黒(く)と取るより仕方がない白(や)と打ち込まれ黒(け)と取るより仕方がない白(ま)と打ち込まれ黒(こ)と取るより仕方がない白(け)と打ち込まれ黒(え)と取るより仕方がない白(ふ)と打ち込まれ黒(て)と取るより仕方がない白(こ)と打ち込まれ黒(あ)と取るより仕方がない白(え)と打ち込まれ黒(さ)と取るより仕方がない白(て)と打ち込まれ黒(き)と取るより仕方がない白(あ)と打ち込まれ黒(ゆ)と取るより仕方がない白(き)と打ち込まれ黒(め)と取るより仕方がない白(さ)と打ち込まれ黒(み)と取るより仕方がない白(ゆ)と打ち込まれ黒(し)と取るより仕方がない白(め)と打ち込まれ黒(ひ)と取るより仕方がない白(み)と打ち込まれ黒(も)と取るより仕方がない白(し)と打ち込まれ黒(せ)と取るより仕方がない白(ひ)と打ち込まれ黒(す)と取るより仕方がない白(も)と打ち込まれ黒(ん)と取るより仕方がない白(せ)と打ち込まれ黒(京)と取るより仕方がない白(す)と打ち込まれ黒(東)と取るより仕方がない白(ん)と打ち込まれ黒(大)と取るより仕方がない白(京)と打ち込まれ黒(阪)と取るより仕方がない白(東)と打ち込まれ黒(名)と取るより仕方がない白(大)と打ち込まれ黒(横)と取るより仕方がない白(阪)と打ち込まれ黒(浜)と取るより仕方がない白(名)と打ち込まれ黒(神)と取るより仕方がない白(横)と打ち込まれ黒(戸)と取るより仕方がない白(浜)と打ち込まれ黒(福)と取るより仕方がない白(神)と打ち込まれ黒(岡)と取るより仕方がない白(戸)と打ち込まれ黒(長)と取るより仕方がない白(福)と打ち込まれ黒(崎)と取るより仕方がない白(岡)と打ち込まれ黒(熊)と取るより仕方がない白(長)と打ち込まれ黒(本)と取るより仕方がない白(崎)と打ち込まれ黒(鹿)と取るより仕方がない白(熊)と打ち込まれ黒(児)と取るより仕方がない白(本)と打ち込まれ黒(島)と取るより仕方がない白(鹿)と打ち込まれ黒(沖)と取るより仕方がない白(児)と打ち込まれ黒(縄)と取るより仕方がない白(島)と打ち込まれ黒(以)と取るより仕方がない白(沖)と打ち込まれ黒(下)と取るより仕方がない白(縄)と打ち込まれ黒(略)と取るより仕方がない白(以)と打ち込まれ黒(す)と取るより仕方がない白(下)と打ち込まれ黒(る)と取るより仕方がない白(略)と打ち込まれ黒(ん)と取るより仕方がない白(す)と打ち込まれ黒(だ)と取るより仕方がない白(ん)と打ち込まれ黒(ぢ)と取るより仕方がない白(だ)と打ち込まれ黒(ば)と取るより仕方がない白(ぢ)と打ち込まれ黒(ぱ)と取るより仕方がない白(ば)と打ち込まれ黒(ぴ)と取るより仕方がない白(ぱ)と打ち込まれ黒(ぷ)と取るより仕方がない白(ぴ)と打ち込まれ黒(ぺ)と取るより仕方がない白(ぷ)と打ち込まれ黒(ぽ)と取るより仕方がない白(ぺ)と打ち込まれ黒(ぽ)と取るより仕方がない白(ぽ)と打ち込まれ

白㊉手抜の場合（第二十四圖）

▲白㋑の飛びは手筋　本圖の石立にては無論白(十)は手を抜くを常とす黒もし機を見て(い)に下れば白(ろ)にこすみ黒(は)に立ち白(に)に飛ぶを定則とすべし▲肝心なるは㋺の突出し　白(に)に立ちたるとき、(ほ)に覗くものあり若し然るときは白は⧗印につがずして(へ)に突出すことを忘る可らず斯くて黒(と)に引かば白(ち)にはね出し黒(り)に切らば白(ぬ)に下り黒(る)につぎ白(を)に飛び黒(わ)にあて白(か)につぎ黒(よ)に切り白(た)にはね黒(れ)につぎたるとき白(そ)にはねるを以て目あり目なしとなり黒一手不足にて死を免かれざるべし

▲黒㋩の變化　黒もし(り)に切らずして(ぬ)にはねなば白(り)につぎ黒(つ)に押すべしとき白(ね)に切り黒(ね)につげば白(ら)に切り左右執れかを取り得べきなり

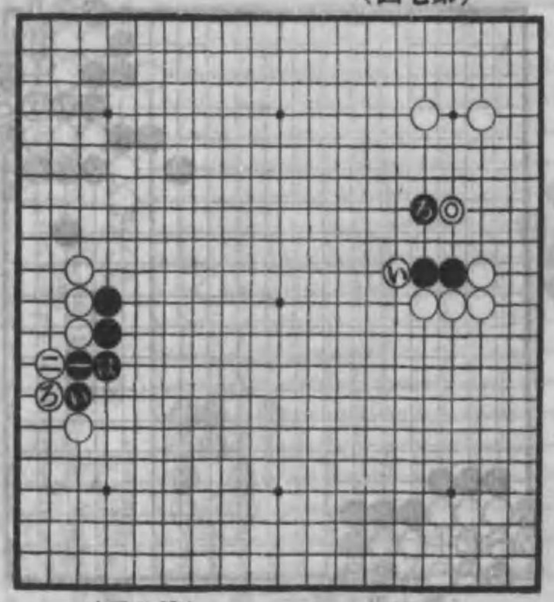
（第二十四圖）



増補第七圖

▲二目の頭　(い)は惣に二目の頭とて此頭を叩かるるは碁家の最も醜よ所にて他に非常の急場なき限りは(い)にのびおく方無難なるべし三目の頭なれば續り碁によりては三目の頭は二目の頭より一層厚しく強くることさなきに非ず併し三目の頭とても黒の勢えが一路内輪に(ろ)に在るときはタトロ其頭を叩かれたりとて慶ぎ易かるべく其隣區◎印に在る場合とは大いに其利害の相違あることを忘る可らず四目の頭も叩かれて痛からざるには非ざれども、のびの長き丈け感じも薄らぐゆゑ、寧ろ〳〵ことなきにしも非ず二目の頭に就て尚は說あり乞ふ次圖を見よ

（第七圖）



増補第八圖

▲頭突きと二目の頭　本圖の如き場合に黒(一)へはね白(二)に抑えたるとき黒(い)に突當るは非なり斬て白(ろ)に當るもずれば黒は怕も二目の頭を叩かれたるも同形に殘れるに非ずや多〳〵の場合(い)に突當ることを避けて(は)にうつ方可なり

（第八圖）

増補第九圖（死はハネに在り）

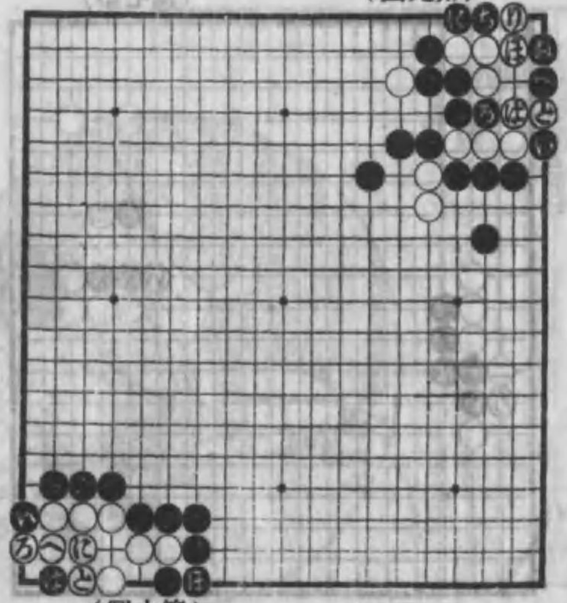
▲ハネ殺しの一例　隅の石の多くは雖に死はハネに在りと云ふ本圖は其一例なり斯る場合に黒(ろ)に出づるは宜しからず必ず(い)にはねることを忘る可らず白もし(は)に點ぶせんか黒又(に)にはねよ假に白(は)に應じたりとすれば黒(へ)にお塞白(と)に遮り黒(ち)へのびり(り)に抑えしとき黒(ぬ)へのびる順序と爲るべく隅の白は北邨一片の枯骨と爲を免かれざるべきなり

増補第十圖

▲ハネ殺しの二例　本圖に於ける白を倒さんとせば(い)にはねる外ある可らず白(ろ)に受くれば黒(は)に置き白(に)に勝勢を張りて活形を作らば黒は徐に(ほ)につぎて善し

▲白(ほ)の變化　白(に)に眼形を持つ手にて(へ)につぎか或は(と)に突當ることありとも黒はやはり(ほ)につぎて可なり如何にしても白は隅に活くるの手段ある可らず要するに死はハネに在りと云ふは内側より攻むるときは自ら中が廣がりて紛れも多く且つ生きられ易き場合多きが故に緊密に外部より挟めて殺す意味の遁り言葉と知るべきなり

（第九圖）



（第十圖）

◉棄石の口傳

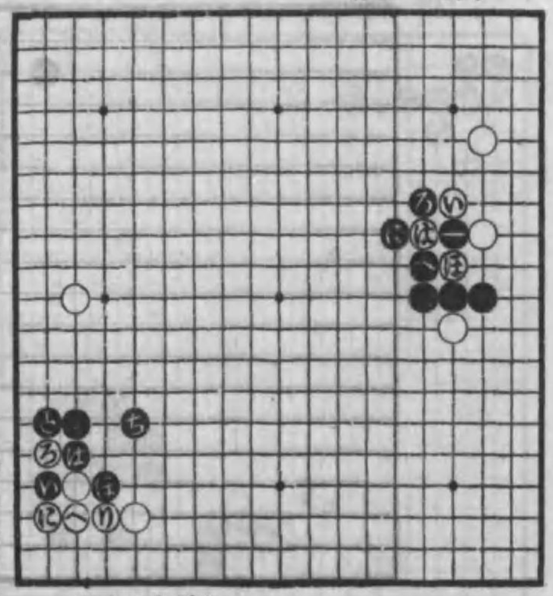
増補其一（第十一圖）

▲黒(一)は棄石　黒(一)へつけ白(い)にはねたるとき黒(ろ)へのびることもあれど中原經驗上事の急なるものあるときは(ろ)に二段ばねすることあるは即ち黒(一)の一子を棄て打つ趣向なりもし白(は)を切らば黒(に)へはねおへし白(ほ)に黒の一子を四ツ目に拔取らば黒(へ)にあつべし黒白孰れにても俗に所謂四ツ目拔に一子を討取らるゝは碁家の最も嫌ふ所なれども本圖の如く三目の並びある場合に於ては左程痛痒を感ずるものに非ず白をして黒の厳壁間際に一子を費さしめたる丈け寧ろ働きたりと云ふて可ならん

増補其二（第十二圖）

▲棄石の效果　本圖の如き場合に於て黒その一子を收めんとすれば則ち棄て固むるの手段に出で黒(い)に一着の棄石を試むるに若かず白(ろ)（はね出せば黒(は)を切り白(に)に抱え黒(ほ)へあて白(へ)につぎ黒(と)に抑える手順と爲らん斯く爲れば黒は(い)の一子を捨にせらるれども其機性の效果により自ら自隊を結束し得るを以て孤軍、敵地に介在せんよりは組強く且つ其働きも自由なるべきなり▲白(ろ)の變化　黒(い)につけしとき白(ろ)には(へ)につぎ黒(ち)に飛ぶ趣向肝要なるべし▲白(へ)の再變　初めに戻り黒(い)につけたるとき白更に(へ)に挽えたらば白(へ)につぎたるとき黒(ち)へ飛ぶ位のものならん▲白(ろ)の再變　白又(へ)につぎ手にて(り)に抑えなば黒(は)に突當んには黒は直に(ち)へ飛び然るべし以上の說明により黒(い)の棄石の如何に働きあるかを了解するに足るべきなり

（第十一圖）

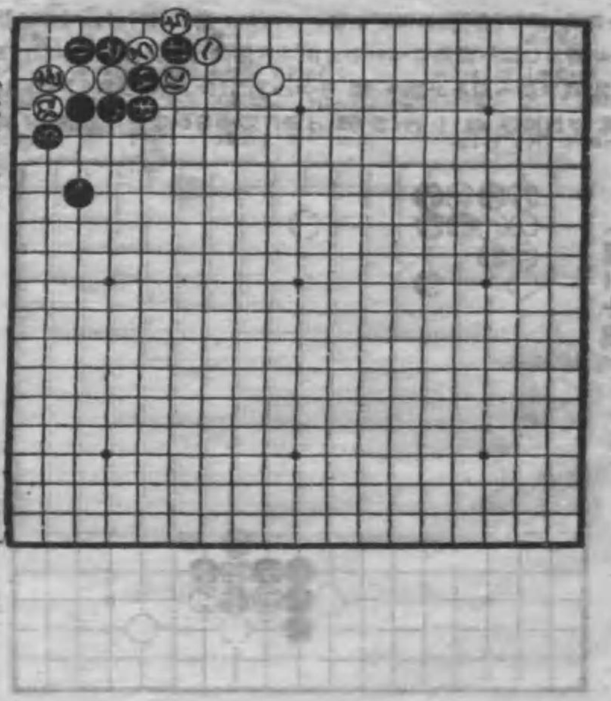


（第十二圖）

第三節

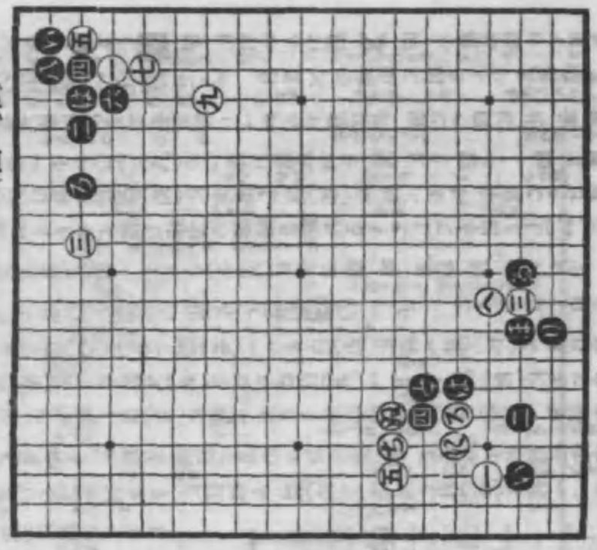
●三間挟みの定則

●第一則（第一圖）


（第一圖）

三間挟みの場合は白(イ)に下ぜねばならぬ。黒(ロ)に開かれては黒は(ハ)に下ぜねばならぬ。

●第二則（第二圖）


（第二圖）

三間挟みの場合白(イ)に下ぜねばならぬ。黒(ロ)に開かれては黒は(ハ)に下ぜねばならぬ。

●第三則（第三圖）

（第三圖）

三間挟みの場合白(イ)に下ぜねばならぬ。黒(ロ)に開かれては黒は(ハ)に下ぜねばならぬ。

●第四則（第四圖）

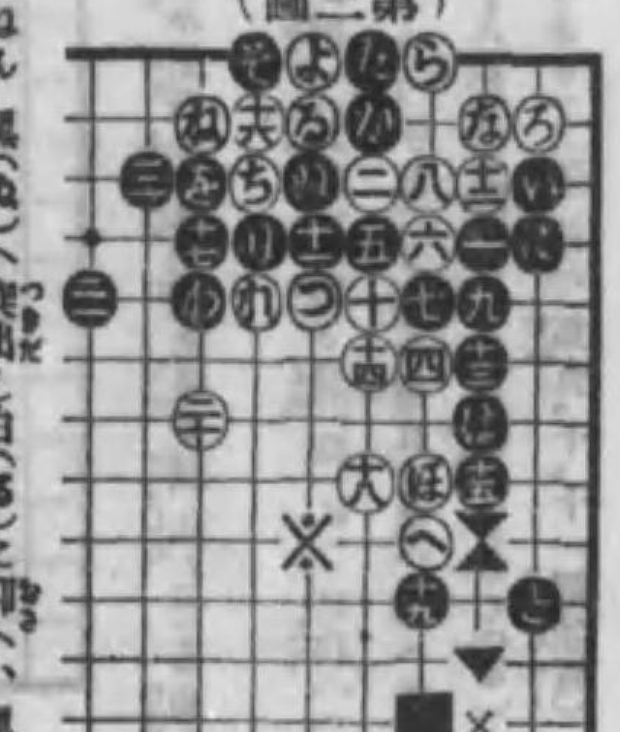
（第四圖）

三間挟みの場合白(イ)に下ぜねばならぬ。黒(ロ)に開かれては黒は(ハ)に下ぜねばならぬ。

●第三則（第三圖）

▲白(四)の掛け 白(四)を掛けたるときは本圖の如く打つを普通とす ▲黒(三)の變化 黒(十三)と圖の如くのびずして(い)へはねたるときは白(ろ)に抑へ黒(は)へとび白(十六)へけいまし黒(十七)、白(十四)へつぎたるとき黒(に)へつぎ白(ほ)に掛け黒(十五)へ押し白(へ)にのびたるとき黒(と)へ飛ぶは眞手にて斯くて白(二十)に展開するを定則とすべし ⧗黒(い)の秘傳 扨本圖に戻り黒(十五)へ飛ぶ手にて先づ(い)にはね白に(ろ)へ受けしめ然る後(十五)へ飛ぶは深意の存する所然るに漫然(十五)へとぶは甚だ危し其次第は白(十七)の一子を「しちやう」に取らるゝ患なきときは白は(十六)に斜走せずして(ち)に飛ばん黒(り)に抑へれば白(十七)(「しちやう」の當り如何を見定むるは此石なり)にはねん 黒(ぬ)へ突出し白(る)に抑へ、黒(を)を切り、白(十六)につぎたるとき黒は(わ)に掛けて(十七)の一子を「しちやう」に取る能はざるのみならず却て此一子の爲に味方の聯絡を斷るゝに非ずや ▲切り處を違へては大變 右の如く黒(ぬ)に突出し白(る)に抑へしとき初心の者は(を)の處を切すしてマ、(十六)の處を切ることあり是れ大惡手なりもし然るときは白(を)につぎ黒又(か)を切らば白(よ)へ下り黒(た)にあて白(ね)へあて黒(そ)に二目ぎり白(る)を打かき、黒其打かきの一子を取りしとき白(つ)へあて黒(る)へつぎ白(ね)に抑へ黒(い)にはね白(な)に下り黒(ろ)に抑へしとき白(ら)につけて黒を俘虜にする手段あるべし ▲白(十七)征の當りと黒(い)のハ子 ことを以て白の(十七)の一子「しちやう」の當りありて取れぬときは黒は必ず(い)にはね白(ろ)に抑へしとき(十五)に飛ぶ戰略を忘却す可らず ⧗黒(い)のはねさへあれば 假令白(十七)の一子「しちやう」に取れぬとしても縱し味方の聯絡を斷たるゝとしても白もし(い)のはねあるに拘はらず(ち)に飛ぶとせんか黒怯ず憶せず(り)に抑へ白(十七)にはねなば黒(ぬ)に突出し白(る)に押へんか今度こそは黒(を)に切らずして(十六)に切り白(を)につがば黒(か)に切りて可なり(る)の一子か(二)(八)の一隊か孰れかを擒にし得べく即ち黒(い)のはねの効能は抑も茲に在らんなり ▲黒(三)は要衝の地點 なるが故に決して手を拔くべからず屢は急所にて白に此急所を衝かれては黒の進退甚だ窮屈を感ぜざるを得ざればなり ▲黒⧗印の附越に注意せよ 白又×の地點に迫らんか其眞意⧗印の附越を窺ふに在るを以て黒は須らく警戒を加へて直に▼印に應じ或もし■印に引かんか黒※印へ攻め掛けて可なり

（第三圖）

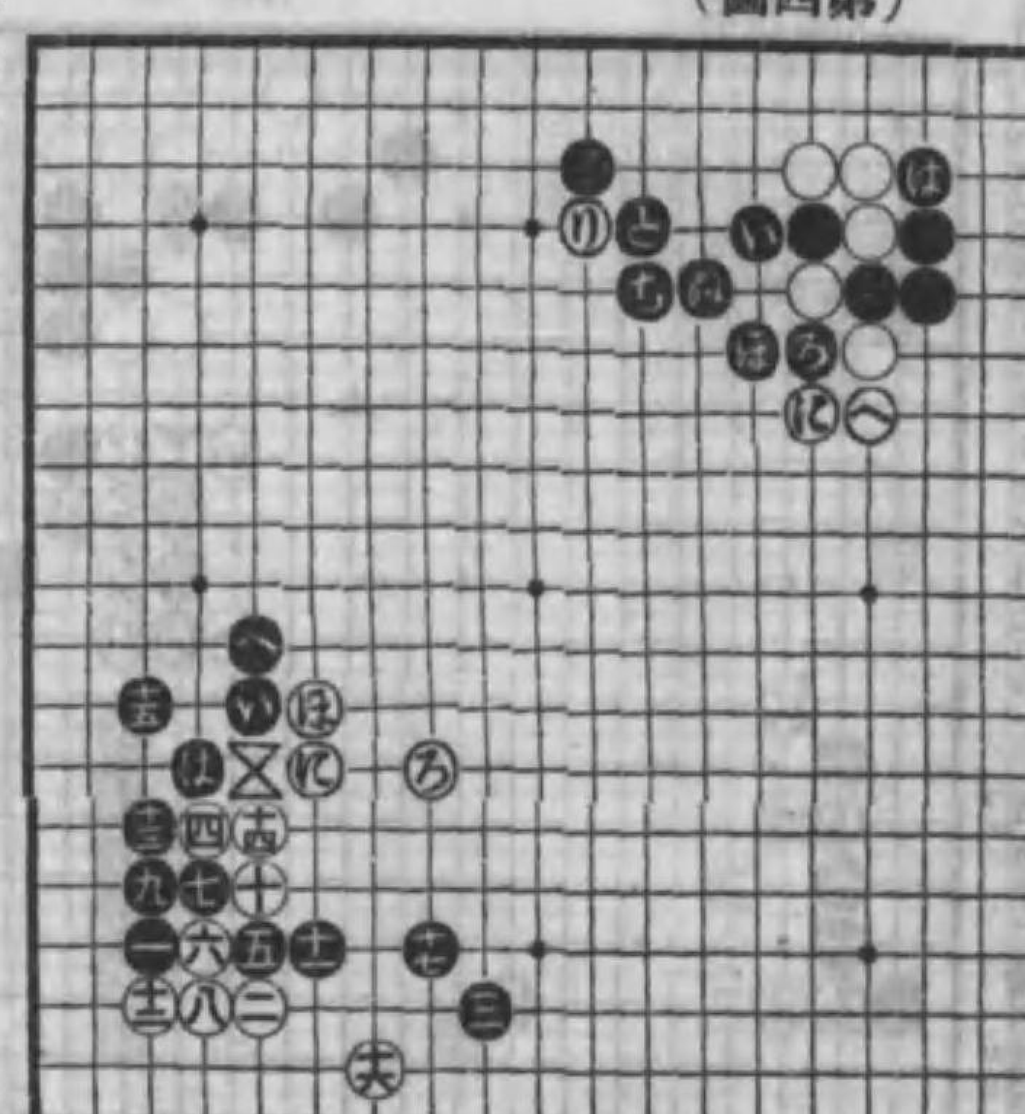


●第四則（第四圖）

▲黒戰略の變化 第三圖の如く黒(十一)は(い)にのびずして(ろ)に切る手段稀には應用することなきにしも非ず斯くて白(い)に黒の一子を打拔きたるとき黒(は)に抑へる趣向なり此時古碁に於ては白(に)へはね黒(ほ)にのび白(へ)へつぎたるとき(と)へこすむを法としたるものゝ如くマ、見受る所なれども黒(と)にこすまんよりは寧ろ(ち)へ掛けて白軍を封鎖するの形整へるに若かざるべし斯る手段あるを以て白(に)のはねは考慮を要すべし

▲白(に)の變化 扨白(に)へはねるは此塲合一考を要すとして白(と)又は(り)へつける手段なきに非ずソレも全局の模樣に依ることにて豫め其得失を斷言し難し ▲白(ほ)のはねは大惡手 黒(は)に押へたるとき初心のものは何の考へもなく手拍子にてマ、白(ほ)へはねるものあるは能く見受くる所なれど(ほ)のはねは割合に於て甚だ損なり何となれば黒の爲に白の一子を擒にせられて其領域の固まるに反し白の形は凝りて(ぬ)の覗き殘ればなり

（第四圖）



（第五圖）

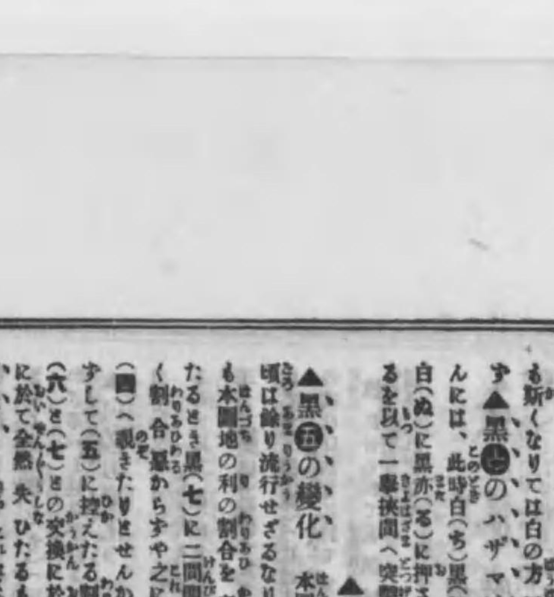
●第五則（第五圖）

▲白(十八)の變化 第三圖に於ては白(十八)は(い)に飛ぶ定則を示したり併し(い)に飛ばずして(ろ)にけいまするも亦一法なり ▲黒(は)のフクレは重要の良手 白もし單に(ろ)に陣取らんか黒は徐ろに(は)にふくれて敵の動靜を窺ふべし此時初心の者は輕く(に)にこすむ手段を知らず往々⧖印へ押すことあれども所謂ダメ詰の惡手にて此時黒(い)にはね白亦(ほ)にはねたるとき黒(へ)にのび黒の形優勢となるべし尚は變化あり次の圖に就て說明すべし

●第六則（第六圖）

▲白㊀の變化　第三圖及び第五圖に說きたる如く白（十八）は▲印に對して黒▲印に應じ追擊の態度に出づるを可とせん此時白（ろ）、黒（は）、白（に）、黒（ほ）、白（へ）この形は能く打碁に見る所なれども斯くなりては白の方圍ふさある形となりて黒の爲には妙ならず▲黒㊁のハザマは如何　若かず黒（と）の挾間へ突入せんには、此時白（ち）黒（に）に抑へ白▲印を切り、黒（り）に押し白（ぬ）に黒亦（る）に押さば結局左右いづれかの敵を攻にし得るを以て一擧挾間へ突擊するの得策なるを知るに足るべきなり

（第六圖）



▲變則（第七圖）

▲黒㊂の變化　本圖の陣形は古碁には能く見る所なれど近頃は餘り流行せざるなり▲黒白兩軍の地の利の割合　抑も本圖地の利の割合を考ふるに假に白（四）の手を（六）へ一間飛たるとき黒（七）に二間開きしたりとせんか此交換は白の方少しく割合悪からずや之に反し白（四）と黒（五）の交換如何假に白（四）へ覗きたりとせんか黒は無論（い）に防ぐべき筈なるに左は せずして（五）に拘えたる割合なるを以て地の利の上に於ては黒は（六）と（七）との交換に於て得たる所の利益を（四）と（五）の交換に於て全然失ひたるものと謂ふべきなり　▲附けの代りに肩撃ち　更に之を白軍の見地より解說せんか白（四）へ覗きたるとき黒（い）に受けたりとせば白に（ろ）の附ありて黒の爲に不利なるが如くなれど併し黒（五）に在りとせば（ろ）のつけは左程効なきものと白より（は）の肩を壓迫せらるゝの處あるに非ずや要するに白は（六）と（七）との交換に於て失ひたる所を（四）と（五）の交換に於て償ひ得て多少餘りある地の利を占め得たる形勢に在るが如し　▲打碁の參考　打碁に黒（五）と並びたるとき白（ろ）につけ黒（に）にはね白（ほ）につぎ黒（七）に飛びたるもあり時の場合と趣向に依ることゝ知るべきなり

其二（第八圖）

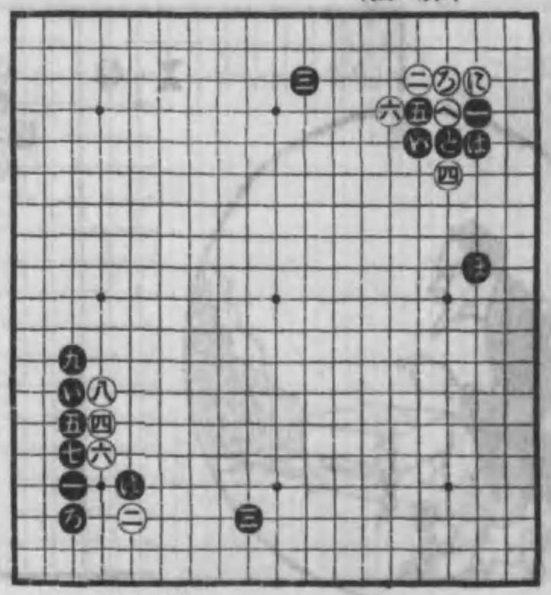
▲白㊅の變化　白、戰局の機樣により本圖の如く（六）と外側にはね出すことなきに非ず其時は黒（い）に立ち白（ろ）へのび黒（は）に並び白（に）に所謂三々の要地を掘せしとき黒（ほ）へ開きて然るべし▲注意　白（ろ）へのびたるとき黒三々の要地を掘せらるゝを恐れ（に）に抑へるは不可なり何となれば白は（四）の味方を優りに（へ）へ突出し黒（と）に抑へれば白（は）に切りて戰ふ手段あればなり

其三（第九圖）

▲黒㊁の變化　本譜は恰も白先づ（六）へ掛け黒（七）にのび白亦（四）へのびたるとき黒（い）に飛びたる陣形より一步進みて黒（五）に押し白又（八）へのびしとき黒（九）へ飛びたる割合に當れり斯くすれば黒（一）（七）と二本のびて（い）へ飛びたる時と違ひ白に（ろ）のつけなき代りに一筋多く壘を築き得て外部を堅固にし得たる譯にて其得失の判斷は外部の模樣によりて決するの外なし

▲黒㊁の意味　黒は何故（は）附けの常道を履まずして本譜の如く（五）につけたりやと云ふに白の作戰計畫の裏を掻き敵の進向を挫く爲めに其意表に出て斯くは（五）とつけたる譯合なり

（第八圖）

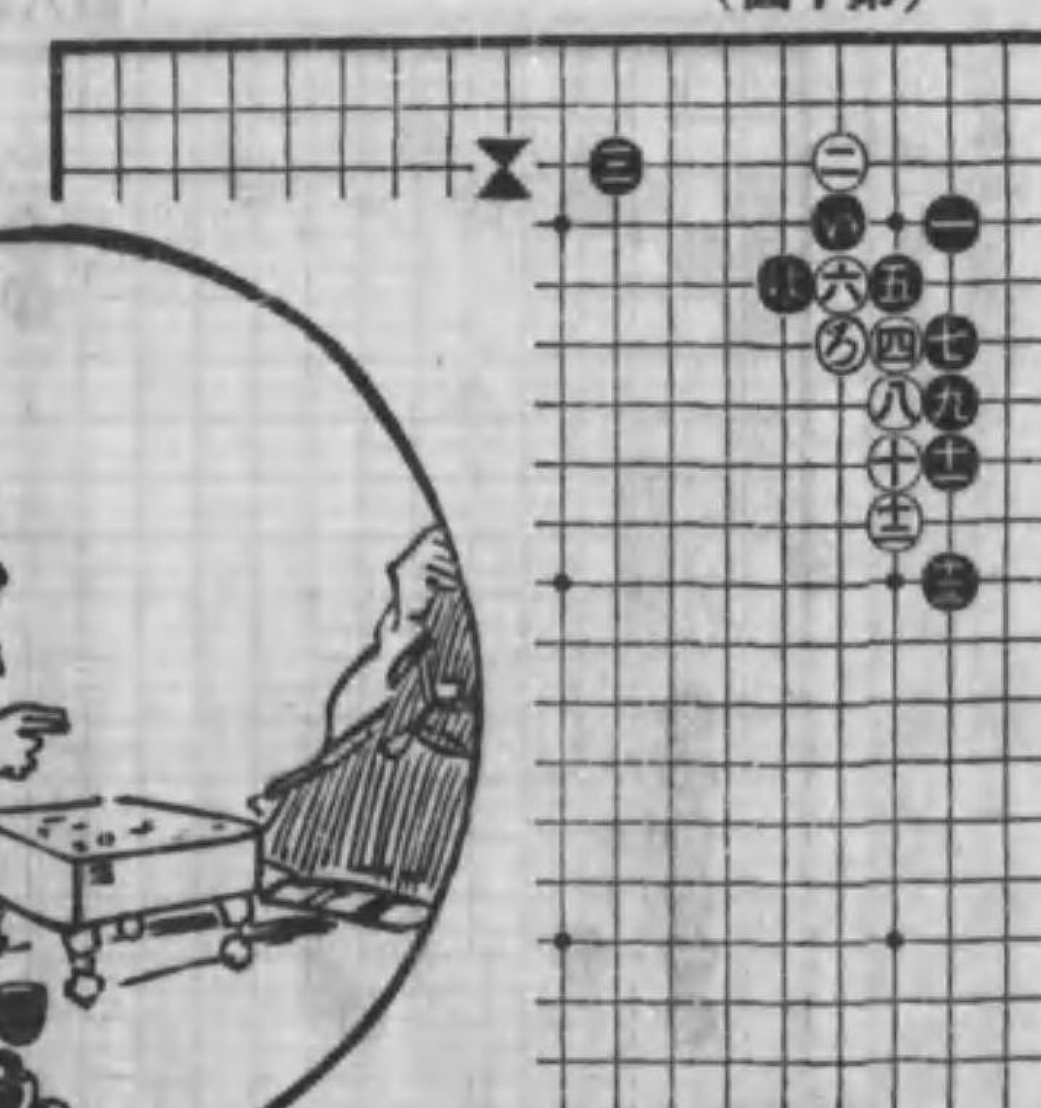


（第九圖）

其四 （第十圖）

▲黒又㊄の變化 黒本圖の如く打つも亦第九圖同樣我をして(い)に應ぜしめんとする白の作戰計畫を挫くに外ならず併し敵の計畫の意表に出るのみが能事に非ず本圖の如く白軍をして外部に鐵壁を築かしむるは中原の戰ひに於て味方の不利となるとなきや否や萬と全局の形勢を胸に收め例せば黒(三)の一子白より⧗印邊に挾撃ちされて苦境に陷ることなきや否や其邊の心得なくて只定石なりとて徒らに本圖の如き趣向に出づるは所謂趙括、兵を誤るの危險なきを得ざるなり ▲白の作戰計畫 白も亦黒の嵌んとする趣向を挫く爲め本圖の如く(六)に抑へずして(七)に防禦線を張るも亦一策なり若し然るときは黒(六)にのび、白(ろ)に押さば黒(は)にのびて可なりと云ふ所以は白(四)と掛ける手にて(七)へ挾み返したりと假定せよ此場合黒は多く(五)にこすまん其時白(四)に押し黒(六)にのび白又(ろ)に押し黒(は)にのびたる時と同じ陣形になるがゆゑなり

（第十圖）



●第七則 （第十一圖）

●白二間挾返し

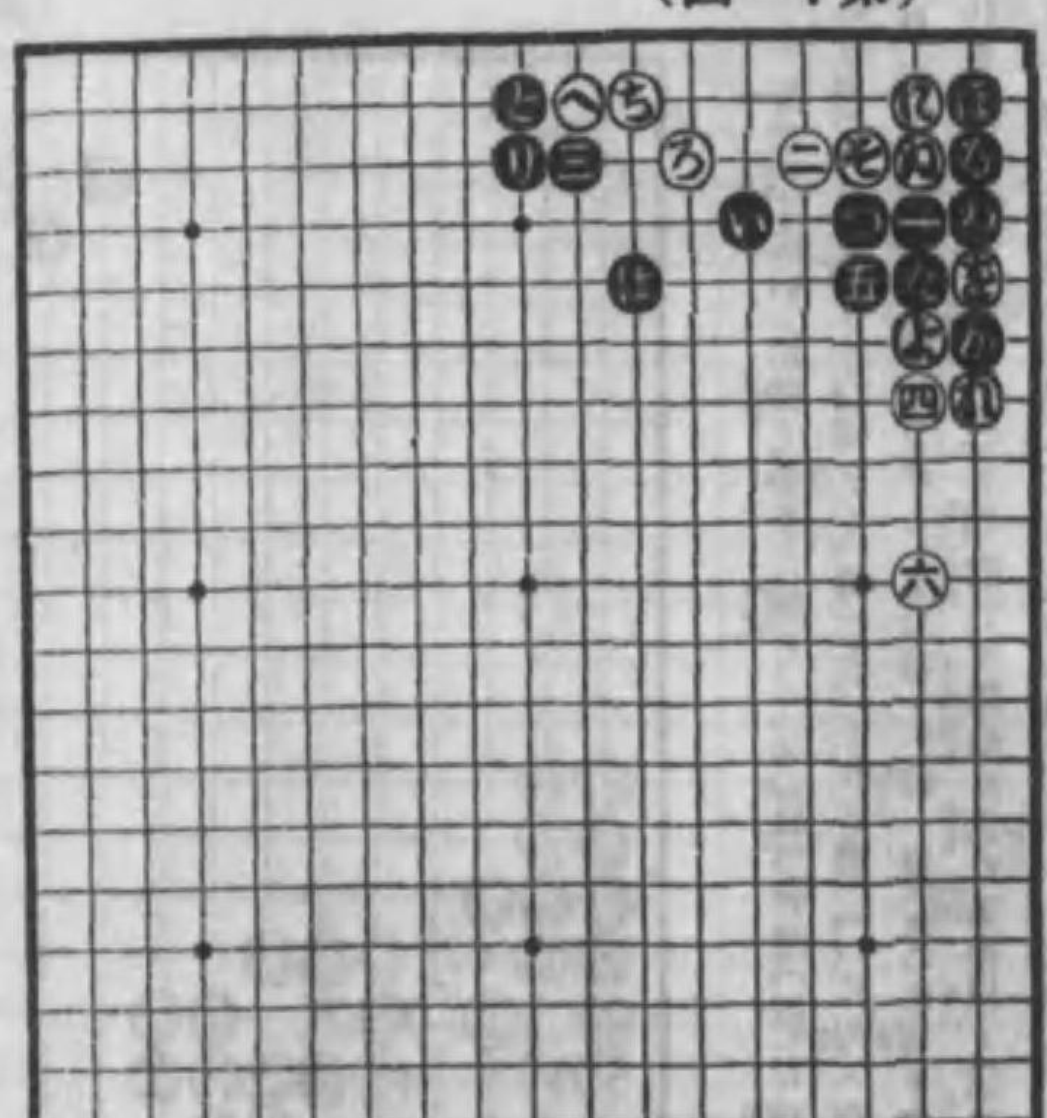
其一

黒はこのまゝ手を拔くこともあり又この一部局の始末を付るにも全戰局の模樣により種々の趣向あり漸次その戰略を說示すべし

▲黒軍封鎖の戰略 を行はんとすれば先づ黒(い)に冠し白(ろ)に應ずれば黒は遠く(は)に包圍すべし斯くして白、黒軍の包圍を破るの策なきを知り(に)に籠城の策を講ずれば黒(ほ)に肉薄せよ左らばと白(へ)に逆撃すれば黒(と)に防ぎ白(ち)に退けば黒(り)に補ひ白、(ぬ)黒(る)この時白(を)に覗けば先手は爾に取らせじと黒單に(わ)につがずして(か)に附越し白(よ)、黒(た)白(れ)に抑へ黒(わ)につぎ接戰一と先づコヽに終結して黒は包圍の實を完ふし白は徐ろに(そ)に補うて此處に一小城郭を搆へ得べきなり

▲黒(か)のつけこし は洵に肝要なる手段にて斯くすれば(を)の取り殘るべく若しこのつけこしの手段を知らずウカと(わ)につがんか白は一應(そ)につぎ後に白(た)に衝當り黒(つ)につぐ手順となり白に(を)ののぞき丈け只儲けされたる結果と爲るべし故に斯る場合殊に白(六)へ二間の開きあるときは黒必ず(か)につけこして先手を取るの手段肝要なり

（第十一圖）



●第八則（第十二圖）

其二

▲黒(九)の變化　黒(九)は前圖の如く遠く包圍せずして最しく(い)に圖ふこともあり白も亦壓手を嫌ぜざるを得ず即ち前圖の如く(へ)に斜走せずして(ろ)につけ黒(は)、白(に)に二段ばね黒(ほ)にはねこみ、白(へ)黒(と)、白(ち)に切り黒(り)に押へ、白(ぬ)に一子取りしとき黒(る)に絶ち切るを定法とす是れ互角の形勢なり

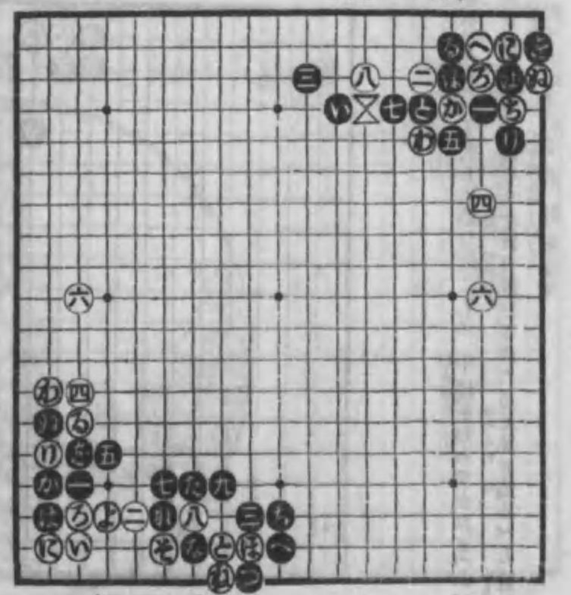
▲黒(ち)の切りと包圍の軍略　白(に)に二段ばねしたる時初心の者はマヽ(へ)に切(に)の一子を取らんと焦ることあり是れ黒が折角(い)に包圍したる軍略を傷るものなり何となれば黒(へ)に切れば白(ほ)につぎ黒(を)に(に)の一子を繰にせしとき白(わ)につけこし黒(と)に聯絡を絶てば白(ち)に打ち後(あ)に突入りて×印より中原(脫出)するの途あればなり尙ほ說明を要することあり

●第九則（第十三圖）

其三

▲兩軍攻守の變化　黒が堅兵念に(九)へ迫りし時白は何故に第十一圖の如く(い)に控えずして劍しく(ろ)につけ黒(は)に押へしとき白(に)に二段ばねせしやと云ふに白もし(ろ)につけずして(い)に控れば黒(に)に引けば黒(ち)につゞく白又轉じて(ろ)に突當れば黒(は)に引き白(り)にのぞき黒(ぬ)につけこし白(る)に抑へ黒(を)に切り白(わ)に抱へ黒(あ)につぎ白(よ)に補ふ手順を經り其形は第十一圖と同じなれば黒(九)の位置が(七)と相對して敵壘に迫れるを以て黒は其形を利用し直に(た)につがん斬くて白もし手を拔かんには黒(れ)に突出し白(そ)に受くれば黒(つ)にはね白(ね)に抑へれば黒(ね)に打込みて劫爭と爲すを得べし故ゆえに黒(た)につぎたる其時は白は是非とも(れ)に固めざるを得ざるなり斯くては黒に先手にて外部を固めちるゝ恐あるを以て白は劃しく(ろ)につけ大で(に)に二段ばねしたる所以なり之を是れ數の戰法の變化に伴ふ臨機の應手とは云ふなり

（第十二圖）

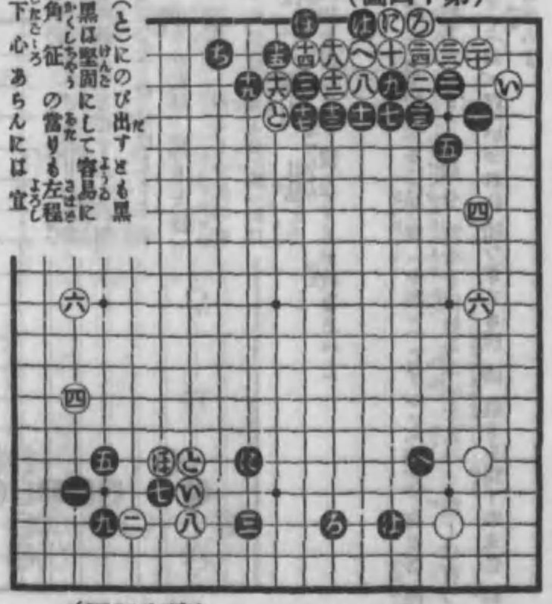


（第三十圖）

●第十則（第十四圖）

▲黒(九)の計略　黒は前二圖の如き戰法に出でずして直に(九)に突貫したる其戰略は他に非ず殿しく白を一隅に壓迫すると同時に自己の壘壁を堅ふし以て中原經營の樞衝に出でたる者にて是れ又一法なりとす▲白(三)の變化　黒(二三)へ抑へしとき白(二四)へつがずして(い)にこすむ手段もあり白もし(い)にこすめば黒(二四)に(二)の一子を取り、白(ろ)に亘り、黒(は)に置き、白(に)につぎ黒(ほ)にはね白(へ)のつぎとなりて活きは活きなり▲白、征の當りの効能如何　角は其上に(四)(六)の一隊を聯絡を通ずるの途開けあるがゆえに此一隅だけに就て云へば白は甚だ有利なる如くなれども黒より先手にて(後)のはねを打たれたるは不利に非ずや何となれば後に白(十六)の一子、征の當り出來て(と)には平然として(ち)に掛つがん白假令黒軍を剛斷し得たりとするも右側の黒は堅固にして容易に近づく能ずず左側の黒赤(後)のはねありて活形を存すとせば則ち折角征の當りも左程の効能なきに非ずや故に白もし(十六)の征の當を利用せんとの下心あらんには宜

（第十四圖）

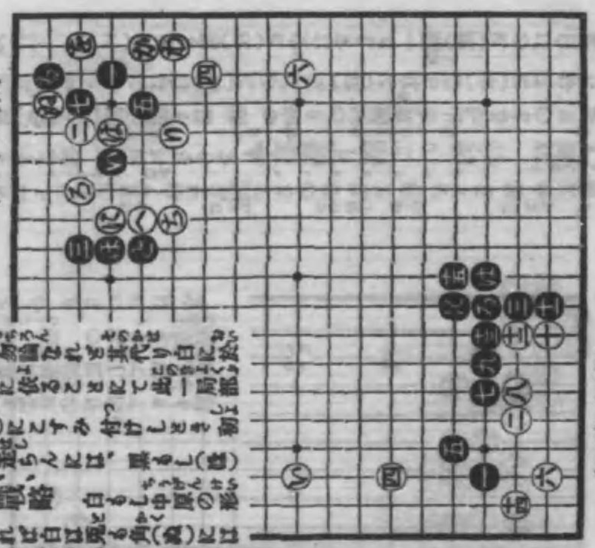


（第五十圖）

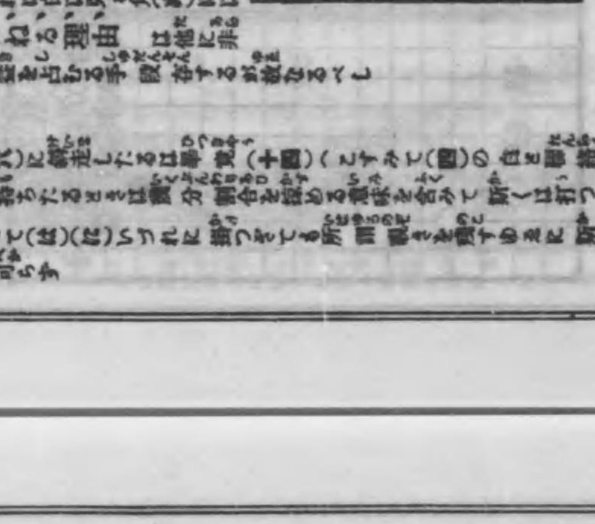
●第十一則（第十五圖）

▲黒(九)の變化　第十五圖の如く黒(九)とこすみつけたる理由如何と云ふに黒に於て白を包圍するの必要を感ぜざる場合に斯くも(九)と隅を固めて實利を占むると同時に白を(い)に追出して攻むるを利とする戰略に外ならず▲右側下隅ごの釣合　右側下隅に白の配置ある如き場合には黒(九)にこすみ付け白(い)に立ちたるときは黒(ろ)へ二間に開くは誤ひ向きの好地位を占むるものと云ふべし若し又右側下隅に圖の如く白の配置ある其附近則ち(は)邊に黒石あらんには白(い)にのび黒(に)に立ち白(ほ)にはねたるとき黒(へ)に攻め掛くる杯は最も働きある趣向ならん▲黒(ち)の變化　白(い)のとき黒(に)に立たずして一應(ほ)にのび白をして(と)に立たしめ然る後(に)に立つ手段もあるべし

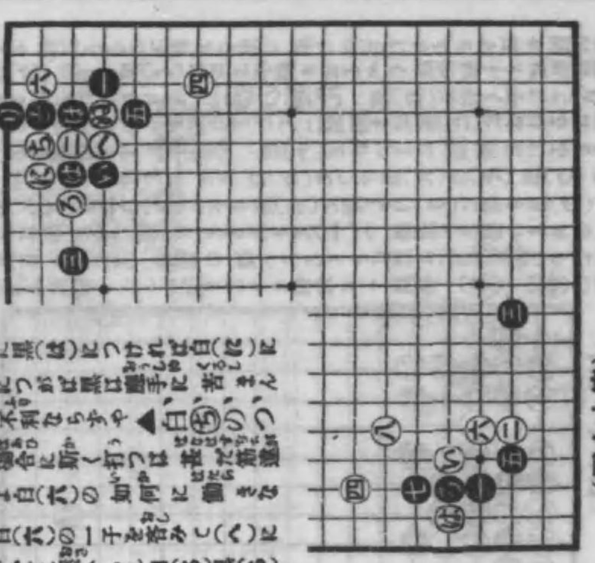
（第十六圖）



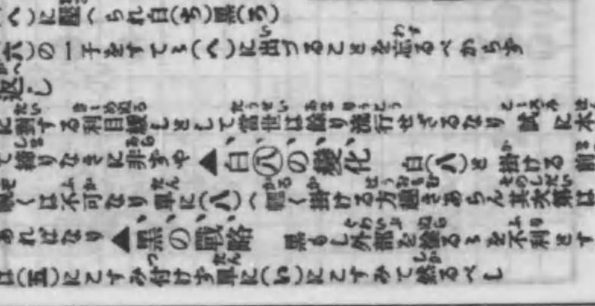
（第十七圖）



（第十八圖）



（第十九圖）



●第十三則（第二十圖）

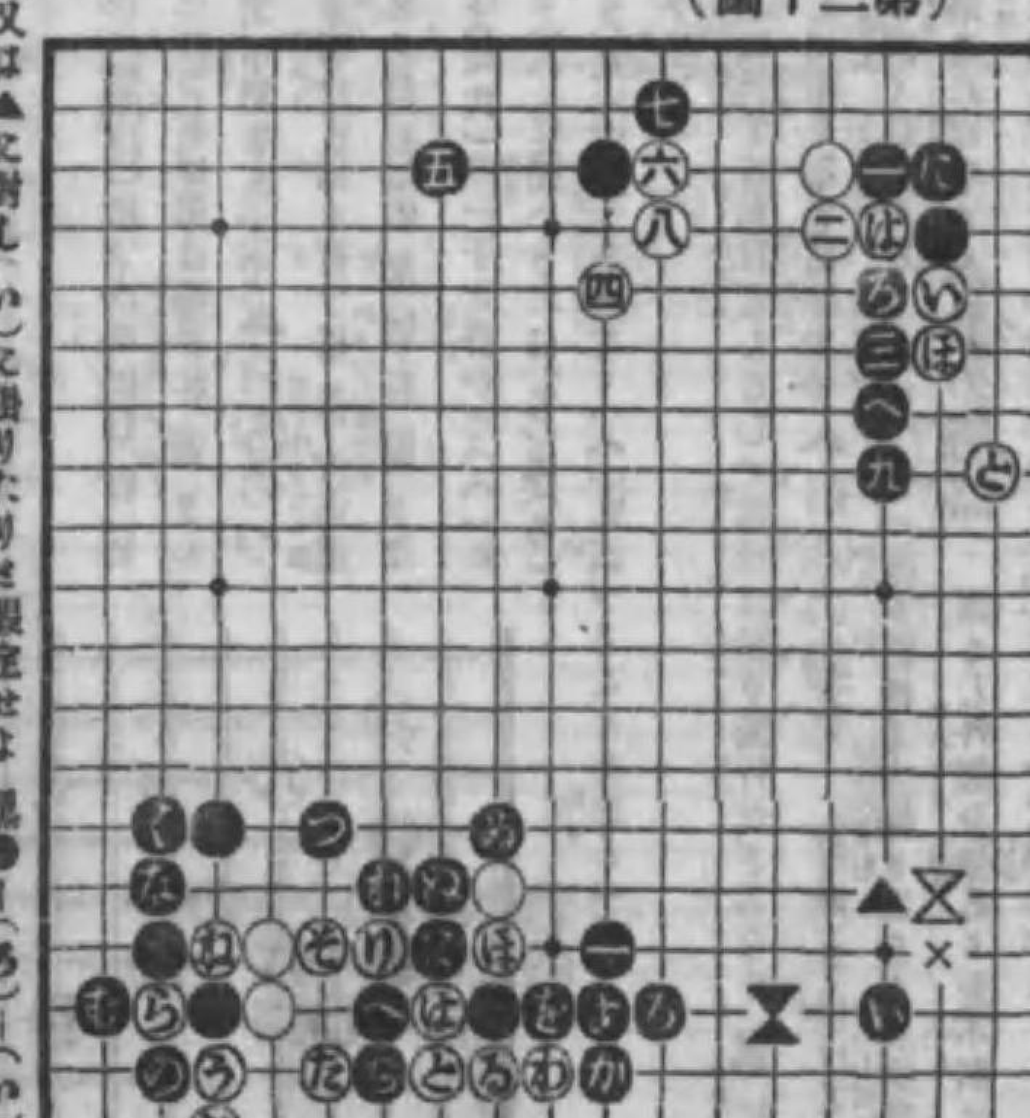
黒三間挾み白手拔の塲合其一

▲黒❶の戰略　黒（一）とこすみつけ（三）と運びたるは先づ隅に實利を占め而して白を攻むる意味を含める巧手なり一歩を進めて云へば黒（三）と構えたるは白をして（四）に冠せしめ而して黒（五）に展開し以て左右に領域を割せん計畫なり▲肝要なるは黒❾の飛び　白（八）へ引きたるは已れを收むる趣向のみに非ずして兼て（い）のつけこしを狙へるなり、知るべし當初白（四）と冒子に冠せしは即ち白（六）へ付け次で（八）へ引き（い）の突撃を試みん底意なりしを、依て黒はイヤ其手は喰はぬと（九）に飛びて以て（い）の附越を防ぐと同時に稍ゝ地域を略せん計畫に出づるは最も肝要の手段と知るべし尚ほ白には種々の戰略あり▲黒❾手拔の結果　は如何に成行くかと云ふに白（い）につけこし黒（ろ）に遮斷すれば白（は）に突入り黒（に）につげば白（ほ）にのび黒又（へ）にのびんか白（と）に走りて黒軍兩斷の計を全ふし得べきなり　是に於てか黒（九）の手の肝要なる所以を知るに足るべし

其二（第二十一圖）

▲黒❼の變化　右側下隅⧖若くは▲印邊に白の配置あるとき前圖の如く黒（ろ）へ二間に展くは非なり何となれば後に黒もし⧖又は▲に對し（い）に掛りたりと假定せよ黒●―（ろ）―（い）の單縱陣となりて其陣取方如何にも位低くして割合甚だ損なればなり故に⧖又は▲邊に高く白軍の控へあるときは黒は（ろ）に開かずして圖の如く（一）へ斜開するを定則とすべし但し×及び⧗印邊に白石あるときは黒（ろ）へ開くこともあり又（一）へ斜走する塲合もあるべし扨て黒（一）へ斜走したるときは白（は）黒（に）にはねこみ白（ほ）に切り黒（へ）にはね白（と）に下り黒（ち）に押し白（り）に切り黒（ぬ）にのび白（る）に曲り黒（を）に逃げ白（わ）に押し黒（か）に押へ白（ろ）に覗き黒（よ）につぎたるとき白（た）につけ黒（れ）白（そ）黒（つ）白（ね）黒（な）白（ら）黒（む）白（う）に一子取りしとき黒（ゐ）に二目の頭を押へるを普通とす▲注意　黒（一）とけいまに展開したるときは白（は）につくれば黒（ろ）に二間開きのときと違ひ必ず（に）にはねこむことを忘るべからず然らずして二間開き同樣（と）にはねるは惡手なり何となれば此時白（に）に引かん左すれば横を見て（を）に附越さるゝ虞あればなり▲黒（な）の變化　黒（ね）に引く手にて（ら）につゞくこともあり若し然るときは白より（う）にはねられ黒（の）に押へ白（お）に下り黒（く）に竝ぶ手順となるべく斯の如くんば黒は隅の一子を取られぬゆゑ一寸得に似たれど其代り肝腎の（ゐ）の頭を押へ付くる能はざるの不利あり先づ黒を持ちたらんときは本圖の如く（ゐ）へ二目の頭を叩くは用心堅固の手段なるべし

（第二十圖）



（第二十一圖）

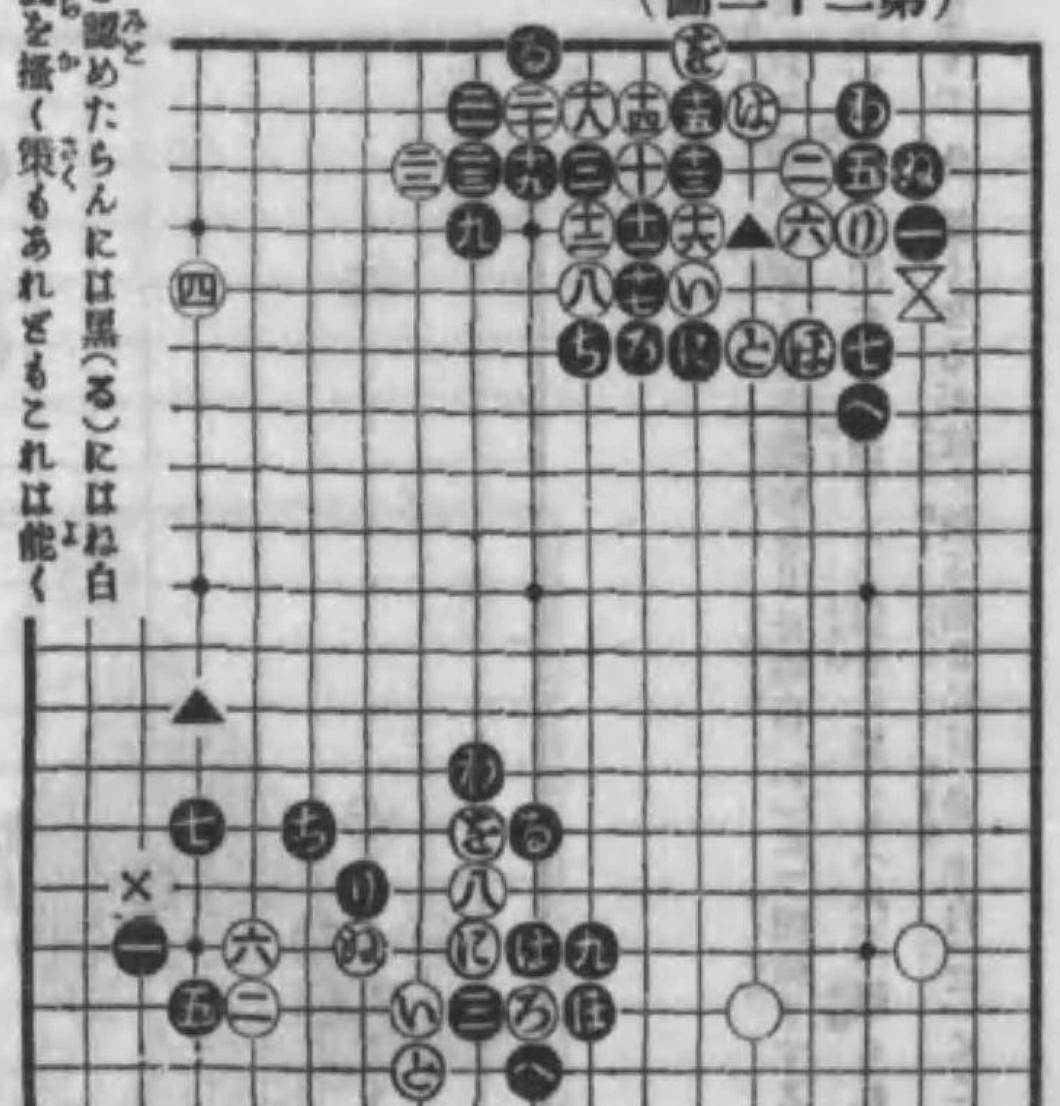
其三（第二十二圖）

▲白㋩付の變化　前圖の如く白（は）につける手にて先づ（い）にのび黒亦（ろ）にのびしとき白（は）につけ黒（に）に曲り白（ほ）につけ黒（へ）に立ち白（と）へ突當りしとき黒（ち）に押へて可なり▲白⑫の變化　白（十二）と切らずして（り）へ曲る手段もあり此時黒（ぬ）につぐは定則なり白は何故に先づ（り）へ曲りしやと云ふに前圖の如く後に白（り）へ曲らんには黒は先手を取るべく（五）の一子をすてゝ⧖印へ引くなるべく是れは白の最も厭ふ所にて（十二）へ切る前に先づ（り）へ曲り込まんには黒は勢ひ（ぬ）につがざるを得ざるべし斯くて後白（十二）へ切りたらんには其結果は前圖の如くなりて白は先手を贏ち得るに非ずや是れぞ白先づ（り）に曲り込むの一策なりと云ふ所以なり▲黒にも計略あり　但し黒前圖の如く（二三）へつぎ白（は）につけ黒（い）にあて白▲印へつぎたるとき黒（と）に白軍を包むも中原の形勢我に利あらずと認めたらんには黒（る）にはね白（を）に黒の二子を包みしとき黒（わ）に下り白の先手を取らん計略の裏を搔く策もあれどもこれは能く熟慮して打つべきことにこそ

其四（第二十三圖）

▲白㋑附越の變化　黒（九）へ斜走せしとき白（い）につけずして（ろ）につけこすも亦一策なり此時黒（は）に遮り白（に）に切り黒（ほ）に一子を抱へ白（い）にあて黒（へ）に一子を取りしとき白（と）に下らば黒は普通の如く▲印に開かずして（ち）に飛ぶを定法とす×印の附越を防ぐと同時に何分か敵を攻むるの趣向に出づるは必要の手段にて白もし手を拔かんには黒（り）に攻込み白（ぬ）に應ずれば黒（る）に掛け斷くて白（を）にのびれば黒は鋭く（わ）にはねて飽まで敵を攻め惱ます手段あるべし故に此塲合白は多くは手を拔くを得ず先づ（る）にこすむ位のものならん左すれば黒は先手となりて他の方面に轉ずるを得べし然るに黒もし普通の如く▲印へ飛ばんには白の爲に手を拔かるべく其時攻掛けたりとて今說明せし如き利益を收むる能はざるや必せり呉々も注意すべきことぞかし

（第二十二圖）



（第二十三圖）

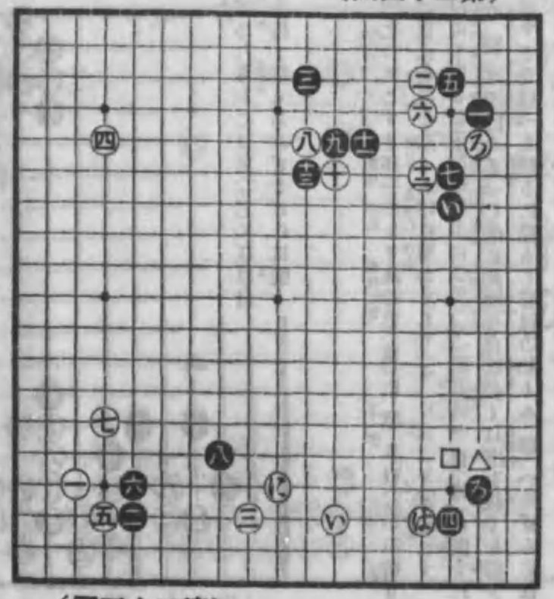
其五（第二十四圖）

▲兵法の常軌　黒(七)へ煽りし其時は白(八)へ冒手に冠すると操兵の常道とすべし然るに初心の者は往々(十二)につけることあれど是れも大墨手なり何となれば黒は得たりと直に(い)にのびるは必定なり左すれば前圖にも說きし如く白は格別得る所なきのみか此場合最も大切なる(ろ)の缺陷を突撃して黒軍崩瓦の機會を失ふなり　**▲緩急の機變**　然れども白先づ(八)へ冠し黒もし本圖の如く(九)(十一)と應戰したらんときは白(二)(六)の一隊包圍の難に陷るの虞あるを以て亦膠柱を許さず白たと(ろ)の附越を失ふも是非なし直に(十二)へつけて(二)(六)一隊の血路を開くは急務なるべし　**▲黒の用心**　若し本圖と反對に黒(八)へ冠して圖の如く白より(十三)に切られたりと假定せよ甚だ紛れ多き形となるを以て黒を持ちたるときは(八)へ冒手に冠するは考慮を要すべく先づ次の圖の如く一路ひかえる方無難なるべし

其六　第二十五圖

▲黒紛れを避くるの用意　黒(八)と一路控えたるは即ち堅氣以て紛れを避くるの趣向なり此時白(い)に二間開きするを定則とす但し右側下隅に於ける黒(四)の配置が△又は□に在るか或は黒の(ろ)に對し(は)に白の揷りある場合に黒より(八)へ煽られたりて白(い)に開くは二間復た二間即ち(三)—(い)—(は)平凡の陣形となりて俄に低くなるが故に防る場合には必ず白(に)にこすむことを忘るべからず

（第二十四圖）



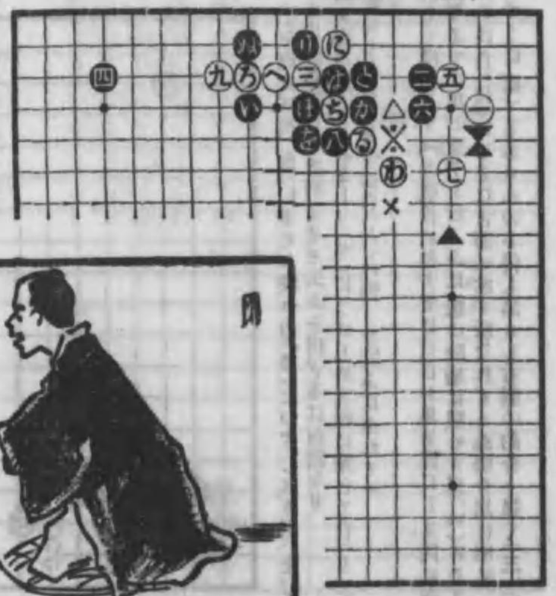
（第二十五圖）

其七（第二十六圖）

▲黒先づ斥候を放て　前圖に說きたる如く本圖の如くなるは定法なり斯の如くなれば敵味方共に急に手を下すの必要なければ黒もし全體局の模樣に依り我陣を固むるの必要ありと感じたるときは先づ(い)に一隅の斥候を放つて敵を脅威すべし、ソレ敵の御參なれと白(ろ)に防禦線を張れば黒は瞬つて(は)の側面を攻撃し白(に)にはねれば黒は(ほ)にふくれ白(へ)に補へば黒は除ろに(と)に引撃くべし左すれば白は▲印にとびて▼印の附越を防ぐならん斯くなれば黒の形は收まれども同時に白の陣營も亦堅固になることを知らざる可らず

▲白(と)はねの手段　黒(ほ)にふくれしとき白(へ)につがずして(と)にはねる手段あるべし此時黒(へ)にはねこみ白(ち)に一子を取り黒(り)にあて白(は)につぎ黒(ぬ)にはね白又(る)にはね黒(を)につぎしとき白(わ)に圖ふ手順となるなり　**▲黒の劫手段**　白(と)にはねしとき黒(へ)にはねこまずして(か)に受け白(ち)に(は)の一子を取りしとき黒▼印へつけこして劫を爭ふ策もあらん　**大惡手**　白(ね)にはねべき手にてマヽ(ほ)にのびるものあるを見受れど是は大惡手なり黒(ち)につがば如何念よ敵の隊形は堅固にならずや　**▲黒十手拔の場合**　白は如何にして黒を攻むるやと云ふに先づ白(と)に進撃し黒✕印に應ずれば白は▲印に拔ふべし白又(と)と攜手より攻めず大手より✕印へ攻め掛けしとき黒(は)に黒(と)に引けば白(ほ)にのび黒(る)に突當る外なかるべく又黒(は)にんか白(と)につけ黒△印につきたる其時白✕に打て守り且攻むる謀に出づるを可とす

（第二十六圖）

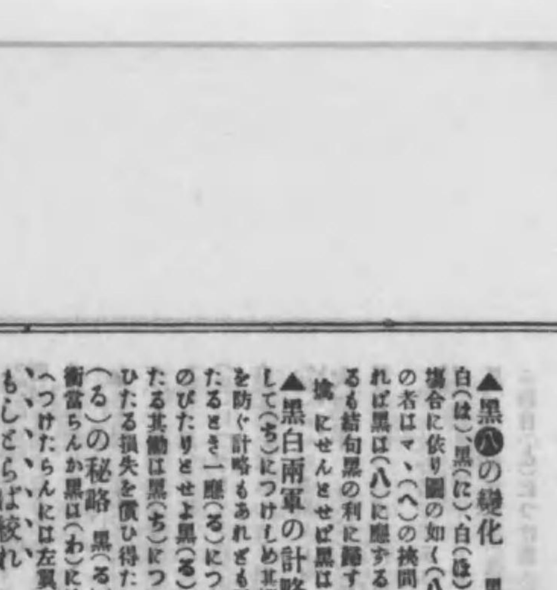


其八（第二十七圖）

▲黑(八)の變化　黒本圖の如く(八)と打たんか白(い)、黒(ろ)、白(は)、黒(に)、白(ほ)となるを定則とす　▲黒(八)の再變化　黒場合に依り圖の如く(八)へ打たず⧖印へ打つことあり此時初心の者はマ、(へ)の挽回に飛込むことあれども大に不可なり若し然れば黒は(八)に應ずることを忘る可らず斯くすれば如何に變化するも結句黒の利に歸するや必せり若し白強ひて(二)(六)の二子を擒にせんとせば黒は輕く二子をすてゝ打つも十分の利ありとす

▲黒白兩軍の計略　是に於てか白はマ、(と)に攻寄せ黒をして(ち)につけしめ其機會を利用して白(り)に立ち以て⧖の附鎩を防ぐ計略もあれども黒にも亦自ら策戰あり　即ち白(と)に攻寄せたるとき一應(る)につけ白(八)へ退却せば　黒(ち)につけ白(り)にのびたりとせよ黒(る)と白(八)の交換は如何白を凝らして重くしたる其働は黒(ち)につけ白をして(り)に立たしめ⧖印の附鎩を失ひたる損失を償ひ得たりと云ふて可ならん　▲白、應戰の變と(る)の秘略　黒(る)に反撃せし時白(八)へ退却せずして(を)へ衝當らんか黒は(わ)に挾撃ち白をして(八)へ引かしめ然る後(ち)へつけたらんには左翼の白は凝りて働きなき形となるべし　▲白もしどらば絞れ　黒(わ)へ突當りしとき白(八)へ退かずして(た)にはねる)の一子を取らんとせば黒(よ)にあてよ斯くて白(か)にねば然るべし黒の利益豊大ならずや斯る結果になるがゆへに白(と)へ攻寄つを以て大いに働きある手段としたれども近頃に至り「黒(る)のつけを發見したるより今は白(と)の働きを疑ふに至れり」

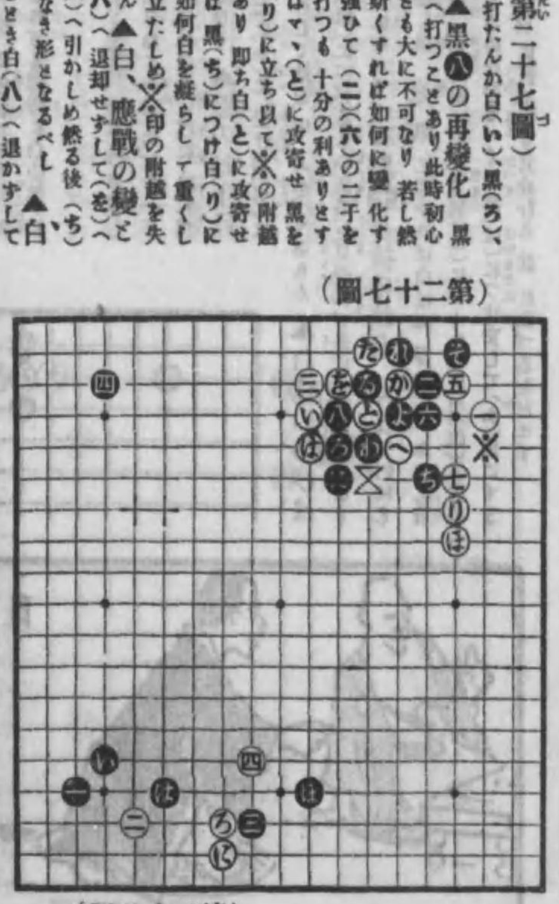
（第二十七圖）



其九（第二十八圖）

▲敵軍誘惑の手段　白(四)は古碁の定法として示す所なれども決して必ずしも有利なりと云ふを得ざるは勿論なり參考までに黒の受手を示さんに敵の誘惑に應せず黒(い)にとすむを博せん戰略に過ぎざれば初心者の好で應用すべき手段に非ざるなり參考までに黒の受手を示さんに敵の誘惑に應せず黒(い)にとすむ抔は洗着にして納れなき手段なるべし斯くて白(ろ)につけし時黒(は)にかけ白(に)に下るは古碁の示す所なれども此場合黒は別に(は)へ攻下る必要なかるべし手を抜きたりとて何の差支かあらん却て敵の打やうに窮するあらんのみ併し黒もし右側の釣合上強て(三)の一子を働かす必要ありとせば(ほ)にけいまする抔面白き趣向なるべし

（第二十八圖）



第四節

◉こすみの定則

●第一則（第一圖）

▲堅實なる良手　本圖の如く黒(三)へこすむは己れを守ると同時に敵を攻むる手段なり堅實にして紛れなき眞手と謂つべきなり

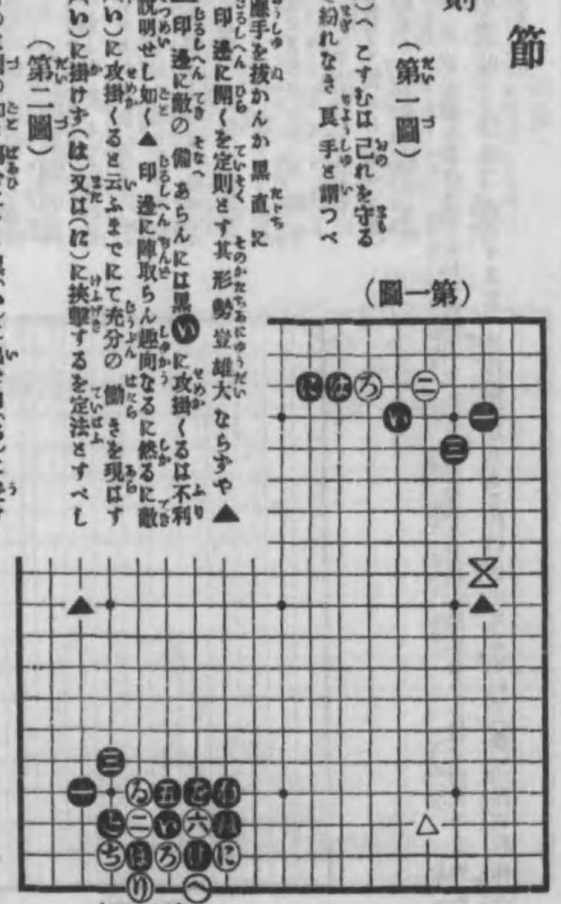
▲白(四)手抜の場合　白もし(四)の應手を抜かんか黒直に(い)に攻掛け白(ろ)に應じたるとき黒▲印邊に開くを定則とす其形勢豈雄大ならずや　▲陣立て自ら法あり　併しながら⧖印邊に敵の備あらんには何となれば黒(い)に掛くるは前にも說明せし如く▲印邊に陣取らん趣向なるに然るに敵兵既に其地點を占領したりとせば黒は只(い)に攻掛くると云ふまでにて充分の働きを現はすことは出來ざればなり故に此場合に於ては黒は(い)に掛けず(は)又は(ね)に挾撃するを定法とすべし

（第一圖）

●第二則（第二圖）

▲黒(い)の出切りは不可　初心のものは圖の如き場合にマ、黒(し)より白(に)に押へ黒又(ほ)に切り白(へ)に一子取りしとき白の(二)の一子を抱へ込むを以て隅の領域の廣くなりし如く考ふるは大なる誤りなり試に見よ黒の石數は七子にして白は五子なるに尙は且つ黒は後手となれるに非ずや　▲黒(い)切りの變化　黒又(は)に切る手にて(ほ)の處を切らんか白(ち)に押へ黒(る)に出づる途あるを以て執にしても黒(い)の出切は惡手と知るべし　▲黒(い)の押しも惡手　扨又黒(い)に割込み白(ろ)に受けしとき黒(を)に押し白(ぬ)に行び黒又(わ)へ押すものなきにあらねども是れ又不可なり勿論左側▲印邊に黒の配置ありて大模樣の縄張りの出來る場合若くは右側下隅△印邊に低く敵の陣取あらんには飽まで敵を低く凝せ而して大いに味方の軍を中原に活動せしめん戰略にて(を)(わ)に押すは可なれども只無意味に押すは宜しからず

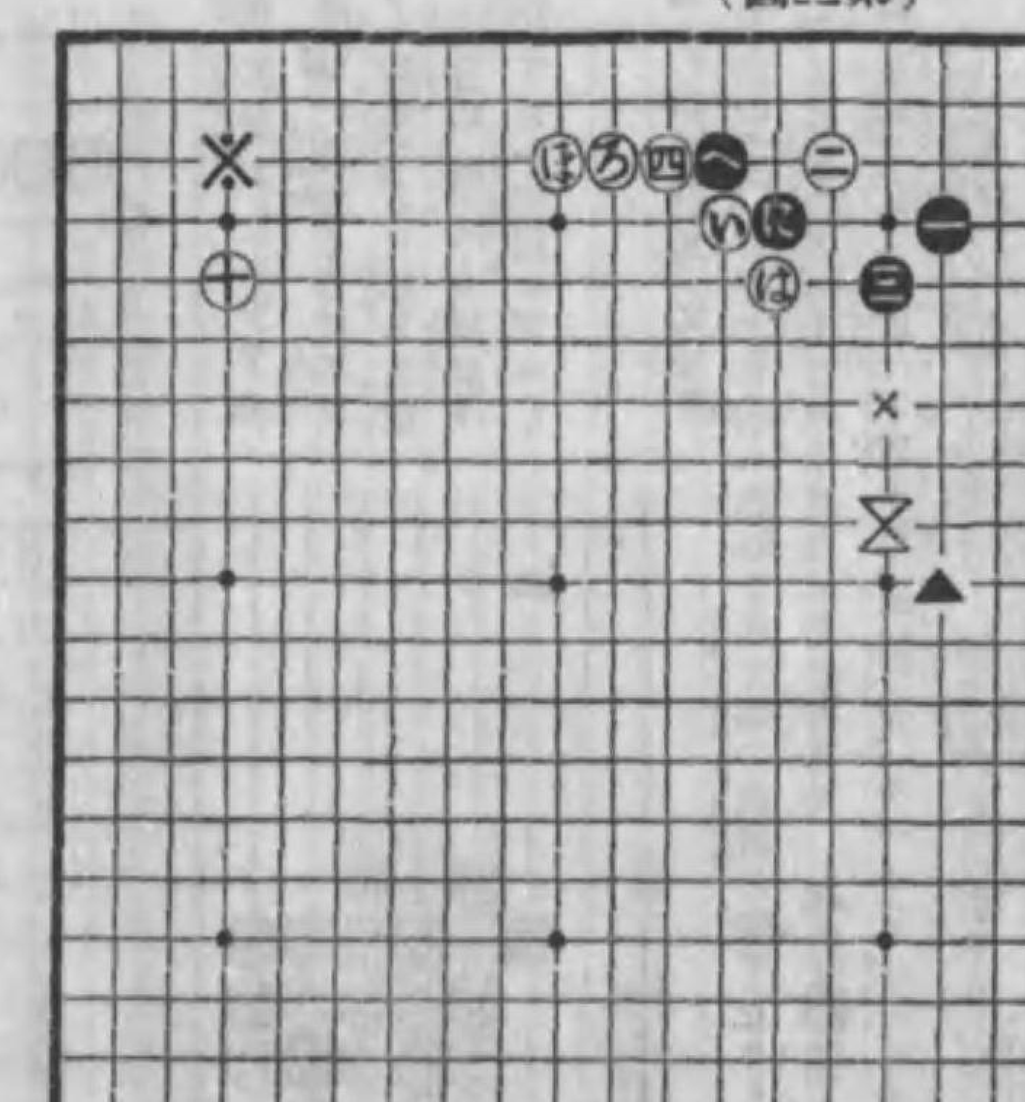
（第二圖）



●第三則（第三圖）

▲白四と局面の模樣　本圖の如く白(四)と二間に展開するは一の戰法なれど如何なる場合にも二間開きが法と云ふに非ず局面の模樣により(い)又(ろ)或は(は)に陣取る趣向あることを知らざる可らず左に其戰略を說明すべし ▲白いに高く陣取る理由　右側面▲印邊に敵の備あるときは黑(に)に掛ける誂向きの趣向なるを以て白は此(に)の攻掛けを凌ぐ其一方には己れを護ると同時に機を見て×印若くは⧖印に進擊せん意味を含みて先づ(い)に護るを上策とすべし ▲三間展開の眞意　は如何にと云ふに一例を擧ぐれば左側上隅即ち※⊕印の要地に敵の據れる場合に白(い)に備ふるとせんか右側面なる(一)(三)の敵に對する睨みは利けど黑より(ろ)の要地に迫らるゝの虞あり依て黑(一)(三)に對する利目は(い)に備ふる程ならねど※⊕の敵に對し配備上の釣合を取る爲に白(ろ)又は(ほ)に兵を配るを法とするなり但し白、法の如く(ろ)へ三間に開くときは黑より(へ)に打込まるゝ手段あることを覺悟せざる可らず其應手の變は後圖に就て說明すべし ▲白四の二間開きは堅固　扨白(四)は(い)と(ろ)の中間に位し其位や、低ふして(一)(三)の黑に對する利目は(い)の如く強からざれども亦多少進擊の意味を有せざるに非ず又三間開きの如く左側面上隅の敵に對する釣合は一路控目なれども左る代り打込の恐れなきを以て堅固なる點に於ては三間開きに優るや勿論なり ▲白はの意味　白(は)へ斜走するは一法に相違なきもこれは稀に見る手にて(ほ)の附近に味方ありて地域構成の計畫の外は餘り應用せざるなり

（第三圖）



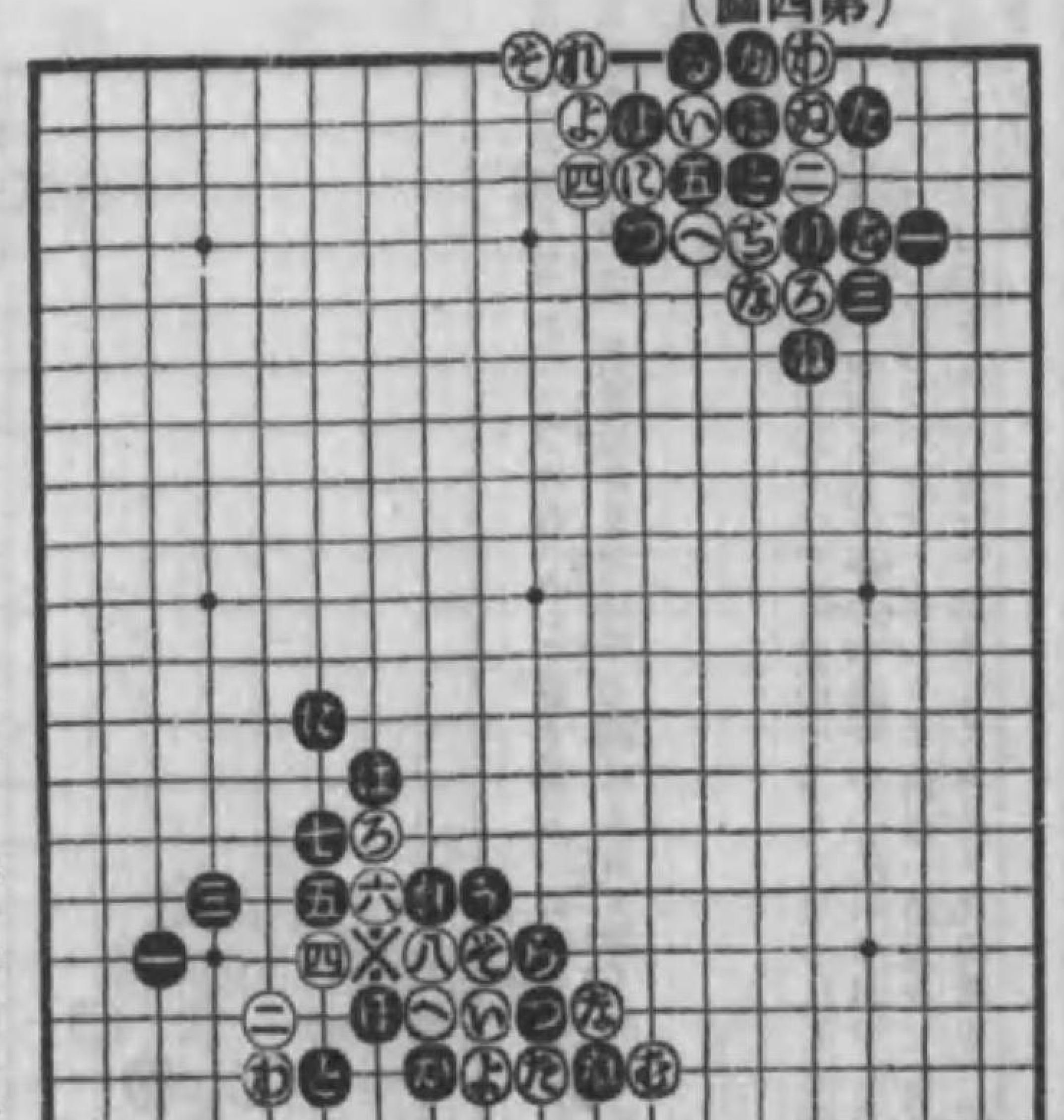
●第四則（第四圖）

▲黑五打込の心得　黑(五)は機を見て決戰の覺悟もて打つべき手にて直に打込むは非なり參考のため白の受方を示さんに(い)に亘る手と(ろ)につける手及び(ち)にこすむ三樣の手段あり ▲白い亘りの計略　白(い)へつけるは戰ひを避けて輕く收まらんとする時に用ふる手段なり黑もし(は)に遮れば白(に)に切り黑(ほ)に抱へ白(へ)にはね黑(と)につぎ白(ち)に押へ黑(り)に切り白(ぬ)に押へ黑(る)に一子取り白(ろ)にあて黑(を)につぎ白(わ)に下り黑(か)に目をもち白(よ)に抑へしとき黑(た)へつける手順となるべし斯の如く白(二)の一隊を犧牲に供して外部を塗りたるは(れ)の下り若くは(そ)にこすむ味を殘し之を利用して左側隅に手段を施さん計略に出たるなり ▲白、血戰覺悟の場合　白中原の摸樣により(二)の一子を敵に委し局勢不利なりと認むる場合には(ろ)へつけて戰ふべし黑もし打込みたる(五)の一子を救はんとせば單に(つ)にこすむか又は一先づ(ね)にはね白(な)にのびたるとき黑(つ)にこすむ外なかるべし又白(ち)にこすむは一策にして矢張り戰意を以て打つべき者なり

▲變則其一（第五圖）

▲相尖みは損　古碁に於ては本圖の如く黑(三)へこすみたるとき白亦(四)に尖むを以て定法としたれども其割合損なるが故に明治の今日に於ては殆ど相尖みの戰法を用ふるものなきが如し ▲白八の變化　白(八)は(い)にけいまに開くも亦一法なりとす但し白(六)(ろ)の二子「しちやう」にて取らるゝ心配なきときは白(八)に掛つや前に先づ(ろ)に一本押す方得ならん併し黑、この時(は)に敵の頭を押へ白(八)に守りたるとき黑亦後手にて(に)に補ふても尙ほ其の形勢優れるに非ずや即ち相尖みの損なる所以を知るに足るべきなり ▲白征の當りなき咎め　若し白「しちやう」の當りなきにも拘はず強引に(ろ)に押したるときは黑直に※印を切り敵の無謀を尤むべし此時白(八)へ掛け、黑(ほ)にのび、白(へ)に追ひ來りしとき黑(と)にこすむことを忘る可らず白(わ)に抑へ黑(か)にはね白(よ)に抑へしとき何は扱おき黑(い)に切るは敵のトドメを刺す所以の急所と知るべし然るときは白は餘儀なく(た)にのびん左らば黑(れ)に切り白(そ)にのびたるとき黑(は)にはねれば白の(六)(ろ)の二子を「しちやう」にて擒にし得べし即ち白に「しちやう」の當りなきときは(ろ)に押すは無理なりと云ふ所以其れコヽに在りて存するなり ▲白たの變化　黑(い)の急所を切りしとき白(た)にのびず(そ)に押したりとせんか黑(つ)にのび白亦(た)に遣へば黑(ね)にはね白(な)に切らば黑(ら)に逃げ白(む)に一子を抱へんか黑(う)にはね白(れ)につぎたるとき黑(は)にはねればやはり白の一團を「しちやう」にて取り得べし ▲黑ねの變化　黑に於ては(ね)に頭を抑へる手にて單に(ら)に曲りても前後いづれかの敵を擒にし得べきなり

（第四圖）



（第五圖）

▲變　則　其二　（第六圖甲）

▲黒、他に非常の急場なくば　本圖の如く黒(一)へ掛くるも白なほ手を拔かんか他に非常の急場なき限りはタトヒ白に二手打たるゝとも黒は直に(二)に抑へ白の一子を取込む方利なり▲白㋑の詰めに油斷すな　白、埒外の機樣に依り(い)に詰めることあり是れ既に伊藤と爲れる一子を活かさん計略を含めるなり黒もし之を看過すとせんか白候ち機鋒を現して(ろ)に出でん黒(は)に抑へ白(に)、黒(ほ)、白(へ)に掛つぐは肝要の手段にて黒(と)白(ち)の時黒(り)につぐ外なく　即ち白は(ぬ)へこすみつけて活とならん折角の勢力範圍を獻じ寄ほるゝ處ある歟敢に吳々も油斷すべからず併し白の隅に活くるは斯く黒に逸付けられても中原の形勢若くは附近の味方に左までの障りを及ぼさぬときに限ることにて此活路を知りたりとて得意氣に濫用すべからず▲黒㋺の變化　白(に)にはねたるとき黒(ほ)に抑へ(へ)して(る)印（飛ぶ手段もあり白(ほ)に出づれば黒(を)に突當り白(わ)に立ち黒(か)に備へ白(よ)に守り黒(た)にはねて亘りを防ぎ白(れ)に突當りのび黒(ね)につぎたるとき白(ね)に眼を持ちて活となるべし斯の如くなれば黒(ほ)に抑へるは宜しからず同圖の如く打つを可とすべし

其　二　（同上乙）

▲白二間詰めは大惡手　白又隅の一子を活さん計略にて※印より一路進みて本圖の如く(一)へ進撃することなきにしも非ず是れ大惡手なり何となれば圖の如く黒白共に(い)(ろ)(は)順を追ひ黒▼につぐべき場合に甲圖の如く▼(甲圖)の(り)へつがずして(ち)に掛つがん斯くては白(一)の一子は殿しき打撃を受くるに非ずや故に一路退きて(い)に打つか左なくばいっそ倘は一路進みて(ち)に迫る方却つて優ならん▲白㋩の詰め　白に於ては既に▲印に味方の兵あるときは機を見て(ち)に迫ることもあり此時黒もし乾隅の一子を活すを不利なりと思はゞ(は)に下りて確實に白の一子を取切るを可とすべし

（隅　坤）　（第六圖）甲圖

（隅　艮）　（乙　圖）

▲變　則　其二　（第七圖）

白二手拔の場合

▲堅壁の効果如何による　本圖の如き陣立に於て白もし㋑へ出で前圖の如く隅に手域を構へんとしたるとき黒△に其血路を止めて外部に堅壁を築くも既に兩側面に敵の擁ありて過の堅壁も地域占領の望み少なきを以て斯る場合には黒(ろ)にはね白(は)黒(に)白(ほ)黒(へ)、白△印へ出で黒(ち)を切り白(り)へはねたるとき黒(ぬ)にくすみて敵の策戰の裏を掻くも一策なるべし

（隅　坤）　（第七圖）

▲變　則　其三　（第八圖）

▲黒㋑へ掛くるは開くの趣向　黒こすみの場合に於て(一)と掛るは前にも說明したる如く眉下即ち▽印邊に開かんも總向なるに黒の志す要所は既に敵の占領する所となれり即ち黒(一)と掛くるの無意味なる所以は夙に了解せしならん然れども白もし單騎、以て※印邊を守る場合に於ては黒は坤方面即ち星角邊に挾撃の意味を含みて(一)と掛くるは格別なりと承知ありたし▲白の策戰　扨て白に於ては左側方面の一部は既に味方の占むる所となり其備へも一ト通り整ひたるに依り實は▲に受くるは普通なれど倘は多少地域を利せん考へより白(い)へ押し黒(ろ)、白▲印黒(は)へのびしきり白(に)に飛ばん斯くなりては黒を有する其一方に左側面の白亦形勢の地に在り黒の不利なるや一見して知り得べきなり▲黒㋺の變化　白(い)に押したるとき黒(ろ)に受けずして(は)に飛ぶ手段もあり此場合白に於て黒をして外部に堅壁を築かしむるも味方の不利ならずと認めたるときは白(ほ)に出で黒(へ)へ押へ白(ろ)にはねこみ黒(と)白(ち)に一子取り黒(り)に押へ白(ぬ)へはね黒(る)にのび白(ね)に押し黒(を)へのび白(わ)へ飛び黒(一)に一子取りしとき白▲のつぎとなりて白の方割合からずや

第五節

◉小目高かゝりの定則

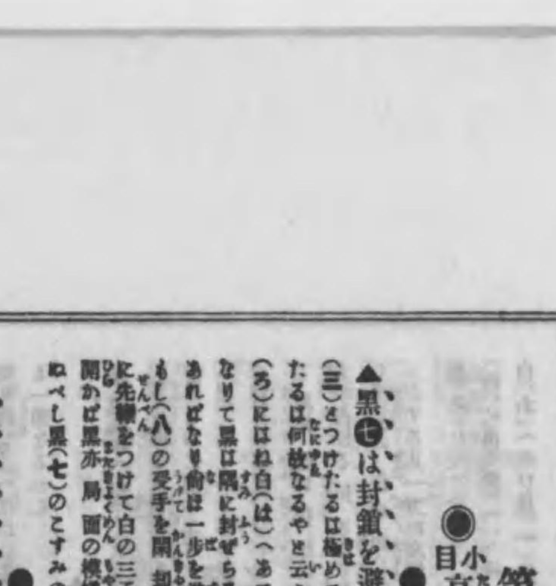
●第一則（第一圖）

▲黒㊐は封鎖を避くる趣向　白(二)の高かゝりに對し黒(三)とつけたるは極めて堅固なる眞手なり扨又黒(七)とこすみたるは何故なるやと云ふに黒もし手を拔かんか白(い)へつけ黒(ろ)にはね白(は)へあて黒(に)へかけつぎ白(は)黒(へ)白(と)となりて黒は隅に封ぜらるゝのみか白の外壁頗る堅固になる處あればなり尚は一歩を進めて云へば黒は其封鎖を浚ゞと同時に白もし(八)の受手を開却することもあらんには黒より(八)の要地に先鞭をつけて白の三子を攻むる手段もあり又白法の如く（八）に開かば黒亦局面の模樣により直に▲印邊へ開く便宜もありぬべし黒(七)のこすみの點にす可らざる所以なり

●第二則（第二圖）

▲白㊅かげつぎの意味　本圖の如く長隅に黒白開軍の配置あるときは前圖の如く白(六)は(い)につがずして(六)にかけつぎを定法とす其理由は假に白(い)につぎ黒(ろ)にこすみ白(は)に開きたりとせよ左側前面の白の隊形は堅へざるも右側の黒に對する響き弱きのみか黒より(に)に開かるゝ餘地あり去ればとて白もし尚は一路進みて(ほ)へ三間に挾撃するとせんか右側の黒に對する響きの強き其代りに白(二)(四)(六)の一隊と(は)軍の距離や、遠きに過ぎすや後に黒(へ)に攻寄せ來らば白は動ひ(と)に補はざるを得ざるべく白もし手を拔かんには黒より其隅に打込まるゝ恐あらん扨て白(と)に一子補ひたる形を見よ白の形はヤ、崩りて黒は怡も(へ)の一子を打得したる形となれるに非ずや此意味あるを以て本圖の如き場合には白(い)へつがずして(六)にかけつぎを必要とするなり▲黒白の隊形整然　定法の如く白(六)にかけつげば黒(ち)にのぞき白(い)につぎ黒(ろ)にこすみ白(は)に開く一段序となり兩軍攻守の隊形整ほん若夫れこれを解剖すれば黒(ち)と白(六)と交換したる手割となれる實を見るに足るべきなり

（隅坤）　（第一圖）



（隅艮）　（第二圖）

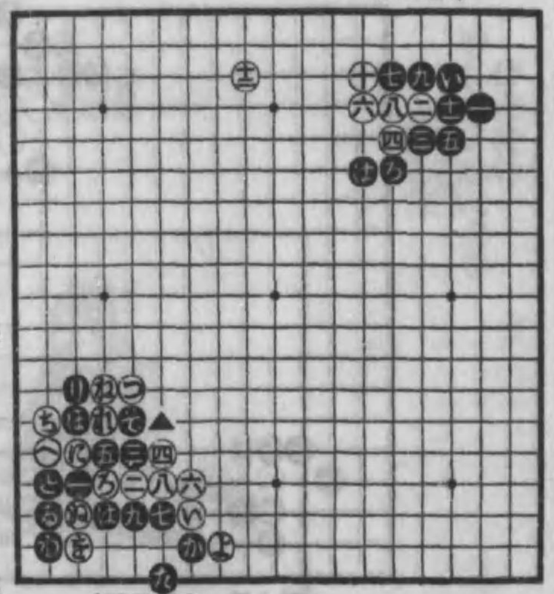
●第三則（第三圖）

▲白㊅のかけつぎは肝要　黒白共に本圖の如くなるは定法なり白(六)とかけつぐべき手にて(ハ)へつぐものあるを見受くれざるも內づけは異なり外づけのときは必ず本圖の如く(六)へかけつぐことを忘るべからず白もし(八)につがんか黒(い)へこすまん斯くては白ヤ、薄形となり且つ弱あきとなりて其割合甚だ損なり▲白㊅の變化　黒(七)へのぞくは定則なれど此時白(八)へつがずして場合により(九)へ押へるこまあり然るときは黒は先づ(ろ)に白の頭を叩き白(八)へつぎたるとき黒(は)へのび出すを可とす白の形ヤ、低きに反し黒の形は優勢なるべし

●第四則（第四圖）

▲白(十)の變化　白(十)は前圖の如く(い)に押へすして(ろ)へ突當る手段なきに非ず併しこれは後段に說明する如く黒(三)(五)の一隊を「しちやう」にて取り得るや否やを見定めたる後ならではうてぬ手なり同時に黒(七)のぞきも亦(三)(五)の「しちやう」の關係を明かにせずして定石なりとて漫然うつは不可なりと承知すべし▲白㊆つきあたりの結果　白(ろ)に突當りたるとき黒(は)に閉ぢ白(に)を切り黒(ほ)に押へ白(へ)にのび黒(と)に押へ白(ち)(わ)に押し白(い)に押へ黒(か)へはね白(よ)に押へ黒(た)へかけつぎ白(れ)につがば黒(三)(五)の一隊は「しちやう」にて取らるゝか左なくば(ね)へ至るべし故に黒は(五)(三)の一隊が「しちやう」の便りありて進く味方と聯絡し得る場合に非ざれば黒(七)へのぞき(九)へひくは大いに損なり白は勿論黒の(五)(三)の一隊が「しちやう」の當りなしと見定めたる上ならでは(ろ)へつきあたるは斷して不可なりと心得べし尚ほ變化あり次圖に於て說明すべし

（第三圖）



（第四圖）

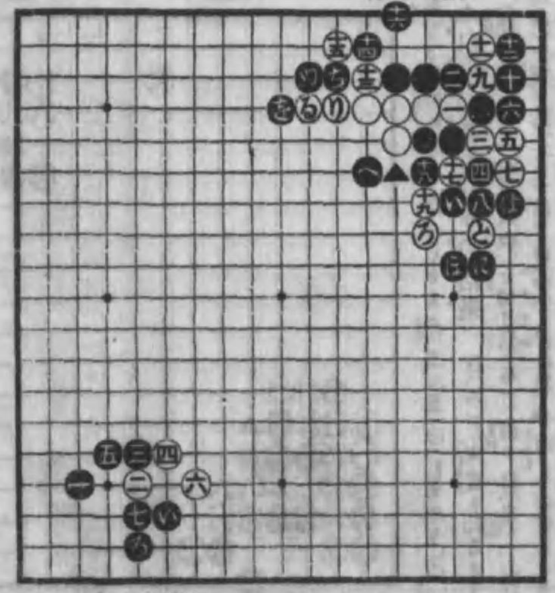
●第五則（第五圖）

▲黒、▲印の變化　黒外側の二子「しちやう」の當りなしと心得きたるときは黒▲印へ逃出すを見合せ(い)に白の(十七)の一子を取る手段もあり若し然らば白▲印にしぼり黒(十七)へつぎ白(ろ)へのび黒(は)に抑へれば白の三子を繩にし得るも斯の如く白をして廣原に堅壘を築かしむるは黒の不利なるべし▲注意　極く初心の者は黒(は)へ押へ手にて(に)或は(ほ)なぞへ飛出さんとすることあれど斯くては白より益〻絶付けられて層一層敵の壘を堅くする歟あるを以て斯る場合には ひろさ辛抱して(は)に押えるを可とすべし▲しぼらる〻苦しさに黒又「しちやう」の當りなき時(い)に一子取り白より▲印へしぼらるゝ苦さに白の(十七)の一子を取らずして▲印へ逃げ出す手段なきに非ず白もし(い)につがんには黒(へ)にのび白(と)に壓へしさき黒(ち)を切り白(り)黒(ぬ)白(る)黒(を)にはねる手順なれども斯くては紛れ多きを以て黒を持ちたる時なれば慎むべきことなり本圖の如きを目して俗に「白の三方切り二目すて」と云ふとかや

●第六則（第六圖）

▲黒(七)の變化　黒外側の一隊「しちやう」の當りなく從つて(い)にのぞく筋なき場合に於ては手を拔くことゝもあり又本圖の如く(七)へつけるを定則としたる古碁もあり白(い)に押へれば黒(ろ)に下るなり尙は變化あり次の圖を見るべし

（第五圖）



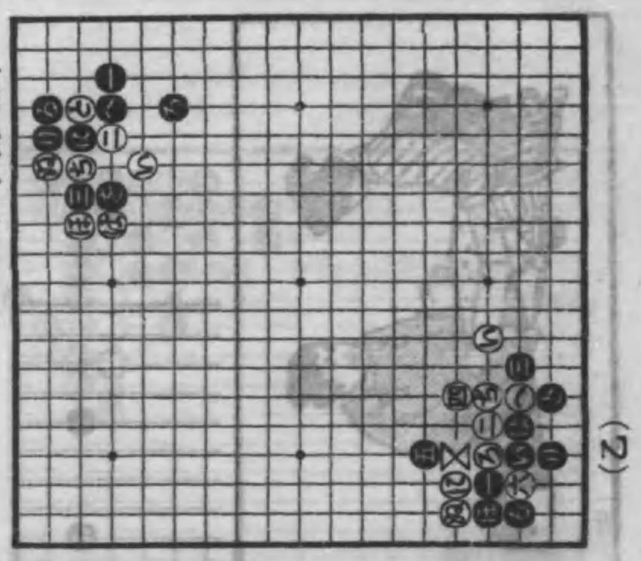
（第六圖）

●第七則（第七圖）

▲黒白策戰の變　本圖の如く左側下隅に黒白の對陣あり又前圖同樣黒(五)(三)の二子「しちやう」の當りなきときは黒(い)にのぞき白をして(ろ)へつがしめ(は)に引くは結句損なるを以て(に)へ三間に展開するを一策とすべし此時白(ほ)につけ黒(へ)に押へ白(と)に退きしさき黒(ち)又は(り)に開くを定則とす▲黒(七)のはねだしと秘路　黒(へ)に抑へる手にて(と)へはねだす手段なきに非ず然れども黒(三)(五)の二子を「しちやう」にて取らるゝ氣遣ひあるときは不可なり今その手順を示せば黒(と)へはねだし白(ぬ)を切り黒(は)に押し白(ろ)につぎ黒(る)へかけ白(を)を切り黒(へ)に一子取り白(わ)へあてしさき黒(は)につがんか白(あ)へはね(三)(五)の二子は「しちやう」にて取らるゝ結果となるべし即ち(と)のはねだしなき所以を知るに足るべきなり▲白(ほ)のあての變化　白も亦(五)(三)の二子を「しちやう」にて取れぬときは(わ)へあて押して單に(よ)へはね黒(あ)に出で白(た)に抑へ黒(れ)に逃げ白(そ)に押し黒(つ)に一子取り白(ね)へあて黒(を)につぎたるとき白(ね)の周をつゝ變化もあり此得失は外部の模樣に依ることにて單に一局部に就て是非の判斷を下すを得ず

▲歸結　要するに白(は)のつけと黒(と)のはねだしは(三)(五)の黒の「しちやう」の當りあるや否やを見定めたる上に非ざれば總卒にうつべき手に非ずと了解すべし

（第七圖）



（図八第）（甲）

●第八則（第八図甲）

白㊀の変化（其二）

▲黒❸のはさみ　上来白のねらいをくじくと共に白からの攻撃に備えた好手。

▲白㊀の変化　又白(ヌ)に対し(ル)と受けるのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊁の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊂の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊃の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊄の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊅の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊆の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊇の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊈の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊉の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

●第八則（第八図甲）

白㊀の変化（其二）

▲黒❸のはさみ　上来白のねらいをくじくと共に白からの攻撃に備えた好手。

▲白㊀の変化　又白(ヌ)に対し(ル)と受けるのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊁の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊂の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊃の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊄の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊅の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

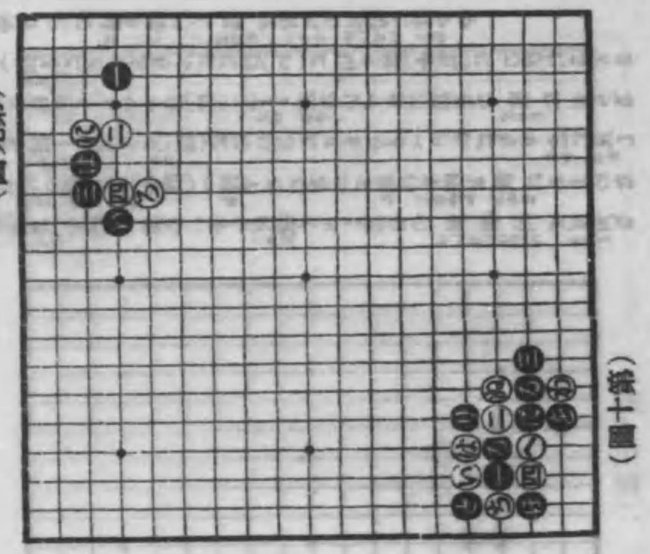
▲白㊆の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊇の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊈の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊉の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

（其二）



（図九第）

●第九則（第九図）

白㊃の変化

▲黒❺のはさみ　大場の取られた白陣全体に目を

▲白㊃の変化　又白(ヌ)に対し(ル)と受けるのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

●第十則（第十図）

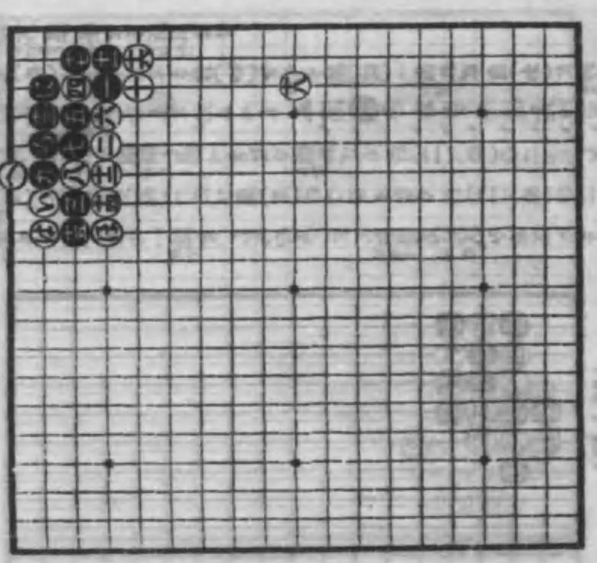
白㊃の内ツケは急用

▲黒❺のはさみ　白(ヌ)に対し(ル)と受けるのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

▲白㊃の変化　白(ヌ)と打つのは黒(ヨ)と打たれて白(ヌ)が利かされる。

（図十第）

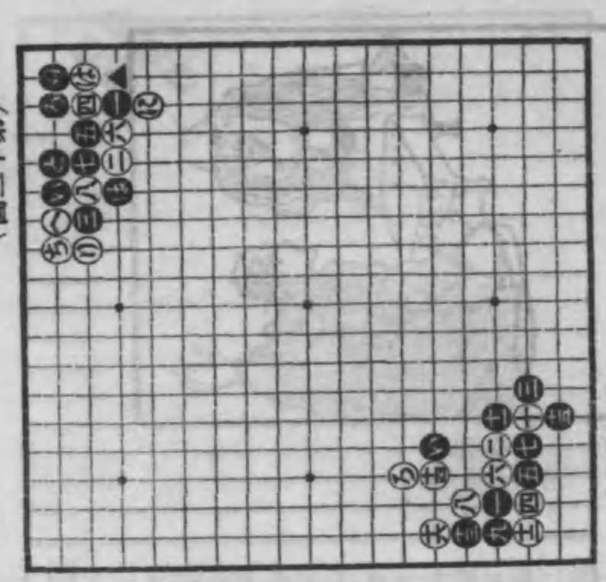
（圖二十第）



●第十二圖　（第十二圖）

◀黒❶くつける妙味　此定法も亦能く見受くる所なり初心の者は白は黒の三子を攻に屠るが故に白の方有利なる如く思くも其は給らず黒の方重圍にして割合好きなり何となれば黒は先手なるのみか後に右側方面若くは中原の際等に於て白(い)と白(ろ)の交際は黒の為め甚だ有利にして白は絶えず黒の攻撃に苦しまざるを得ず左すれば白は(ろ)くのびる外なかるべく黒(い)は白(ろ)の交際を破壊するの目的を以て(は)くつける妙手あればなり◀黒❶の切りは通法　白(十)(は)くはねこみたるときは黒も亦(十五)に受けんお定石の如く(十一)に切るを定法とすべきなり◀曲り白をして(十三)に打抜くは如何　白(十一)(十三)と曲りて白をして(十四)に打抜くも黒は(十五)に手取切らしめても黒のしめつけ強きに非ずや

（圖二十第）



●第十三圖　（第十三圖）

◀黒❶くつける妙味　此定法も亦能く見受くる所なり初心の者は白は黒の三子を攻に屠るが故に白の方有利なる如く思くも其は給らず黒の方重圍にして割合好きなり何となれば黒は先手なるのみか後に右側方面若くは中原の際等に於て白(い)と白(ろ)の交際は黒の為め甚だ有利にして白は絶えず黒の攻撃に苦しまざるを得ず左すれば白は(ろ)くのびる外なかるべく黒(い)は白(ろ)の交際を破壊するの目的を以て(は)くつける妙手あればなり◀黒❶の切りは通法　白(十)(は)くはねこみたるときは黒も亦(十五)に受けんお定石の如く(十一)に切るを定法とすべきなり◀曲り白をして(十三)に打抜くは如何　白(十一)(十三)と曲りて白をして(十四)に打抜くも黒は(十五)に手取切らしめても黒のしめつけ強きに非ずや

●第十二圖　（第十二圖）

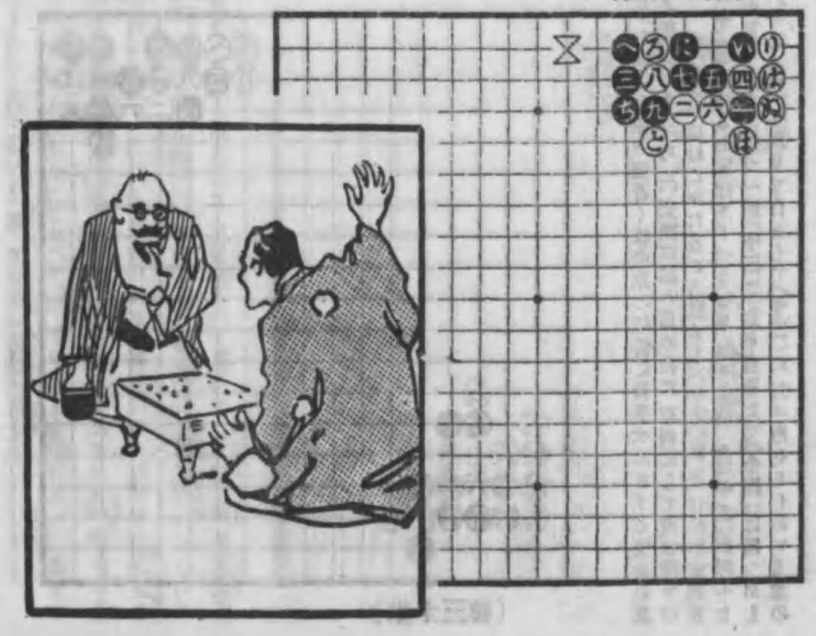
◀黒❶くはねに受ける手段肝要　第十二圖に於ては白(八)くはねこみたるとき黒重に(い)に受けたれども先づ(ろ)に置はねを白をして(は)くのびしめ給る後(い)に置く手段肝要なり此手は古碁を見受くる所なり斯くなりて白の方甚だ不利なりとす又は其圖は白(圖)のつぎに走るを以て今後この定石の手筋を知る可らず故に(い)く置りしとき白(に)に換かけんか黒(ほ)に(八)の一子を打抜きて同なり白亦黒の一子を抛くのひあり此は最切り時さる丈け不利なる割合に非ずや◀白㊀の變化　白もし(に)にかけを打たず(ほ)くつがんか黒(に)に立ち白(く)を切らば黒は(と)くつがん斯くては前圖同樣白はなりて白の方割合甚だ黒おるべく心成に於てか斯迄苦の力もらんからざるべきなり此は變化あり次の圖に示さん

（圖二十第）

●第十四則　（第十四圖）

▲黒㊈の切りは悪い　白(八)へはねこみたるとき第十二圖の如く黒肝心なる(い)のはねを打たず本圖の如く直に(九)に切ることもありとせんか白(ろ)にのび黒(い)にはね　白(は)にのび黒(に)に押へ白(は)にはね黒(へ)に押へ白(と)にはね黒(ち)につぐ手順となりて先手は白の手に歸し黒の割合悪かるべし諺り黒(九)切りの不可なる結果是非もなきことならん　▲白㊁のはねや善し　白が(と)にはね若くは(り)に横道せずして早に(は)に掛け先手を取らん趣向に出でたる戰略や善し心得置くべきことにこそ　▲黒㊄につぐは損　黒もし(へ)に押へざる手にて(ち)につがんか白に先手にて(り)に曲らるゝ丈それ丈け黒の損となるべし　▲黒(へ)の變化　黒(へ)に押へず又(ち)にもつがず(り)に押へるとせんか白(ぬ)に一子取り黒(ち)につがば其儘手を拔きて可なり斯の如く黒(り)に押へるときは白の爲に(ぬ)に一子取拔かれ(二)(六)の白に對する味を失ふのみならず(八)(ろ)の敵を取切らぬ爲め後に白より⧖印迄に(八)(ろ)の引出しを含みて一子打得さるゝ手を殘すの損あるべし要するに斯の如く如何に變化するも黒の不利に歸するは結句(九)切りの悪き結果と知るべきなり

（第十四圖）



増補　其四（第十四圖）

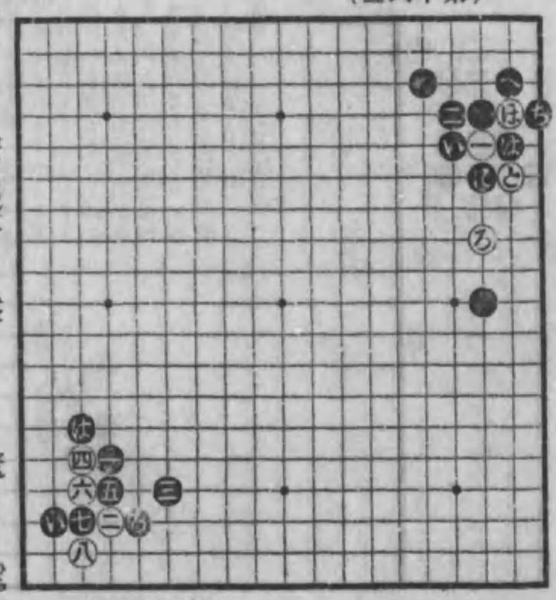
▲白㊁ばねの駈引　白(一)へつけたるとき黒(い)にはねる手段は既に本書に於て說明したる如く通常の受手なれども本圖の如く既に星下に味方の備へあり且つ全局の形勢に鑑み通法に泥みて黒(い)には飽迄活動の機みを與ふるを緊ふときは靜に(二)へ引くこともあるべく　若し然るときは白は單に(ろ)へ開閉するも一策なれども黒より(は)へはねて或は(に)へ挾まれ抑して後の運びの悪からん場合は(ろ)へ開かずして一應(は)へはねよ是れ亦機宜の棄石にて黒(へ)に應じたるとき靜に(ろ)に開く手段マヽありと知るべく斯くて黒(は)を切らば白とに抑え黒(ち)の取と爲りて先手は白の手に歸せん換言すれば先手を取りて纏く捌かん趣向のときは(は)のはねを試みることも了解すべきなり抑も此(は)のはねは實に(は)又は(に)の逆襲を凌ぐのみならず黒もし(へ)に受けたる儘棄石かんには機を見て白(と)へかけつぎ眼形をもつの意味をも含めるなり、さは云ふものゝ如何なる場合にても(は)のはねが善しと云ふに非ず戰局の形勢、敵に於て(は)にはねかけたるとき黒單に(ろ)に抑えるは不利なり必ず(い)にのびるを忘れず其時は黒(い)にのびずして(ろ)に抑えんには(七)の一子を所謂四ク目に拔かるゝに非ずや然るに黒更に(い)に一子の犧牲を供したらんには敵の之を取るには想像い手數を要すべく加之ならず(ろ)のあて(は)のはねまで利かしてビシ〳〵敵を緊め付くる利もあらん是れ(七)(い)の二子を犧牲に供するの效果とこそは知らるゝなり

（第十五圖）

増補　其五（第十五圖）

▲一目石を棄てるな＝犧牲の效果　圖の如く白(八)とはねかけたるとき黒單に(ろ)に抑えるは不利なり必ず(い)にのびるこを忘れず其時は黒(い)にのびずして(ろ)に抑えんには(七)の一子を所謂四ク目に拔かるゝに非ずや然るに黒更に(い)に一子の犧牲を供したらんには敵の之を取るには想像い手數を要すべく加之ならず(ろ)のあて(は)のはねまで利かしてビシ〳〵敵を緊め付くる利もあらん是れ(七)(い)の二子を犧牲に供するの效果とこそは知らるゝなり

（第十五圖）



増補其六（第十六圖）

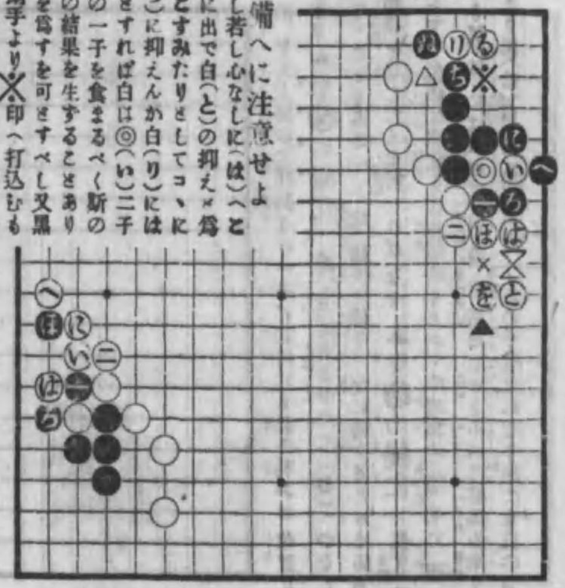
外内の利害　本圖の如き場合に初心の方は互りさへすれば取らるゝ心配なしと誤造作に考へて黒(い)につけ白(ろ)へはねたし黒(は)を切り白又(に)へはねかけ黒(ほ)に互りて(へ)に(い)の一子を四ヶ目に抜かるゝことあるは屢〻見受る所なれども甚だ不可なり黒は裏路傳へに崖邊を互りたりと云ふまでにて僅に寸地を贏ち得たるに過ぎず然るに敵は恰も中原の一角に城池を穿ちて其堡壘堅〻形勝の位置を占め得て發展の餘地綽綽たる形勢に在ずや同じ互るにしても(い)につけんよりは(は)の内側につけるに若かず白(と)にはねたし黒(ち)を切り白(り)へはねかけ黒(い)にあて白(は)につがば黒(ろ)に押し又白(は)につがずして(ぬ)に打抜くとせんか前のとは反對に黒は敵を邊隅に封鎖すると同時に中原の曠野に面して壘壁を築き得たるに反し白は(は)の一子を同じ四ヶ目に打抜きたりとは云ふものゝ辛ふとて崖邊に一小屯營を構へ得たるに過ぎざるに非ずや(い)(は)共に棄石なれども其效果に於て潭渭の差あるを知るに足るべく同時に(い)と外側へつけるの拙手たるを知るに足るべきなり

（第十六圖）

増補其七（第十七圖）

▲白、先手の封鎖　本圖の如き場合に於て假に黒、手を抜きたりとせよ白は◎この一子を其の儘に棄んよりは(い)へのびて敵に手數を費やさしむるの手段に出づるこそ上手なれ黒もし(ろ)に抑ふれば白は(つけ黒又(に)に抑へ白(は)へあて黒(へ)に取る手順となるべく即ち白は先手にて敵ヶ隅に封ずるの利あらんなり▲黒(ろ)の變化　扨又黒(ろ)へ抑える手にて場合により(は)にとすむ手段なきに非ず若し然らば白(は)にあて黒(ろ)へつぎ白×印に抑え黒(に)へ抱えたる形を見よ黒の爲には單に(ろ)に抑えたるときよりは×印の切目の殘れる丈け有利なるに非ずや▲敵の備へに注意せよ併しながら▲印に白の守備兵あるときは黒(は)にとすむ手なしと知るべし若し心なしに(は)へとすむこともあらんには白(ろ)にあて黒(ほ)につぎ白×印に抑え黒▽印にとすみたりてコゝに(ち)に抑えんか白(り)には注意せざる可らざるは※印へ襲撃の陣を生ずるの一事是なり黒もし(ち)にねん斯くて黒(ぬ)に抑え白(る)のつぎに爲らば如何黒△印の切を防がんとすれば△印を切られて(ぬ)の一子を失ふなるべく◎(い)との聯絡を斷んとすれば△印を切られて(ぬ)の一子を失ふなるべく◎(い)との聯絡を斷んとすれば△印を切られて(ぬ)の不利の結果を生ずることあり知く外部に向つて眞手たるべきとすみも内即ち※印を固ほるとの計を爲すを可とすべし又黒併しながら多くの場合タトと隅に些青み殘ることありとも外部發展の計を爲すを可とすべし又黒(は)にとすみたるとき白(ほ)▽と逃げて×印の切を殘すは工合あしく攻撃の手段に出づる外なかるべし要するに白(い)のびとすみを覺え置きて(ろ)へ打込むも妙ならずと思ふときは×印へとすむか遠〻(ち)に圍ふ手段に出づるべきなり倘は本圖に就て注意すべきことあり序に次圖に就て說明せん

（第十七圖）



増補其八（第二十八圖）

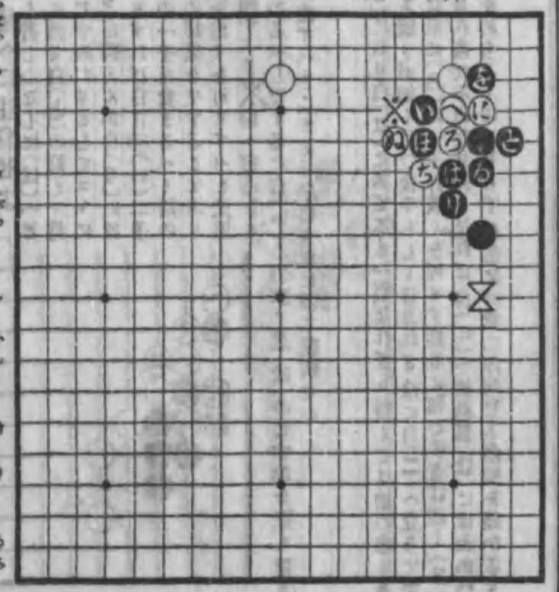
▲白(二)へ黒(ろ)の打抜き　黒(一)を切りしとき白(い)にはね黒(ろ)に取り白(は)にあてるも一策なれども斯くては劫の味もあり且つ切目も殘るべく若夫れ右側方面の經營急なるものあるときは如何にも緩きが如く且つ後手らしくはあれど徐に白(二)へ立ちて堅壘を築くに若かざるべし黒に於ても倘は此方面の始末を付るの要ありとせば單に(ろ)に一子打抜くを可とす然るに初心の者は輕く(ろ)に一子打抜くの勢翼なる眞手たるを知らずマゝ(い)杯に押すことあれども是れ甚だ不可なり何となれば白(に)へはね黒(ほ)にはねかへしたるとき白(へ)に二段ばねする手段あればなり斯くては音に其出路を喰止められるゝのみならず外部に非常に厚層なる壘壁を築かるゝに非ずや注意すべきことにこそ

◉凝形の實例

增補 其一（第十九圖）

▲白㊂づけの働き　本圖の如き場合に白もし手を拔かんには黒より(い)に掛けられ其結果星下に白の控ある丈け位低く凝形と爲るを免かれざるの理由は既に本書に於て說明せる如し尤も黒に於ても既に二間の開きあるに(い)に掛るは本書に說示せし如く先づ(い)に掛け然る後星下の⊠印（展開したる程の働きはなければ併しながら白亦局勢上此(い)の掛けを嫌ふ此方面の開きを爲すべきやと云ふに黒に二間の開きなくば白(い)にとすむは通形なり其とすみに對して黒亦二間に開くは常規なれども黒は既に二間展開の好地位に在るなるに還轉せに(い)にとすむの定理に適はざるは固より言ふまでもなきことなり此場合白は敵の二間開きに跨入て(ろ)につくるを上策とすべし黒もし(は)に抑へなば白亦(に)に抑へよ黒(ほ)には亦白(へ)につぎ黒(と)に下り白(ち)を切り黒(り)にのび白(ぬ)のかけと爲りたりて凝形と爲れるに非ずや　即ち白(ろ)つけの機宜に適せるを知るべきもあらんには白は基勢により(ち)を切ることもあるべく又✕印に拔く執にしても黒(る)のつぎは凝形たるを免かれず(る)につぎて然る後一間飛を爲したる姿勢なればなり▲黒(を)の變化　黒(と)に下る手にて(る)につぎことにつかずして(ち)につかんには白宜しく(る)を切るべし何と割合ひ宜からずや黒の二間開きは如何にもトンマの地位に陷りて活勢を失へるに非ずや▲黒亦策あり　最初（戻り白(ろ)（つけたる放に黒亦之を連るの策なき非ず即ち黒(に)（のび白(へ)につぎたる分優勢の一步を占め得たる姿なるべし

（第十九圖）



第六節

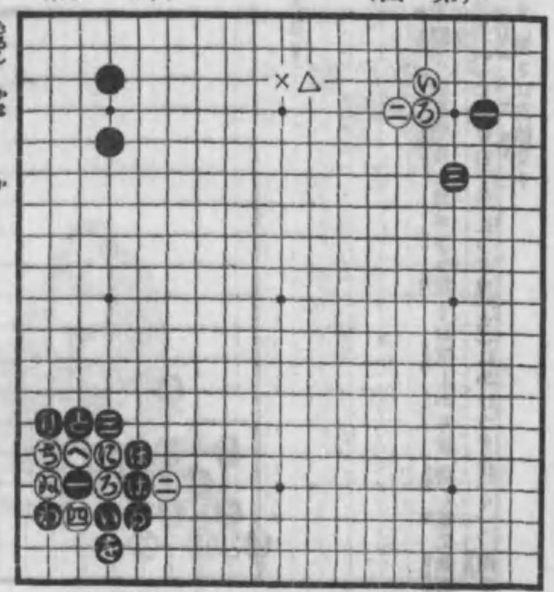
◉二間高かゝりの定則

●第一則（第一圖）

▲白高かゝりの戰略　本圖の如く白高く二間に陣を布きたるは抑も意味あり例せば圖の如く坤隅に敵の構へありと假定せよ或は局面の機運により低く(い)に掛ることなきにしも非ざれども多くの場合に於ては斯く低く(い)へけいきに掛りては黒に手を拔かるゝ恐れもあり又△印邊へ挾擊されて敵の模勢雄大となるに反し白は孤軍深く敵地に入るの感なきを得ず去りて(ろ)へ一間高に掛りては黒より(い)へつけられ此方面のキマリつきて納れ少なく甚だ面白からず寧ろ二間高がきりの戰法を應用すべきなり▲黒の策戰　これに對する黒の策戰は圖の如く(三)に應ずるを定法とす此場合に於ては白は多く手を拔くを常とすれども若し此處を打つの必要ありとせば星下即ち×印へ構ふるを可とせん

（隅　坤）

（第一圖）



（隅　艮）

（第二圖）

●第二則（第二圖）

▲白㊃つけの機會　白(四)へつける場合は黒白共に全局要地の配備略ゝ整ひたる後機會を見て打つことゝもある一手段と承知すべし念の爲め此場合に於ける兩軍攻守の筋道を記さんに黒(い)にはね白(ろ)にのび黒(と)に追ひ白(ち)へのび黒(り)に押し白(ぬ)に一子取りさき黒(る)につぎ黒(を)へ下ることもあれど多くは(る)につぎ星下の如き結果になるが故に白に於て全局要地の配備成らぬ先に(四)へつけるは甚だ不利なりと知るべし▲注意　初心の者は白(四)につけたるとき(い)にはねこむことを知らずマヽ(わ)に抑へることあり斯くては白(ろ)へはね黒(へ)に引きたるとき白(を)にかぜつぐ手順となりて黒の位太だ低く前段に說明したる白軍開敗の圖に比し黒の方餘程見劣りせずや

●第三則（第三圖）（甲）

▲黒㊂の戰略　白高く(二)に掛りたるときは前二圖の如く黒(六)に應ずるは通形なれど若夫れ坤隅に黒の配置あり其模樣により敵に✕印或は▲印邊を占領さるゝを不利なりと認めたるときは孫子の所謂上兵は謀を伐つの策に出で黒(三)(先圖甲)の如く運ぶを定法とすべし▲黒白の戰法　黒(七)りして挾擊の態度に出づる手段もありぬべし若し然る場合には黒白共に圖の如く運ぶを定法とすべし▲黒白の戰法　黒(七)へのび出したるときは白は通常(い)に陣取るを法とすれども(三)の一子を挾擊うを利とする場合は白(ろ)へ打つを可とす(い)(ろ)執れにしても黒は必ず(は)に飛ぶことを忘る可らず

▲注意　黒(三)の挾みあるときは乙圖に示す如く白は(五)へつける手段なしと了解すべし白もし強ひて(五)へつけんか黒(四)にのび白赤(に)にのびたるとき黒(ほ)にはねこむべし白は俟ち兩斷されんタヒ隅に小さく活くるとも其不利なるや固より言ふを俟たざるなり

（坤　隅）　（甲）（第三圖）

第三圖（乙）
黒手抜の場合

▲黒の手抜は非なり　白(い)即ち小けいま掛りのときと異なり本圖の如き場合に黒が手を抜くは宜しからず併し他に急場あれば是非なし白(三)黒(ろ)にはね白(は)に切り黒(に)に掛け白(ほ)にのびへ黒(へ)に掛け白(と)につぎ黒(ち)にかけつぎ白(り)へ曲り黒(ぬ)にはね白(る)に掛け黒(を)に飛ぶを定則とす黒一手抜きたる丈け割合悪きは當然なり

（乙）（第三圖）　（隅　長）

第七節

◉白大けいま掛り　定則

（第一圖）

▲白㊁の趣向　本圖の如き大けいま掛りは(一)の敵に對する警き劍きを以て打つ場合極めて少なし如何なる場合に打つやと云ふに例せば左側方面に黒の堅壘ありとせん此時白普通の如く(い)に掛らんには黒より(ろ)に挾擊されて左側方面に廣大なる領地を占めらるゝ如き虞あらんとき黒の一間詰を避くる爲め新くは大けいまに掛るの趣向もあるなり此場合黒は手を抜くこと多し▲白㊃のつけ　白もし此場を打つとすれば先づ(は)へつけ黒(に)に押へ白(ほ)に切り黒(へ)にはね白(と)にのび黒赤(ち)にはね白(り)へのび黒(い)につぎしとき白(ぬ)に曲る手順となるべし極く初心者の注意までに記さんに黒無謀にも(わ)にのびるときもあらんか白(か)に頭を押へて攻にすべきなり▲黒の戰法　黒赤此場を打つとすれば黒(ち)白(る)に押し黒(い)に下りしとき白(を)に立つを通形とす併し白もし黒より(る)に押へられても右側方面に廣大なる領地を占めらるゝ場合なきときは白(る)にのびずして單に(よ)に斜走する手段もあるべきなり

（第一圖）

第八節

◉高目の定則

●第一則（第一圖）

▲高構えの戰略　本圖の如く白(一)と高く構ふるは一局若くは左右の權衡を計り或は始めより特に總向を爲さん氣組にてうつ手にて必ずしも眞き總向さのみは云はれぬなり然るに初心の者は白、黒の差別なく漫然打下す其譯を聞けば位高くして可なり敵もし侵し來らば迎せて戰はんのみと、是れ用兵の法を知らざる者の言なり假に敵もし侵撃し來らずとせば如何白は如何に締るべきや通法の如く(二)に守るか時により(い)にうつ一の變化あるのみに非ずや其反對に白(二)へ低く構えたりとせよ而して此圖の締りを爲さんとすれば則ち(一)或は(に)乃至(ほ)等種々の打着點あるに非ずや要するに高く構えて總向工夫の手段に出づるは兎も角只高いから廣いからと云ふ意味にてうつべき手に非ざるなり**▲黒の策戰**　白の高構えに對する黒の策戰如何にと云ふに初心の者は惑せらるゝを憂れてマヽ(い)若くは(ろ)に掛るものあれざも甚だ損なり、やはり普通の如く(二)にうつを可とす併し△印邊に白の控えあるときは必ず黒は一歩深く(は)に侵入して敵地に活くるの計を爲すべきなり此場合に於ける攻守の戰法は序を追うて說明すべし

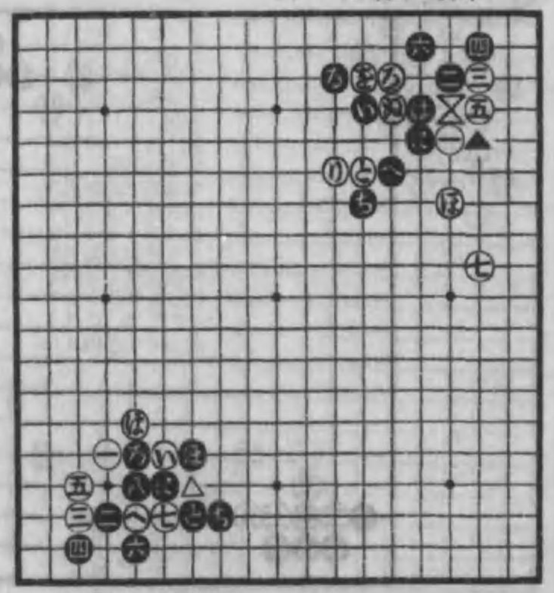
（第一圖）

●第二則（第二圖）（甲）

白内づけ定則

▲黒四六は不敗の固め　本圖の如く白(三)へつけるを内づけの定法と云ふ、これに對し黒(四)(六)と運ぶは位ヤヽ低きに似たれざも所謂善く戰ふ者は先づ不敗の地に立つも謂つべく極めて堅固なる眞手なり**▲黒白互角の形勢**　白(七)の展開は敵の同方面より攻寄せんことを慮り斯くては味方の不利なりと敵に先んじて此要害を占め領地を劃取せん計略に出でたるなり勿論場合により手を抜くことなきにしも非ず白(七)に對し黒多くは(い)印へ發展するを通則とす是れ互角の形勢なり**▲白の攻方に二策あり**　黒(い)は場合により手を抜くことあり其時白もし攻勢を取らんとせば(ろ)若くは(い)に迫るを定則とす詳言すれば左側方面の經營を爲さんとすれば白(ろ)に急撃し黒(は)にこすみ出せば白も(い)に竝行し黒(に)に押せば白(ほ)に守り黒(へ)にこすみしとき白(と)に突撃し黒(ち)にはねれば白(り)に退くを一策とす因に白(ほ)に圍ふ手にて單に(と)に立つ手段もあり**▲白の中原經營策**　白又中原に志しあらば遠く(い)の地點に網を張りて敵軍壓迫の手段に出づるを上策とす黒(ろ)に壓ぜんか白(ぬ)に壓へて可なり黒は勿論手を抜くも活きはあれざ尙ほ壓手を必要とすれば(る)に飛ぶの外なく其位低ふして氣勢意外に擴ぬ白(ぬ)に抑ふべき手にてマヽ(を)に抑へるものあるを見るは是れ大不可にはね出さんか黒×印に突込まん斯くては折角はね出したる(は)の一子を取らるゝか▲印を切らるゝか白は殆ど潰亂の狀態に陷り當初の目的たる中原經營策は支離滅裂に歸すべきなり此場合に於けるハメ手あり乙圖に示すべし

（第二圖）（乙）

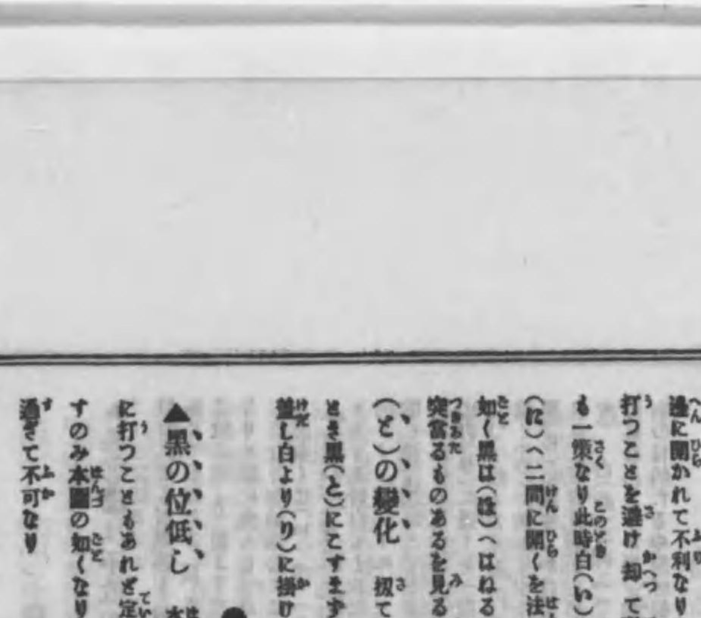


乙圖（ハメ手）

▲ハメ手の注意　甲圖に於て說明せし如く此場合白△印にこすむは定法なれざ或は(い)に掛けることなきに非ず是れハメ手なり黒の應手を示さんに黒(ろ)に制出で白(は)に抑へ黒又(に)に出で白△印に抑へしとき黒(ほ)に切るは是れ敵の術中に陷るものなり此時白(へ)に突込まば如何今更ら悔ふるも詮なし**▲黒(ほ)切りは大切**　此場合に於ては黒は〳〵も(ほ)に切らずして(と)に切ることを忘る可らず白(ほ)につがんか黒(ち)にのぶべ〳〵白又(ほ)につがずして(ち)へ掛けたらんには今度こそ黒(ほ)に切りて敵の荒膽を挫くべきなり

●第三則（第三圖）

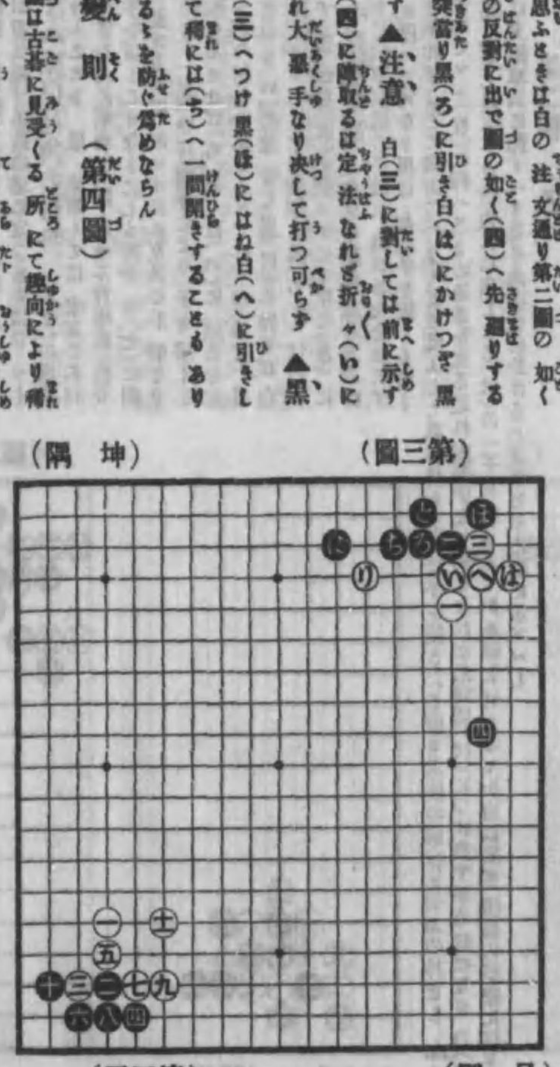
▲黒、敵の謀を伐つ　長隅の白の模様により白より(四)の邊に開かれて不利なりと思ふときは白の注文通り第二圖の如く打つことを避け却て敵の反對に出で圖の如く(四)へ先廻りするも一策なり此時白(い)に突當り黒(ろ)に引き白(は)にかけつぎ黒(に)へ二間に開くを法とす　▲注意　白(三)に對しては前に示す如く黒は(ほ)へはねるか(四)に障取るは定法なれど折々(い)に突當るものあるを見るは是れ大悪手なり決して打つ可らず　▲黒(と)の變化　扨て白(三)へつけ黒(ほ)にはね白(へ)に引きしとき黒(と)にこすまして得には(ち)へ一間開きすることもあり並し白より(り)に撞ひらるゝを防ぐ爲めならん


（第三圖）

（隅　坤）

●變則（第四圖）

▲黒の位低し　本圖は古碁に見受くる所にて趨向により得に打つこともあれど定則として打つべき手に非ず只その應手を示すのみ本圖の如くなりては白の構へ厚きに反し黒の陣列低きに過ぎて不可なり


（第四圖）

（艮　隅）

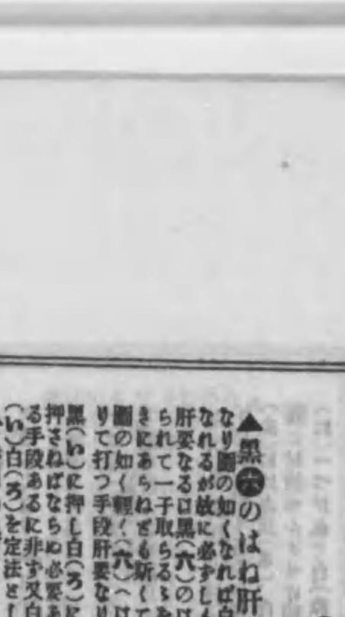
●第四則　白外づけの定則（第五圖）

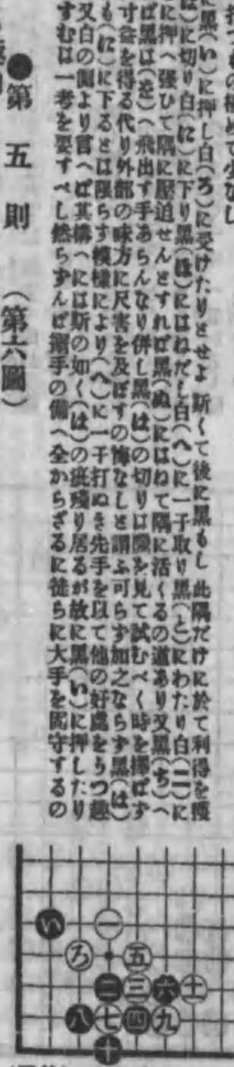
▲黒(六)のはね肝要　本圖の如く(三)と外へつける亦定法なり圖の如くなれば白は隅に相應の領地を得し如くなれば後手となれるが故に必ずしも割合よしとは云ふを得ず扨て此圖に於て最も肝要なる口黒(六)のはねなり斯く打てば(七)(九)執れの處かを切られて一子取らるゝを恐れ黒(八)へはねずして(七)へ引くものなれども斯くては位甚だ低く且つ其形重くして不可なり本圖の如く輕く(六)へはねて(七)(九)執れなりと白の切りし方を取りて打つ手段肝要なり　▲黒(ち)の押しは古法　古碁に於ては黒(い)に押し白(ろ)に受くるを定法としたれど黒必ずしも(い)に押さねばならぬ必要あるに非ず手を緩さたりとて白より急に攻むる手段あるに非ず又白も(ろ)に受けずして可なり當世に於ては黒(い)白(ろ)を定法として打つもの極めて少なし

▲黒白の參考　假に黒(い)に押し白(ろ)に受けたりとせよ斯くて後に黒もし此隅だけに於て利得を慾るの機會ありとせば黒(は)に切り白(に)に下り黒(ほ)にはねだし白(へ)に一子取り黒(と)にわたり白(一)に つぎ黒(ち)に押し白(り)に押へ強ひて隅に壓迫せんとすれば黒(ぬ)には のびしき白(る)を切れば黒は(を)へ飛出す手あらんなり併し黒(は)の 悪に手を下さんには隅に寸益を得る代り外部の味方に尺害を及ぼすの悔に切りたりとて白必ずしも(に)に下るとは限らず模様により(へ)に一子打ぬき先手を以て他の好處をうつ趣向もあるべし左りながら又白の圖より言へば其構へには斯の如く(は)の備へ全からざるに徒らに大手を施守するのとて古法に泥み(ろ)にとすむは一考を要すべし然らずんば潜手の講あらんなり

（第五圖）

（隅實）




（第六圖）

（隅乾）

●第五則（第六圖）

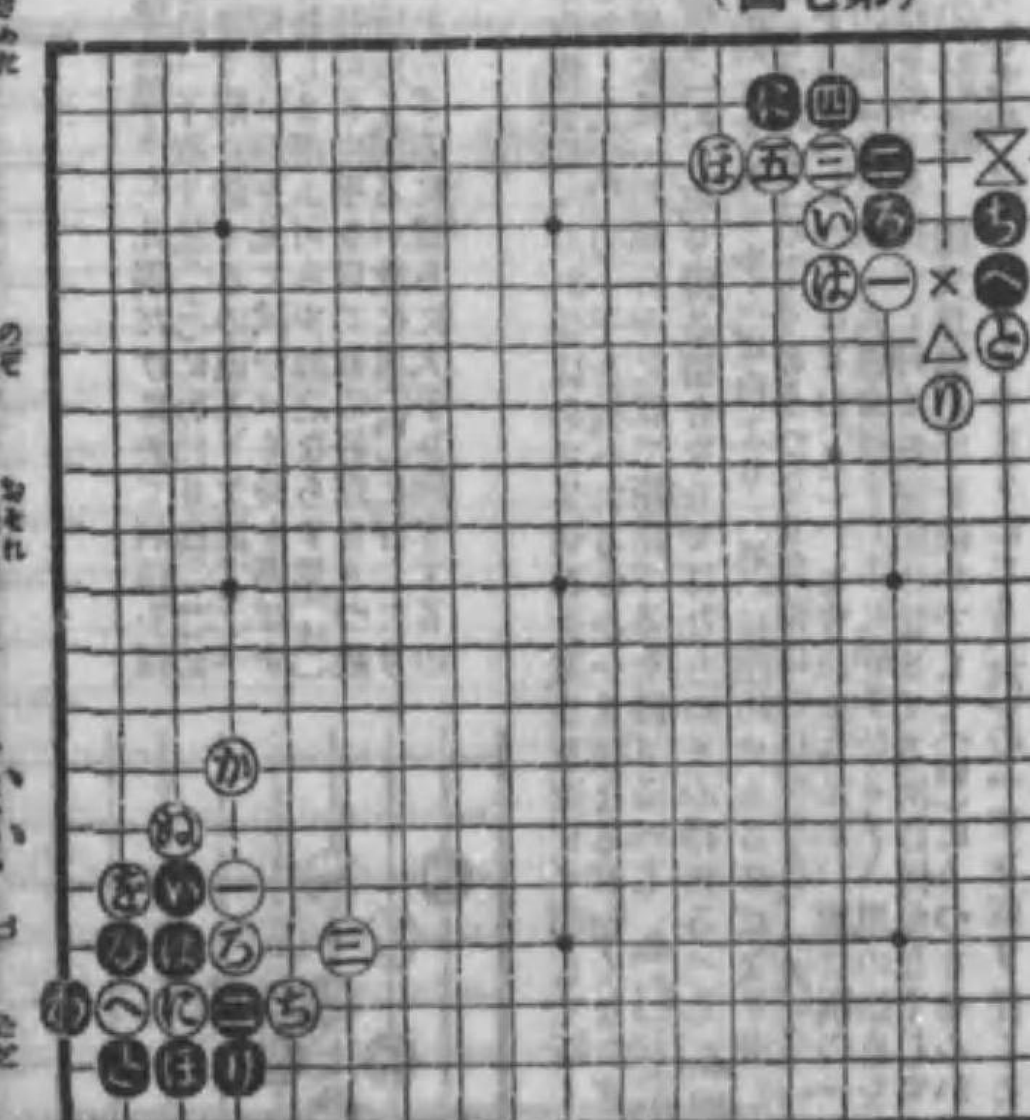
▲白、外廓を厚くする趣向　本圖の如く白、前圖の反對に(七)と きたる此一局部のみに就て言へば白は前圖の如く隅に實利を取むることなく只(六)の一子を抱へたるのみ一見損なるが如くなれど實は外廓を厚くして右側方面若くは中原に臨まん策戰なるがゆへに其得失は單に此一局部のみに就て斷定するを得ざるべし　▲白(七)の切り「しちやう」にて取り得る場合ならではならぬと心得然るべし　▲黒三手うちの秘策　扨て本圖に於て黒のうち適所は通例(い)へうつを「しちやう」に一の秘策ありと云ふは他に非ず黒、機を見て要隅方面に先づ一子(一)へ打上げんか黒(い)へうつべき手を抜きて復た一子(二)を下して他の要處を討死せしむる覺悟にて衝は一子(三)を他の要地に下すべし斯くても隅の黒は未だ全く其運命盡きたるに非ずいよ〳〵黒の部隊の一部隊の當りを試みて敵をして(六)の一子を取らしむるに在りとす　▲黒(ぬ)の打得を爲すを得べし抑も此秘策の要とする所は何氣なく「しちやう」と見て「しちやう」の當りをうつ趣向なるがゆへ白に於ても其心して タトヒ「しちやう」の當りなきときにても(六)の一子を取り置くこと極めて肝要なり

●變則（第七圖）

▲白㊄の變化　本圖の如く白(五)へのびるは古法の定規とする所なれど其割合損なるを以て當世に於ては(い)に引くを通法とせり參考のため黒白のうち方を示さんに黒(ろ)、白(は)、黒(に)、白(ほ)へのびしとき黒(へ)に轉じ白(と)、黒(ち)に引きたるとき白(り)にとすむことを忘る可らず如何にも外廓は白くなりしやうなれど黒には確定の領域あるに反し白の外廓附近の地域は漠として定かならぬ其上に後手となれるに非ずや尚且つ場合によりては黒より(い)の出切を狙はるゝこともなしと謂ふ可らず

▲黒㋬及び㋠は良手　黒、輕く離れて(へ)にゆつべき手にて、ヽ、×へはねるものあれど甚だ不可なり又黒(ち)に引くべき手にて×印へ突當る方、得なるが如く思ふものあれども決して然らず斯くては白より△印へ抑へられたる後⌛印へ置かるゝ隙や殘らんなり▲白㋷も手筋　白(り)にとすむは此場合に於ける手筋なり俗に△印へ引くは如何にも働きなく左りとて×印へ突當らんか(り)に覗かるゝ懼あるべし▲注意　圖の如く黒(四)へはねべき手にて(ろ)へ突當る抔は最も大惡手なり白は直ちに(い)に抑へん黒×印へはねんか白は△印へ二段ばねすべし即ち黒は所謂だめ詰めの姿となりて自ら己れを窮屈にする結果を生ずべければなり

（第七圖）



（第八圖）

●第六則（第八圖）

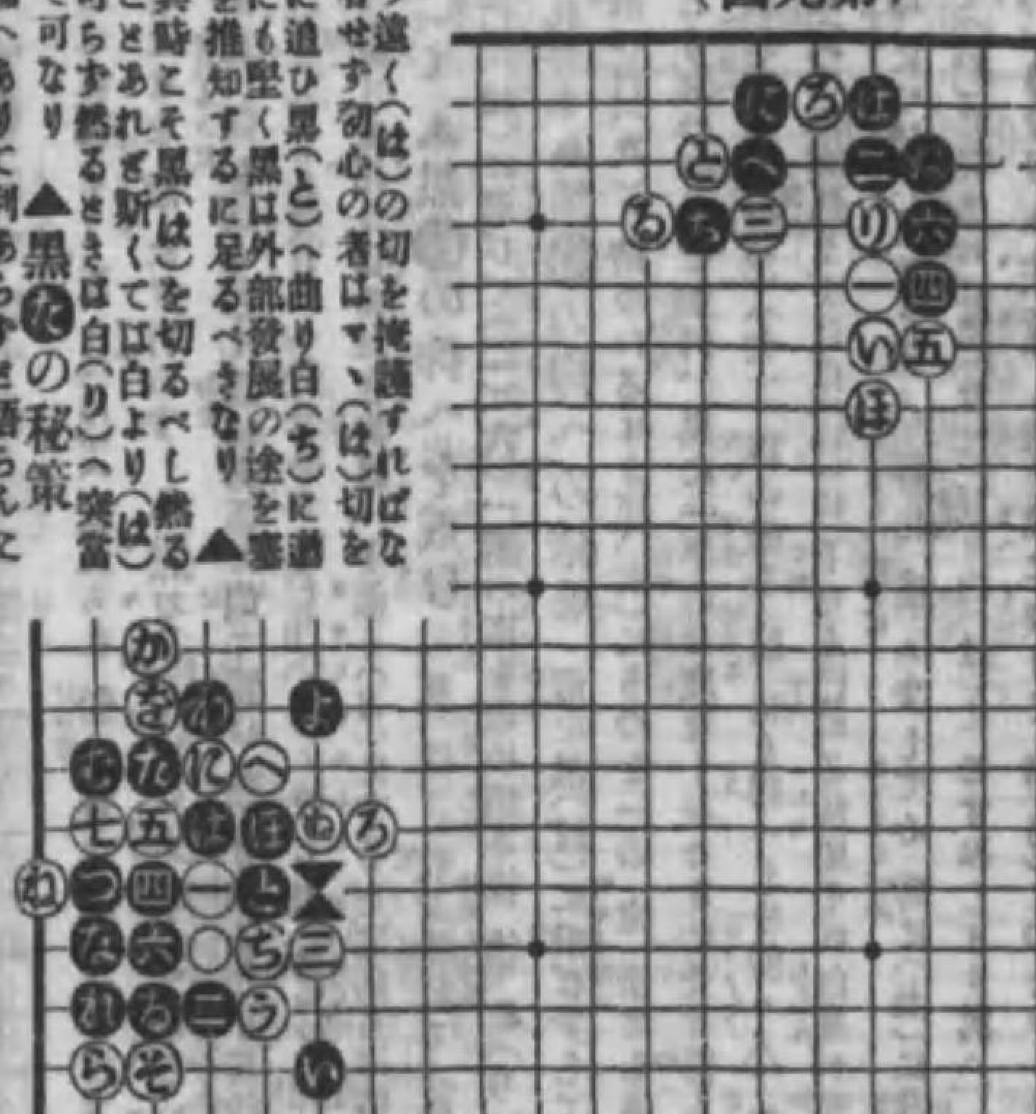
▲白軍封鎖の計略　圖の如く白(三)へ掛るは黒を一隅に封じ外廓を厚くしてうたん計略なり然るときは黒(い)につけるを定法とす之れに對する白の應手に三様あり先づ其一を示せば白(ろ)、黒(は)、白(に)を切り黒(ほ)にはね、白(へ)、黒(と)、白(ち)、黒(り)、白(ぬ)にはね黒(る)、白(を)、黒(わ)に二子取しとき白(か)へかけつぐを一則とす▲白㋥の切捨ては手順　白は其計畫通り黒を一隅に封鎖せんとせば則ち(に)(へ)の二子を犠牲に供するの覺悟なかる可らず白若し(に)に切らずして單に(ち)に抑へれば黒(に)へつがれて白(ぬ)の抑へが利かぬ結果を生ずべし

●第七則（第九圖）

黒白ともに本圖の如く打つも亦定法なりとす

▲白封鎖の計　白(七)のうち方は一様ならねど假に(い)につぎたりとせん　黒或は手を拔くことなきにしも非ず若し然るときは　白(ろ)に攻寄せん黒は勢ひ(は)に受けざるを得ざるべし斯てはつまり　白に先手にて一子打得されたる割合となるべし故に黒多くは(に)に備ふるを可とす▲白㋑の變化　白又(い)につがずして(ほ)にかけつぐこともあり其時黒は(へ)につけて先手を取るの趣向に出づべし　白(と)に抑へれば黒(に)に下り白手を拔けば則ち(ち)の切り殘るべく尚ほ此場をうつの必要ありとせば白先づ(り)にあて黒(ぬ)の所へつぎたる時白(る)に守るを定則とす尚は變化あり次の圖に示すべし

（第九圖）



（第十圖）

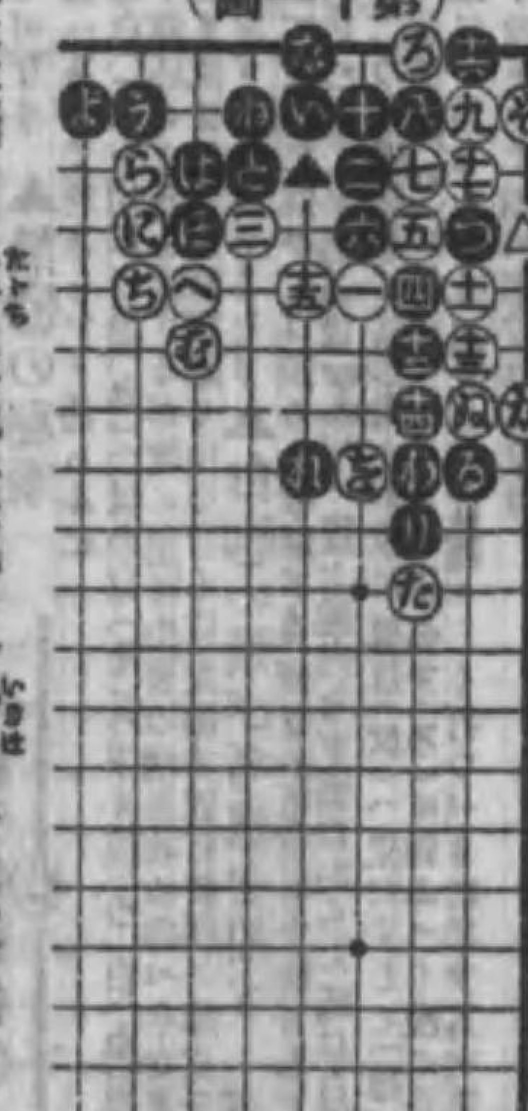
●第八則（第十圖）

▲白㋺は輕妙　本圖の如く黒(い)に備へ白亦(ろ)に守るは古碁の定則とする所にて白(ろ)は誠に働きある姿勢に在り其故は輕く且つ遠く(は)の切を掩護すればなり▲黒㋩切は大惡手　然るに白(ろ)に鐵條網の備へあるにも頓着せず初心の者はヽヽ(は)切を試ることなきにしも非ず若し然らば白(に)へかけ黒(ほ)にのび白(へ)に追ひ黒(と)へ曲り白(ち)に遮へ黒(り)に一子取りしとき白(ぬ)に固めたる陣形を見よ白の外壁如何にも堅く黒は外部發展の途を塞がるゝに非ずや以て敵の守りある所を攻むる黒(は)切の無謀なる所以を推知するに足るべきなり▲㋺白手拔の變化　白(ろ)に備へずして場合により手を拔きたる其時こそ黒(は)を切るべし然るときは白は輕く(ぬ)へ飛ぶを通則とす此時黒ヽ、(と)に一子を抱えることもあれど斯くては白より(は)へはねられて封鎖せらるゝ憂れあるが故に必ず(に)へ立つことを忘る可らず然るときは白(り)へ突當り黒(る)につぎ白(を)に飛び黒(わ)に押し白(か)へのび黒(よ)へ飛びて可なり黒もし前段の如く(よ)までの手順を運ぶも中原若くは左側方面に敵の備へありて利あらずと悟らんには白(り)に突當りしとき黒(る)につがずして(た)へ曲る策ありとす其時白(る)を切れば黒(ね)へはね白(そ)へ下り黒(つ)白(ぬ)黒(な)白(ら)黒(む)と爲りて(五)(七)の二子を擒に得べく白は勢ひ(う)に一子取込まざるを得ざるが故に黒は先着の功を收め得べきなり斯く爲りては此一隅だけに就て言へば白の方或は少しく有利ならん、なれども黒は其豫定計畫通り中原若くは左側方面に發展の陣立を爲し得たる形勢に在るを以て得失孰れに在りやは單に此一局部のみに就て斷定するを得ざるなり▲白㋦の飛び考慮を要す　抑又白(ぬ)の飛は常用とは云ふものゝ今說明せし如き結果を來すことあるを以て實戰に臨みては須らく考慮する所なかる可らず時としては極く俗手の如くなれ共黒(は)を切りしとき直に(り)へ突當り黒をして(る)につがしめ然る後⌛印へ竝ぶ趣向など面白からん或は白⌛印へ竝はずして(ぬ)へ飛ぶ手段なきにも非ず若し然るときは白には旣に(り)のあてありて其形重きが故に黒は(に)へ立たずして(は)へ竝ぶ策もありぬべし是れ豫め白の覺悟せざる可らざる所ありて之を要するに最初黒(い)に斜走せしとき白は必ず(ろ)に備ふべく漫に手を拔くの不可なる所以を知るに足るべきなり▲注意　白(七)の下りは或は一策ならんも黒としては輕々しく打つべきに非ず其次第は若し其附近に何等かの援兵ある場合は(い)に守る手にて直に(は)を切る手段ありて紛れ多ければなり

●第九則（第十一圖）

▲白(五)のはねだし　本圖の如く白(五)へはねだすは確に一方策なれども黒白共に無事に收まることになりてははねだしたる方少しく損の形なり併し能く實戰に應用せらるゝ戰法にて又能く間違へること多きを以て詳しく說明すべし　▲黒(八)のはねつぎば最も肝要　なり然るに初心の者はヽ、(い)にかけつぐことあれど甚だ不可なり其次第は黒(十六)のはねの有無は敵味方の攻防上非常の關係ある要處なるに黒もし(い)にかけつかんには白より直に(ろ)へはねられ勢ひ黒は(十)につがざるを得ずして肝腎なる(十六)のはねを失ふべし必ず黒は(十)と堅くつぐことを緩にす可らず　▲黒又(十五)にとぶ手を忘るな　黒(十六)へはね白(十七)につぎたるとき黒(は)へ飛ぶことを忘る可らず其間を切らるゝ恐れあるに似て實は繋り居るなり其時白もし(に)へ掛けんか黒(ほ)に突出し白(へ)に抑へ黒(と)へ引き白(ち)へつぎしとき黒(り)へ飛ぶ手や善し白(ぬ)に押し黒(る)に抑へ白(を)にのぞき黒(わ)につぎ白(か)に守りしとき黒(二)(六)の一隊は棄て置くも活きはあれど尚は一子低く(よ)に守るを定則とす善く守る者は九地の下に藏るとはそれ此謂ひか斯くなりては黒の方宜しかるべし　▲黒(ぬ)の抑へを戒む　黒(は)に飛ぶ手にて(ぬ)に抑へるを法とする者あれど單に(は)に飛ぶを本則と心得べし其譯は黒先づ(は)に飛びて(二)(六)一團の軍を收め然る後徐に(り)に展開して△印の斷息を狙ふと同時に外部發展の礎地を成す方働きあれば也　▲黒(ぬ)の抑への結果　假に黒(は)に飛ばずして(ぬ)に抑へたりとせよ古碁に於ては白△印に眼をもちたるとき黒(は)に飛び白(た)に詰めたるとき黒(れ)にうつを一の定法としあれどコヽに注意せざる可らざるは白もし△印に眼をもたずして▲印にとすみつけなば如何、黒に一手の落度なくみごとに受け得られたりとすれば白は頓か損なれど併し黒はヽ、爾ることなきにしも非ず黒以爲らく(五)(七)一隊の敵を擒にし得べしと匆々△印に斷息の一手を置くとせんか白は徐に(そ)に曲るべし扨はシメたりと黒(つ)に突込まば白は(い)に下らん巳ぬる哉黒それ自身が却て捕獲の運命に接すべけんなり　▲白のハメ手防禦策　故に白▲印につけたるとき黒△印に飛ばゞ白は△印に活くるの外なからん、然るに白もし强ひて黒を取らんとて(い)に突出せば黒(な)に亙り白(は)にとすみしとき黒△印の急處を衝けば前とは反對に黒の方一手多くなりて全く白を擒にし得べきなり　▲注意　扨て前に戻りて白(ち)につぐべき手にて若しも(ら)へ押へたらんには黒(ち)に切り白(む)にのびたるとき黒(う)にはねつぎてよし尚は白(に)の手に就て說あり後圖に示すべし

（第十一圖）

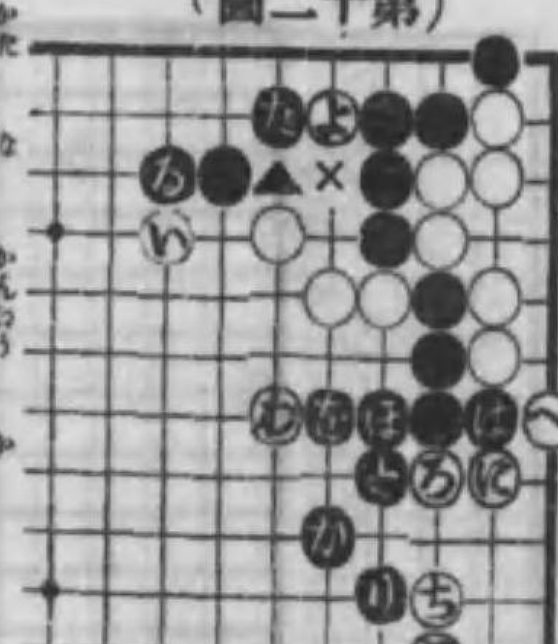


（白のハメ手防禦策）

●第十則（第十二圖）

▲白(ろ)つけの定法　白(い)へうつ手にて(ろ)へつける手段あり然るときは黒先づ(は)に曲るべし白必ず(に)に抑へん是れ僞りて敵を迫るもの黒もし(へ)に下り絶地に敵を迫るは身自から死地に就くなり必ず(ほ)に引還へすことを忘る可らず白(へ)に亙り黒(と)に曲り白(ち)にとび黒(り)につけ白(ぬ)にのびしとき黒轉じて(る)に固むるを定則とす　▲黒(ほ)の變化　又黒(ほ)に引く手にて(を)に飛ぶこともあり白はやはり(へ)に亙り黒(と)へふくれ白(ち)に飛び黒(り)につけ白(ぬ)へのびしとき黒は前同樣(る)の固めを爲すを肝要とす斯くて白(わ)につけなば黒は柳に風と(か)に忍ぶべし何ぞそれ其應手の堅忍なる　▲黒(る)の固め　以上說示せし如く白をして(へ)に亙らしめて黒(る)へ守るの手段は當さに是れ敵を攻めんと欲すれば必ず先づ備ふるの戰略と謂つべき乎　虫に看取せよ黒軍の形勢いかに優踰なるかを　▲注意　白もし(い)若くは(ろ)につける手にて敵を侮り(よ)につけなば黒は×若くは▲印等所謂ダメ詰めの應手を避けて必ず單に(た)にとすみつけて亙るを可とす

（第十二圖）



▲變則（第十三圖）

▲黒(四)のつけは損　實戰に於てヽ、見る所なれども黒(四)につけるは其位低くして甚だ損なり參考の爲め黒白應手の手順を示さんに此時白(五)へ抑へるは肝要の手段なり黒もし(い)へふくれなば白(ろ)へ抑へ黒(は)を切り白(に)へつぎ黒(ほ)へかけ白(へ)へ下り黒(と)へつぎしとき白(ち)へつけ黒(り)へ下りたるとき白(ぬ)へはねる手順となるを以て白の方非常に割合宜かるべし　▲黒⧗印のはねは自滅の基　扨て白(ち)へつけたるとき黒は何故に(り)に押へて⧗印へはねざりしやと云ふにはねれば自滅の運命を知ればなり今その手解きを示さんに假に黒⧗印へはねたりとせよ白(る)の虛を衝かん黒(を)につげば白(ぬ)を切り黒(わ)にはね出せば白(か)にのび黒(よ)につげば白(た)に曲り黒(れ)へ逃出せば白(そ)に抑へ黒(つ)に曲りたるとき白(ね)に抑へれば則ち黒は果敢なくもコヽに討死せざるを得ざるべし扨て黒(四)のつけは古碁には定法の如く示しあれど黒の爲め非常に損の割合となるが故に輕々しくうつ可らず

（第十三圖）

●第十一則（第十四圖）

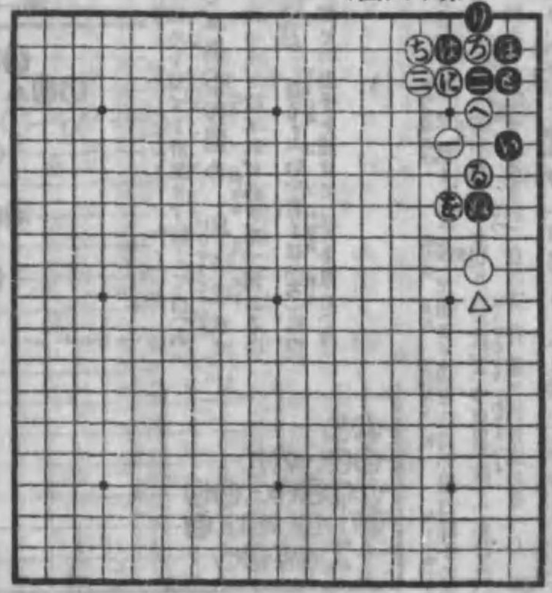
▲黒、敵地侵略の計　前にも説きし如く本圖の如く右側圍の星附近に白の構えあるときは黒は敵地に入りて敵地を侵略するの計に出で圖の如く(一)と三々の要地に侵入し白(三)へ挾みしとき黒(い)へ斜走するを定法とす白もし(ろ)へつければ黒(は)へはね出し白(に)を切り黒(ほ)へ掛け白(へ)へ當て黒(と)へつぎ白(ち)に抑へしとき黒(り)に取るを順序とす

▲黒㊀の意味　黒(い)に斜走するは單に右側面の星角に白の備へあるときに限れるに非ず星下即ち△印に白の控えあるときとても斯くうちて可なり若夫れ星下即ち△印に白ある場合の黒の應手の變を示さんに白(ろ)へつけたるとき黒(は)にはねこまずして(と)へ引き白(に)へ突當れば黒(ぬ)に斜走して可なり

▲黒㊁の變化　切又白(ろ)につけしとき黒(と)へ引かまして(へ)へ從ふ手段もあり白(ほ)にのびれば黒はやはり(ぬ)へ斜走するなり

▲注意　以上二項に於て說明せし黒(ぬ)に出づるの手段は白の備へ(の△印に在るときに限ることにて第一項の如く敵の一路近く星角の○印へ續れるときは黒(ぬ)に飛出するも白より(る)又は(を)につけ壓し〳〵封ぜらるゝの恐れあるを以て黒(と)の引き難に(へ)へ從ふ處向は一考を要すべきなり

（第十四圖）



第九節

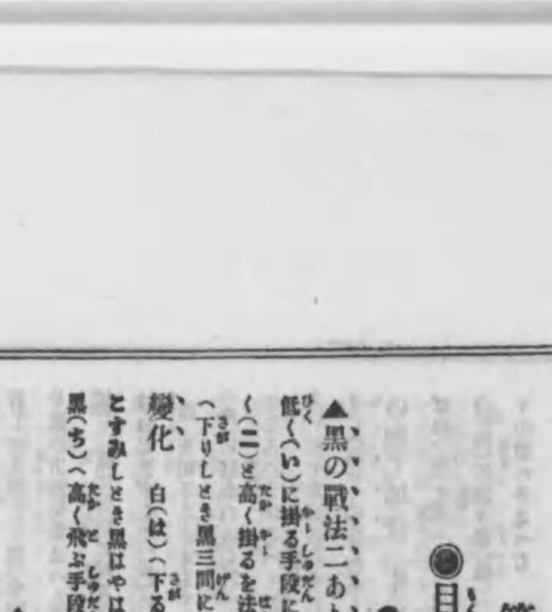
◉目はづし定則

●第一則（第一圖）

▲黒の戰法二あり　白の目はづしに掛る手段二あり其一は低く(い)に掛る手段にて其二は低く掛るの不利なるときは圖の如く(二)と高く掛るを注とす白(い)に受ければ黒(ろ)に抑へ白(は)へ下りしとき黒三間に(に)へ展開するを通則とすべし

▲白㊀の變化　白(は)へ下る手にて(ほ)へ引けば黒(へ)へのび白(と)へとすみしとき黒はやはり(に)へ開くべし併し碁の模樣に依りては黒(ち)へ高く飛ぶ手段もありこれは能く〳〵うつ手なり

（第一圖）

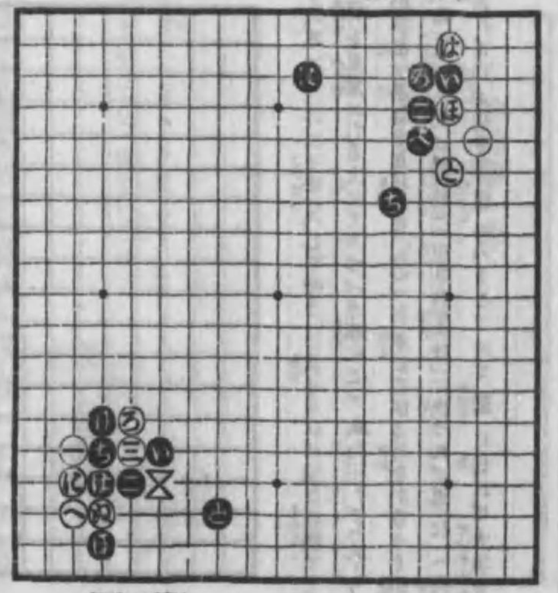


●第二則（第二圖）其一

▲白㊁のつけは變法　白、左側方面に模樣を作らん意向のとき稀に(二)づけの變法を用ふることあり古來より定法とせる黒白攻防の法數種あり即ち黒(い)にはね白(ろ)へのび黒(は)へ出で白(に)に抑へ黒(ほ)へ當下し白(へ)へ下り黒(と)に守るを一法とす

▲黒㊀の變化　黒(い)へはねる手にて(ち)へはねこむ手段なきに非ずなくてならねは白より(は)の處を切られ黒(り)へのび白(ぬ)へ下りしとき非ざれば不可なる一事是れなり、もし(二)の一子を「しちやう」に取れる場合ならんには(ち)にはねこむは近頃面白き手段なるべし尙ほ數あり次の圖に示さん

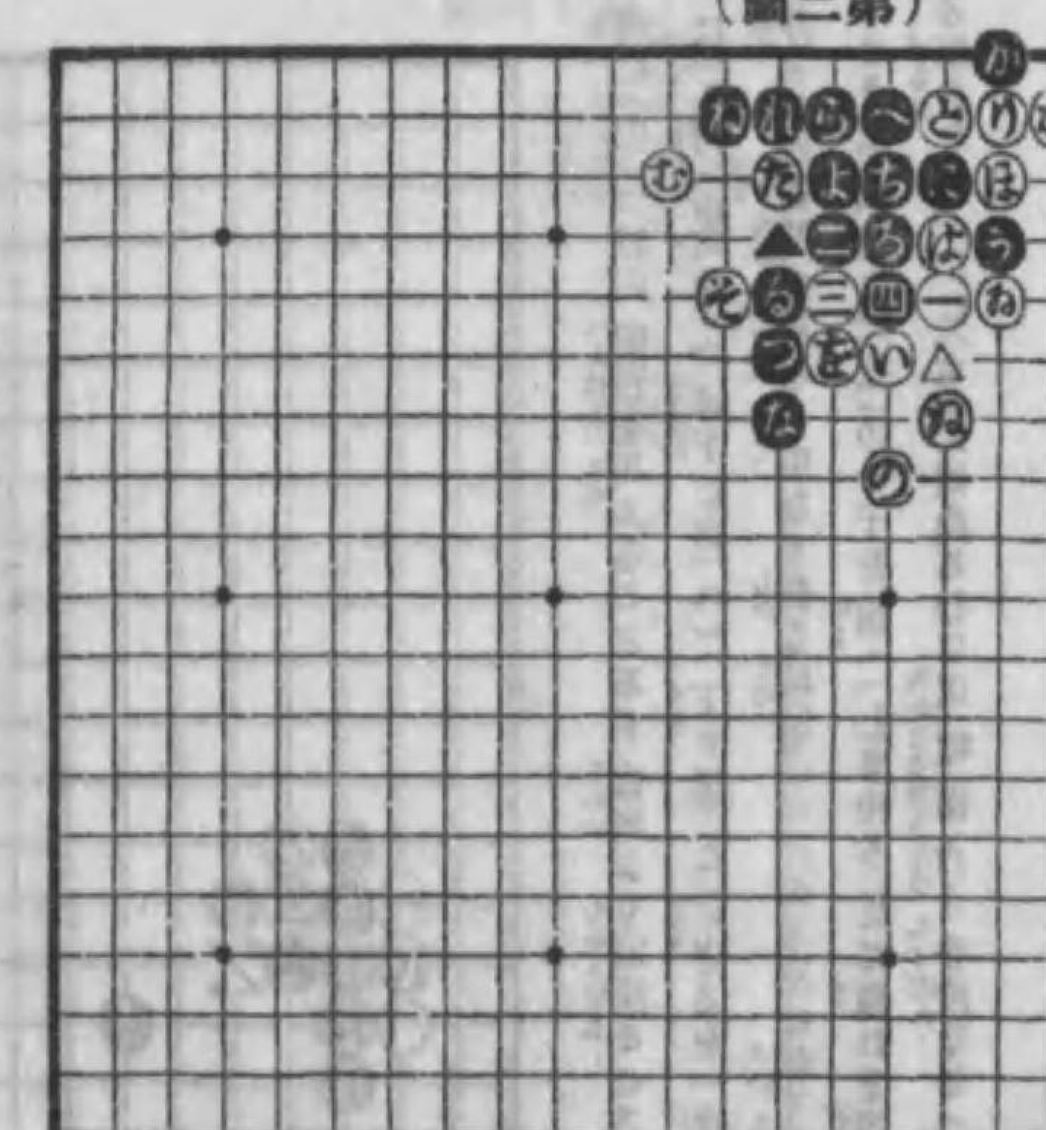
（第二圖）



（第三圖）其二

▲白㊂と㋑の關係　白(三)「しちやう」の當りなきときは白(ろ)に切るは損なるを以て勢ひ(い)に抑へざるを得ず此時黒(ろ)、白(は)に抑へ黒(に)、白(ほ)、黒(へ)へかけつぎ白(と)にあて黒(ち)へつぎしとき白もし(り)につがんには△印の切殘るべく依て白(ぬ)へかけつぎたりとせば黒先づ(る)にはね白(を)へつぎしとき轉じて黒(り)を切り白(わ)にはね黒(か)に下る手順となり黒の方優勢なるべし　▲白▲の切と「しちやう」の關係　扨て前圖に戻り白(三)「しちやう」の當りあるとき黒(四)にはねとまずして(る)にはねたりとせん此時白(を)へのびずして▲印を切ることもあらん若し然らば黒(よ)へ下り白(た)へ押し黒(れ)にはね白亦(そ)へはね黒(つ)へのびしとき白(を)に押す手順となる外なかるべし左れば白に於て黒の(る)(つ)の二子を「しちやう」にて取得る場合に非ざれば▲印を切るの無理なるを知るに足るべし(る)(つ)の二子幸に「しちやう」の當りあれば黒は其儘にて置きて(ゐ)へのびん蓋し白は離手に窮するならんよく〳〵「しちやう」の關係を見定めたる上にてうつべき事にこそ▲白「しちやう」の利く場合　黒(る)(つ)の二子「しちやう」に取らるゝときは(ゐ)へのび出す手なきを以て黒(な)へ三本にのびる外なかるべく然らば白(ね)に抑へ黒(ら)につぎ白又(む)にかけつぎ黒(う)に備へ而して白(ゐ)に抑へれば黒(は)へ引き白又(は)に出づれば黒(に)へ抑へ白(ゐ)に曲り黒(ほ)へつぎ白(の)に斜走するを手順とす其他種々の變化あれど白▲切りは愼むべきことにて濫に切れば大損を醸すの恐れあるべし

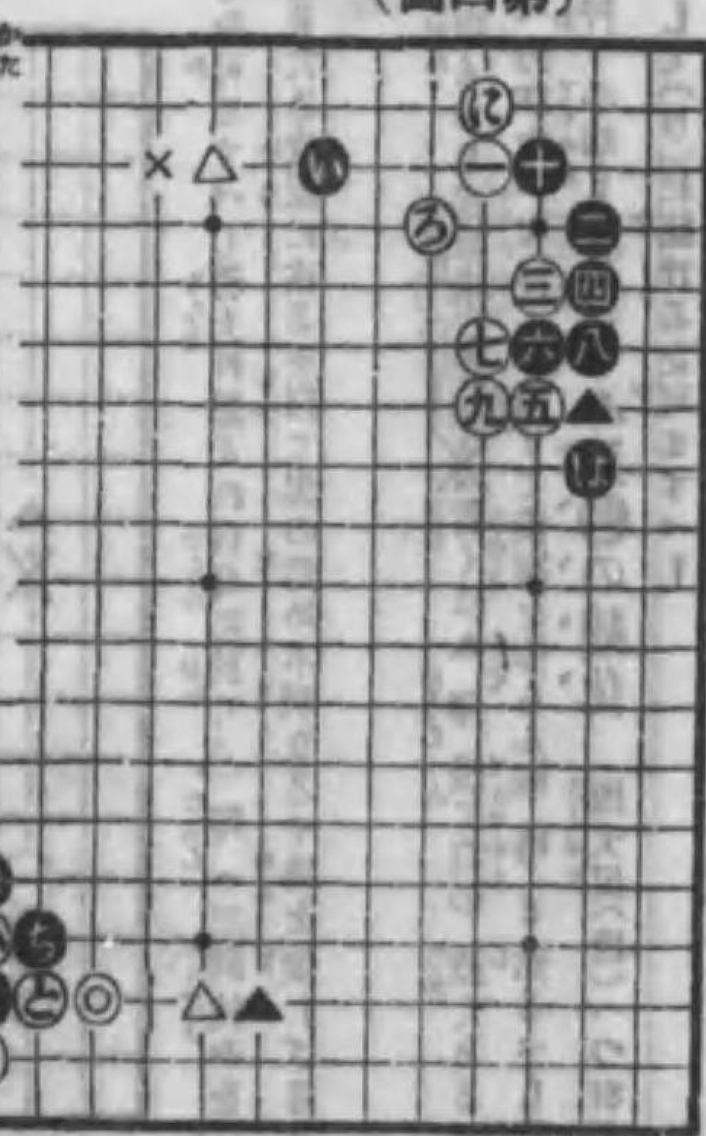
（第三圖）



●第二則（第四圖）

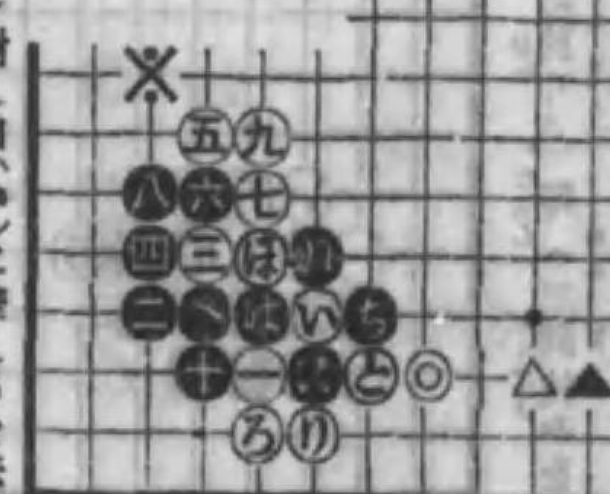
▲白㊄の戰略　本圖の如く白(五)と飛びたるは戰局全體の權衡を執り而して圖の如く黒(六)の肩に堅固なる三角疊を築きて左右兩側及び中原經營に資せんとする戰略に出でたるなり一歩を進めて言へば假に(い)の地點に黒の二間挾みありとせん斯る場合には圖の如く黒(十)へこすみつけ白(ろ)に控たる時黒若し(は)へ飛ばゞ白より△印へ挾撃せらるゝは黒の苦痛とする所なるべく黒は(は)の手を抜きて多くは×印へ開くならん其時白▲印へ抑へる手順となり右側方面の釣合よしと認めたるとき(五)とびの戰略を應用することゝ知るべし　▲黒㊉のこすみつけは肝要　黒(六)へはねとみ(八)へつぐは通形にて白(九)の肩をつぎしとき黒(十)へこすみつくるは極めて肝要の手段なり時に白もし法の如く(ろ)へこすめば黒手を抜きて他へ轉じ白又(に)へ下れば黒(は)に飛ぶを通則とす尚ほ變化あり大圖を見よ

（第四圖）



●第三則（第五圖）

▲白㋺の下りを警戒す　本圖の如く右側二間◎印に黒の備へあるときは黒(十)のこすみつけに對し白(い)に控えるを法とす然るにや、(ろ)へ下るものなきに非ず是れ甚だ不可なり抑も白(ろ)に下る其意味は黒の二間挾みなき場合白もし法の如く(い)にこすみ黒に星角即ち▲印邊にうたるゝを嫌ふとき白(ろ)に下り黒をして※印へ飛ばしめ而して白△印の要地を占めん趣向なるに然るに敵既に右側二間◎印の地點に迫り來れるにも拘らず白(ろ)へ下るは無謀に非ずして何ぞや參考の爲め其手解きを示さんに白強ひて(ろ)に下らんか黒(は)へはね充し白(い)に抑へ黒(に)を切り白(ほ)へつぎ黒亦(へ)につぎ白(と)へはねとみ黒(ち)を切り白(り)に一子取りしとき黒(ぬ)を切るべし斯くて白劫に受れば黒は孰れの場所を棄てても必ず、みな劫を打抜くべきなり白(ろ)に下るの無謀なるは勿論なれども黒亦直に白の無謀を咎むると否とは機を見て試むべきことにて劫の結果ヨリ大なる損害を招ぐ如き虞ある局面の形勢なるときは暫く見合せ然るべし　▲黒㊅の變化　黒もし白に堅固なる角疊を築かるゝを厭はんか(六)へはねとまずして單に(八)へのびるも一策なり斯くて白(六)へつぎたるとき※印に飛ぶを法とす

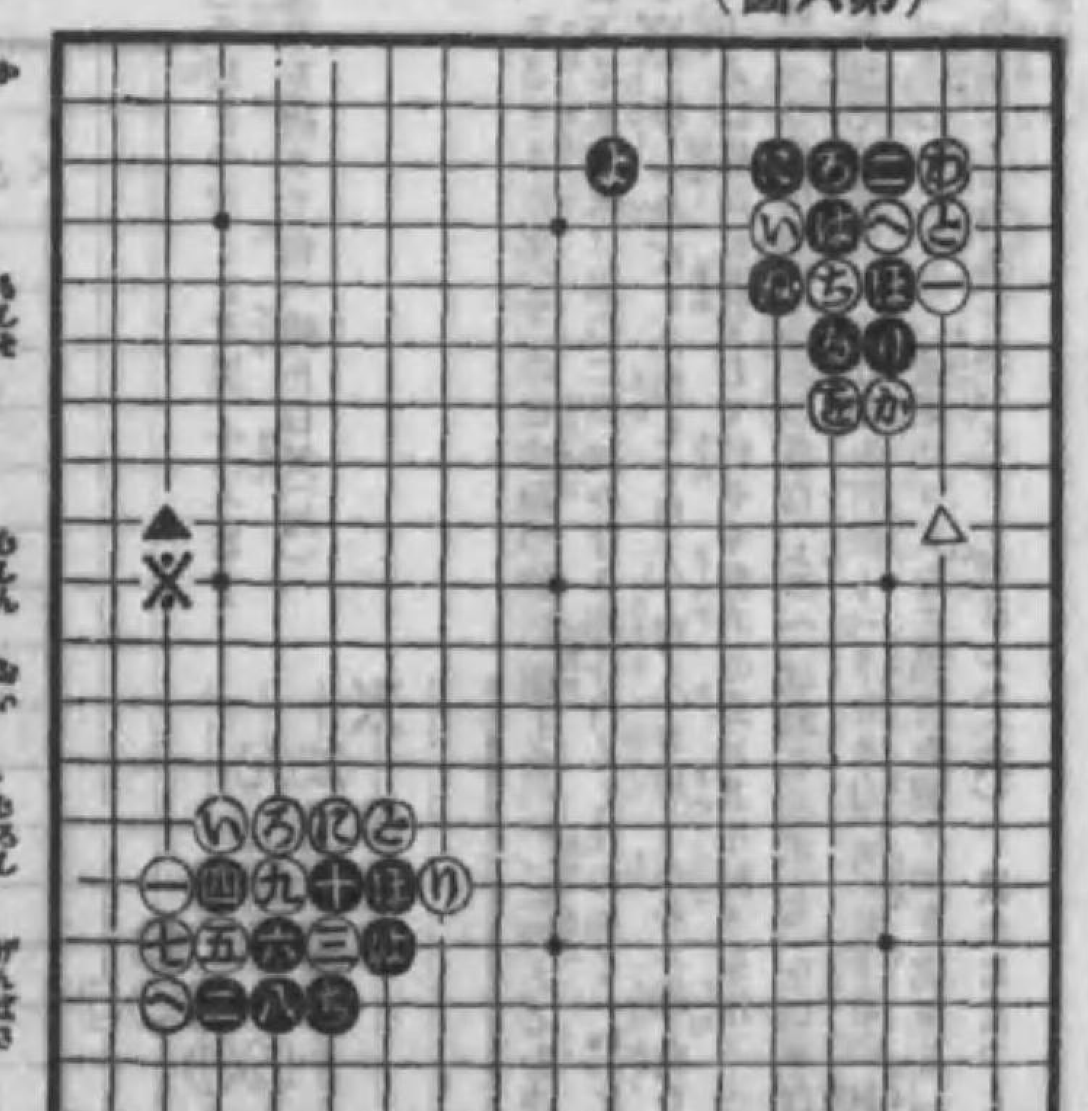


（第五圖）

●第四則（第六圖）

大けいま掛り（其一）

▲白㋑のかけ　白の(い)に對する黑の受方の中黑(ろ)の並び及び(は)のこすみつけ若くは(に)へつける手段は三間挾み第三圖以下第十圖に於て旣に說明せり尙ほ(ほ)のつけも同樣說示したれど本圖は三間挾みと場合を異にするを以て更に說明すべし▲黑㋭のつけ　黑(ほ)へつけ白(へ)にはねこみ黑(は)に遮り白(と)へつぎ黑亦(ろ)へつぎしとき白(ち)を切るを定則とす▲注意　△印に黑の備へあるとき即ち三間挾みの戰陣に於ては白(ち)を切れば黑必ず(り)へのびるを通法とす併し本戰局に於ては△の要地に黑の控へなきを以て黑(り)へのびずして(ぬ)を切るべし白(り)に一子取らば黑(る)にあて白(を)へはね黑(は)に劫を取り白(わ)へ抑しとき黑(ち)へつげば白も亦(か)につぐべし此時黑(よ)へ三間に陣取るは極て堅固にして疵少なき良手にて其制合は蓋し互角の形勢に在るべし先着の場合は先づ此戰法に出るを可とすべし若夫れ黑それ自身に於て△印へ三間挾みを試みたる其時に斯の如くうつざせんか△印の黑は孤縣以て敵の堅壘に迫りたる位置に在るを以て黑の爲め不利なるや論を俟たざるなり



（第六圖）

（第七圖）

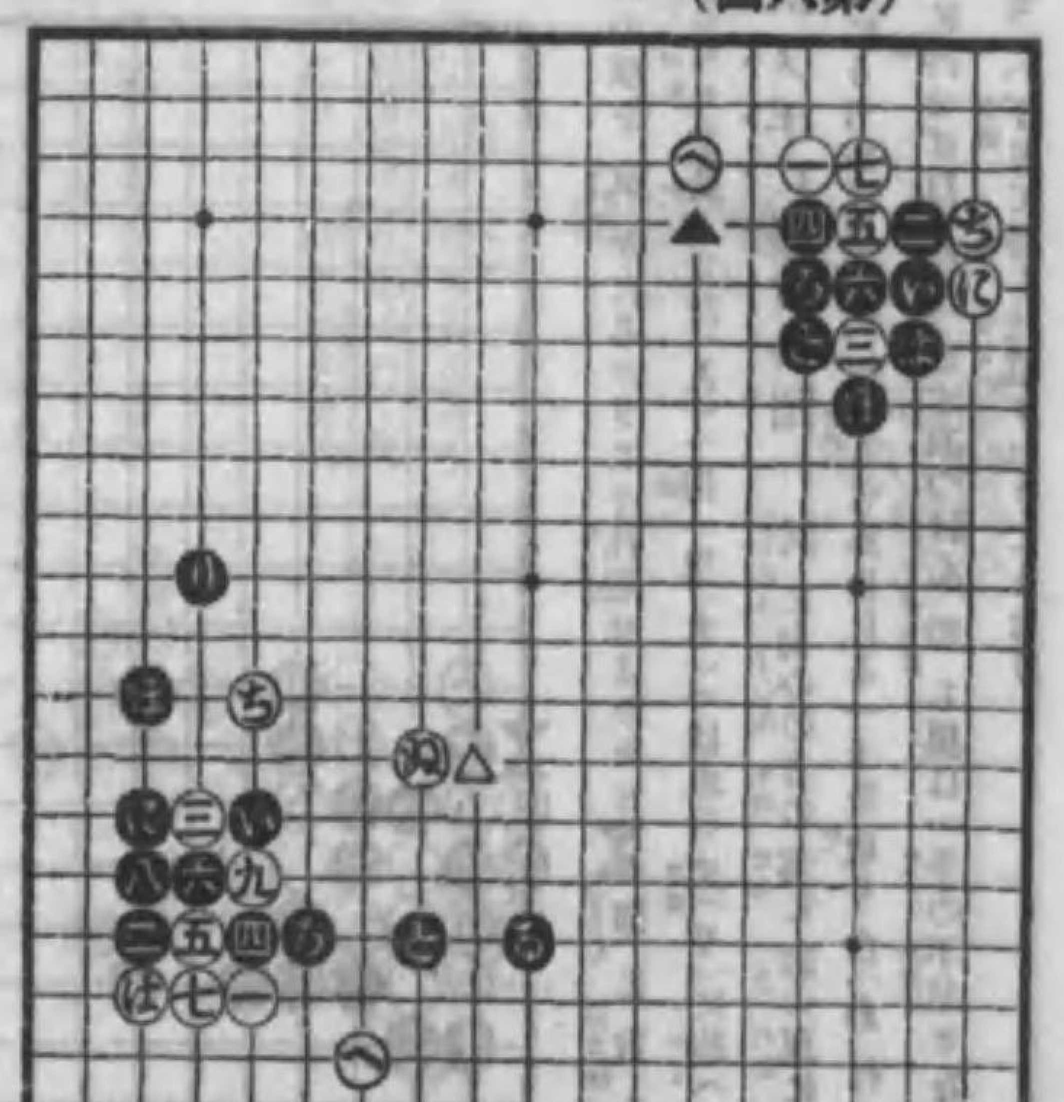
●第五則（第七圖）（其二）

▲白㋑の變化　前圖の如く白(い)に一子取らずして(ろ)へのびる手段もあり其意味は左側╳若くは▲印邊に白の控えあるとき白陣中に(い)に一子取りては如何にも其形凹みて薄くなるゆへ(ろ)へのび次いで(に)へ曲りて模樣を作らん戰略と知るべし若し然らば黑(は)へかけ白(に)へ曲り黑(ほ)につぎ白(へ)に抑へるか(と)へ押す手順となるべし▲黑㋭の變化　扨又黑(ほ)へつがずして直に(ち)に一子取ることもあらん若し然るときは白は(へ)に抑へずして(り)に掛けるを可とすべし

●第六則（第八圖）

（其三）

▲黑㋺のつぎは奇道　古來より打碁及び碁書にも黑(い)につがずして(ろ)につぐを定法としあるを見受れども是れは兵家の所謂奇道を履むものなるべし扨て黑(ろ)につがんか白は宜しく(い)に切るべし黑亦(は)を切り白(に)へのび黑(ほ)にかけ白(へ)若くは▲印へ煽り黑(と)に一子取りしとき白(ち)に一子抱へるを手順とすべし▲黑白兩軍の形勢　黑(ろ)のつぎは無論白(三)の一子を「しちやう」にて取り得る場合ならざる可らず縱し然る場合さても圖の如くなりては白の隅に實利を占め得たる其の反對に黑は恰かも浮城の如き形勢に在るを以て其割合甚だ損なり抑も黑(ろ)つぎの戰法は中原經營の成算あらんとき稀に用ふる手段にて定法として常に應用すべきに非ざるなり



（第八圖）

（第九圖）

●第七則（第九圖）

（其四）

▲黑㋑切りの變化　白(九)と切りしとき黑亦(い)を切りて自らの陣營を收むるの堅實なる手段たることは旣に前圖に於て說明せり併し黑又(ろ)へのびるも一策ならずとせず若し然るときは黑白攻守の變化種々あり能く其變法を心得てうつべきことぞかし扨て黑(ろ)へのびたりとせよ白(は)に抑へ黑(に)へ押し白(い)につぎ黑(ほ)へ飛び白(へ)を守り黑(と)へ飛び白又(ち)へとび黑(り)に煽り白(ぬ)へ開きしとき黑(る)へ飛ぶは抑も黑(ろ)に出るの手段中最も紛れなき定法とする所なり▲白㋦の變化　白は圖の如く(ぬ)に開かずして時として△印へ大展開を試みることもあり其時黑の受方はやはり(る)へ飛びて可なり尙ほ變化あり序を追ふて說明すべし

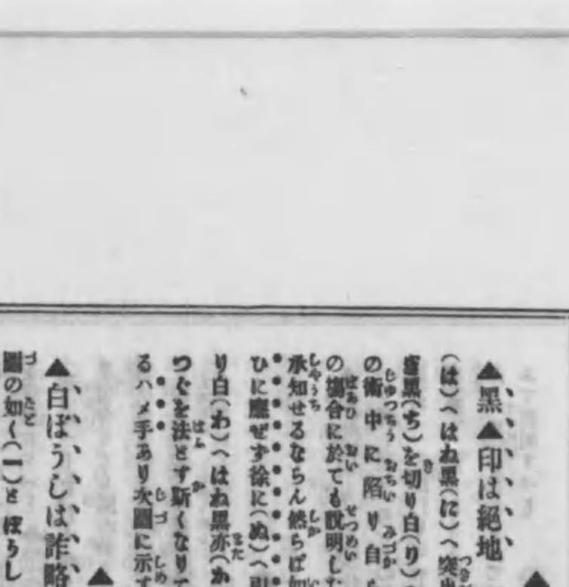
▲變　則（第十圖）

▲黑▲印は絶地　本圖の如く白(い)へ飛び黒(ろ)に押し白(は)へはね黒(に)へ突出し白(ほ)に抑へ黒(へ)を切り白(と)に つき黒(ち)を切り白(り)へ下りしとき黒▲印に食ちんか是れ敵の術中に陷り自ら破滅を招くものなることは既に三間挾みの場合に於ても說明したるを以て▲印にうつ手なきことは疾く承知せるならん然らば如何に壓戰すべきやと云ふに黒は(り)の誘ひに應ぜず徐に(ぬ)へ引還へすべし其時白(る)に掛へ黒(を)へ曲り白(わ)へはね黒赤(か)へはね白(よ)へのびしとき黒(た)にかけつぐを法とす斯くなりては黒の方優勢なり、なほ之れに似たるハメ手あり次圖に示すべし

▲變　則（第十一圖）

▲白ぼうしは詐略　前圖に於ては白△印（飛びたれど水圖の如く(一)とぼうしに冠せしときは黒一旦は(い)へ曲り白(ろ)へはね黒(は)に抑へ白△印を切り黒赤(に)を切り白(ほ)に誘ひには前圖同樣白の術中に陷るべし必ず(へ)へこすみ出すことを忘る可らず斯くて白(と)へ抱へ黒(ち)へはね白又(り)に抱へしとき黒單に(ぬ)へのびて善し、やはり黒の方優勢なるべし▲黒、敵のハメ手に罹るの圖　試に初心の者の爲に敵の罠に罹る圖を示さんに黒▲に抑へんか白(る)にあてん黒(を)に二目とれば白(ろ)にうちあき黒(ほ)に其うちあきたる一子を取り白(わ)におうてし黒(ろ)をつぎ白(と)へはね黒赤(ち)へはねなば白(か)へ曲り黒(よ)に押せば白(た)へどすみつけん　即ち黒は一手の不足となりて全軍擒虜となるを免かれず又黒(ち)へはねる手にて(ぬ)へつくれば白(ち)へ下りて善し注意すべきことなり

（第十圖）（ハメ手注意）

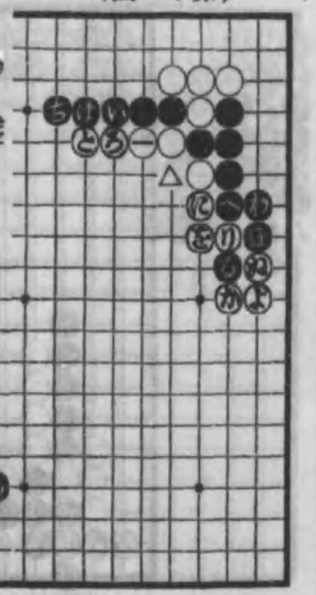


（第十一圖）（ハメ手）

●第　八　則（第十二圖）

▲白△印の變化　前圖の如く白△印へつがずして圖の如く(一)へ押す手段もあり若し然るときは黒(い)、白(ろ)黒(は)白(に)へのびしとき黒(ほ)へ去すを普通とすべし▲黒ⓗは良手黒(ほ)は後段に說く如く「しちやう」の關係を見合せてうつべき手にしあれど斯くうつは極めて肝要の手段なり然るに斯く輕く斜走さすしてマ、(へ)へ押すものあれば甚だ損なり　此時白先づ(と)へ押し黒(ち)へのびしとき白轉じて(り)へはね黒赤(ほ)へはねんか白宜し(ぬ)へ二段はねすべし▲參考　斯くて黒、無謀にも(る)を切る　知きことあらんか白(を)へつぎて可なり而して黒(わ)につげば白(あ)へ掛けるか場合に依り(よ)に引くべく黒又(わ)をつがずして(よ)に一子を取らんか白(わ)を切り(へ)の一軍を生ずるがゆへに黒(へ)へ押すは慎むべきことなり

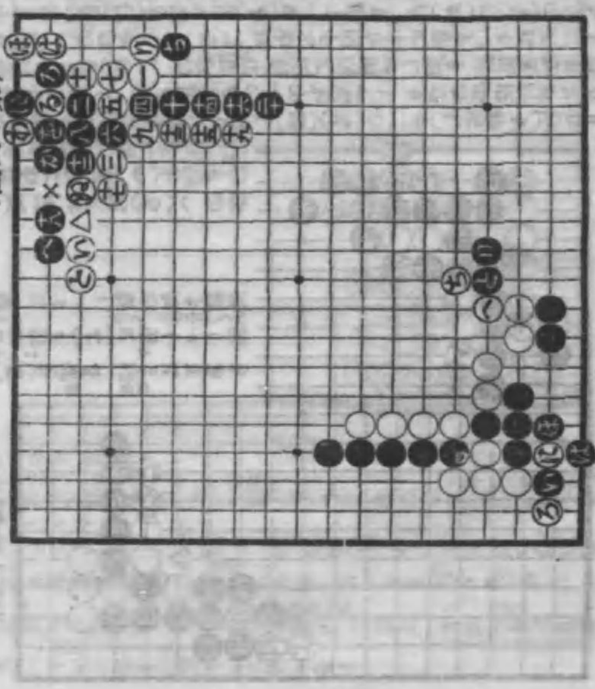
（第十二圖）



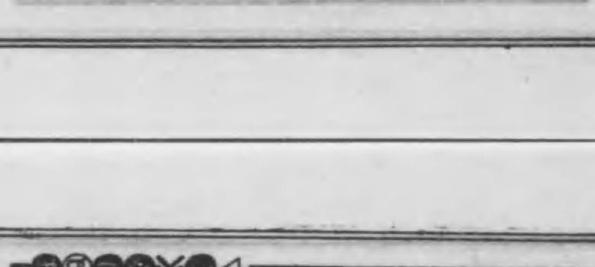
●第　九　則（第十三圖）

▲黒ⓘののびは肝要　圖の如く黒(に)へ斜走せしとき白倘ほ(い)へ押せば黒(ろ)へのびて白(は)に攻付くれば黒(に)に怒ぶを　肝要とす其次第は白(ほ)へはねとみ黒(へ)を切り白(と)へのび黒(ち)へ曲り白(り)へ抑へしとき黒(ぬ)を切り白(る)へのびしへ北げ出さん其時黒(か)へはね(は)(る)の二子を「しちやう」に掛けて攻にし得る手段ある故なり但し(は)(る)の二子「しちやう」の當りあるも黒最初ⓒ此一子をのび出すは深く考慮を要す第四則第六圖に說明せる如く、寧ろ黒ⓒ此の一子を棄てゝうつの手段肝要なるべし▲黒ⓙの變化　尤も白(は)に攻付け黒(に)へのびんとする一刹那我れもし(に)へのびずして(る)へはねる手段なきに非ず、それにても白(は)へのび黒(ち)へ曲り白(り)へ抑へしとき黒(ぬ)を切り白(る)へのびしへ、黒(ち)に守りしとき白(た)へ斜走すべし斯くて黒(れ)へつければ白(そ)に竝ぶ手順となるべきが故に黒の方甚だ不利なり▲黒ⓚのはねの變化　白の(は)(る)の二子やはり「しちやう」の當りあるときは黒(る)へはねる手にて(へ)へあてることもあらん左すれば前圖に於て說明せし如く白より(に)に二段はねされて前圖同樣の結果となるべく執れに變化するも黒の不利に歸するは免かれ難き運命なるを以て前段にも注意せし如く最初白◎を切りしとき黒は篤と巽隅方面に白の「しちやう」の當りあるや否やを見定め然る後黒◎ののびなり何を決せざる可らず是れ又世の所謂口傳とする所なるべきか倘ほ種々の變あり序を追ふて見よ

（第十三圖）



（第四十図）



（第五十図）

●第十図（第四十図）

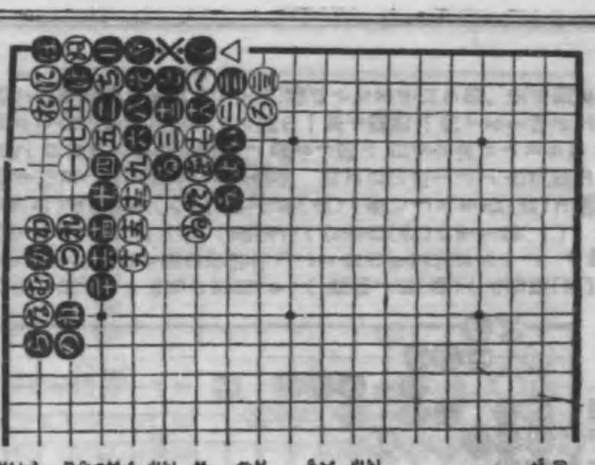
◀白△印の変化　前図白△印にそのまま打ち切ったのでは黒×印にツケられて大変です。白△印の一線が「しまった」と感じられるのはこの点です。白△印にそのまま打ち切ったのでは黒×印にツケられて大変です。白△印の一線が「しまった」と感じられるのはこの点です。

◀白△印の再変　白(ア)に黒(イ)と曲がり込めば黒×印に白(ウ)と押して白の形勢がよくなります。白(ア)に黒(イ)と曲がり込めば黒×印に白(ウ)と押して白の形勢がよくなります。

●第十一図（第五十図）

◀白①の押し　前図白に「しまった」の感じを与えた白①の押しです。前図白に「しまった」の感じを与えた白①の押しです。

◀白①の変化　白(ア)に押されて黒(イ)と切られては白(ウ)に押すことができません。白(ア)に押されて黒(イ)と切られては白(ウ)に押すことができません。



（第六十図）

◀黒白両軍の激戦（第六十図）

◀黒❶の切り大切　黒又(ア)と切るのは大悪手です。黒又(ア)と切るのは大悪手です。

◀黒❶の切り大切　黒又(ア)と切るのは大悪手です。黒又(ア)と切るのは大悪手です。

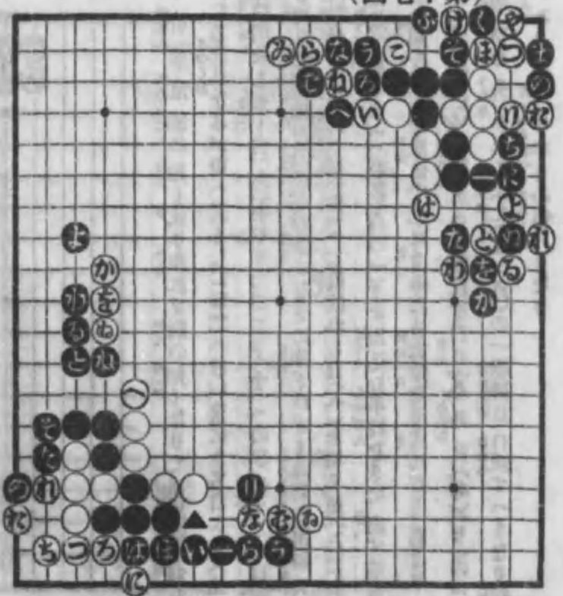
▲參　考　（第十七圖）（其一）

▲惡手の實例　本圖の如く黒(一)へ曲るは無理なれども往々斯くうつものあり參考の爲め如何なる結果を生ずるやを示さんに白(い)へのび黒(ろ)へ押し白(は)に立ち黒(に)へ下り白亦(ほ)へ下り黒(へ)へはね白(と)に攻撃し黒(ち)へ折込み白(り)に抑て黒(ぬ)へつけ白(る)に抑へ黒(を)を斷り白(わ)にはね黒(か)へのび白(よ)にはねこみ黒(た)を切りしとき白(れ)に取るべし即ち黒(一)(に)の一單は包圍の裡に陷り退路なきに窮すべきなり　▲黒●の變化　黒(へ)へはねる手にて單に(ち)へ曲らんか白は、やはり(り)に抑へ黒亦(そ)に抑へ白(つ)に守り黒(た)へ飛び白(ね)へはね黒(な)に受け白又(ら)へ二段はねし黒(む)を切り白(へ)につぎ黒亦(う)につぎ白(る)へ引き黒(の)へ置き白(お)に抑へ黒(く)へはね白(や)に抑へ黒(ま)に並び白(け)に一子取り黒(ふ)へ抑へしとき白(こ)に置くを以て黒は手不足となりて討死すべきなり斯の如く如何に變化するも其結果、黒の不利に歸するは(一)へ曲りたる巡りと諦むべし倘ほ變化あり次圖を見よ

（第十八圖）（其二）

▲黒▲の變化　前圖の如く黒▲印へ坤さすして　本圖の如く(一)へ斜走せしときは白▲印へ曲り込み黒(い)に抑へ白(ろ)へはね黒(は)に抑へ白又(に)へはね黒(ほ)へつぎ白帰して(へ)へ立ち黒(と)へ抑し白(を)へのび黒又(わ)に押し白倘ほ(か)へのび黒(よ)へ飛ぶ手順となるべく(一)の變化　黒又(一)に斜走なさずして(た)へはねることなきにしも非ず左れば白△印へ曲り黒(い)に受け白(ろ)へ曲り黒(は)に抑へ白(に)へはね黒(ほ)へつぎ白(う)へ引き黒(の)へ置き白(お)に抑へ黒(く)へ斜走せしときは白▲印へ曲り込み黒(い)に抑へ白(ろ)へはね黒(は)に抑へ白又(に)へはね黒(ほ)へつぎ白帰して(へ)へ立ち黒(と)へはね黒(ほ)に抑へ白(ち)へかけつぎ黒(り)へ斜開し白(ぬ)へかけ黒(る)に走し白△印へ曲り黒(い)に受け白(ろ)へ曲り黒(は)に抑へ白(に)へはね黒(ほ)へつぎ白(う)へ引き黒(の)へ置き白(お)に抑へ黒(く)へはね白(や)に抑へ黒(ま)に並び白(け)に一子取り黒(ふ)へ抑へしとき白(こ)に置くを以て黒は手不足となりて討死すべきなり斯の如く如何に變化するも其結果、黒の不利に歸するは(一)へ曲りたる巡りと諦むべし倘ほ變化あり次圖を見よ

（第十七圖）



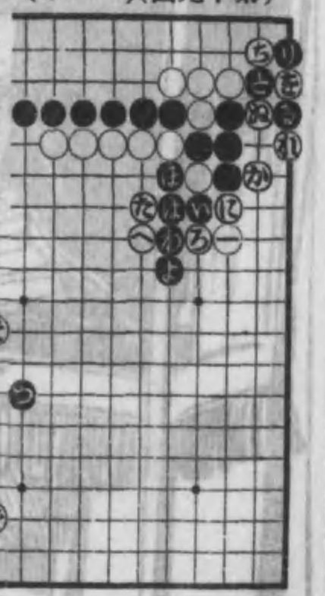
（第十八圖）

▲參　考　（第十九圖）

ハメ手の注意

▲黒㊀ののびは筋違ひ　ハメ手の注意まで記さんに黒(は)にのび白(に)にあて黒(は)に一子取り白(へ)へ桁にかけ黒(と)へはね白(ち)に抑へ黒又(り)へ二段はねし白(ぬ)を切り黒(る)へ劫に受け白(を)に一子取り黒(わ)へ突出し白(か)へはね黒(よ)へ脱出る手順なれども斯く白に聯絡されては黒の不利なるべし畢竟黒(は)ののびが筋違ひなる爲め斯る不結果を來たせしなり　▲ハメ手破りの手段　然らば黒はやはり云ふに黒(い)へはね白(ろ)に抑へしとき單に(ほ)に一子打抜くべし左すれば白は(た)にかける位のものなるべく其時黒(と)へはね、白(ち)、黒(り)、白(ぬ)、黒(る)、白(を)、黒(わ)にはね差し白(れ)に(る)の一子を取れば黒(は)へつなぎ取りしとき黒(わ)にはね差し白(れ)に(る)の一子を取れば黒(は)へつなぎ取りしとき黒(わ)にはね差し白(れ)に(る)の一子を取れば黒(は)へつなぎ如く白に亘られて居らぬ丈け得に非ずや

（第十九圖）（ハメ手）



●第十二則　（第二十圖）

▲白(へ)の並びは肝要　本圖の如く白(一)へ立つも亦一の絶向也其時黒(い)に斜走し白(ろ)へ押し黒亦(は)へ曲り白(に)につぎ黒又(ほ)に押し白(へ)に並び黒(と)へ引き白(ち)へ開き黒(わ)へはね白又(か)へ二段はねし黒(よ)に押し白(た)に守り白(を)へ開き黒(わ)へはね白又(か)へ二段はねし黒(よ)に押し白(た)へかけつぎ黒(れ)に展開し白(そ)に塡り黒(つ)に飛ぶを通則とす此戰ひの中に於て最も肝要なるは白(へ)の並びなりとす若し黒より(へ)へつけらるゝ如きことあらんには夫れこそ白の形勢となるべきが故に必ず(へ)の並びを開却す可らず　▲注意　白(あ)へはね黒(ね)に一子取りしとき白(ら)に絞ぼるを可とす初心の注意までに　▲黒、絞らるゝ覺悟にて　黒(る)に守る手にて局面の模樣により直に(わ)へはね白(あ)へ二段はねすれば黒は絞らるゝ覺悟にて(ね)を切る手段なきに非ず若し然れば白(た)へはね黒(な)に一子取り白(ら)にあて黒(ぬ)につぐ手順となるべく或は前段說明せし圖形よりは可なるやも知れず白も亦(あ)に二段はねを試み絞りてうつも面白からずと思ふときは繼に(ね)へのびるならん左れば黒(る)に飛ぶべく本圖の如く黒免ブ(る)に飛び次いで(わ)に

（第二十圖）

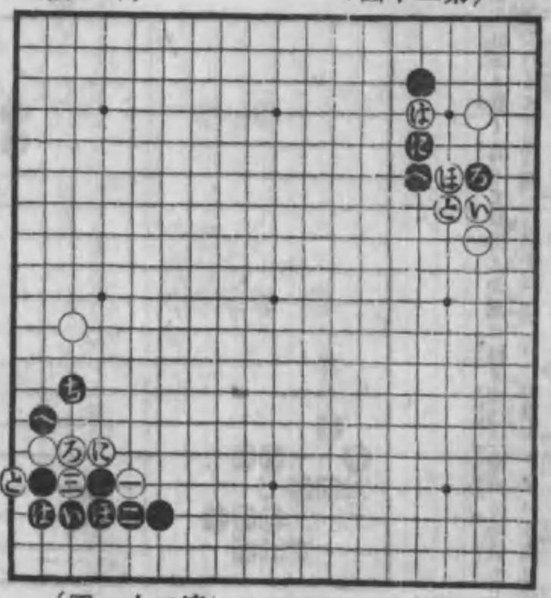
增補其二（第二十圖）

▲黑㋐の打込は急　白(一)は長隅一方面に向つての釣合上一路控へて(い)に開くが通形なれども稍に三間に開くことあり此場合黒(ろ)の打込を急くの甚だ不可なりと云ふ次第は白より(は)につけられて前後兩軍の凌ぎを爲さゞる可らざる危急の境隅に陷ればなり斯る場合には何時も使はぬ手段なれども(に)へ一間飛ぶこそ宜けれ白は勢ひ(ほ)に補はざるを得ざるべく斯くて黒(へ)に押し白(と)に引くはヽ、打蚤に見る所なれども此局部丈けに就て言へば白(一)は稍ゝ凝形と爲れる姿に非ずや但し白(一)の一子なくば黒(に)(へ)と白(ほ)(と)の交換は無論白の方割合善きなり即ち知る白(一)の三間開きなるときに漫然黒(に)に立つの不可なるを

増補其三（第二十一圖）

▲黒㋑の受と㋺の切り　黒(圖)と(い)に受れば白(ろ)につき黒赤(は)につき白(に)に抑え黒(ほ)につぐ手順を經り黒(い)形は如何にも堅固なれども手數を掛けたる割合に得る所の地域少なく稍ゝ凝形と爲るを免かれず斯く爲るの不可なるものありとすれば黒(い)に受る手にて外側の(ろ)を切り白(い)にのび黒(に)につき白(は)に一子を抱え黒(へ)に抑え白(と)に取りしとき黒(ち)にかけつぐを可とすべし白もし(は)へ曲る手にて(へ)へ引くこともあらんには黒(は)にのびて(三)(い)の二子を拿捕し得べきなり

（第二十圖）　（隅坤）



（第二十一圖）　（隅長）

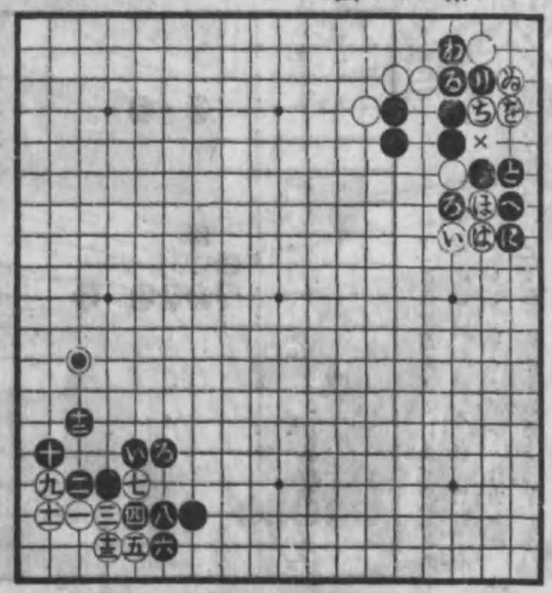
増補 其四（第二十二圖）

▲黒㊀、敵の趣向を挫く　本圖は黒番の場合に屬す見る所の形なり抑も白(い)に飛びたるは黒の壓手を試むる手段に外ならず然るに黒もし敵の手段に釣られて無造作に(ろ)に割込む如きことあらんには白は是れ幸ひと(は)に下るは必定なり見よ黒の形の如何に凝れるかを、斯る場合には黒(ろ)抔(はねとまず只輕く(に)へ斜走するこそ着けれ然るに初心の方は斯くては白(ほ)にふく亂黒(へ)に抑えたるとき×印を切られはせぬかと心配することもあれど決して恐るゝに及ばず白もし然らんには黒(と)につぎ白(ち)にのびなば黒(り)へはねこみ白(ぬ)に抑え黒(る)につぎ白亦(き)に當たるとき黒、わ)に下る手順と爲るべく白は空しく邊土に戰役せざるを得ざるに非ずや▲白㊁の變化白又(ち)へ下らかして(き)へとすまんか黒(ぬ)へつけとし白(り)に絶ちたるとき黒(ち)を殺りて善し要するに黒に)には已れを贈ると同時に敵の連向を挫く輕妙の冥手と知るべきなり

増補 其五（第二十三圖）

▲堅陣上塗りの形　本圖の如く運ぶは黒白共に普通の形なるに似たれども斯く爲りては◉この黒は餘り味方の堅陣に接近して凝形と爲れるに非ずや陣上塗の形は甚だ感服せざるを以て白(三)と押したるとき黒(四)の壓手は須らく考慮を要すべきなり圖の如く左側の巻に◉この備へあるとき白より(九)(はかつがれる手順と爲りては◉この一子は無くもがなの位置に陣取れる姿と爲るを以て黒は必ず早に(九)へ下るか或は(十一)へ逃げぬの手段に出づることを忘る可らず扨て黒(九)へ下りし其時白もし(四)へ繰出すこともあらんには黒は必ず欲封の戰略に出で(七)又は遠く(ろ)に包圍すべし黒(ろ)の時白(十一)を守らば黒、手を拔きて可なり強ひて之を取らんとするは宜しからず

（第二十二圖）



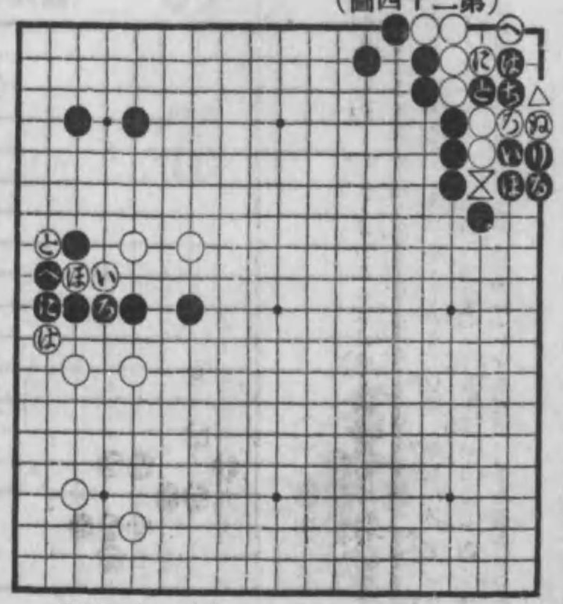
（第二十三圖）

◉黒白の先手爭ひ

其一（第二十四圖）

▲黒㊀敵の懐を挟る　本圖は黒二間挟み白手拔の場合の打碁に於てヤ、見る所の形なり斯る場合に黒もし彼を攻め且つ先手を取らんとすれば先づ(い)につけよ斯くて白(ろ)に抑えたるとき黒(は)に置く手順肝要なりさす白は(に)へはねて殘念ながら黒に先手を讓る外なき可らず勿論黒(い)につける手にて(ほ)へとすみても先手にはなれど損碁の上に於て三目の差あることを知らざる可らず之を詳解せんに黒(ほ)にとすみ白(い)に抑え黒(と)を切り白(に)に抑え黒(ち)への下白(は)に抑え黒(り)へはね白△印へ打つ手順と爲りて白の地域は八眼に噴えるに非ず然るに前の如く黒(い)につけ次で(ほ)へ引く手順と爲りて白より×印へ突込まるゝ手段なきものと假定すれば(ぬ)の崩邊は黒の勢力範圍に屬するを以て詰り黒(ぬ)へはねつぐ手順と爲りて白の隅地を六眼に減ずることを得べし即ち白の隅地を二眼潰すと同時に(る)の一眼を作り得べく彼此れ三眼の差ある所以を了解するに足るべきなり但し白より×印へ突込まるゝ處れあるときは黒(ぬ)のはねつぎは暫く見合はすことゝ心得べきなり

（第二十四圖）



其二（第二十五圖）

▲覗きてとすむは輕妙　本圖も亦黒(は)に實戰に見る所なり斯る場合に於ては白單に(は)にとすまんよりは先づ(い)にのぞき黒(ろ)につぎたるとき白(は)にとすみて先手を取る手段に出づるを可とすべし如何局勢上稍には白(い)黒(ろ)白(ほ)に突出し黒(へ)に抑えたるとき白或は(に)若くは(と)を殺る手段なきに非ざれども斯くては白の石が如何にも重く爲りて進退の自由を缺くの嫌みなきに非ざるを以て多くの場合前段說明せし如く先づ(い)にのぞき然る後あつさりと(は)にとすみて先手を取る方可ならん

實戰虎の巻

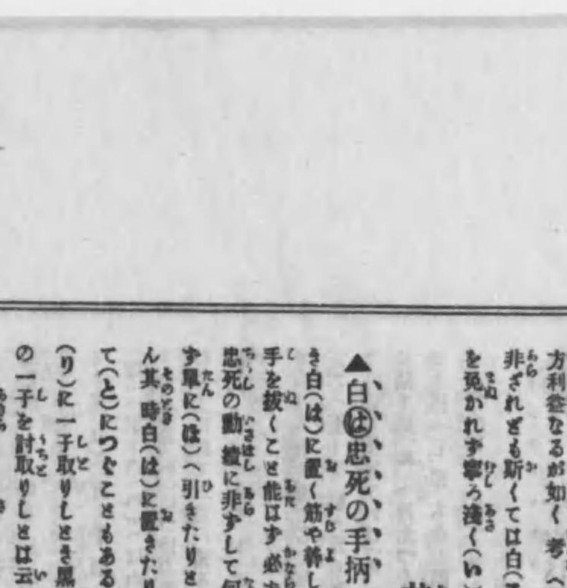
其三（第二十六圖）

▲猿辷りは後手　斯る場合に初心の方は兎角深く辷り込む方利益なるが如く考へて猿辷りを試むることなきに非ざれども斯くては白（ろ）黒（い）白（に）と爲りて黒は後手と爲るを免かれず寧ろ淺く（い）に辷り込み先手を取るに若かざるなり

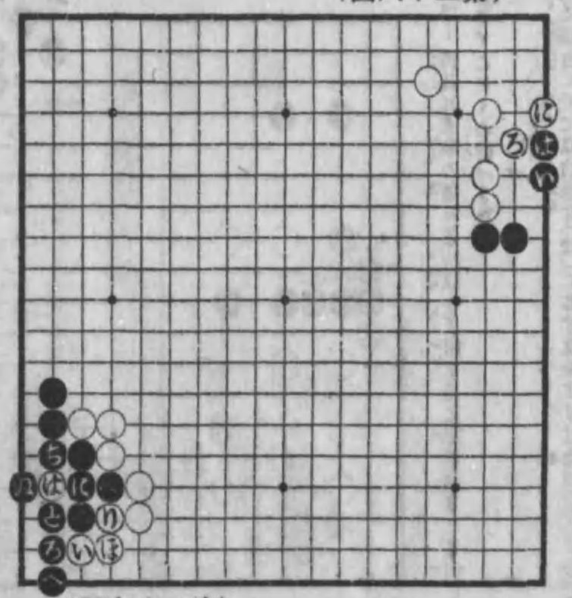
其四（第二十七圖）

▲白㊀忠死の手柄　白先づ（い）につけ黒（ろ）に抑えたるとき白（は）に置く筋や幹し黒（に）へつぎ白（ほ）に引きたるとき黒は手を拔くこと能はず必ず（へ）に下らざるを得ざるべし是れ白（は）忠死の動機に非ずして何ぞや然るに白もし（は）に置く手段を知らず單に（ほ）へ引きたりとせんか黒は時として手を拔くことも あらん其時白（は）に置きたりとて黒は敵の註文通り（に）をつがずして（と）につぐことあるべく白（に）へ込めば黒又（ち）を つぎ白（り）に一子取りしとき黒（ぬ）に亘る手段ありとす斯く爲りては敵の一子を討取りしとは云ふものゝ黒の手拔に匹敵する程の儲けなきや明かなり先きに（は）に置く手順の 都にず可らざる所以を知るに足るべきなり

（第二十六圖）



（第二十七圖）



●實戰虎の卷

第二編 軍備篇

●割地布石法則

●第一則（第一圖）

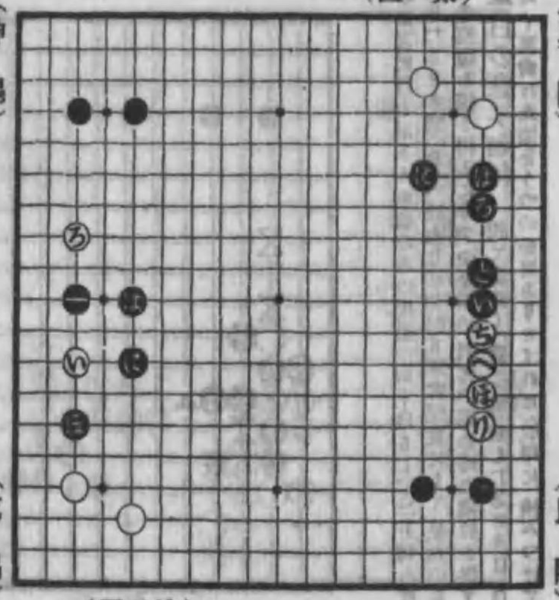
▲白の金城に對する策戰　本圖の如き固めある白の金城に對し短兵急に攻掛（かゝ）るは味方を損するの基なり例せば長隅の要衝に圖の如く黒軍の守備兵あるとき幾隅の敵と相對し自他の樞衝上如何なる地點を立脚地とすべきやと云ふに此石立に於ては黒は先づ(い)の地を占め徐ろに侵略の歩を進むべきなり而して白もし手を抜きたりとし黒なは此戰線の經營を得策なりとせば(ろ)若くは(は)へ軍を進めて己を守ると同時に敵城に迫るの戰略に出づるを上策とすべし▲惡軍急迫は挾撃の恐れあり　然るに黒(い)の要衝を開却し進（すゝ）んで短兵急に(は)若くは(ろ)邊へ迫るは甚だ危險なり假に白より(い)に挾撃せられたりとせよ而して黒(に)方面へ北げたりとして白或は(は)邊へ展開し以て反對に長城に迫りたりとせば如何即ち黒は長城附近の發展地を敵に占領せられたる其一方に(は)(に)の一軍は懸軍長驅敵の後に糧道を絶たれて獨り自ら味噌を舐嘗するの觀なからずや▲(い)は要衝の地

●第二則（第二圖）

黒兵の敵味方の樞衝上(い)は何故に要衝の地なりやと云ふに一例を擧れば黒一敵兵の(へ)(侵入するありて長城との聯絡を絶たるゝことあるも(い)軍は即ち(ろ)へ展開するだけの地の利を有すればなり非ず白タトセ(ち)へ侵撃するとしても黒は尚は(は)へ二間に展開する丈けの餘地あるべし勿論白(ち)も長城方面(り)の巻へ二同に開く餘地を有するを以て黒(と)の占領は早に此方面のみの形勢に因り其得失を斷するを得ず先づ己れを守ると同時に後の發展を期し一路登えて(い)の要地に據るを通則とすべし

黒定法通り(一)の要處を占めたりとせよ之に對する白の防備地點は孰れかと問（ば）(い)なりと答（さ）るを得ず己れの領地を擴むると同時に(ろ)のうちこみを含み尚ほ其他種々の絶妙あれば手を抜くことゝもあれど先づ(は)へ飛ぶより善きはなし抑も黒(は)の飛びは自己の地域を擴大して(ろ)のうちこみを防ぐのみか中原發展の基ともなり盤を見て(ね)へ進撃もし又暗に(ほ)のうちこみを狙ふ意味をも含める肝要の手段なりとす

（第一圖）



（第二圖）

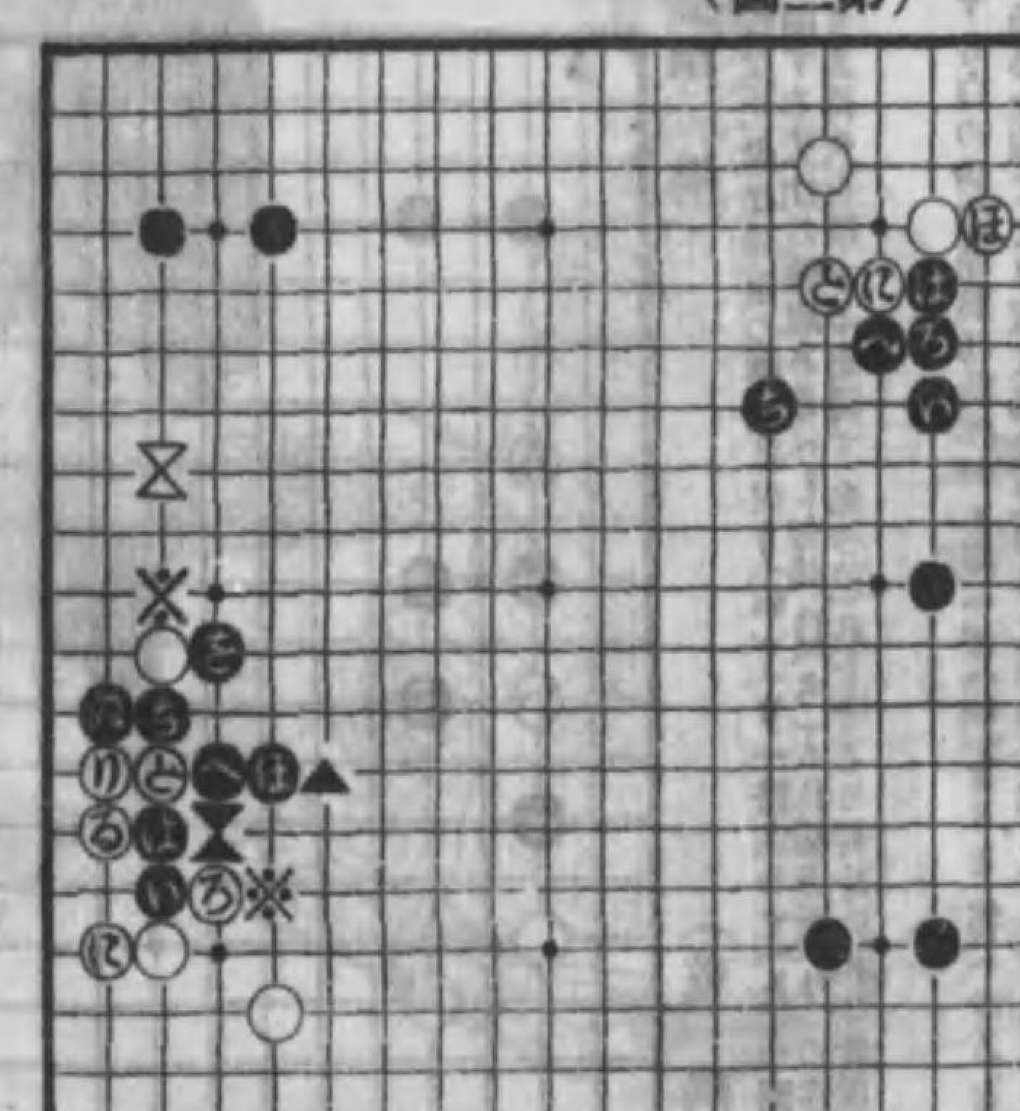
●第三則（第三圖）

▲黒(は)の突貫　既に第一圖に於て說明したる如く此側面のみの形勢に於ては黒の占むべき要地は(い)又は(ろ)の巷なれど時により猛烈に(は)へ突貫を試むる手段なきにしも非ず左すれば白(に)に反擊し黒(ろ)へ引き白(ほ)を守り黒(へ)へ壓迫し白(と)に應へるを通形とす黒尙は此場を打たんとすれば(ち)へ斜開する位のものならん併し黒(は)の突擊は敵の城廓を益々固うする結果を生ずるが故に叨に用ふべき手段に非ざるなり

●第四則（第四圖）

▲黒の單騎遠征　前圖の如く星下即ち※印に黒の守りなく敵兵の星角に據るある場合にても黒は單騎(い)の壘壁へ肉薄して遠征を試むることなきに非ず白は、やはり(ろ)へはね黒(は)へ引き白(に)へ下りしとき前圖に於ては⧗印へ曲るを法としたれど此戰局に於ては甚だ不可なり假に黒⧗印へ曲り白※印へのび黒▲へ斜走したりとせよ其形如何にも重くして後に中原發展の計を爲すに就ても何となく重荷を負へる如く進退自由ならぬ憾ありぬべし必ず輕く(ほ)へ斜開の戰略に出づることを忘る可らず▲犧牲は兵家の常　然るに初心の人は黒(ほ)へ斜走すれば白⧗に出で黒(へ)に抑へたるとき白(と)を切り其結果味方の二騎の生擒となるを氣遣うて⧗へ曲ることあれど是れ戰ひの法を知らざるものなり試みに其成行を示さんか初心者の杞憂の如く白もし(と)を切らば黒は宜しく(ち)へはねこむべし白(り)へのびれば黒(ぬ)に追ひ白(る)へ曲りたるとき黒(を)へはねなば如何其軍容堅實にして星角の要衝を守れる敵の一騎は孤立殆ど爲すなきの死地に陷れるに反し黒は宏大なる模樣を描き得るに非ずや全局の利害の爲め時に犧牲を供するは兵家の常、若夫れ全軍全きを欲せば、むしろ戰はざるに如かざるなり▲白の應手如何　扨て黒輕く(ほ)へ斜走したるときは白は勿論(と)に切る手段なきを以て先づ⧖印へ二間開きする位のものなるべく黒尙は此場をうつの必要ありとすれば※印に挾みつけて自らを收むるの手段に出るを可とすべし

（第三圖）



（第四圖）

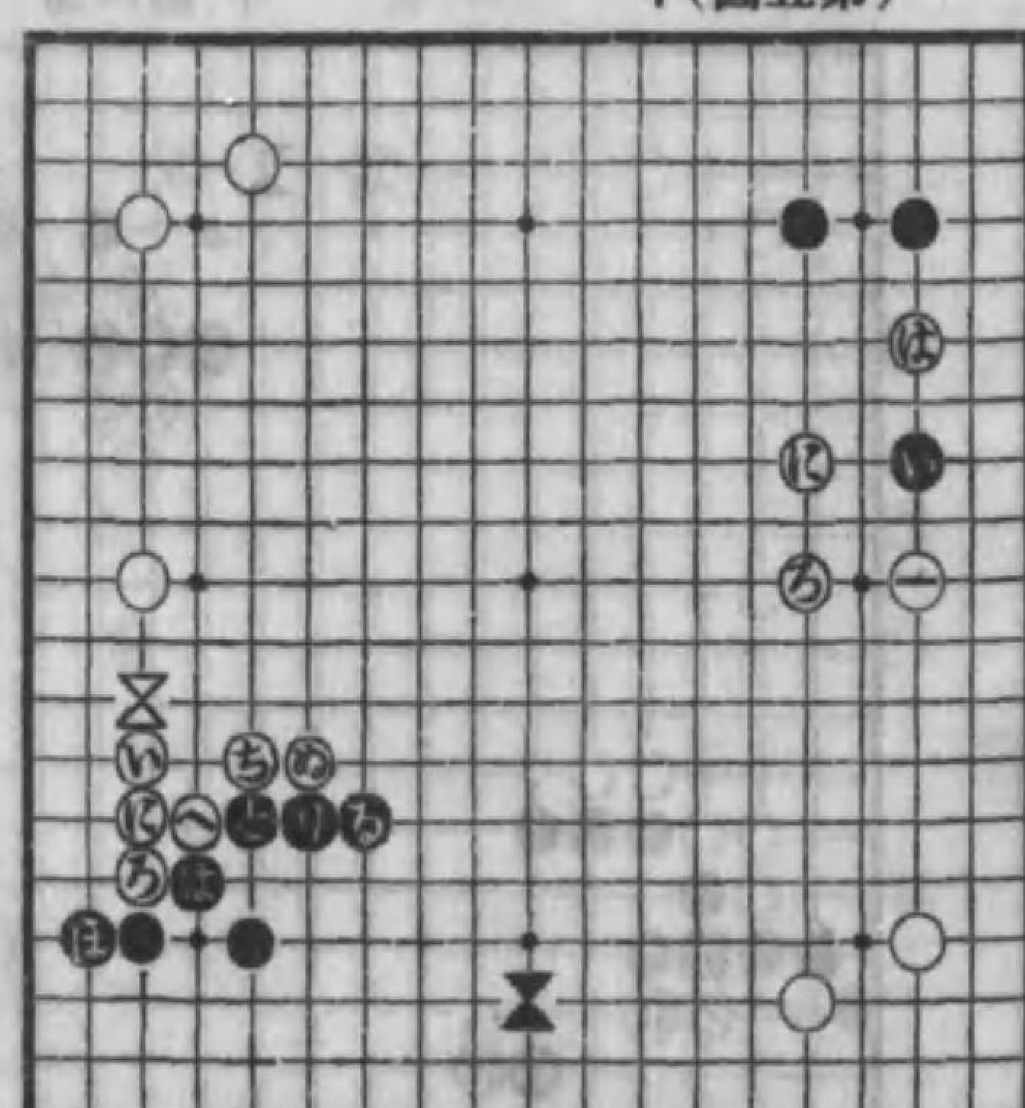
●第五則（第五圖）

▲敵、味方の要衝　圖の如き黒白兩軍の陣形に於ては星下は即ち敵味方共に第一に占據すべき要衝の地なりとす第一圖の反對に白(一)と星下へ開きたりとせよ此時黒もし應戰を利なりとすれば(い)へ受くるより善きはなく白亦(ろ)に應ずるを可とす扨て星下は同じ要地とは云ふものゝ第一圖の場合と其意味に於て多少の差異ありと云ふは他に非ず黒は高締り三間開きの構えなるがゆへ白タトヒ(ろ)へ開くも當分(は)にうちこむ手段なきを以て尙は此場をうつの必要ありとすれば(に)へ曲るの外なからん尙は口傳あり乙圖に說明せん

▲白軍、乾城攻擊の作戰（乙圖）

黒もし⧖印に應ぜずして他をうちたりとせん乾城に對する白の作戰何如にと云ふに黒は即ち高構えなるが故に第一圖の如く三間に開くは不可にして一路控えて(い)へ開くを通法とす但し白なほ一歩進みて劇しく(ろ)へ肉薄する手段なきに非ず然るときは黒(は)へふくれ白(に)へ引き黒(ほ)へ下り白(へ)へ曲り黒(と)にはね白又(ち)へはね黒(り)へのび白(ぬ)に押し黒(る)へのびる手順となるべし斯くては黒の城寨は恰も鐵柵を植えたる如く濠深く壘高き堅固の構えと爲るに非ずや成算あるに非ずしてヤタラに(ろ)へ猪突するは寧ろ無謀と謂はざるを得ず況して⧗印邊に黒の配備あり尨大なる領域を確保せらるる如き戰局に於ては更に不可なり尙ほ注意すべきことあり次圖に就て會得せよ

（第五圖）甲



（乙圖）

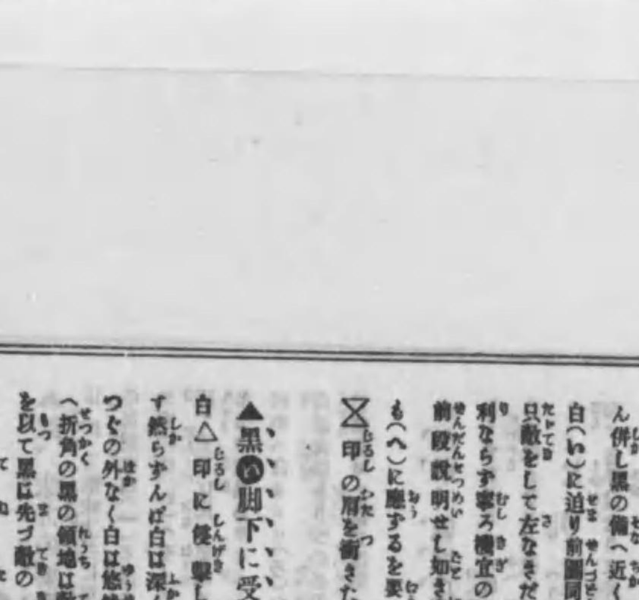
●第六則（第六圖）（甲圖）

▲敵に因り自ら變化あり　※印邊に進く黒の捨たるとき白(い)（突貫するの不可なるは前圖に於て既に了解せしならん併し黒の備へ近く▼印に在りて敵陣自ら堅固なるときは白(い)に迫り前圖同樣白(り)黒(ぬ)までの交換を爲すも、これは只敵をして左なきだに堅き固めを堅くせしむる法にて其割合不利ならず寧ろ機宜の策と謂つべきなり　▲黒にも亦策あり前段說明せし如き意味あるを以て白(ほ)へ曲りしとき黒必ずも(へ)に應ずるを要せず手を拔きて他をうつも可なり而して白⊠印の肩を衝きたるとき黒▲印へこすむを通則とすべし

（乙圖）

▲黒(ろ)脚下に受くるの趣向　黒白共に本圖の如く運びて白△印に後擊し來りしときは黒その脚下に一兵を下すを法とす然らずんば白は深く壓迫を蒙して(ろ)の處を衝かん　黒は(は)をつぐの外なく白は悠然(に)へ引きて△印との聯絡を保つに引換へ折角の黒の領地は敵の爲に蹂躙さるべきなり、それ此缺陷あるを以て黒は先づ敵の脚下(い)に一兵を派し彼れ若し(は)に抑へれば黒手を拔きて他の大場をうつの手段肝要なり

（第六圖）甲

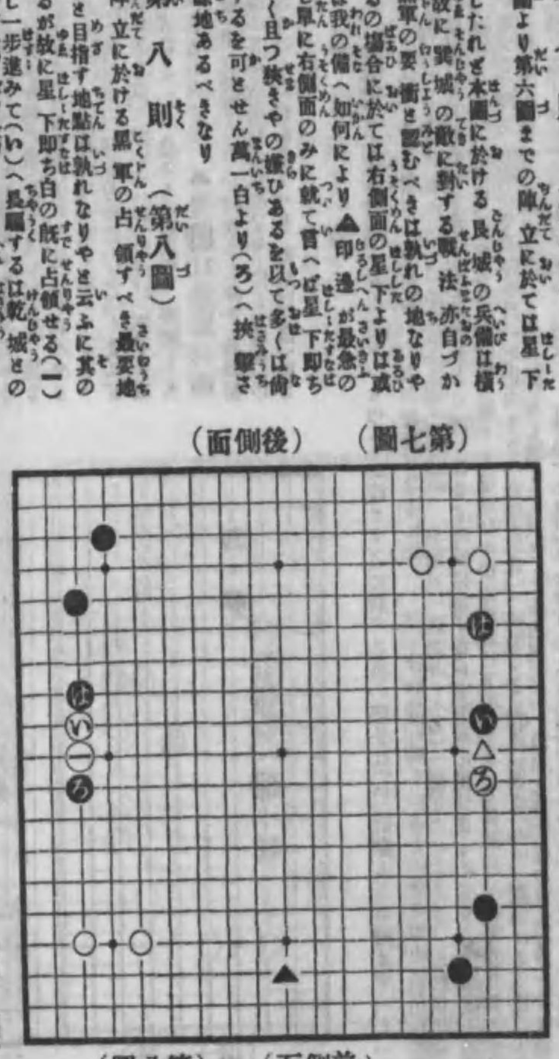


（乙圖）

●第七則（第七圖）

▲黒軍の要地　第一圖より第六圖までの陣立に於ては星下即ち△印を最要地としたれど本圖に於ける長城の兵備は横陣ならずして縱陣なるが故に敵に對する戰法亦自づから異ならざるを得ず扨て黒軍の要衝と認むべきは孰れの地なりやと云ふに其備へ縱陣なるの場合に於ては右側面の星下よりは或は乾城方面の弱れ若くは我の備へ如何により▲印邊が最急の場所となるやも知れず併し早に右側面のみに就て言へば星下即ち△印へ據るは其形細く且つ狹きやの憾ひあるを以て多くは尚ほ一路進みて(い)へ進軍するを可とせん萬一白より(ろ)へ挾擊さるるとも黒は(は)に展開の餘地あるべきなり

（第七圖）



（第八圖）

●第八則（第八圖）

▲白軍の要地　本陣立に於ける黒軍の占領すべき最要地は既に說きたり白の要地と目指す地點は孰れなりやと云ふに其の陣形は黒と異なり橫陣なるが故に星下即ち白の既に占領せる(一)の巷を以て最要處とすべし一步進みて(い)へ長驅するは乾城との距離遠きに過ぎて釣合ひ悪さ其一方に敵より(ろ)邊へ挾擊ちされたる其時に敵の據れる坤城方面に展開の餘地僅に一間を存するに過ぎざるを以て尊常の碁にては不可なりと心得然るべし

▲單縱陣の戰列　本圖の如き形にては黒に於ては白の(一)に對し拮抗すべき眞處なしと謂うて可なり或は(は)（詰める手なき）に非ざれども全局新地の大場を爭ふ最初の地取としては極めて狹小の縄張なるべし何さなれば●ノ●—(は)斯の如く直線的縱陣を作るは其占領せる地縄狹くして位低く兵家の據ふ所なればなり

●第九則（第九圖）（甲圖）

▲黒白互角の形勢　本圖に於ける黒の進軍地は（い）（ろ）（は）の三點ありとす作戰計畫の模樣に因り三地孰れかを撰ぶなり就中（い）へうつの意味は已れを衛り且つ領地を擴げると同時に敵の侵略を豫防するの手段に出でしものにて之に對し白（は）へうちたりとせば此側面に於ける黒白の地取は凡そ互角の形勢に在らん勢ひ均きものは以て戰ひを挑み難し黒は宜し〳〵手を拔きて他の好處に先鞭を着〳〵すべきなり換言すれば黒、他に好處ありと認めしときは先づ黒（い）と白（は）の交換を試み然る後に轉ずるを利とす　黒もし（い）をうつとせんか白は勿論（は）へうたず孰れ（ろ）へ侵掠を試み來るや也知る可らず▲黒㋑の得失　黒軍更に一路を進めて（ろ）へ陣したりとせん一路進みたる丈け地の利を占め得たる如く〳〵なれど夫れ丈け味方との聯路隔たれるを以て假に白（に）に受け黒手を拔きたりとせよ距離の遠き丈け夫れ丈け白のうちこみも亦廣く其勢力範圍を荒さるゝの恐れあるに非ずや▲黒㋺は進軍の極地　尚ほ一步進みて黒（は）地（展開する手段なきに非ず此地點は黒軍開展の極地にして是より先に進むは危險なり但し黒（は）の極地まで進みたりとして此地域の繩張を爲すべき要地は（ほ）にして又斯〳〵うつを通形と心得べきなり

（乙圖）

白の側より言（ば圖の如く星下へうつを定法とす之に對する黒の應手は（い）に應ふるを法とすべし一見小なるが如く〳〵なれど●／●―●此形とは異なり其基形●―●の高締りなるに加へて低く〳〵けいまに締りたるものなるが故に其固め堅實にして侵し難さの陣形と謂つべきなり▲白㋩は攻守中庸の位置　白側は一路進みて（ろ）へ據ることもあり、これは乾城の助備かた〳〵の展開と地域攻撃の中間に位する陣取方にて是れより進むは全く〳〵地域に對する攻撃手段に出づるものとす▲黒軍攻守の機變　扨て白（ろ）へうちたりとして黒（は）に締るは如何にも狹く大塲爭ひの時機に於ける受手としては黒の不利なるや固より論を待たず守るは不利なれば饒つて（に）へ挾撃ちする抔亦た一と捗向ならん此時白（ほ）へ挾撃するか（は）或は（へ）へ攻掛ける三樣の手段あり其孰れを撰ぶかは全局の模樣に因るべし▲注意　こゝに注意し置くは白（ろ）にうち黒（に）へうちこみたるとき白もし手を拔かんには其時こそ最に狹さに過ぐると救めたる（は）へ挾みて然るべし是れ一には已れを守り二には（ろ）の白を攻むる手段にして前のとは白から場合を異にすればなり

（第九圖）

（乙圖）

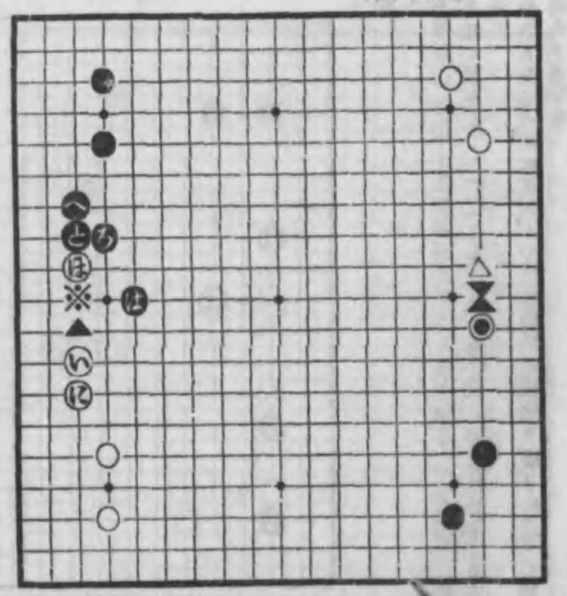
第十則（第十圖）

▲ハンマの陣取　本圖の如く黒白共に總陣の備に於ては敵も味方も先づ▼印を占領するを通則とす或は黒は△印に、白は◉印に進む場合なきにしも非ず其時白◉印に、黒は△印にうちこすみたりとせんか黒は對城方面に二間開きするの餘地なく白亦長城方面へ一間の外展開の餘地なかるべく即ち黒白共にハンマのうちこみとなるが如く最初星角を占めたる黒も又白も敵のうちこみに因りて二間展開の途なく是れ又ハンマの陣取となるが故に就中先着の黒に於ては先づ一路控えて星下の▼印を押ぶを可とすべし

第十一則（第十一圖）

▲星下交地の得失　本圖は前圖同樣黒白共に同形なるを以て攻守の方法亦一なりとす斯る陣立に於ても亦星下即ち※印を要地として押むものあれども假に黒、星下にうちたりとせよ白（い）へ詰めなば如何、白城の締り好きことは既に說明せる如くなるに非ずや幸に白のうちこみを見れたりとして本城との距離遠く〳〵してうちこみの餘地を存せるに非ず黒の方は本城との距離遠く〳〵してうちこみの餘地を存せるに非ず白のうちこみを見れたりとして本城との聯絡を保ちて領域の締りを爲さんには（ろ）へ一幅を植ふる位のものならん其形四手掛けとしては少し〳〵狹きに過ぎず左りとて（は）へ一間に飛べば其格好は立派なれど其地域確實ならず、とは云ふものゝ※印の占領或は（ろ）の締り乃至（は）の飛は必ずしも不可なりと云ふに非ず孰れも全局の模樣により善くもなり惡くもなることあれど此側面のみに就て言へば前陣の不利あるを免れざるなり▲白機先の戰法　黒更に一路進みて▲印（うつ）とせん白（に）へ受けざるは勿論なるべく左りとて（ほ）へ挾撃すればそれこそ黒より（へ）に挾み返されて第九圖の乙圖に於て注意を與へたる如く敵に締り且つ攻むるの好機會を捉へらるゝが故に白は更に猛進して（へ）に掛り機先を制するに如かざるべし▲黒㋭の戰略＝白の苦心　黒は※印又は▲印へうたずして（い）又（に）へ掛るも一策なれども單に（と）へ大けいまに締るも亦妙なり其意味は白もし手を拔けば突進して（に）へ掛らん趣向なり是れ先づ備へて然る後攻むるの謂ひか此時の白の受手は※印へうつは前に言ふ如く不利なれば一路控えて▲印へ守るとしても其締り卿か不確實なるの嫌ひあり左りとて更に一路（い）に控ふれば敵と同形に締り其不利なるや言を待たず豈に然るのみならず白は※印へうつとして敵の戰略に操縱さるゝも面惜し要するに眞面目に受くれば殆ど敵と同形になりて手を拔かれんいつそ棄置かんか（に）へ攻掛けらるゝの恐れあり已みなん〳〵斯くなりては最早や此側面は碁盤否な爭地なきに等しく是に於てか知る黒（と）は戰地に處して敵を待つの眞手段なるを▲黒（ど）の締り　黒（と）より尚ほ一步進みて（ほ）へ構え手段なきに非ず若し然れば白は手を拔くか▲へ應ずれば黒白同形となり互にうちこみの體あらん故に黒若しうつとすれば（と）に締るの優れるに若かざるべし

（第十圖）



（第十一圖）

●第十二則　（第十二圖）（甲圖）

▲黒(ハ)と白(ろ)　此圖形に於ける黒の打塲は勿論(い)印なり之に對し白の受手は是迄とは違ひ本城の　構え大けいまなるが故に一路控えて二間に(ろ)へ開くを通則とす是れ自己の領地を護るも同時に敵に當るの手段なり尤も角は一路進みて(は)へ　うつ手段なきに非ず斯くては彼れ一塵(に)へ飛び然る後機を見て　(ほ)へ侵入し來るなるべく隅の綿りの規模廣き丈け自づから塵手に　苦まさるを得ず(ろ)へ控えてうつを上策とすべし▲黒の逆襲手段　白(ろ)へうつ手にて(は)へ詰めたるとき黒(に)へ　飛ばずして直に(ほ)へうちとむこともあらん其手段は白もし之を攻に　せんとすれば敵に逆はず輕く(ほ)の一子を棄て(へ)に逆襲して　隅と振替はらん趣向なり斯る趣向もあるがゆへに白は縱に(ろ)に　控へ然るべし斯くても黒は先づ(に)へ　飛ぶ位のものならん▲黒打込を狙へ　黒(い)へうちたるとき白もし(ろ)の塵手を拔かんには　機を見て(ほ)に攻寄せて隅の　うちこみを　狙ふべきなり　▲黒(と)は惡手　黒(い)へうつべき手にて(と)にうつものなきにしも非ず　是れ惡手なり其次第は斯くては白の將さに占めんとする　(ろ)の地點はより善き塲所と爲るに反し黒は餘り敵に近寄り過ぎるのみか本城との　距離遠く後顧の患へ少なからざればなり縱し黒(い)へ　うちたりとしても白(は)に詰寄せるの不利なるは前述の如くなるを以て　(ろ)に控える方敵の堅壘に迫らざる丈け有利なるに非ずや

（乙　圖）

▲白(一)の得失　白の側より言ふも(一)はやはり要處にして之に對し黒は(い)に受くるを通法とす尤も星下即ち(一)の地點は乾隅の白の構えの廣き丈け白に取ては敵の惡る隅最急の塲所には非ざるべく却て黒をして(一)へうたしめて白(ろ)に塵を已れを守る方得策ならん併し其得失は實戰に臨み全局の模樣と趣向により決すべきものとす

▲白の覺悟　圖の如く白(一)黒(い)となりては白は先づ(は)に飛ぶ位のものなるべけれど斯くては其縱強區域餘り廣きに過ぎて黒より(に)へうちとまれて後顧は(は)へ強壘の障あることは隱て覺悟せざる可らざるなり

（第二十圖）

（甲圖）

（乙圖）

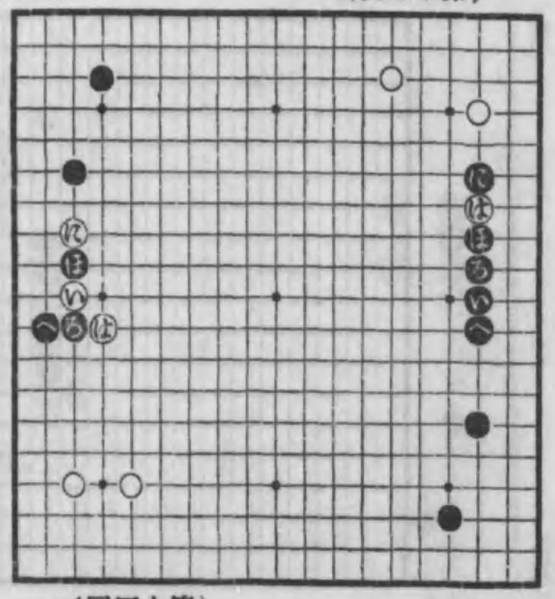
●第十三則　（第十三圖）

▲最急の塲所は孰れか　本圖の如き形にては黒白共に最急の打塲なりと云ふて可なり黒の側より言へば此塲合(い)の星下を押ふは其割合甚だ損なりと云ふは本城の構えは大げい圖ひの縱陣にして其地取り餘りに細長ければなり左りとて(ろ)に開かんか(い)より優ならん、なれども敵に(は)の好處へ　締るの機會を與ふるが故に是れ又眞き手とは云ひ難し斯の如き　黒白開綿りの隅地にては孰れか打塲に困らざるはなけれど　一局の　樞衡上是非打たねばならぬ場合には敵城近く黒(に)へ攻寄せるか、むしろハンマに(ほ)へうつ趣向なきに非ず併し此　手段は常に應用されては困るなり▲白の打塲　白の側より言へば星下即ち(い)　印は決して要處に非ず何となれば敵　城に向つて　展開の餘地なければなり故に若し此塲をうつの必要ありとすれば(ろ)へうつ外なかるべく其時黒(へ)に詰めるは既に說明せし如く　比較的細小の手なるを以てむしろ手を拔くの外なかるべし

●第十四則　（第十四圖）

▲白(は)の利害　本圖に於ける黒の最好地點は(ろ)より善きはなし然らば白の打塲は如何にと云ふに星下　即ち(い)へうつの不可なるは前段既に說明せし如く一路控えて(ろ)へうつを通則とすれども塲合に因り一段高く(は)の丘地を占めて中　原經營の素地を作すことなきに非ず然るに黒もし手を拔き白、機を見て(に)に詰めたりとせよ白(ろ)に在りて其陣形(に)――(ろ)の直　線的と爲るより(は)(に)――(は)の斜陣と爲る方如何に　位、高きかを知るに足らん併し黒の側より言へば敵、(ろ)に在りとして(は)へ　詰めるは割合甚だ損なれども白(は)の高地に據れる其塲合は所謂　鮮明にして恰も開門を明放したる如き　防備の狀　態に在るを以て常は不可なりと　雖も攻めたる(は)へうつも後に(へ)へ　侵入する手段ありて惡手　却て　眞手と變ずるの利なきに非ず然るに白、殊更に(は)の高地に據れる其深意如何次圖に於て說明すべし

（第十三圖）

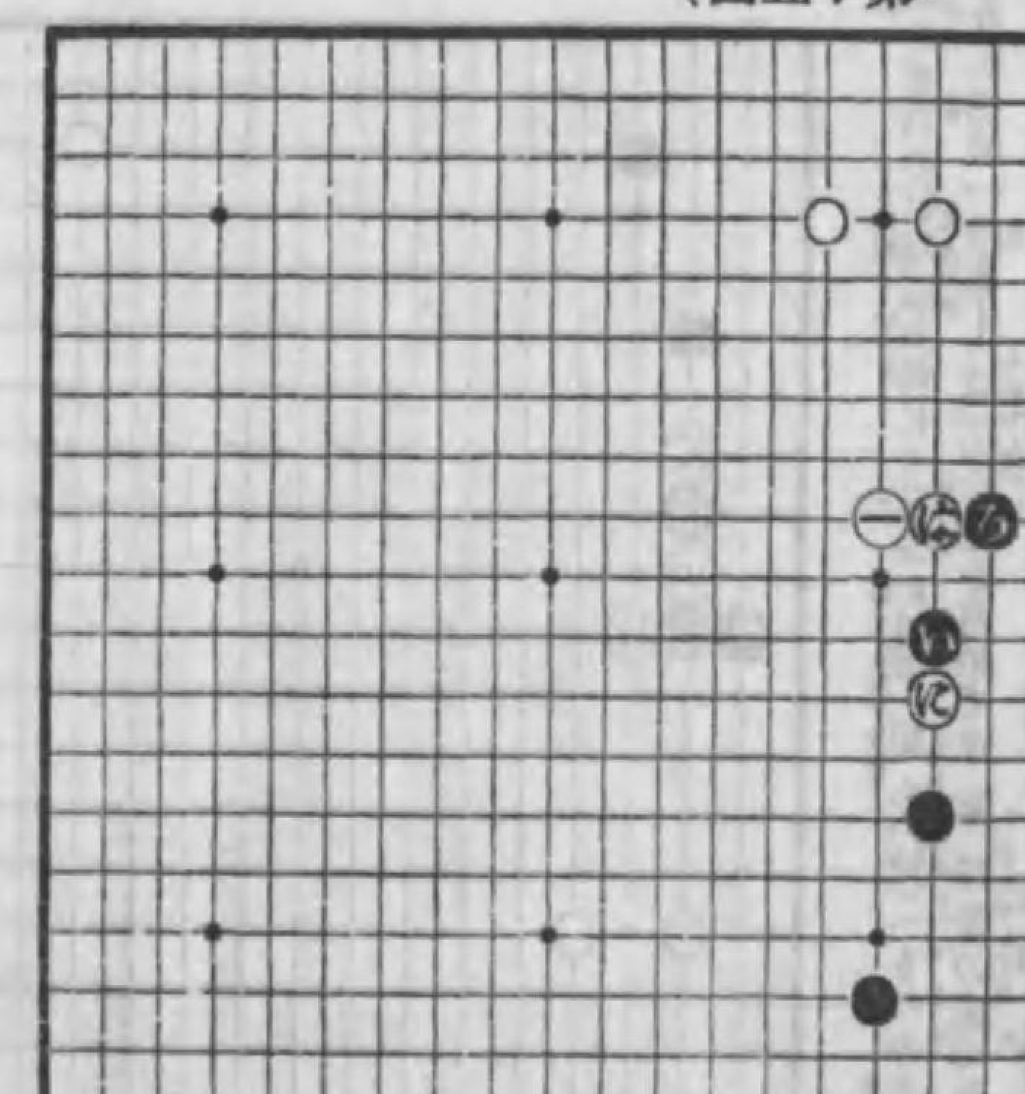


（第十四圖）

●第十五則　（第十五圖）

▲口傳白（一）の深謀　前段に於て説明せし如く白もし（一）の高地を占むれば則ち黒は（ろ）へ侵入の意味を含みて（い）へ進撃し来る手段あるを知りながら白は何故（一）の高地を占めたりやと云ふに抑も深意の存するありて然るなり深意とは何ぞや、乞ふ徐に聞け、白假に（は）へうちたりとして黒（い）へ受けるよりは他に幾分有利の場所ありとせよ黒は無論（い）を棄て其の有利なる場所に先鞭を着くるならん是れぞ白の苦心の存する所、左りとて自己が機先を制して其の處を占領すれば黒が（は）の地を侵略するは必定、是れ白の倘更ら忍ぶ能はざる所なり事、コゝに至りては多少の損は是非なし敵に啗はすに利を以てするに若かずとて扨こそ（ろ）の利を犠牲に供して敢然（一）の高地に據れる次第にて幸に其計略、圖に中りて敵の（い）の地に誑され来るあらんか手を抜きて他の有利なる場所を占領し若し敵、我計に乗らずして他を占領すれば（に）へ詰めて規模大なる領地割取の計を爲し兼ねて中原展發の素地を作らんとの深謀より斯くは高壓手段を取れる所以を知るべきなり

（第十五圖）



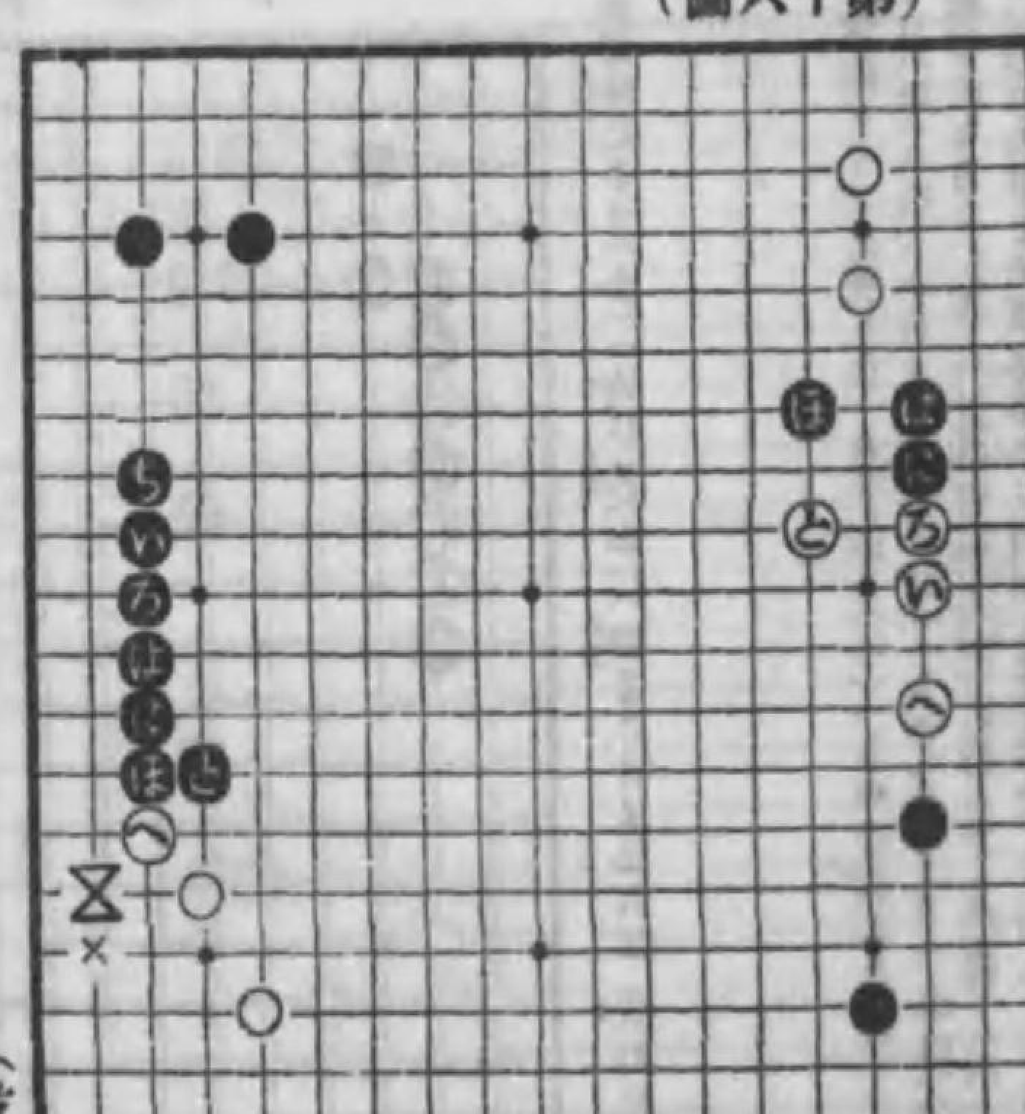
●第十六則　（第十六圖）

▲黒白の打場　本圖の如き陣立に於ては白（い）へうつは不可なり一路控えて（ろ）にうつを通法とす之に反し黒は大けいま締りの縦陣なるを以て（い）若くは（ろ）に開くは狹し進で（は）へ掛るを可とす或は一路控へて（に）へ掛ることもあり扨て黒（は）へ掛りたりとして（ろ）に敵の挾撃する所と爲りたる其時は黒（ほ）に飛出し白は（へ）へ開くか（と）に飛ぶ位のものならん斯く爲れば其釣合ひ略ぼ互角の形勢に在れど一局の模様により釣合ひ妙ならずと思ふ其時に一路控えて（に）にうつことゝ心得べし

●第十七則　（第十七圖）

▲黒の最要地二點　本圖に於ける黒の打場は敵城一段の高地に在るが故に（い）より（ほ）に至る五ケ處と直に⧖印へ打込む手筋ありとす就中黒の好地點は（い）（ろ）の二地にて（い）にうてば白は（に）へ受ける位のものならん或は白（は）に詰める手段なきに非ざれども斯くては黒より（ほ）又は⧖印へ打込るゝ虞あり扨又黒一路進みて（ろ）へ来れば白は無論（に）へ締る外なかるべく黒又一歩近く（は）に寄せ来らば白は之を邀へずして其裏へ廻りて（い）に挾撃するも一策なり更に黒一歩を進めて（に）へ進撃し来らんか白は之を（ろ）に挾撃するか或は堅く（へ）を守る外なかるべし若し又黒敵城間近く（ほ）へ攻寄せれば白（は）へ挾撃するか左もなくば（へ）へ一撃を與へて黒をして（と）に膽ぜしめ然る後（い）若くは（ろ）へ中斷の計に出づる趨向もあるべし▲白の要地　本圖に於ける白の要地はやはり（ろ）（い）の二地なり假に白（ろ）へうちたりとせよ黒は坤城の釣合よりすれば無論（ち）へうつを法とすれども敵城亦一段の高地に在て其構え廣きが故に△印へ打込む手筋あることを記臆せざる可らず打込の結果は如何に成行べきか請ふ次の圖を見よ

（第十六圖）

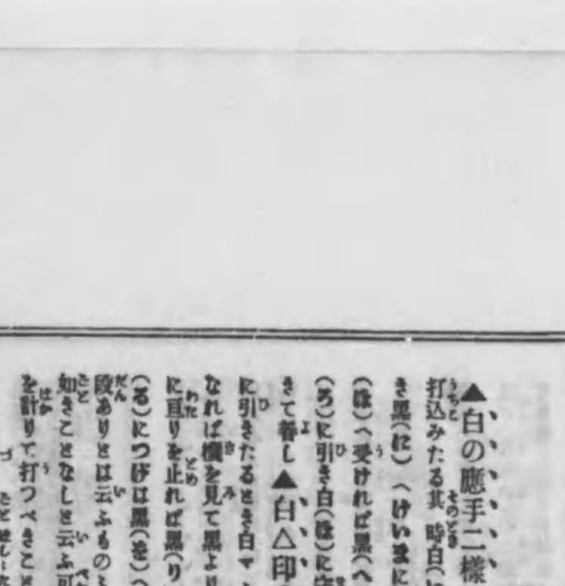


（第十七圖）

●第十七圖の續き

▲白の應手二樣　扨て黒星下に白の有無に拘はらず（一）と打込みたる其時白(い)へとすめば黒(ろ)へ押し白(は)へのびしき黒(に)へけいまに打てば活を爲るべく白又(い)へとすまずして(陸)へ受ければ黒(へ)にうちて可なり白又單に(と)へ衝當れば黒(ろ)に引き白(陸)に守り黒(へ)星下に白石なきときは×(印)に退きて善し▲白△印の押へは不可　白(と)へ衝當り黒(ろ)に引きたるとき白マ、△印に押へることあれど甚だ不可なり何となれば機を見て黒より(陸)へつけらるゝ統るればなり其時白(ち)に直りを止れば黒(り)につけ白(に)へはねこめば　黒(ぬ)に押へ白(る)につげは黒(を)へはねて活を爲るべし斯の如く隅に活きる手段ありとは云ふものゝ　夫れが爲め(一)(ろ)の一單を讓にせらるゝことなしと云ふ可らず故に　黒に於ても△のつけは能く〳〵機を計りて打つべきことにこそ▲白㋥の守りは肝要　前に戻りて白、圖の如く星下(うち黒▲印へ詰めたるとき白、本壘を固めんとせば時により(わ)へ飛び又(か)へ絡ることもあれど　夫れにても命は黒(一)へ打込みの味殘れるを以て堅く(い)を守るに若かざるべし

（第十七圖）の續き



●第十八則　（第十八圖）

▲㋥は要衝　本圖に於ては黒此側面を打たんとすれば(い)に締るを定則とす之に對し白、星下即ち(ろ)へうつの黒より(は)へ詰められて損なることは既に說明せり一路進みて(に)へうつか又は(は)若くは(陸)へ掛るを可とす　就中(に)へうつを可とせん▲黒の締りしときは(ち)白は(ろ)が要地となるべし是れ又(に)が最要處なるべし若し　黒最初高く(い)に締らずして低く(へ)(と)へ締ひて打たんとすれば共に(ち)にうつ位のものならん

（第十八圖）

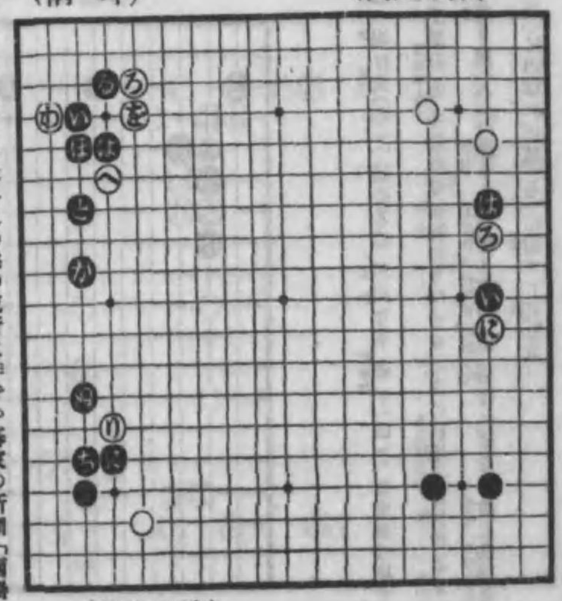
●第十九則　（第十九圖）

▲黒㋥の詰めは格好　本圖に於ける黒の好處は(い)にして之に對し白(ろ)に詰めるは　其割合ひ　損なり之に反し黒(い)にうち白手を抜きたるとき(は)へ詰めるは稍〻締好の着手ならん▲白の釣合　白は即ち高締りなるがゆゑ星下の(い)へうつは損にして一路進みて(に)に讓れば前後の釣合至極宜しかるべし

●第二十則　（第二十圖）

▲口必然の戰法と兩掛け　乾隅に圖の如き對陣ありとして黒は如何にして坤隅の擴張を爲すべきやと云ふに此場合黒低く、(い)に陣取るは大不可なり其次第は　兩隅共に黒の位置は同一の戰線に在りて　其位甚だ低きが故に白より(ろ)へ掛られしとき手を拔くこと能はず必ず一方(に)へとすむか(は)にとすまざるを得ず若し然らずして假に黒　其儘手を拔きたりとせんか(白)より(は)に掛けられ黒(陸)へのび白又(へ)へのび黒(と)に飛びしとき　白は轉じて(に)へ掛け黒(ち)にのび白又(り)へのび黒(ぬ)へ　飛びたる形を見よ兩軍共に同一の　低地を劃して得る所の地域極めて狹く且つ其形も亦甚だ働きなきに非ずや　故に白より(ろ)に掛られたるときは黒は必ず(は)(に)執れかにとすむを必然の戰法とす　換言すれば斯く掛れば黒は必然とすまざるを得ず敵に我が戰略を讓まると丈け黒の不利と爲るは是れ又必然の成行に非ずや兼家の所謂「兩掛け」の避けざる可らざる所以は即ち此理に基けるなり依て、黒法の如く(ろ)にうちたりとせよ而して白(陸)に掛りたるとき手を拔きて何の發支もなく或は又(に)へとすみて打つや否やは黒の意中に存することにて敵に其戰略を悟られぬ丈け利なるに非ずや▲ろは白の最要地　假に黒坤隅を棄て他をうちたりとして坤隅に於ける白の打擲は或は高く(を)にうつこともあれど(ろ)こそ喫緊の最要地なれ何故然るか黒、(い)へ掛るの手段なきは前段既に說明せる如しとすれば則ち白(ろ)の構えは黒の(い)の掛りを封じたる好着手と謂はん後、目はづし乃至高目も用ゐ方に因りては斯の如き利ありとす此場合黒は(は)に掛るの外なかるべく若し然らば白(い)、黒(陸)、白(わ)を守りしとき常ならば黒(か)へ三間開きするを常法とすれど此場合は然らず假に黒(か)に開きたりとせんか白は得たりとや(に)へ掛けん此時黒(ち)、白(り)、黒(ぬ)へ飛ぶ手順と爲るべく〳〵即ち黒は纏長き單騎陣と爲り位低く〳〵形薄りて敵の形と釣合はざる結果を生ずべし一隅に於ける定石も他の模樣に因り却て悪手と爲ることあり乾坤二隅の關係に於てをや兵法の事ばざる　所以は則ちコゝに在り扨(か)の定法も此側面の形勢に於ては定法たるを得ず手を拔くか然らずんば(に)へとすむ手段を揮ふ外なかるべきなり

（隅　坤）

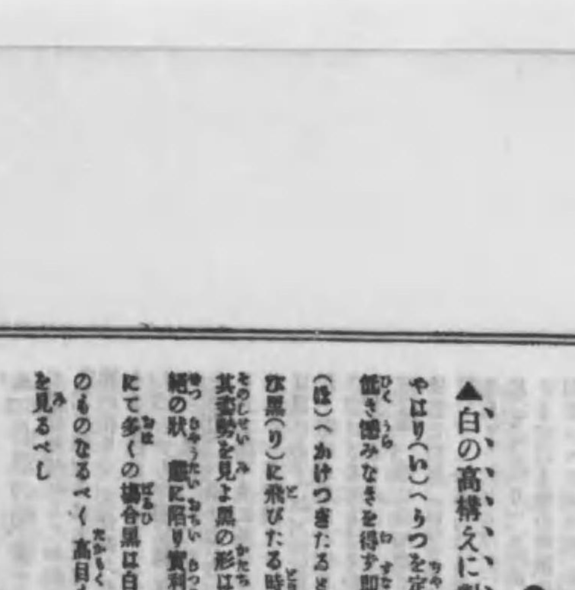


（第十九圖）

（第二十圖）

●第廿一則（第廿一圖）

▲白の高構えに對する戰法　長隅丈けに就て言へば黒はやはり(い)へうつを定法とすれど實際との釣合より言へば些か位低き憾みなきを得ず即ち白(ろ)へつけ黒(は)へはね白(に)へ引き黒(ほ)へおけつきたるとき白(へ)へおけ黒(と)にのび白又(ち)への黒(り)に飛びたる時白(ぬ)にかけ黒(る)白(を)となりたる其姿勢を見よ黒の形は隅隅ともに緩りて外部發展の路殆ど杜絶の狀態に陷り實利も亦少なきに非ずや布石上愼むべきことにて多くの場合黒は白の着手を待つて應向するか(へ)へこすむ位のものなるべく高目も用ひ方に因りて必ずしも不利ならざるの實を見るべし



（第二十一圖）（×××は境界）

●第廿二則（第廿二圖）

▲黒白兩軍の戰法　本圖の如き場合に於て白、常套に泥み(い)へ掛け又(ろ)へ詰めるは不可なり必ず(は)へとすみつけて隅を守る一方に敵を稼働に追出して前後より攻むるの策に出でざる可らず黒亦先手なれば如何にうつやと云ふに疑問の場合に於ける定法の如く(へ)へ開くは暴し何となれば星下の白は既に二間開きの備へと爲り黒(へ)へ開くも其勢き甚だ微弱なればなり故に此場合黒は(と)に斜走するを通則とす斯くて白(い)に掛ければ黒(ち)へ押し白(り)にのびれば黒(ろ)に詰めて可なり

（第二十二圖）　（長隅）

●第廿三則（第廿三圖）

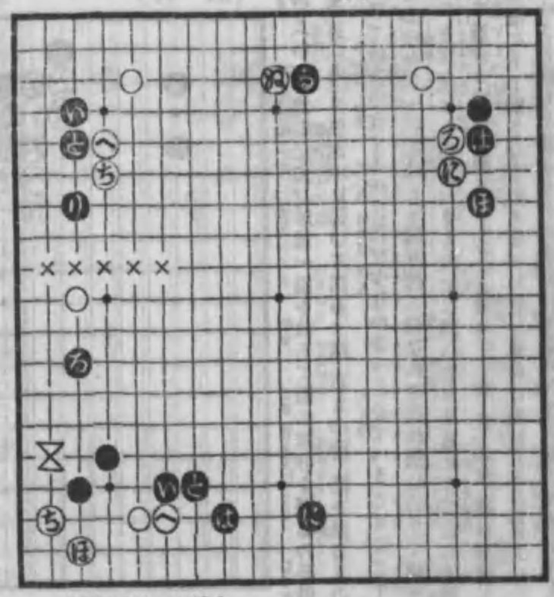
▲白(ぬ)は兩陣兼用の良手　本圖の場合に於ても黒(い)へ掛るは不可なり今その成行を示さんに黒もし(い)に掛らんか白先づ(ろ)へおけ黒(は)に押し白(に)へのびれば黒(ほ)へ飛ばん其時白又(へ)へかけ黒(と)に押し白(ち)へのび黒(り)に飛びたるとき白(ぬ)の要處を占領せば如何恰も白は(ぬ)の一子を以て双方に兼用したる姿と爲れるに反し黒は左右兩軍とも位低く不利の形勢に陷れるは低く(い)へ掛りたる巻りに外ならず故に黒は此場合手を抜くも一策なれども(へ)へ掛るか(る)へ三間挟みするを通則とすべきなり

●第廿四則（第廿四圖）

▲先づ(は)に挟みて而して後　星下に白の控えあるとき普通の如く黒(い)に掛るの理由なきことは既に說明せり棋にも因れず先づ此隅丈けにては黒(ろ)へうつ外なかるべきも單に(ろ)に詰めんよりは一應(は)に挟み白(い)へとすみ出でしとき黒(ろ)に詰める方少しく働きあらん併し如何なる場合に於ても斯く打つ方必ずしも有利なりと云ふに非ず定法としては黒(は)に挟み白(い)へとすみ出でしとき黒(に)に開くを通形とすれども併し白より(に)に挟撃されても左程の傷みなしと思ふ其時は(に)へ展開すべき手にて(ろ)に詰める方働きありと云ふに過ぎざるなり▲(ハ)其理由如何は必ずしも黒の註文通り(い)に出づると限れるに非ず局面の形勢により黒(い)に掛け白(へ)へ押し黒(と)にのびたるとき白(ち)へとすまん斯く爲りては則ち圍地に陷りて活を求むるの手段に出で直に(ほ)へ辷り何に黒(い)へ掛け白(へ)に押し黒(と)へのび白(ち)へとすむ手順とならん此時黒は所謂稼明にて後に白より⊠印へ飛ばるゝ「へり」の殘りあるにも拘はらず果して(ろ)へ詰めて幅挟き寸地を守るの勇氣ありや否や必ず縛して他の要地時取の計に出づるや必せり斯の如く詰むると單に(ろ)へ詰める手段の孰れが働きあるやを了解するに苦まざるべきなり

▲黒の凝形のお供　倘は黒(は)へ挟みたるとき白(い)へとすみ黒(ろ)へ詰めたりとせよ黒の●此とすみは即ち凝形なるがゆゑ先づ(は)へ挟み白をして○○斯の如く黒の凝形のお伴を爲さしめ然る後(ろ)へ詰めたる割合と爲るべく黒(は)へ挟まず單に(ろ)へ詰めて白に(は)へ開かれて黒窮り峙凝形と爲るよりは優なるべし

（第二十三圖）



（第二十四圖）

●第廿五則　（第廿五圖）

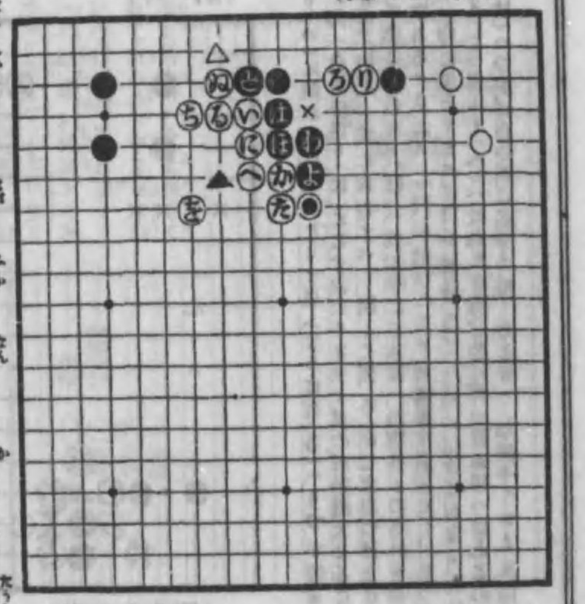
▲白、模様消しの手段　本圖の如き黒の模様を消さんとするには白は(い)の肩にうつより将きはなし之を常用の手段とす若し然らば黒(ろ)に受け白(は)へのび黒(に)へ煽り白(ほ)に飛ぶを通形とすべし時として白(ほ)へ飛ぶ手にて(へ)にうつことあるは必寛白、X印の挟間を狙ふに外ならず黒も其心して打つべきなり▲白㊤の打込は急　初心の者は時として餘り黒の地域が廣過ぎるからとて(と)抔に從ひ嗜を試みることなきに非ず甚だ不可なりと云ふ所以は黒軍は左右共に其守備整へるにも拘はらず深く敵地に切込みたる丈にて始終敵より追撃さるる掛念あるのみか左側坤城方面に益々領域を擴めらるる結果を生ずるに非ずや尤も星下の黒、右に二間の開きなく白(ち)に在るときは(と)へ挟撃する手段なきに非ず并は別として白如何に深入したりとて黒強ひて取らんと焦るは不可なり味方の兵を損せずに自己の地域を荒さぬやう徐ろに敵を追撃するこそ得策なれ敵を殺すは必ずしも戰ひの目的に非ざればなり扱て白の深入は無謀なりとして必ず北ぐるに忘る可らず　▲活石と活石の聯絡　白(い)の肩を覗ひたるとき黒(ろ)又(と)と無意味に匐つて活石と活石との聯絡を謀るものあれども賢なる仕方と云ふを得ず斯くては益々敵に堅壘を築かしむのみにて味方の益する所は甚だ少なかるべし心すべきことにこそ又黒(ろ)へ押す手にて(り)へ押し白(ぬ)へのびしとき黒(る)に控える人あるのみか一の定法とも爲り居る程なれば是れ敵に因りて變ずるの理を知らざるものなり星下の黒、右に二間の開きなくんば斯の如く打つを定法とし然るべきも右に二間の開きあるにも拘はらず黒時と同樣黒(り)に押し白(ぬ)へのび黒(る)に控えたる形を見よ黒は果して幾許の實益を贏ち得しぞ又黒(り)と白(ぬ)の交換は如何に白(ぬ)の働けるかを見るに足らん其理由は黒の甚城に對する二間開きは敵に挟撃に失し働きなき形となるか故なり尚ほ甚だしきは黒更に一本(を)に押し白(へ)へのびたるとき黒(る)に控える抔は以ての外の理に通ぜざる打方と謂ふべきなり尚ほ說あり次圖に就て說示すべし

（第二十五圖）　（隅　坤）

●第廿六則　（第廿六圖）

▲白㊤の肩打と㋑の打込　本圖隅角に於ける白の城塞は小けいま締りにして黒は三間開きなるが故に此側面丈けに就て云(ぱ(い)の肩打を用ひざるに非ざれど或は(ろ)へ打込む方可なるやも知れず併し白(い)に一騎斥候を放ちたりとして其應手如何を示さんに黒は此場合こそ三間開きなるを良て先づ(は)に押し白(に)へのび黒(ほ)に押し白又(へ)へのび黒(と)へ曲り白(ち)に飛ぶを手順とす斯くなれば我隅の白に對する釣合宜しかるべし▲黒㊤へ曲るの意味　前圖の如く黒△印に控えんには白に手を抜かるるの虞れあり故に斯く(と)へ曲りし次第にて白も亦手を抜かんか黒は劃しく(る)にはね上る手段あらん故に白は多くの場合(ち)に應ずるを通則とすべし黒又(ほ)へ押す手にて先づ(と)に曲り白(ち)へ飛びたるとき黒(は)へ押す手順もありとす▲注意　本圖の如き場合に黒手を抜く手段にて(と)へ曲るは可なれども右に三間の開きなく抔て白の控え(り)邊に在るとき黒(は)(ほ)と運び而して(と)へ曲るは不可なり何となれば斯くて黒もし當初の計畫通り手を抜かんか白より(ぬ)へ抑へられん斯くては黒の形甚だ重く且つ單陣と爲りて白より攻めらるる憂あるべし斯る時にこそ後手なれども△印へ控え打つを可とするなれ▲黒㊤の變化　黒(は)に曲り白(へ)へ飛び黒(ほ)へのび白(を)に守るを通法とす但し白に於ても亦策あり并は(へ)に飛ぶ手にて直に(ほ)に抑へる手段なきに非ずそれは勿論黒(に)を切るも「しちやう」にて取る場合に限るは言ふまでもなし斯くて黒(わ)にはね白(か)にのび黒(よ)に押し白倘は(た)にのびるを通形とす斯く爲れば黒の圖が一段低きのみならず×印の切目ある丈け黒城方面より著くは◉印に抑へ付て×印の切目を狙つと黒を攻る手段もあるべく且白の外廓は勿論黒より甚だに堅固なる外廓は益々堅なるべし故に黒に於ても斯なるの不利なることを悟んには(と)に押すして先(ば)より運ぶ手段肝要なるべし

（第二十六圖）

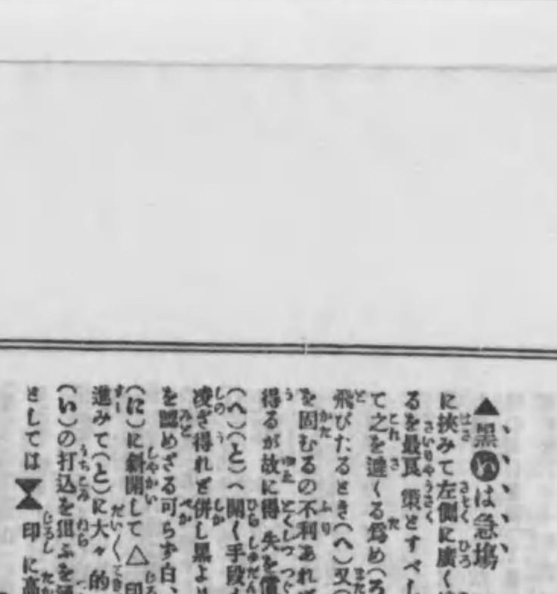


●第廿七則　（第廿七圖）

▲黒(い)は急場　本圖に於ては黒勿論坤城との釣合上(い)に挟みて左側に廣く地域を劃ずると同時に白を攻むる手段に出づるを最良策とすべし白に於ても(い)の挟みは至極の急場なるを以て之を遮ぐる爲め(ろ)に掛け黒(は)に押し白(に)へのびる黒(ほ)に飛びたるとき(へ)又(と)に展開するを一策とす斯くては巽隅の黒を固むるの不利あれども其償ひとして左側面の大場に縄張を作し得るが故に得失を償ふに足るべし白又(ろ)へ掛けずして早に(い)(へ)(と)へ開く手段もあり若し白(い)に開けば則ち黒の三間詰を喰めざる可らず白一路進みて(へ)に開かんには黒は手を抜くか(に)に斜開して△印の打込を狙ふ位のものなるべし白尚は一歩進みて(と)に大々的展開を試みなば黒は先づ(に)へ斜開しもって(い)の打込を狙ふを通則とす黒(に)へ斜開したるとき白の守りとしては▼印に高く圍ふを定法とすべし

（第廿七圖）

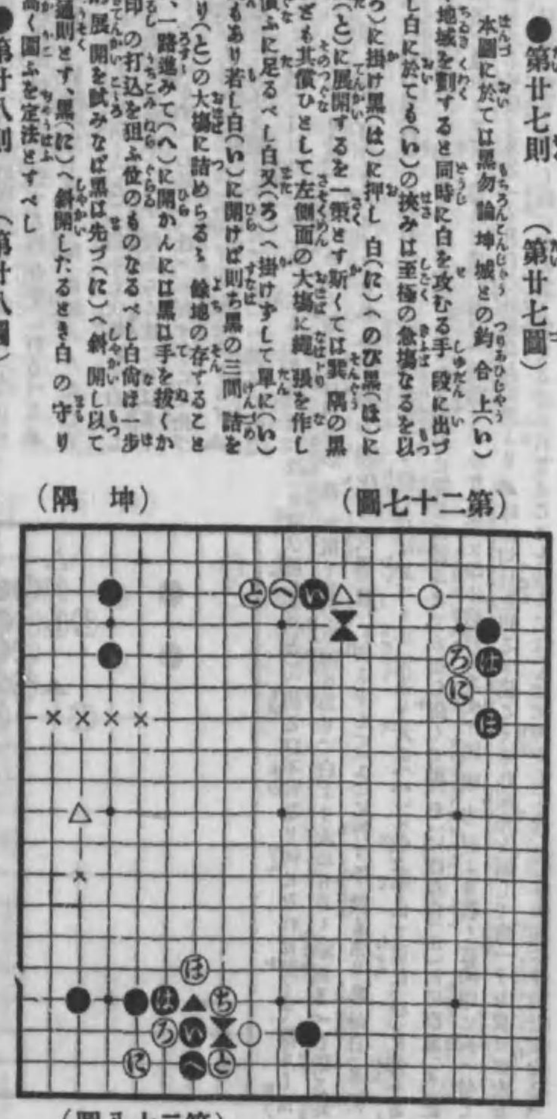
（坤　隅）



●第廿八則　（第廿八圖）

▲白(ほ)の飛びと▲印ののび　本圖の場合白もし手を抜き黒より(い)に詰められ不利なりと思ふときは白(ろ)へうつ手段あるべし併し△印邊に黒の控えあるときは考慮を要す其譯は斯くて黒(は)に抑へ白の位は甚だ低からずや故に白(は)に抑へられて不利なりと思ふときは(い)へ一間に攻寄すべし斯くて黒ろ)にとすみつけなば白(ほ)へ飛び已れを守ると同時に敵の領域を浸むるの戰略に出づるを可とす然るに白往々(ほ)へ飛ぶ手にて▲印へのびるものあれど極めて不可なり右一間に白石ある場合に斯くのびるは取も直さず▲印の のびると爲る形と爲るに非ずや俗手たる所以を知るに足るべく又假に△印に飛びたりとせよ黒(ほ)は劫爭ひの覺悟　扨て黒(ろ)へこすみつけ白(は)に抑へ黒▼印へ劫を取れば白は飽まで劫を爭ひ敢もし劫盡きて(は)へつがば白の石は最早や輕くなるゆへ　如何やうさも其損き方は心の儘なるべし

（第廿八圖）



●實戰機略

第三段　地軍爭篇

其一

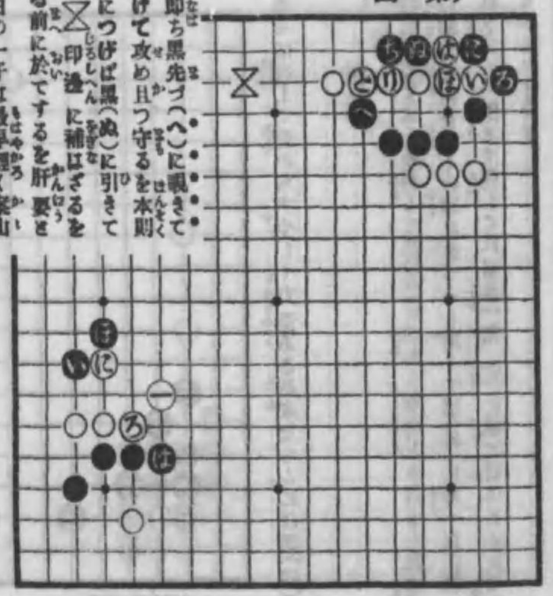
▲黒先づ探りを試みよ　本圖の如き場合にては黒は戰局の緩急を見計らひ其儘棄置くことあり其時白(い)へつけ黒(ろ)にはね白(は)へ凹み　黒(に)へあて白(ほ)のつぎとなるべく斯くては黒は眼形を失ふ故に黒としては成べくコヽに先輩を付くるの要あり即ち敵の動靜を窺ひ白(と)に應じたるとき黒側面へ轉廻し(ほ)にとすみつけとす白もし手を抜かば黒、機を見て(ち)に敵の虚を衝く手段あり白(り)に善し斯く爲りては白の形は重く其儘棄置き難きを以て白は勢ひ尚は一手得ざるべし▲黒(へ)に覗く機會　黒(へ)の覗は(ほ)へこすみつけるも知れず斯くては黒(へ)の覗きは強合抜けの形と爲るが故に(ほ)へこすみつけるを攻め後に(ち)の虚を狙ふ手段肝要なりと知るべきなり

（第一圖）

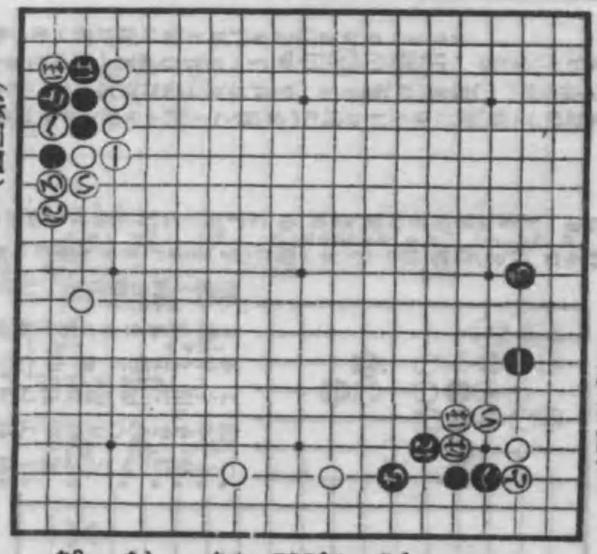
其二

▲黒(い)は急所　白(一)へうちたりとせよ其時黒(い)の急所に切りを狙ふを手筋とす斯くて白(ろ)に補ひたる序に黒(は)へのびる抑も兵を活用するものに非ずして何ぞや此石立を解剖すれば白(ろ)と黒(は)の交換は先づ互角なるべきも黒(い)と白(一)の交換の割合如何恰も黒(い)へうちたるとき白(一)へこすみたる姿にて孰れか働きあるやは一見明白なるべし▲白(ろ)の變化　白(ろ)に押す手にて愚手なれど若し(に)につげれば黒(ほ)へはねて善し外部の白の味最きゆへ急に隔の黒を攻むる手段なかるべきなり

（第二圖）



（圖四第）



（圖三第）

其の三

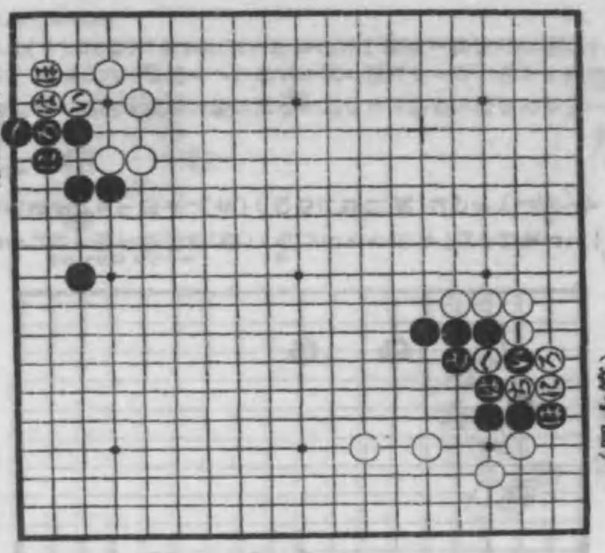
◀白①は非常手段　次圖の如きは白①は非常手段にして白(い)の切り白(ろ)に二段は勿論白(は)に打つも同じ白(に)に打つも同じ●●●●これは所謂非常手段にて中央を全部黒の勢力にまかす可き場合にのみ用ゐる手段なり

◀黒の非常手段　黒(い)と打つ白(ろ)と受けたる以上中央白(ろ)の二子は最早助からんと思ふ場合は黒(い)には名人といへども容易に切り得ず白(ろ)に打つ黒(は)に打つ白(に)に打つ黒(ほ)に打つ白(へ)に打つ黒(と)に打つ白(ち)に打つ黒(り)に打つ白(ぬ)に打つ黒(る)に打つ白(を)に打つ黒(わ)に打つ白(か)に打つ黒(よ)に打つ白(た)に打つ黒(れ)に打つ白(そ)に打つ黒(つ)に打つ白(ね)に打つ黒(な)に打つ白(ら)に打つ黒(む)に打つ白(う)に打つ黒(ゐ)に打つ白(の)に打つ黒(お)に打つ白(く)に打つ黒(や)に打つ白(ま)に打つ黒(け)に打つ白(ふ)に打つ黒(こ)に打つ白(え)に打つ黒(て)に打つ白(あ)に打つ黒(さ)に打つ白(き)に打つ黒(ゆ)に打つ白(め)に打つ黒(み)に打つ白(し)に打つ黒(ゑ)に打つ白(ひ)に打つ黒(も)に打つ白(せ)に打つ黒(す)に打つ白(ん)に打つ黒(京)に打つ白(大)に打つ黒(中)に打つ白(寸)に打つ黒(之)に打つ白(助)に打つ黒(投)に打つ白(了)

其の四

◀黒の動向を推し　其の圖の如き黒(い)を採りたるは白(ろ)に黒(は)と押し白(に)と引きたる時黒(ほ)に打つ白(へ)に黒(と)に打つ白(ち)に黒(り)に打つ白(ぬ)に黒(る)に打つ白(を)に黒(わ)に打つ白(か)に黒(よ)に打つ白(た)に黒(れ)に打つ白(そ)に黒(つ)に打つ白(ね)に黒(な)に打つ白(ら)に黒(む)に打つ白(う)に黒(ゐ)に打つ白(の)に黒(お)に打つ白(く)に黒(や)に打つ白(ま)に黒(け)に打つ白(ふ)に黒(こ)に打つ白(え)に黒(て)に打つ白(あ)に黒(さ)に打つ白(き)に黒(ゆ)に打つ白(め)に黒(み)に打つ白(し)に黒(ゑ)に打つ白(ひ)に黒(も)に打つ白(せ)に黒(す)に打つ白(ん)に黒(京)に打つ白(大)に黒(中)に打つ白(寸)に黒(之)に打つ白(助)に黒(投)に打つ白(了)

（圖五第）



（圖六第）

其の五　（第五圖）

◀白の巧妙　白(い)と打つ黒(ろ)に下ぶれば白手を抜いて(は)に打つも黒(ろ)に打つにも白(に)に打つも黒(ほ)に打つにも白(へ)に打つも黒(と)に打つにも白(ち)に打つも黒(り)に打つにも白(ぬ)に打つも黒(る)に打つにも白(を)に打つも黒(わ)に打つにも白(か)に打つも黒(よ)に打つにも白(た)に打つも黒(れ)に打つにも白(そ)に打つも黒(つ)に打つにも白(ね)に打つも黒(な)に打つにも白(ら)に打つも黒(む)に打つにも白(う)に打つも黒(ゐ)に打つにも白(の)に打つも黒(お)に打つにも白(く)に打つも黒(や)に打つにも白(ま)に打つも黒(け)に打つにも白(ふ)に打つも黒(こ)に打つにも白(え)に打つも黒(て)に打つにも白(あ)に打つも黒(さ)に打つにも白(き)に打つも黒(ゆ)に打つにも白(め)に打つも黒(み)に打つにも白(し)に打つも黒(ゑ)に打つにも白(ひ)に打つも黒(も)に打つにも白(せ)に打つも黒(す)に打つにも白(ん)に打つも黒(京)に打つにも白(大)に打つも黒(中)に打つにも白(寸)に打つも黒(之)に打つにも白(助)に打つも黒(投)に打つにも白(了)に打つも黒(い)に打つにも白(ろ)に打つも黒(は)に打つにも白(に)に打つも黒(ほ)に打つにも白(へ)に打つも黒(と)に打つにも白(ち)に打つも黒(り)に打つにも白(ぬ)に打つも黒(る)に打つにも白(を)に打つも黒(わ)に打つにも白(か)に打つも黒(よ)に打つにも白(た)に打つも黒(れ)に打つにも白(そ)に打つも黒(つ)に打つにも白(ね)に打つも黒(な)に打つにも白(ら)に打つも黒(む)に打つにも白(う)に打つも黒(ゐ)に打つにも白(の)に打つも黒(お)に打つにも白(く)に打つも黒(や)に打つにも白(ま)に打つも黒(け)に打つにも白(ふ)に打つも黒(こ)に打つにも白(え)に打つも黒(て)に打つにも白(あ)に打つも黒(さ)に打つにも白(き)に打つも黒(ゆ)に打つにも白(め)に打つも黒(み)に打つにも白(し)に打つも黒(ゑ)に打つにも白(ひ)に打つも黒(も)に打つにも白(せ)に打つも黒(す)に打つにも白(ん)に打つも黒(京)に打つにも白(大)に打つも黒(中)に打つにも白(寸)に打つも黒(之)に打つにも白(助)に打つも黒(投)に打つにも白(了)

其の六　（第六圖）

◀黒(い)は注文通り　白(ろ)と曲りたるは黒(は)と切りたるは白(に)と曲れば黒(ほ)と切り白(へ)と曲れば黒(と)と切り白(ち)と曲れば黒(り)と切り白(ぬ)と曲れば黒(る)と切り白(を)と曲れば黒(わ)と切り白(か)と曲れば黒(よ)と切り白(た)と曲れば黒(れ)と切り白(そ)と曲れば黒(つ)と切り白(ね)と曲れば黒(な)と切り白(ら)と曲れば黒(む)と切り白(う)と曲れば黒(ゐ)と切り白(の)と曲れば黒(お)と切り白(く)と曲れば黒(や)と切り白(ま)と曲れば黒(け)と切り白(ふ)と曲れば黒(こ)と切り白(え)と曲れば黒(て)と切り白(あ)と曲れば黒(さ)と切り白(き)と曲れば黒(ゆ)と切り白(め)と曲れば黒(み)と切り白(し)と曲れば黒(ゑ)と切り白(ひ)と曲れば黒(も)と切り白(せ)と曲れば黒(す)と切り白(ん)と曲れば黒(京)と切り白(大)と曲れば黒(中)と切り白(寸)と曲れば黒(之)と切り白(助)と曲れば黒(投)と切り白(了)と曲れば黒(い)と切り白(ろ)と曲れば黒(は)と切り白(に)と曲れば黒(ほ)と切り白(へ)と曲れば黒(と)と切り白(ち)と曲れば黒(り)と切り白(ぬ)と曲れば黒(る)と切り白(を)と曲れば黒(わ)と切り白(か)と曲れば黒(よ)と切り白(た)と曲れば黒(れ)と切り白(そ)と曲れば黒(つ)と切り白(ね)と曲れば黒(な)と切り白(ら)と曲れば黒(む)と切り白(う)と曲れば黒(ゐ)と切り白(の)と曲れば黒(お)と切り白(く)と曲れば黒(や)と切り白(ま)と曲れば黒(け)と切り白(ふ)と曲れば黒(こ)と切り白(え)と曲れば黒(て)と切り白(あ)と曲れば黒(さ)と切り白(き)と曲れば黒(ゆ)と切り白(め)と曲れば黒(み)と切り白(し)と曲れば黒(ゑ)と切り白(ひ)と曲れば黒(も)と切り白(せ)と曲れば黒(す)と切り白(ん)と曲れば黒(京)と切り白(大)と曲れば黒(中)と切り白(寸)と曲れば黒(之)と切り白(助)と曲れば黒(投)と切り白(了)と曲れば黒(い)と切り白(ろ)と曲れば黒(は)と切り白(に)と曲れば黒(ほ)と切り白(へ)と曲れば黒(と)と切り白(ち)と曲れば黒(り)と切り白(ぬ)と曲れば黒(る)と切り白(を)と曲れば黒(わ)と切り白(か)と曲れば黒(よ)と切り白(た)と曲れば黒(れ)と切り白(そ)と曲れば黒(つ)と切り白(ね)と曲れば黒(な)と切り白(ら)と曲れば黒(む)と切り白(う)と曲れば黒(ゐ)と切り白(の)と曲れば黒(お)と切り白(く)と曲れば黒(や)と切り白(ま)と曲れば黒(け)と切り白(ふ)と曲れば黒(こ)と切り白(え)と曲れば黒(て)と切り白(あ)と曲れば黒(さ)と切り白(き)と曲れば黒(ゆ)と切り白(め)と曲れば黒(み)と切り白(し)と曲れば黒(ゑ)と切り白(ひ)と曲れば黒(も)と切り白(せ)と曲れば黒(す)と切り白(ん)と曲れば黒(京)と切り白(大)と曲れば黒(中)と切り白(寸)と曲れば黒(之)と切り白(助)と曲れば黒(投)と切り白(了)と曲れば黒(い)と切り白(ろ)と曲れば黒(は)と切り白(に)と曲れば黒(ほ)と切り白(へ)と曲れば黒(と)と切り白(ち)と曲れば黒(り)と切り白(ぬ)と曲れば黒(る)と切り白(を)と曲れば黒(わ)と切り白(か)と曲れば黒(よ)と切り白(た)と曲れば黒(れ)と切り白(そ)と曲れば黒(つ)と切り白(ね)と曲れば黒(な)と切り白(ら)と曲れば黒(む)と切り白(う)と曲れば黒(ゐ)と切り白(の)と曲れば黒(お)と切り白(く)と曲れば黒(や)と切り白(ま)と曲れば黒(け)と切り白(ふ)と曲れば黒(こ)と切り白(え)と曲れば黒(て)と切り白(あ)と曲れば黒(さ)と切り白(き)と曲れば黒(ゆ)と切り白(め)と曲れば黒(み)と切り白(し)と曲れば黒(ゑ)と切り白(ひ)と曲れば黒(も)と切り白(せ)と曲れば黒(す)と切り白(ん)と曲れば黒(京)と切り白(大)と曲れば黒(中)と切り白(寸)と曲れば黒(之)と切り白(助)と曲れば黒(投)と切り白(了)と曲れば黒(い)と切り白(ろ)と曲れば黒(は)と切り白(に)と曲れば黒(ほ)と切り白(へ)と曲れば黒(と)と切り白(ち)と曲れば黒(り)と切り白(ぬ)と曲れば黒(る)と切り白(を)と曲れば黒(わ)と切り白(か)と曲れば黒(よ)と切り白(た)と曲れば黒(れ)と切り白(そ)と曲れば黒(つ)と切り白(ね)と曲れば黒(な)と切り白(ら)と曲れば黒(む)と切り白(う)と曲れば黒(ゐ)と切り白(の)と曲れば黒(お)と切り白(く)と曲れば黒(や)と切り白(ま)と曲れば黒(け)と切り白(ふ)と曲れば黒(こ)と切り白(え)と曲れば黒(て)と切り白(あ)と曲れば黒(さ)と切り白(き)と曲れば黒(ゆ)と切り白(め)と曲れば黒(み)と切り白(し)と曲れば黒(ゑ)と切り白(ひ)と曲れば黒(も)と切り白(せ)と曲れば黒(す)と切り白(ん)と曲れば黒(京)と切り白(大)と曲れば黒(中)と切り白(寸)と曲れば黒(之)と切り白(助)と曲れば黒(投)と切り白(了)

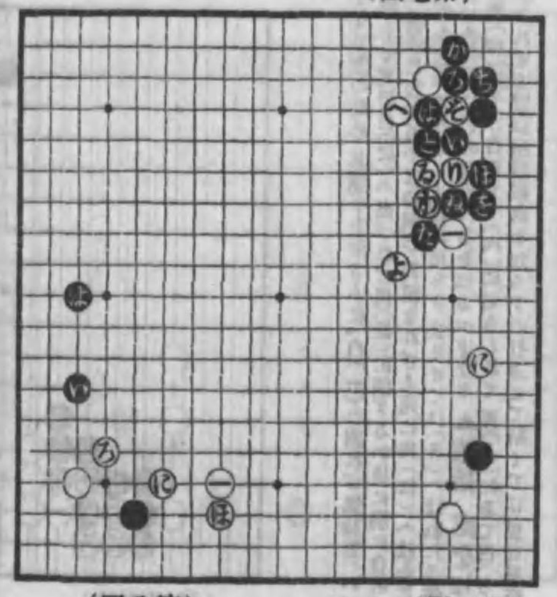
其七（第七圖）

▲白、高地占領の計　本圖の如く長方面に黒白の配置あるときは白往々(一)と一段の高地に據ることあり黒の受方は(い)(ろ)又(は)へつける三種の手段あり而して黒(い)へこすめば白は直に(に)へ挟まん態度なり又黒(ろ)へこすみつければ白(は)に立ち黒(は)に飛びしとき、やはり白は(に)へ挟み又黒(は)につければ白(へ)へはね黒(と)にのび白(ろ)へのび黒(ち)に抑へしとき白(に)へ挟み而して機を見て(ほ)へ詰めん意味を含めるなり▲白⑫の變化　扨又黒(ろ)につけ白(は)へ立ちしとき白(に)へ挟ますして(り)へつける態度なり若し然らば黒(い)へふくれ白(と)に抑へ黒(ぬ)へはねこみ白(る)へつぎ黒亦(を)につぎ白(わ)に抑へ黒(か)に下りしとき白(よ)に守る手順と爲るべし▲黒⑬の變化　黒(か)へ下る手にて(た)を切る手段なきに非ず、それは白もし(そ)へ割込めば黒(ち)へつぎ(い)の一子を棄てうつ態度なり▲白にも亦策あり　右の如く黒より(た)に切らるゝには白の不利とするが如き戰局の機様なる場合には白にも策なきに非ず即ち最初黒(は)へ飛びしとき白(り)へつけるを可とす黒もし(を)へのびれば白(ぬ)につぐべし斯くすれば(そ)へあてんには此場合黒は(ち)へつぐ外なかるべし然る後白(り)へつぎ課定計畫通り外壁を築き得て中原經略の素地を作し得べきなり

其八

▲白(一)は弱敵操縱手段　本圖の如く白(一)と高壓手段に出でしは全く弱敵を岐路に誘ひ巧みに操つらん戰略に外ならず若し然るときは黒は徐ろに(い)に挟み返ずを眞策とす斯くて白(ろ)へこすまんか黒(は)に二間開きして可なり何ぞ紛れなき形に非ずや而して白(に)へ掛けたりと假定せよ抑も(一)の在場は變ならずや斯る場合には白(一)は(ほ)に在りてこそ形なるに一段高く陣取れる爲にて其不締りは勿論敵を圍地に陷れながら一段活動の餘地を與へたるに等しかるべきなり

（第七圖）

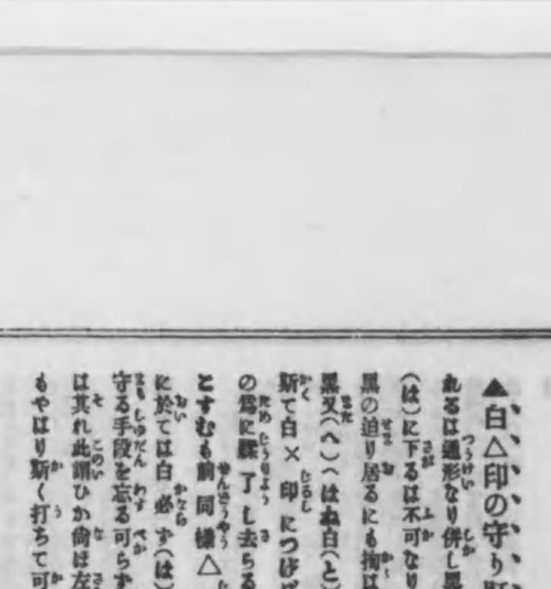


（第八圖）　（隅長）

其九（第九圖）

▲白△印の守り肝要　黒(一)とつけたるとき白(い)へふくれるは通形なり併し黒(ろ)へ引きしとき此場合白、尚は通法に從ひ(は)に下るは不可なり何となれば黒(に)へ曲りたるとき左側に黒の追り居るにも拘はらず通常の如く白(ほ)へはねたらんには黒又(へ)へはね白(と)にのびし時黒より△印へ喰かるゝ手ありて白×印につげば黒(ち)へ引て聯絡を保つべく即ち隅の地は敵の爲に蹂躙し去らるゝに非ずや白又(ほ)へはねる手にて(り)にとすむも前同樣△印の處を衝かるゝ處あるを以て斯る石立に於ては白必ず(は)へ下る手にて常套を脫して敢と△印に守る手段を忘る可らず兵法に所謂先づ勝つ可らざるの計を爲すとは其れ此謂ひか尚ほ左側の黒一路控えて大げいま掛りの場合にてもやはり斯く打ちて可なり

（第九圖）

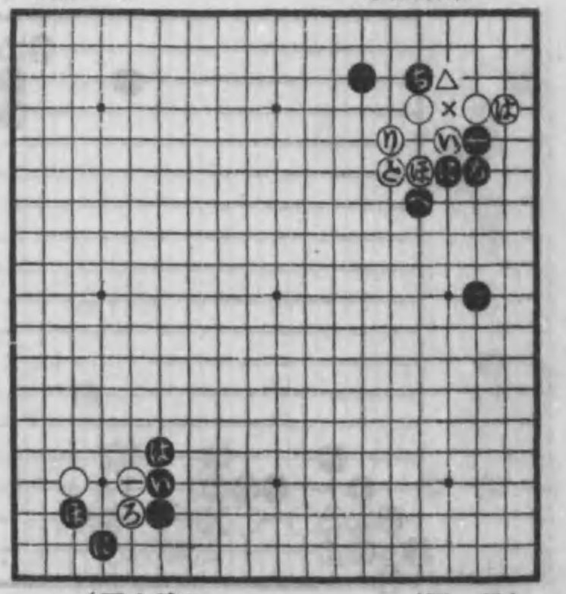


（隅坤）

其十（第十圖）

▲黒、邊隅隱居の計　圖の如く白(一)と肩(うちたるとき黒(い)へ押し白(ろ)に抑へ黒(は)へのび出すを通則とす併し戰局の機様により白に隅の實利を占められたる其上に尚ほ手を拔かれて右側前面より遣く黒(い)(は)の一軍を攻めらるゝの不利なるを知りたるときは早く自ら收まるの計に出で黒(い)へ抑へる手にて續く(に)へ上り込み白もし右側方面より攻寄せ來らば黒(ほ)へとすみつけ隅に隱居の體裁にして可なり併しながら左側坤隅方面若くは中部に白の模様あり白より(い)に抑へらるゝ手順と爲りて廣大なる領域を占めらるゝ擔念あるときは黒(に)へ上り込むは一考を要すべく或は(い)に立つを可とする場合もありなん

（第十圖）



（隅長）

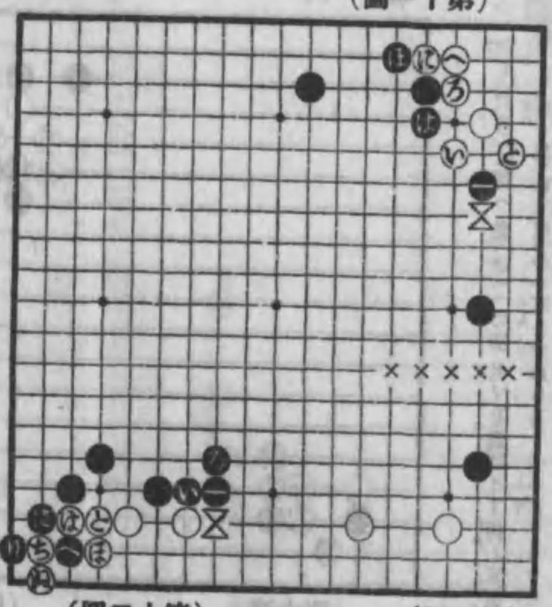
其十一　（第十一圖）

▲白の籠城策　本圖の如く敵軍大手、搦手の兩門に迫れるときは白(い)に血路を求めて兎に角中原(ぬ)へ脫け出で戰ふを普通とすれども併し本圖の如く局勢急にして普通こすみ拔の戰法に出づるの不可なるとき、換言すれば中原へ出づるも妙ならず却て籠城策を執る方敵に於て「あます」の氣味あらんと恐慮したるとき白(ろ)へこすみつけ黑(は)にのび白(に)（はね黑(は)に抑へ白(へ)へつぐを變法と心得然るべし又黑の(一)が一路拔えて⧖印に在るときとても中原へ出づるの效能著しからざらんにはやはり籠城策を執るべく且つ白(ろ)へこすみつけ黑(は)にのびしとき白(と)へこすむ趣向もあるべし

其十二　（第十二圖）

▲敵の裏を掻くの計　圖の如く長隅に白の二間開きある場合には取は黑(い)へ抑し又(ろ)にうつ手段もあれど斯く(一)と掛け敵の形を低く同一線路に重複せしめて左側中部に規模大なる割地の計を爲すを善しとす扨て黑(一)へ掛けたりとして白、此場合を輕く捌かん其手段は⧖印を缺ふのは敵の衝中に陷るものゆ（其裏を掻きて白(は)につけ黑(に)へ抑へ白(は)に凹み黑(へ)へあて白(と)につき黑亦(い)へつぎ白(ち)を切り黑(り)にはね白(ぬ)へ下るも一策なり是れも屬々實戰に於て見る所なり

（第十一圖）



（第二十圖）　（隅長）

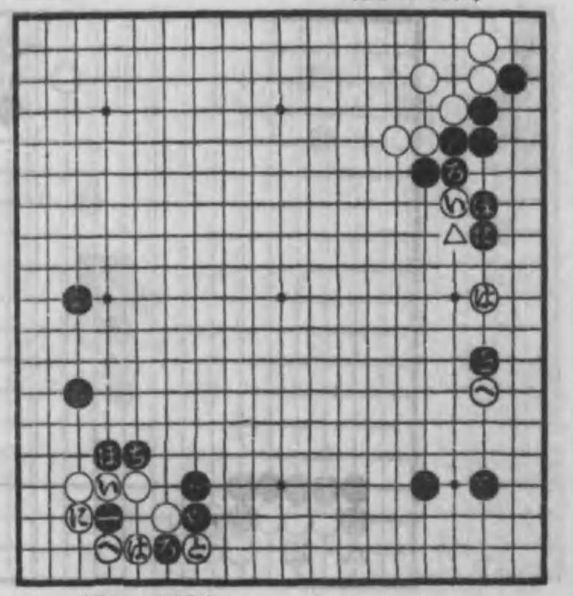
其十三　（第十三圖）

▲斥騎敵の動靜を窺ふ　斯る陣圖に於ては白試に(い)に一路、斥候を放つて敵の動靜を窺ふことあり黑もし(ろ)につげば白(は)に展開し次で黑(に)又は(ほ)へ攻寄せれば白(へ)に開かん趣向なり之に反し黑(ほ)又(は)へうつ手にて(と)へ詰めれば白(ほ)にの㊀で善し水へ戻りて黑もし(ろ)につがずして(ほ)へつげれば白手を拔きて可なり少し〳〵打得の氣味あらん　**▲白㊀の口傳**　白は何故に先づ(は)の要地を占めずして(い)に斥候一路を放ちしやと云ふに曰く理由あり例せば白先づ(は)にうち黑(に)へ詰めたりとて假定せよ後に白(い)に窺ふも黑は(ろ)につがずして△印へ壓へ付け白を重くしてうつ趣向に出でん又黑(に)へ詰める手にて搦手より(と)に攻寄せたりとして後に白(い)に覗くも、やはり黑は(ろ)につがずして(ほ)へつげん白もし(に)へ抑へれば黑は(ろ)につぐべく斯くては前段に說明せし如く黑より(と)に詰められたるとき白單に(ほ)に下るよりか其形甚だ不味からずや　**▲白㊉とし㊀の變化**　扨又右の如く白(い)に覗き黑(ほ)へつけたるとき白(に)へ抑へずして(ろ)に切らば黑は△印へはね一子すてゝうつ手段あり又前へ戻りて白(は)に對し黑(と)に詰めたるとき白(い)に覗かずして單に(ほ)へ二間開きせば黑(い)にあけつぐべし黑の形整へるに反し白の形の滯滯なるは一見明白なるべし斯く說き來れば白最初(い)に、斜き敵の動靜を窺ふの深意を了解するに難からざるべきなり

其十四　（第十四圖）

▲白、裏路亘りの計　黑(一)と白の缺陷を窺ひしとき白(い)につがんか黑より(ろ)へはねられて白は隅の地を掠められたる上後手となるを見かれず依て白、外部の機線により隅へ封じられても不利ならずとするときは單に(は)へこすむ手段あるべく黑(い)に突出せば白(に)へ下り黑(ほ)へ脫け出づれば白(へ)の裏門を締切りて善し斯くすれば白(と)のはねや殘らん其時黑(ち)に壓へるも又(と)に下るも白は必ず手を拔き他をうつの手段に出ざる可らず　**▲黑㊉の變化**　白(は)にとすみ黑(い)へ突出すべき手にて(に)へ並ぶも或は又(へ)に抑へても白は必ず(い)につぐべし如何に變化するも白の方可なるや必せり黑又(ほ)に脫け出づる手にて若しも(へ)に下る如きことあらんか夫れこそ白より(ほ)に抑へられて死となるべし

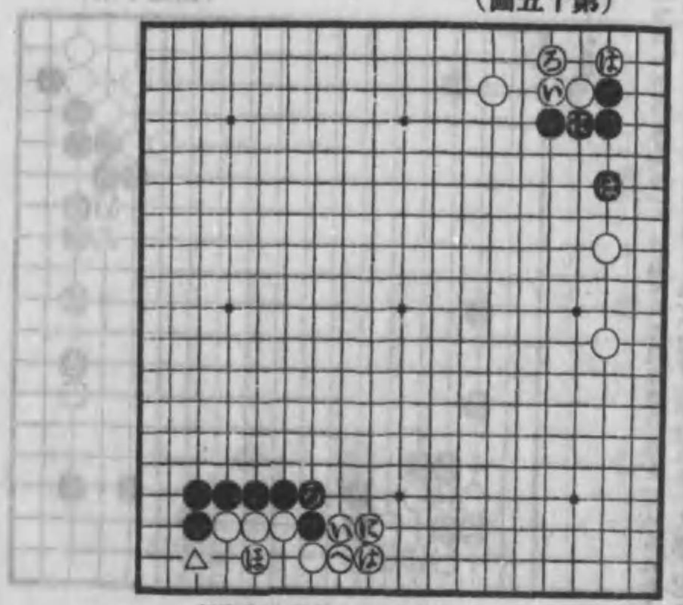
（第十三圖）



（第十四圖）

其十五（第十五圖）

▲白(ろ)のこすみ　本圖に於ては白(い)へ引くは最も見受くる所なるが寧ろ(ろ)へこすむ方働きあらん(は)の はねの得點を以てなり斯くて黒(に)へつげば白(は)にはねまた黒(に)につがずして(ほ)へ飛ぶも白はやはり(は)にはねまた若し又黒(に)又は(ほ)にうたずして單に(は)へ下れば白(ほ)へ詰めよ執れ にしてる黒を攻むるの手段あるべし但し白(い)(ろ)の得失は一概に斷定し難けれど多くの場合(ろ)へこすむ方利なるが如し



（第五十圖）

其十六（第十六圖）

▲白(に)の働き　本圖に於ては白(い)へはねまた黒をして(ろ)につがしめ置して白手を抜くか 或は(は)へかけつ直ぐ抓して うつことも あれど同じ後手に爲ならば(い)へ はねるよりは一歩進く(に)へ飛ぶ方 働きあらん其時黒(ろ)につげば白(ほ)に守る方(い)へはねまた次で(ほ)に守るよりか一路進み居る丈け 利合 善かるべし 黒もし(ろ)へつぐ手にて(い)に備えれば白(へ)に決りて善し

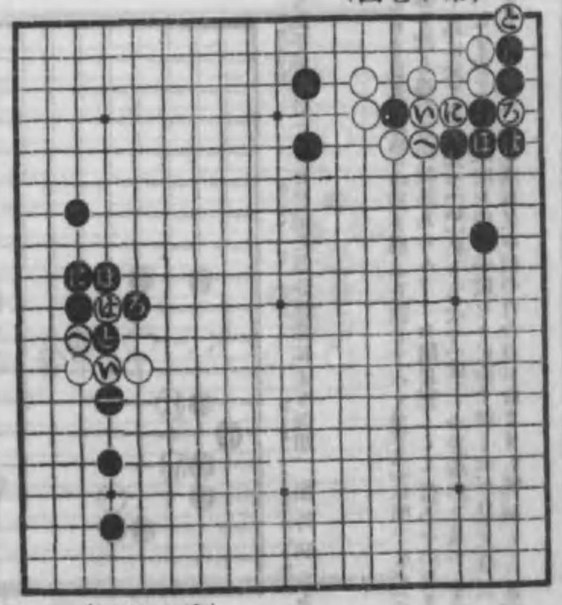
（第六十圖）

其十七（第十七圖）

▲白(ろ)切の働き　斯る場合に白單に(い)へ一子を圍ふは實戰に於て毎度見受くる所なり併し先づ(ろ)を切る手段あり黒(は)に抑へれば白(に)へあて黒(ほ)につぎたるとき白(へ)へ衝當る方働きありとす黒(は)へ掛ける手にて 單に(ほ)へつげば白(い)に一子取置き後(と)へはねる得あるべく 或は又場合により先づ(と)には ね餘る後(い)へうつこともあらん 但し白先きに(と)へはねれば善により黒は二目案てる 覺悟にて(ろ)の一子を取らす(い)へ引きて一子を活かす手段あることは豫て覺悟せざる可らざるなり

其十八（第十八圖）

▲白(は)の意味　此場合に於ては黒(一)へ覗き白(い)につぎたるとき黒(ろ)へ飛び白を攻むる絶前あり斯くては味方の不利と思はんには白(い)につがずして(は)へつける手段あるべく黒(に)へ引けば白(い)につぎて善し又黒(ほ)へはねれば白(ろ)にのび黒(い)に突出せば白(へ)へ衝當り黒(と)を切れば白亦(に)を切りて一子を殺にすべく又黒(と)を切ちすして(に)につげば白(と)につぎて可なり要するに黒の思ふ通り白單に(い)につぎ敵に(ろ)に働かるとは損なりと思ふとき(ろ)の飛を防ぐ爲め(い)へつがずして先づ(は)につける次第にて其結果白(い)へつぐことゝなれば 自ら活形を備へ得べきなり



（第七十圖）

（第八十圖）

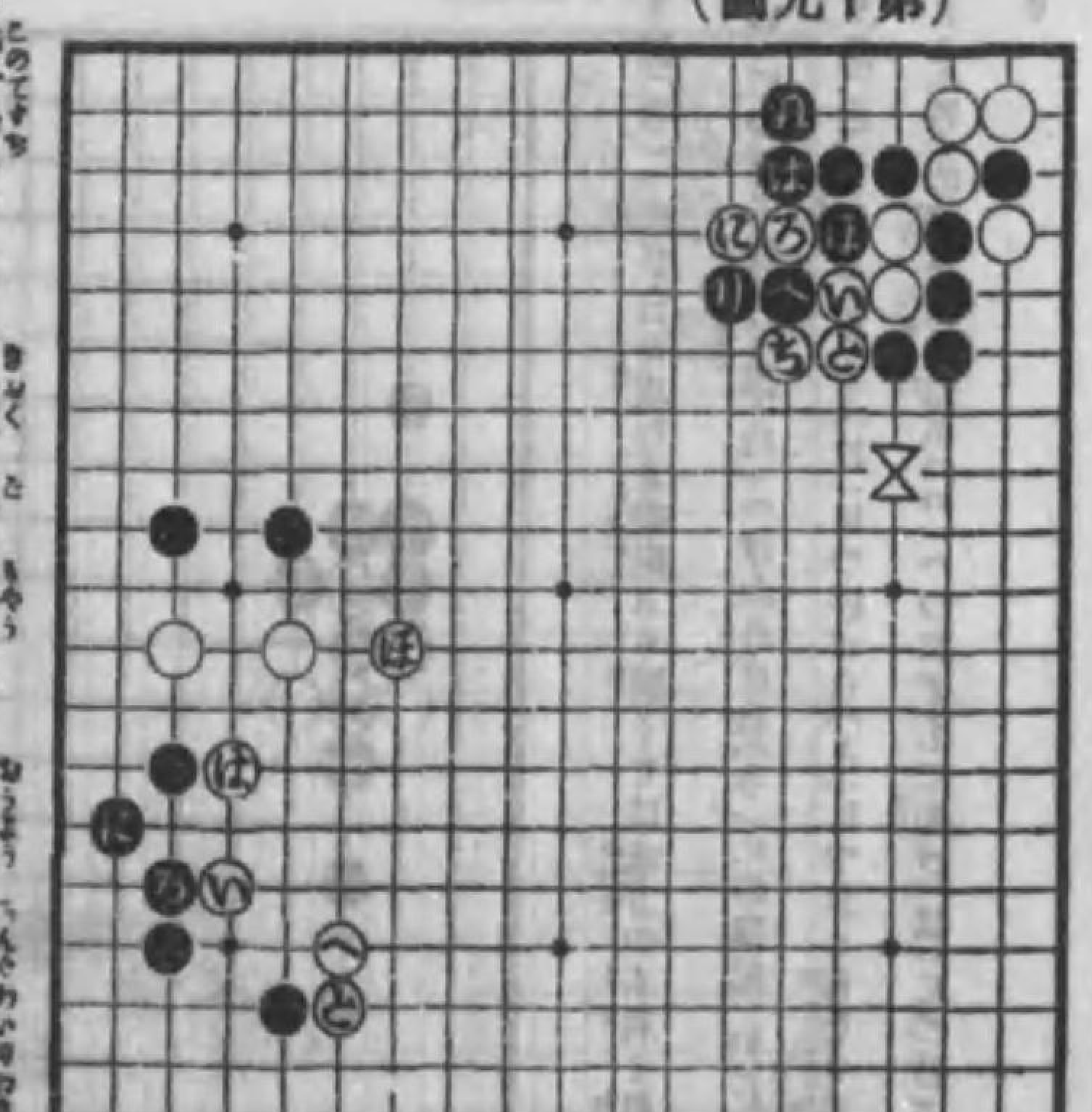
其十九（第十九圖）

▲黒白の戰法　本圖に於て白(い)へ曲るは惡手にして必ず(ろ)へ飛ばざる可らず黒の應手如何にと云ふに黒もし(は)へのびれば白も亦(に)へのぶべきが故に黒は勢ひ低地を這はざるを得ず依て黒(は)にのびずして先づ(ほ)に出で白(い)へ抑へ黒(へ)を切り白(と)に逃げ黒(に)に(ろ)の一子を擒にせしとき白(ち)へ曲るべし斯くて黒(は)に一子取るか或は(り)へつぎたる其時は局勢如何にも因れど先づ⌛印邊にうちて右側の四子を攻むる手段に出づるを可とせん▲黒(に)の手筋　初めに戻り白(ろ)へ掛けしとき黒(に)へつける手筋あり此時白(は)へ下れば黒(ほ)に出で白(い)に抑へ黒(へ)を切り白(と)に出でしとき黒(ぬ)へはね「しちやう」に掛けて擒にすべし形は前のと同じなれど白(は)ののびいしを一手餘分に取り得る丈け黒の利益なるべく白より右側の四子を攻められしとき多少讓歩しても、得失を償ふに足るべし▲白(は)の變化　黒(に)へつけしとき白(は)へ下らず(へ)へ竝ばんには黒(は)へ亘りて然るべし黒(に)のつけ必ずしも妙なりと云ふに非ざれども此手筋あることを記憶し碁の模樣により應用、案外利益を得ることありと知るべきなり

其二十（第二十圖）

▲白(い)の效果　圖の如く白、前後に敵を控え早く自ら收まらんとするときは先づ(い)の肩を覗ふを法とすべし黒(ろ)に應ずれば(白)(は)へつくべし斯くなれば白は自づから眼形を備ふると同時に黒の模樣を消し得たるの效果あらんドーセ隅は堅くして打込みのなき處ゆへ右の如き手段に出づるを可とすべし▲黒白兩軍の戰略　扨て黒に於ても白先づ(い)にうち來て(は)へつけ活形を具へらるゝを嫌はんには位低くして隅の角には(ろ)を守る程堅からざれども(に)へこすみて白の趣向を挫く手段なきに非ず斯くせば白は(ほ)へ飛ぶ位のものならん併し白に於ては兎に角(い)と(に)と交換し置けば機を見て(へ)へ掛け或は又中部の白の形が收まりし曉割しく(と)へつける手段あるを以て(い)の點撃は自づから一法なりと心得て善し

（第十九圖）



（第二十圖）

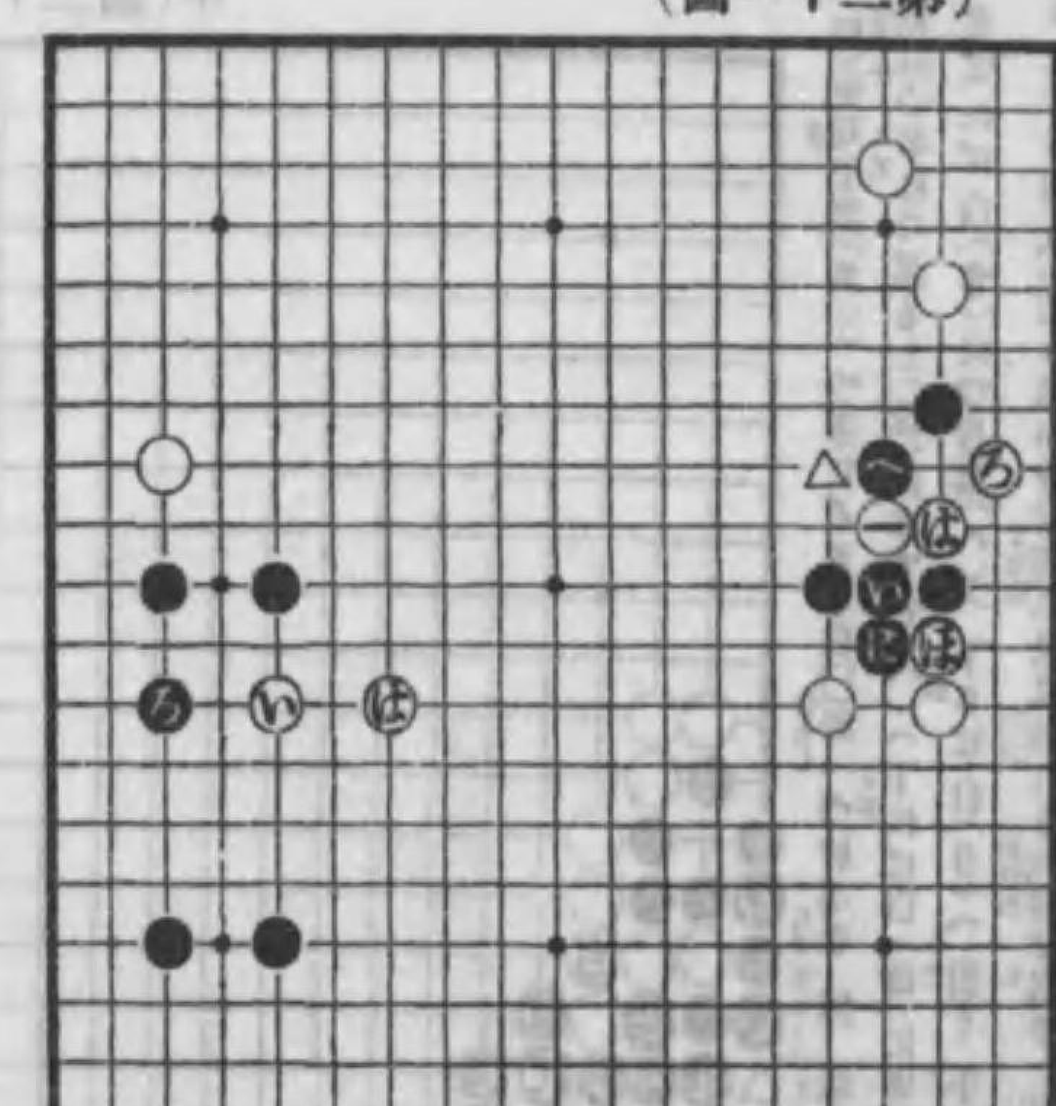
其二十一（第二十一圖）

▲白(一)の探り　白試に(一)と探りを入れたる其時に黒(い)へつがんには白直にうつか或は機を見て(ろ)へ飛込む手筋あらん然るに斯く輕く(ろ)へ飛込むとを知らず敵の堅壁に沿うて(は)に遮斷を試みるものあるは屢々見受くる所なれども是れ俗手にして甚だ不可なり黒に於ても此處はなか〳〵六ケしき處にて模樣により(い)へつがずして(は)に抑へて置く方善き場合もあり其時白(い)へ突出せば黒(に)に抑へ白「しちやう」の如何を見て(ほ)を切れば黒(へ)へふくれ而して白の二子の「しちやう」に取れぬ其時は△印へ桁に掛け白を絞つてうつの手段肝要なるべし

其二十二（第二十二圖）

▲白の削地手段　本圖に於ける白の削地手段は淺く(い)に侵掠するを法とし而して黒多くは(ろ)へ受くるを通形とす斯くて白手を拔くこともあり或は又前面の黒白兩軍の模樣により施すべき手段は一ならざれども先づ此圖丈けに就て云へば(は)へ飛ぶ位のものならん

（第二十一圖）



（第二十二圖）

其二十三（第廿三圖）甲圖

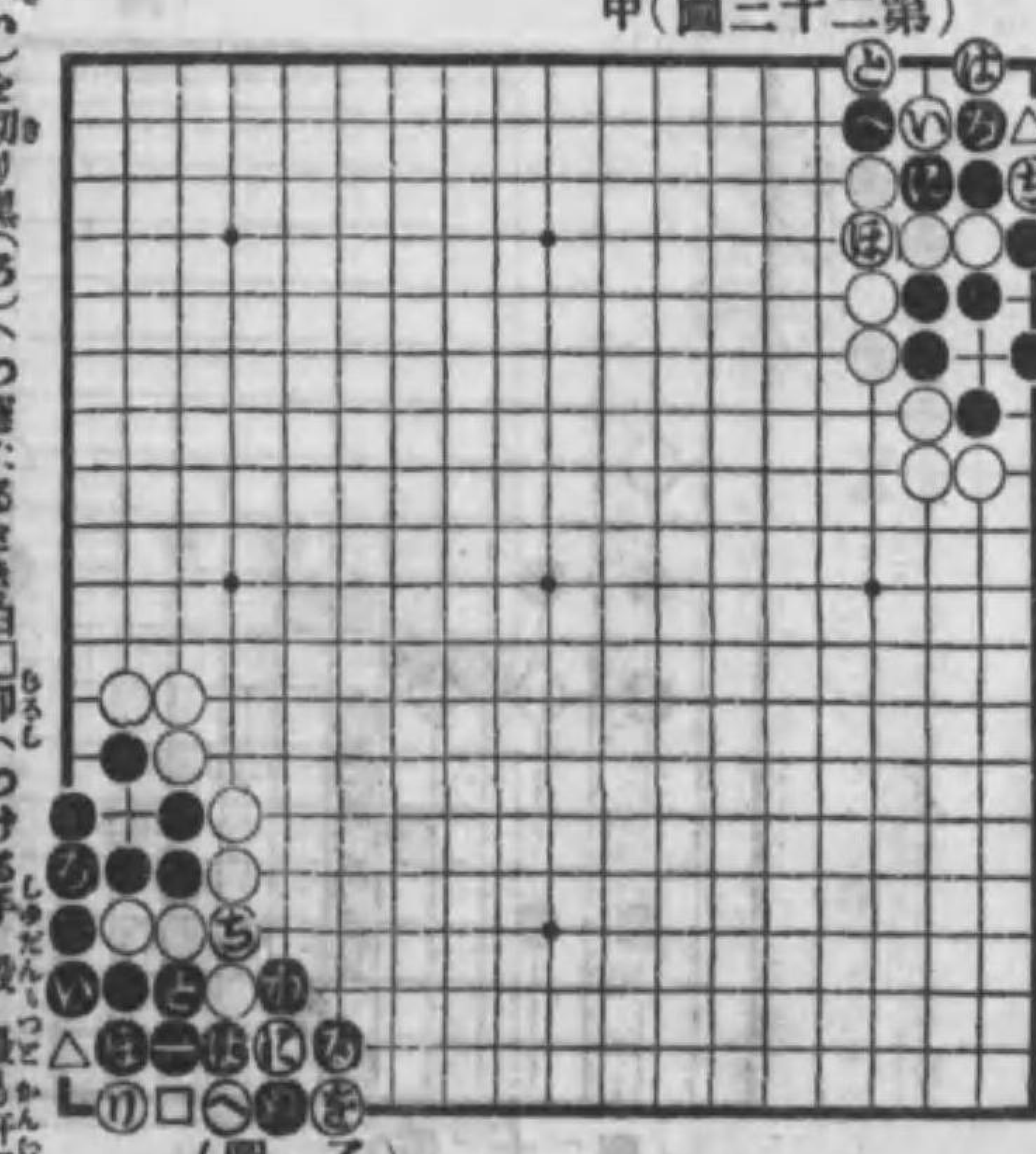
本圖の如き場合に於ては白は決して單純に黑を取ることを得ず如何にしても劫にはなれど劫にする就て自ヅから巧拙あり白は普通（い）へとすみ黑（ろ）に受け白（は）へはね黑（に）に割込み白（ほ）へつぎ黑（へ）を切りしとき白（と）へはねて劫仕掛にするは能く見受ける所なれども斯くの如くして白もし劫に負けたらんには其損害測る可らざるものあらん斯る場合には白（い）へとすまずして先ヅ△印へ置く手筋あることを知らざる可らず此時黑（ろ）に抑へれば白（ち）に打缺きて善し又黑（ち）につげば白（い）へとすみ黑（ろ）に遮りたるとき白（は）へはね互りて劫とすべし是れならば白萬一劫に負けたりとて其損害前者に比すれば輕微なるべし尙は口傳あり次の圖に就て說明せん

▲白劫仕掛の巧拙

乙圖

▲黑●の口傳　白△印へ置きたるとき若し上の黑の手數多ければ黑は（い）へつがずして圖の如く（一）へとすむ手なきに非ず其時（い）を切り黑（ろ）へつぎたるとき白□印へつける手段最も肝要なり黑（は）に出づれば白（に）に抑へ黑（ほ）へあてれば白（へ）に引くは無論の事にて黑もし（ほ）にあてず（へ）へ下れば白（ほ）にあてて善し▲黑の運命　又黑、白より（に）へ抑へられたるとき一應（と）へあてれば白（ち）につぎ黑（へ）へ下らば白（り）へ引く手あるべく黑又（へ）へ下らずして（り）に抑へれば白（へ）へ引き黑（ぬ）に二目取りしとき白（へ）にうちかけば則ち黑は孰れも缺目と爲りて運命コ、に盡きなん▲白の成算　併しながら黑（ぬ）に二目とり白（へ）をうちかきしとき黑は（る）へはね出し白（を）に一子取れば黑（わ）へあて白又（わ）へつげば黑□印へ一子取りて逃出す手段あるを以て最初白□印へ置は黑が外へ逃出しても尙捕獲し得る丈の見込ある場合ならでは不可なりと知べし▲白□印の意味　白□印のつけの意味如何にと云に單に（は）に抑れば黑（一）へとすむは上の黑の手數多きときなるを以て□印へ下る手あらん斯なれば如何にしても隅に一眼ある譯なり□印のつけの忽にす可らざる所以を知に足べし

(第二十三圖)甲



(乙圖)

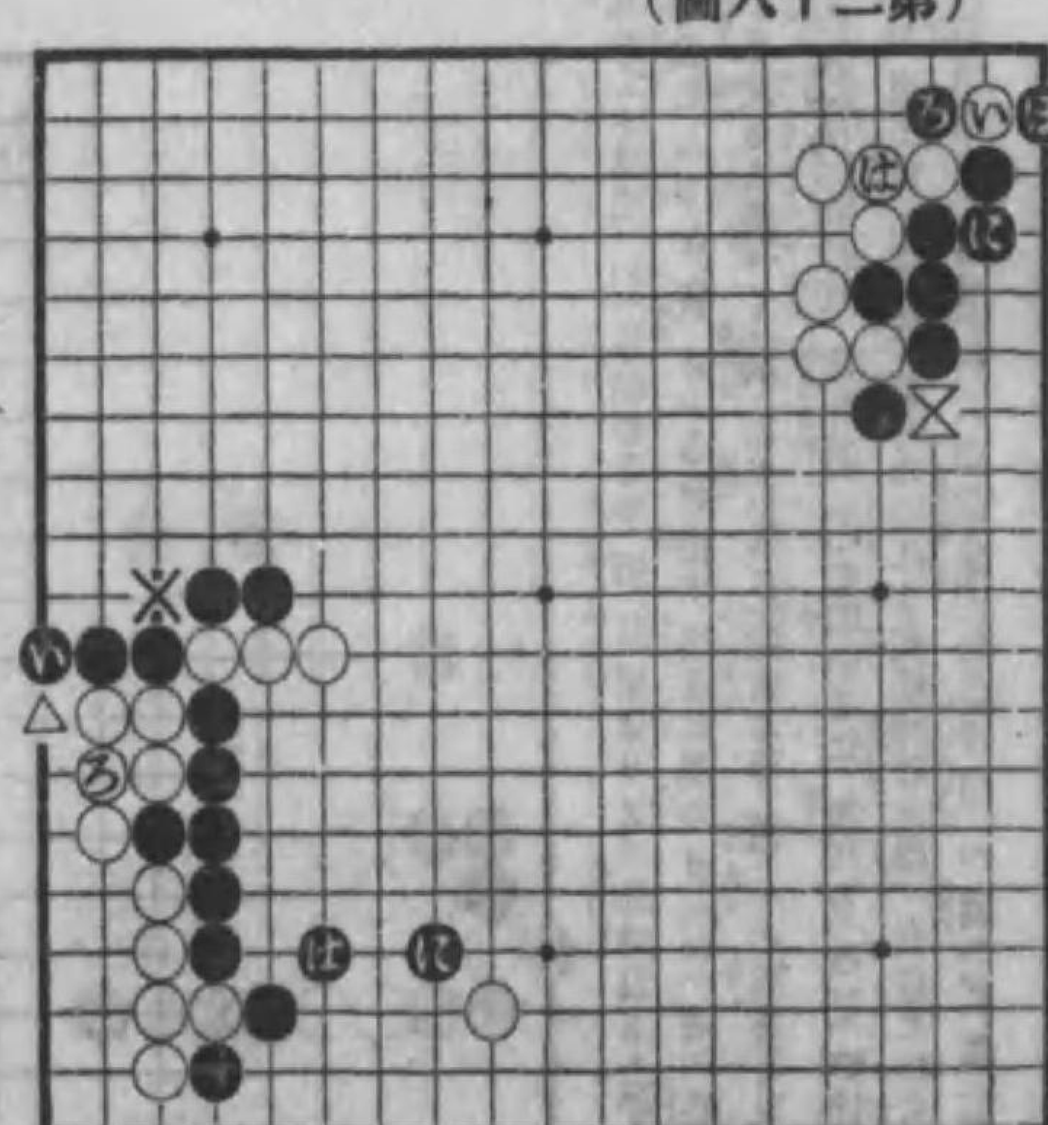
其五（第二十八圖）

本圖は三間挾み大けいま冠の場合に折々出來る所の圖なり白單に（ろ）へ下らんか黑は無論手を拔くならん依て白（い）に二段ばねし黑（ろ）を餘り白（は）につぎ黑亦（に）をつぎたるとき白手を拔く手段に出づることあるべし

▲白㋑二段ばねは手拔の趣向

▲黑㋩の變化　黑（に）をつがずして若しも（ほ）へはねる如きことあらんには白は宜しく⌛印を餘るべし斯くすれば黑には（に）の切疵ありて僅に⌛印の切石を取る手段に出づる能はざるが故に白は如何やうにも其切石を捌くことを得べし黑に於ては多くの場合（ほ）のはねを見合せ（に）へつぐことと心得然るべきなり

(第二十八圖)



(第二十九圖)

其六（第二十九圖）

扨て本圖の如き黑軍の接戰狀態に於ては一方✕印の敵を凌ぐと同時に前方に於ける一縱聯隊の缺陷を補はざる可らざる危急の場合に迫れるものとす如何にせば敵の未だ迫り來らざるに先だち前後兩軍の凌ぎを爲し得べきやと云ふに徐に（い）に下りて（ろ）の打込を狙ふの外に策ある可らず此一角を崩されては白の一大事、敵の狙ふ（ろ）の駄目を自ら埋立つる外なかるべく即ち黑は先手にて✕印の敵を凌ぎ次で前方一縱聯隊の急に赴きて（は）若くは（に）に備ふることを得べきなり是れ豈に一擧兩全の妙策に非ずや然るに先手なりとて漫然△印にはね置くものあるはマヽ見受くる所なれども✕印の危を防ぎつゝ同じく先手にて（い）へ下る手段あるを以て△印のはねは須らく考慮を要すべきなり

▲一擧兩全の妙策

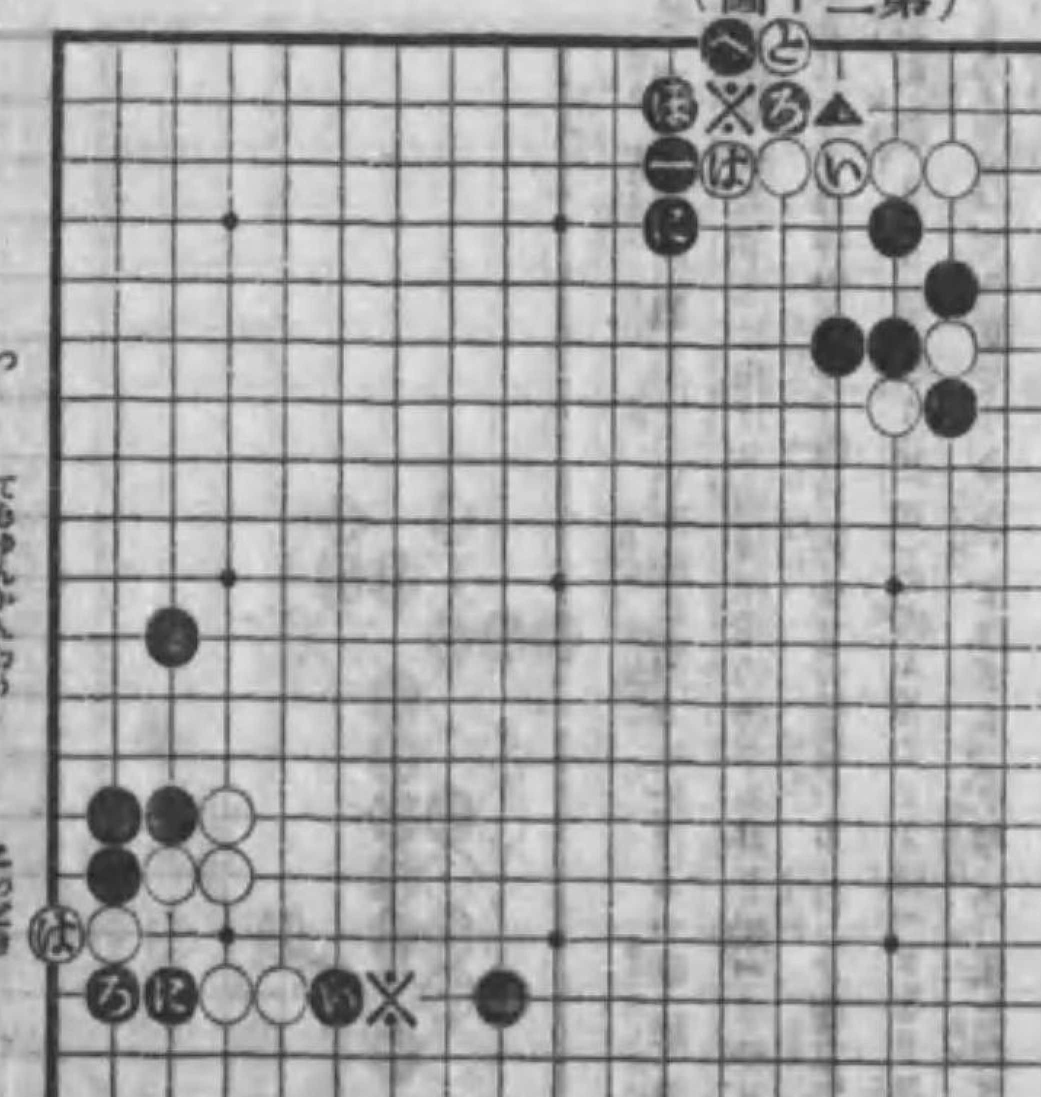
其七(第三十圖)

▲黒(一)▲印の隙を狙ふ　黒(一)と詰め寄せたるは暗に▲印の隙を狙へるなり扨て此缺隙を窺はれたる其時は白は無論(ろ)に抑える手なきを以て(い)につぐ外なく左すれば黒は悠然(ろ)に引きて聯絡を保ちつゝ白を攻むるの手段に出づるや必せり故に白もし之を防がんとせば(は)に突當る外なし斯くて黒(に)に立ちても或は又(ほ)に下りても手を抜くを常とす尤も黒(ほ)に下りしとき白手を抜けば▲印の置き引けは殘れども併し前のとは違ひ其時白×印へ突出し黒(へ)に亘りしとき白先づ(と)に打缺き追落しの趣向を利用して僅に隅に活くる手段あるを以て何の差支へもあることなし

其八(第三十一圖)

▲黒(ろ)づけの深意　本圖の如き對陣に於て黒單に(い)に詰寄せれば自ら後手と爲るを免かれず若し夫れ(い)の詰を利し尙且つ先手を取らんとすれば先づ黒(ろ)につけよ斯くて白(は)に亘りを止めしとき黒(い)に詰める手順肝要なりとす此時白もし手を抜かんには(に)へのびて亘らるゝ手あるを以て後手と爲るも詮なし尙は此處に一子を費さゞるを得ず然るに黒先づ(い)詰め然る後(ろ)へつけたらんには白は(に)へ突當り黒をして(は)に亘らしめて打つ手段もあるべく或は又(ほ)に突當る等種々の策あるを以て黒は兎に角先づ(ろ)につけ敵の應手を試むる方妙味あるべきなり▲白(は)の變化　扨又黒(い)に詰めるに先だち(ろ)へつけたるとき白もし(に)へ突當り黒をして(は)に亘らしむる手段に出づるとせんか黒に於ては(は)亘りの殘れる丈け利益を得、白はそれ丈け損したる割合と爲るべく此場合に於ては黒は果して(い)に詰めるや否やは疑問ならん白又(に)へ突當る手にて×印へ開かば黒(に)突當りて可なり

(第三十圖)



(第三十一圖)

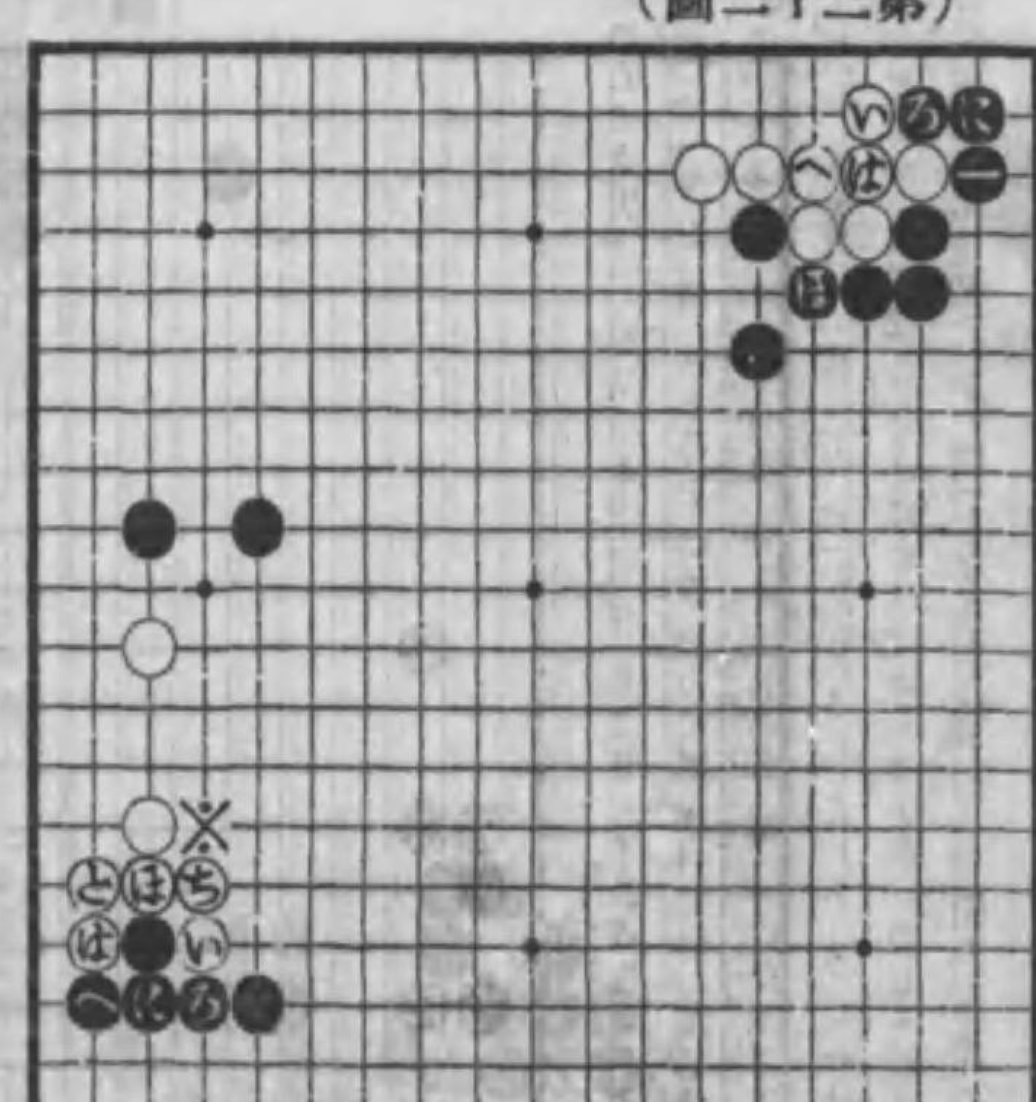
其九(第三十二圖)

▲白(い)は良手　本圖は先手取り云々と云ふ程にはあらず且つ白(い)は何となく控え減りするかの如き感なきに非ざれども實は良手なり黒もし(ろ)にあつれば白(は)につぐも黒亦(に)へつぐとすれば則ち白は先手と爲るを得べきなり斯る場合に白(ろ)抔へ下るは極めて暴し若し然るときは黒(は)を切り白(い)に抱えなば黒(は)にあて先手にて穴疵を埋めらるべく又白(へ)につがば黒(に)へ下るなるべく如何にしても白は後手となるを免かれざればなり

其十(第三十三圖)

▲白の攻守手段　圖の如く前後に敵を控えたる二目を棄置きて取らるゝ氣遣ひなき時とても嚴しく攻立てらるゝ懸念ある場合は白は如何に其補ひを爲すべきやと云ふに＝(白(は)づけの手段は棄石の例參照)白先づ(い)につけ黒をして(ろ)に受けしめ而して白(は)に挾むを善しとす斯くて黒(に)をつぎたるとき白手を抜くこともあるべし(は)の一子は自ら味方の二子を掩護しつゝあればなり尤も後手にはあれど黒(に)をつぎたるとき白尙は(ほ)に突當り置くも一策にて可なり大なる手なりとす▲黒(に)の變化　黒もし(に)をつがずして(へ)に受けなば白(ほ)に突當り黒(に)をつぎたるとき白手を抜くを常とす▲黒亦策あり　白(は)に挾みたるとき黒散じ裏を掻きて(ほ)に突當る策なきに非ず白(と)へ引き黒(へ)に抑え白(ち)にあて黒(に)をつぎ運びと爲るべく斯くては白の形重く爲るのみか×印の切疵殘るを以て白は尙ほ一手の補ひを要せん要するに白(い)のつけと黒(ほ)の突當りは即ち兩軍先手爭ひの意味を含めるものと知るべきなり

(第三十二圖)



(第三十三圖)

其十一（第三十四圖）

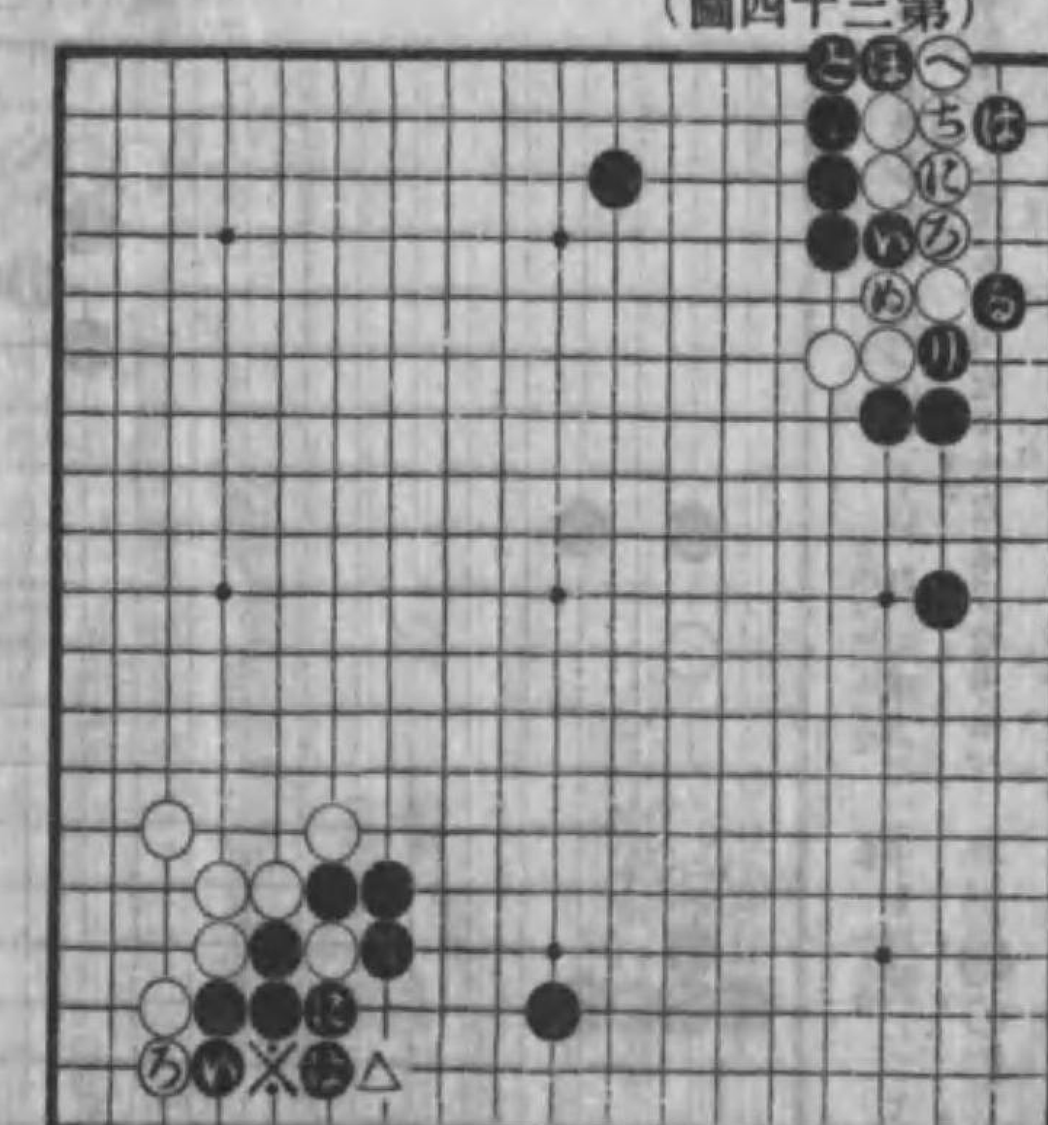
▲黒ほは敵の喉に刄　本圖も亦々、實戰に見る所なり斯る場合には黒先づ(い)に出で白(ろ)に受け黒(は)に置き白(に)をつぎ黒(ほ)へはね白(へ)に抑え黒(と)につぎ白亦(ち)につぐ外なく即ち先手は黒の手に歸するのみならず黒(は)は敵の喉に刄を擬しつゝあるに似ずや後に黒(り)にあて白(ぬ)につぎたるとき黒(る)にはねなば如何若し白、外部を塞がれて遁るに路なしとすれば(は)の一子は正に是れ腹裡の刄、以て黒(い)殊に(は)は敵の急所を衝く所以の要手たるを知るに足るべきなり

其十二（第三十五圖）

▲白×づけの妙手　本圖の如き場合に於ては白×印へつける手段あることを知らざる可らず黒もし(い)に遮らんか白(ろ)に抑えよ黒(は)に一子抱える外なかるべく即ち白は先手にて(ろ)の下りを贏ち得たる割合と爲らずや然るに白單に(ろ)に下りたらんには蓋し黒は手を拔くならん

▲黒いの變化　黒もし(い)へ曲るべき手にて(に)に一子取らば後手にはあれど白は無論(い)に引かん斯くては隅に相應の地を作らるゝ上に△印の飛を殘すの損あるべきなり白もし×印のつけを知らず左りとて後手と知りつゝ(ろ)に下るも感心せずとて其儘に捨置かんには黒より(ろ)へはねられて非常の損失を被らざるを得ず其損害を算すれば×印のつけの如何に有利の妙手なるかは思ひ半に過ぐるものあらん

（第三十四圖）



（第三十五圖）

第四　掠地結束篇

「よせ」しらべ（計算明確）

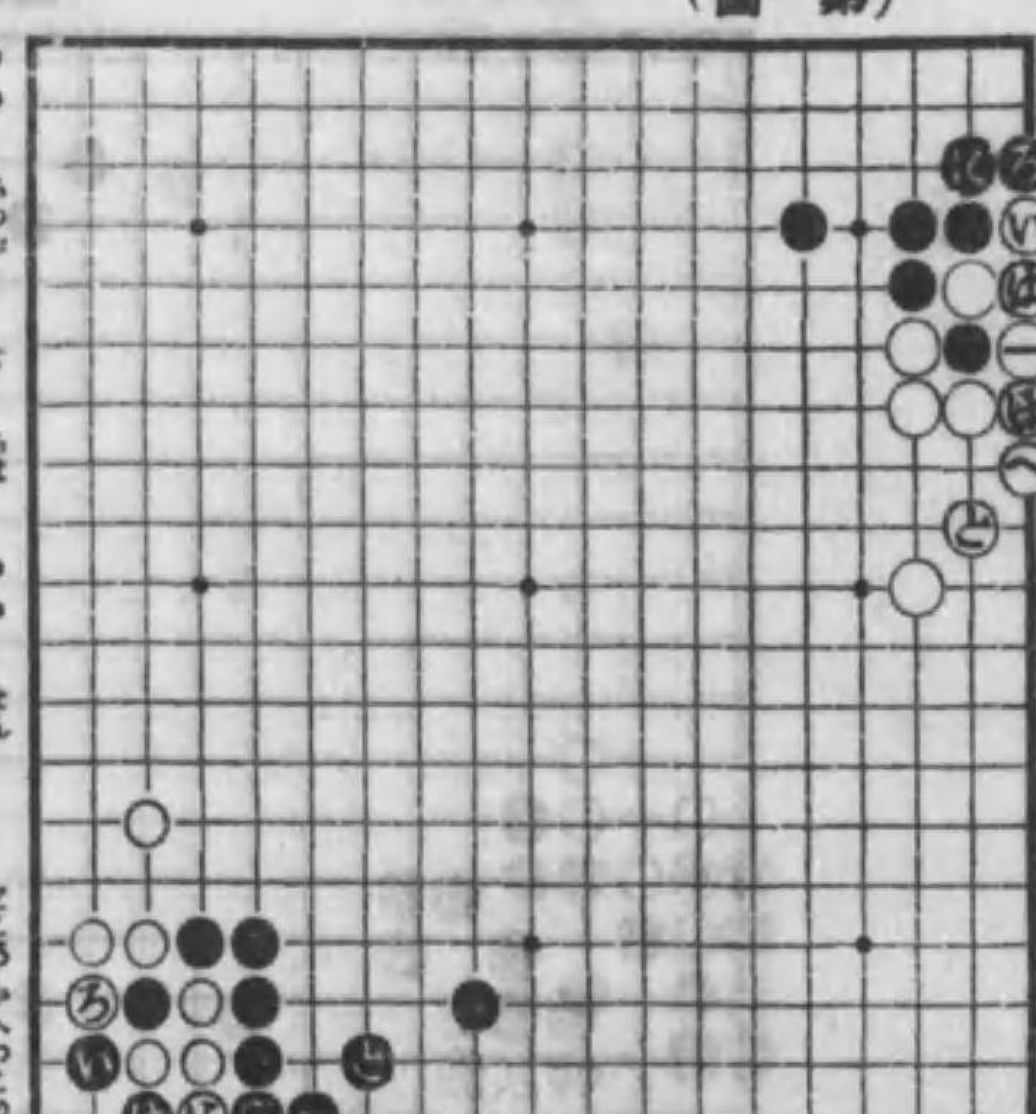
其一

▲黒白共に後手十目の得　黒白共に○●此一子の取りは劫にうつ手なしとすれば十目の得なるべし但し劫にさるゝ手ありて一路控えて打ざる可らずとせば凡そ十二三目に當るならん其計算法を示さんに假に白(一)と取り次で白(い)の畔へはね黒(ろ)（白はに切り劫に打つ手なしとして）に抑へ白(は)へつぎ黒又(に)につぎたりとせよ而して此反對に黒が(は)に一目取りたりとすれば即ち(い)(ろ)(に)の三目は黒の地と爲るべく而して一目の取りは二目に當るゆへ合せて五目の得と爲るべし加ふるに白(ほ)に下るは後手なるを以て先づ(ほ)のはねは黒の餘得として後に黒(ほ)へはね白(へ)に抑へ黒(一)へつぎ白(と)にかけつぐとすれば即ち白に取りては一目の取揚げが二目の損、それに(ほ)(へ)(と)の三目が地潰れと爲り合せて五目の損をすべき所を却て此五目の得を占めて反對に黒に五目の損害を與へる譯なるを以て即ち白に於ては(は)の一子の取りと(い)の餘得を見込み合せて十目の得と算する譯なり如何にも繁雜の計算法なれどもこれが昔時からの仕來りゆへ心得までに記すこと斯の如し以下總て此計算に倣ふべし

其二

▲黒いは先手二目の得　本圖は實戰中最も多く出來る形なるを以て能く覺え置きて應用を怠る可らず黒先手の場合單に(ほ)へ下り白をして(に)に受けしめたると形も割合も同じなれども併し圖の如く打てば確に先手と爲るの得あり黒先づ(い)へはね白(ろ)に取り黒又(は)へはね白(に)に抑へたるとき黒(ほ)へあて先手を取るを肝要とす若し白先手にて(ほ)にはねつぐとすれば黒に(へ)(と)の二眼を埋めさするを以てやはり白先手二目の得と爲るべし

（第一圖）



（第二圖）

其の三

◀白のつけ先手六目　黒この形勢をみて△に置く。

先手に打つとすれば(ろ)に打つことになるが白は(い)に受けて黒は(は)に下ることになるので見合せる。黒は(は)の断点を(い)に置いて白を分断しようとするが白は(い)に置いて黒の(は)を切り離す。黒は(に)(ほ)(へ)(と)と置いて大目の地を作るが白は(ち)に置いて大目の地を作る。

其の四

◀白のはねつぎは先手四目　白(は)の点である。

黒はこれを防ぐために(に)(ろ)に置いて白の◎◎二個を取ろうとするが白は(い)に置いて黒の◎◎二個を取り以後白は(は)(ろ)(に)(ほ)と置いて四目の地を作る。

(圖三第)

(圖四第)

其の五　（第五圖）

◀先手六目の得　黒に白其の△印のつぎは先手六目の地となり白は(い)に置いて黒の(ろ)は白の手を見込みこれを防ぐ。

其の六　（第六圖）

◀白のはねは先手六目　白(ろ)のはねは黒(い)に置かれると白は(は)に置いて大目の地を作るが黒は(ち)に置いて大目の地を作る。

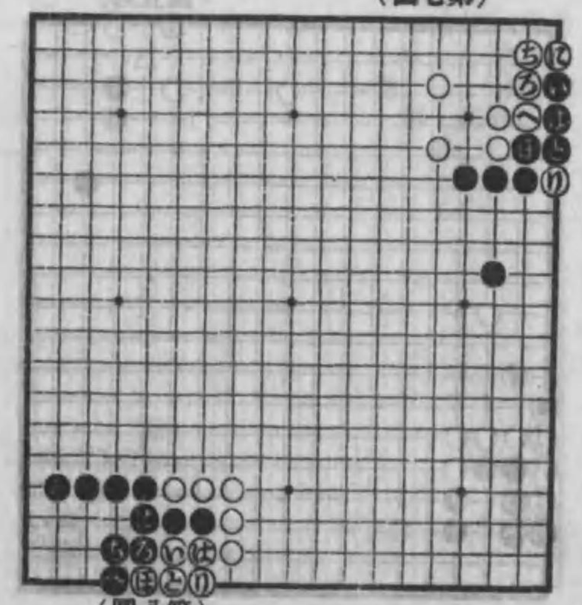
(圖五第)

(圖六第)

其七（第七圖）

▲黑(ろ)の猿辷りは先手九目　の得なり白もし(ほ)に抑へるとすれば後手なれども(り)のはねつぎを見込みて、やはり九目の得とす何さなれば自分に六目の地が出來て敵地を三眼減せばなり

（第七圖）



其八（第八圖）

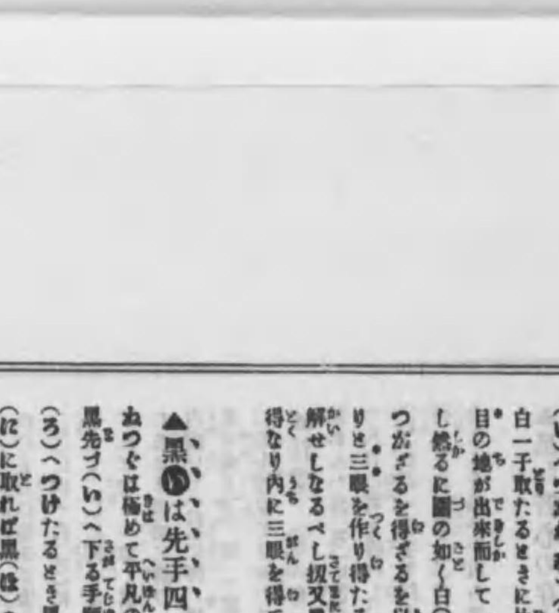
▲白(わ)は先手七目　黒打つとすれば、やはり(い)へ下る外なく後手七目の得なるべし▲注意　黒(い)へ控ふべき手にて(は)に抑へるものあれど甚だ不可なり其時白(り)へはねれば黒は勿論(と)に抑へる能はず(ろ)に控たる其時に白より(は)へつけられ單に(い)に下りたるより四目の損をすればなり

（第八圖）

其九（第九圖）

▲白(わ)の取は十一目　念の爲め此計算を示さんに若し黒に(い)へつがれ番で(と)にはねらるれば白(ち)(り)のつぎと爲りて白一子取たるときに比すれば(り)(ち)(と)の三眼が慣れて黒に六目の地が出來而して一目の取を失ふ故に都合十一目の損と爲るべし然るに圖の如く白(い)に取り次で(に)へはねれば黒は後(へ)につがざるを得ざるを以て黒は六眼潰れと爲るべく斯くて一子の取りと三眼を作り得たるを以て合せて十一目と計算する譯は既に了解せしなるべし扨又黒一子取られたる後(に)へ下るは後手四目の得なり内に三眼を得て外に先手の眼峽き殘れるを以てなり

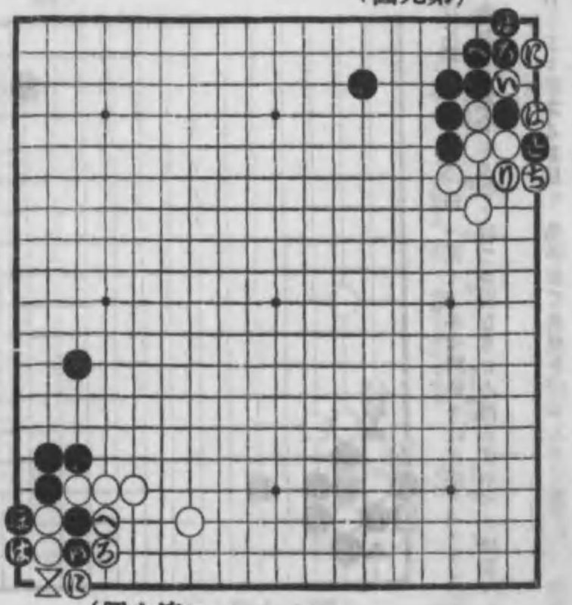
（第九圖）



其十（第十圖）

▲黒(ろ)は先手四目　本圖の如き場合に於て單に黒(ほ)へはねつぐは極めて平凡の手段にて僅に先手二目の利に過ぎず然るに黒先づ(い)へ下る手順を執らんには先手四目の得を得べし即ち白(ろ)へつけたるとき黒赤(は)につぐるを善しとす此時普通の如く(に)に取れば黒(は)へ引き白もし(に)に取らずして(は)に抑へれば黒▲印へあてゝ劫と爲す手あらん敵地に在りて劫を爭ふ是程黒に利なるはあらじ此圖も亦能く出來る形ゆへ(は)のつけを心得置くべきなり

（第十圖）



其十一（第十一圖）口傳

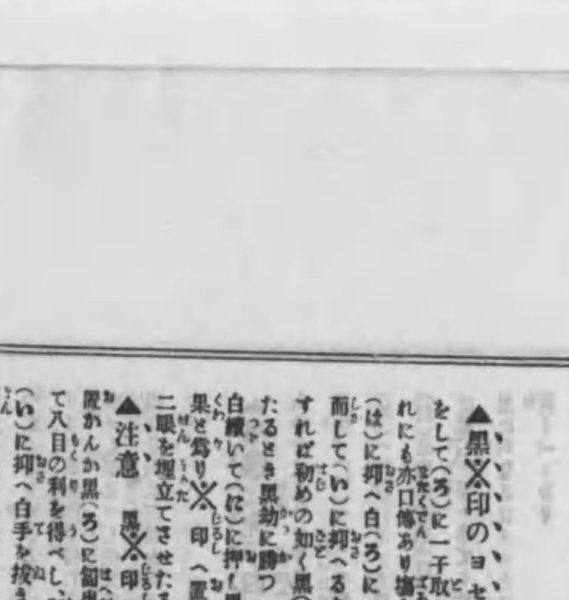
▲黒×印のヨセ　本圖に於ては多くの場合黒(い)へあて白をして(ろ)に一手取らしめ而して先手を取るを通則とすれども是れにも亦口傳あり場合により黒×印（置き白（い）に出でなば黒(は)に抑へ白(ろ)に一手取る手順と爲るゆへ（黒の先手と爲るべく而して(い)に抑へるよりは劫の都合により二目の利益あらん詳言すれば初めの如く黒(い)に抑へ白(ろ)に取り次で白×印へはねたるとき黒劫に勝つ見込なくば(は)に拔んざる可らず然るときは白續いて(に)に押！黒(ほ)に抑へ白(へ)へつぎ黒亦(と)につぎ結果と爲り×印へ置きたるに比すれば黒をして餘分に(ほ)(と)の二眼を堤立てさせたる丈け白の利益と爲れる計算明白なるべし

▲注意　黒×印の置きは誘兵とも爲る其譯は白もし其儘に棄置かんか黒(ろ)に留出す手あらん白(ち)に押せば黒(へ)へ繋がりて八目の利を得べし、斯く爲れば八月の劫にては爲れど併し黒最初(い)に抑へ白手を拔きたるとき黒(へ)に打拔く程の得にはならぬ何となれば黒(ち)のはねを失へばなり其得失如何にぞ云ふに單に此處丈けに就て云へば×印へ置く方多少利益なれど後の「ヨセ」の工合により先手を取らでは引合はぬともあり又見合はして置く必要もあり如何なる場合にも斯く打つを利なりと心得るは不可き知るべし

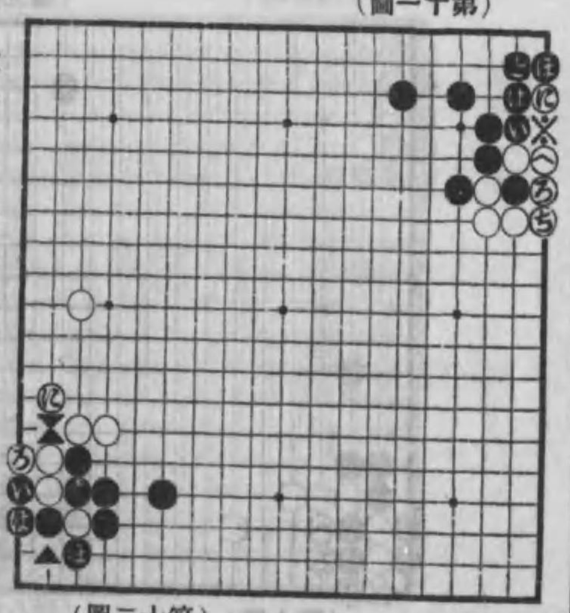
其十二（第十二圖）

▲黒白苦心の存する所　黒もし此儘棄置けば白より▲印へつけ亘らるゝ事あり此時白單に▼印へつぎは黒の術中に陷るなり黒は亘りを防ぎたる上に手を拔くことを得べければなり依て白(ろ)に抑へるを注ぎす黒(は)へつぎたるとき白(に)へあけつがば黒は(ほ)に一子取る外なく即ち白の先手と爲りて黒が(い)にはね先手を取らんとしたる策略は顯顯する結果に終るべし是に於てか黒又單に(ほ)に一子取れば白(に)にあけつがずして(は)に取込むべし黒もし手を拔けば白▲印へあてる利や殘らん

（第十圖）



（第二圖）



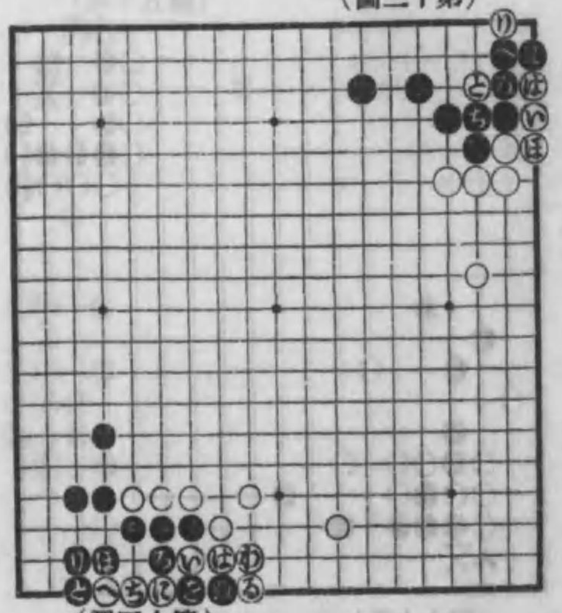
其十三（第十三圖）

▲白(い)のはねは先手五目　なり何故に黒(ろ)控へしやと云ふに若し直に(は)に抑へれば白(ろ)を切り黒(ほ)に取り白(に)へあて黒(い)につぎ白(と)へ喰き黒(ち)につぎしとき白(り)のあけつぎを爲りて我軒下に集を作らるゝ恐れあればなり

其十四（第十四圖）

▲白(い)のはねつぎは凡そ後手十一目　の得なるべし勿論これは(に)へはね(へ)（つけるまでの計算なり反對に黒が打つとすれば先づ(い)に下り先手を取る趣向に出づるを手順とす白(は)に抑へれば黒(ぬ)へはね白(る)に抑へ黒(を)につぎ白亦(わ)へつぎたりとせよ白より(に)にはねられたる結果に比すれば黒の地は八目增えて白地はあべこべに三目減りと爲るが故に白(い)のはねつぎを約十一目と計算するなり

（第三十圖）



（第四十圖）

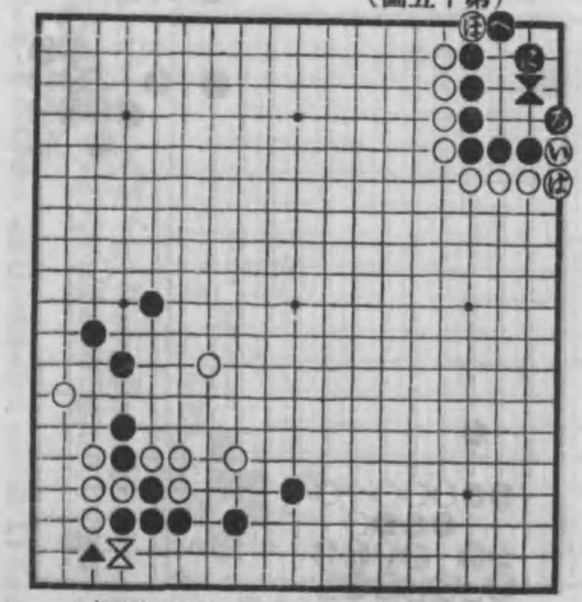
其十五　（第十五圖）

▲黒㊀は衆つぎの働き　白(い)へ(はね　黒(ろ)に　抑へ　白(は)へつぎたるとき初心の者は能く⧖印へつぐことあれど斯る場合には必ず違へ(に)にかけつぐことを忘る可らず之を名づけて誘つぎと云ふ白(は)へはねたるとき　單に(へ)へ抑へれば可なるを以てなり

其十六　（第十六圖）

▲勝敗の決此一擧　中押の碁に非ずして作り碁のときは白に於ては⧖印　黒に於ては▲印　孰れにても先きに手の廻りたる方が勝ちと云ひ做はし居る位の大切の場所にて凡そ何目の得と一概に目算は立て難けれど無限の意味を含める最　要處と心得然るべきなり

（第五十圖）



（第六十圖）

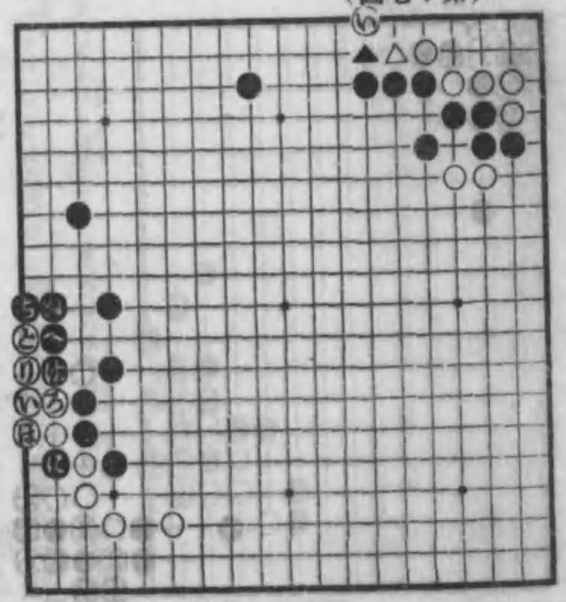
其十七　（第十七圖）

▲白㊁は手筋　白△印への引出せば黒は勿論▲印に抑へんのみ斯くては何の妙味もなし此場合白(い)にある手筋あることを記憶すべきなり

其十八　（第十八圖）

▲白(い)のこすみ　白(い)へこすむ手筋あるべし其次第は白單に(ろ)に出れば黒(は)に抑へるは無論として白又(は)へ飛べば黒(ろ)に出で白(い)へ亘れば黒先づ(に)を切り白(ほ)につぎたるとき黒(へ)へつける手あるを以て白は後手と爲るを免れず然るに白(い)へこすまんには黒之を受くるとすれば(へ)に挽える外なかるべく白(と)につけ黒(ち)に抑へ白(り)につぎ黒(ぬ)につぐ手順と爲り白先手と爲るべきなり即ち知る白(へ)に飛ぶよりは(い)にこすむの有利なるを

（第七十圖）



（第八十圖）

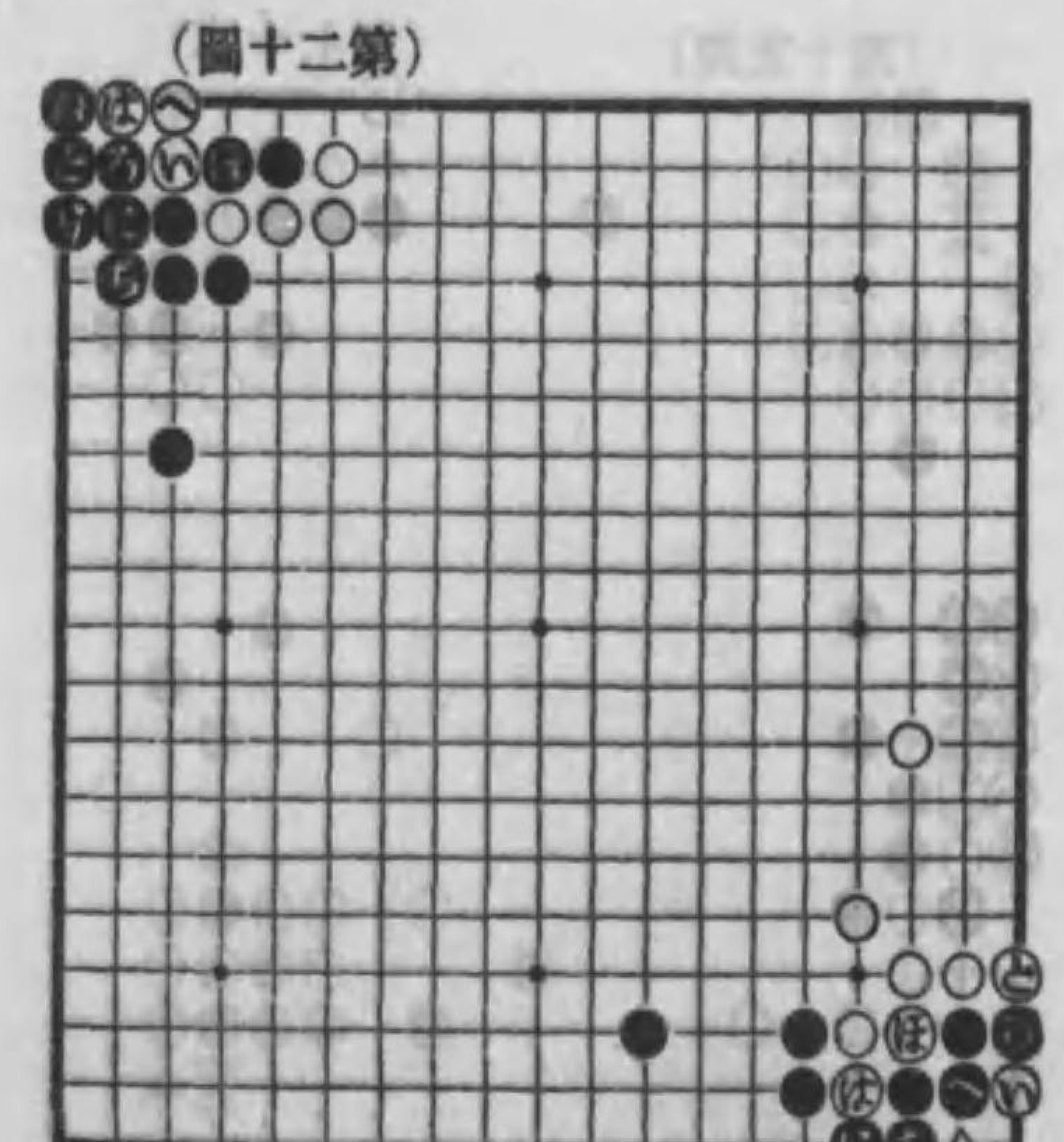
其十九　（第十九圖）

▲白(い)は良手　白先ゴ(い)に置き黒(ろ)に押へ白(は)に突出で黒(に)へ亘り白(ほ)にあて黒(へ)へつぎ白(と)に押へ黒(ち)へつぐ手順と爲るべし即ち白(い)は黒(と)のはねつぎを防ぎ且つ先手を取らん手段たるを知るべきなり白(と)に押へたるとき黒もし棄置けば白△印へはねて劫と爲す手あるを以て黒は忍で(ち)へつぐ外なし

其二十　（第二十圖）

▲白(は)の二段ばね　本圖に於ては白先ゴ(い)へはねよ黒(ろ)に押へれば白(は)に二段ばねして可なり黒の一子は旣に釜中の魚なれば其上に黒(ろ)の運命を狙ふ良手たるを失はず其時黒(に)につがば白は其儘手を抜くべく又黒(ほ)を切れば白(へ)につぎ黒(と)へ下れば白(に)に一本切を入れ黒(ち)に押へたるとき手を抜きて他に先鞭を着くべし併し黒にも亦手段なきに非ず即ち(と)へ下る手にて(り)へかけつぎ敵もし先手を譲らずんば(ぬ)に一着を試みて劫と爲す手段あるべし去りとて無算の劫仕掛けは勿論愼まざる可らず

（第二十圖）

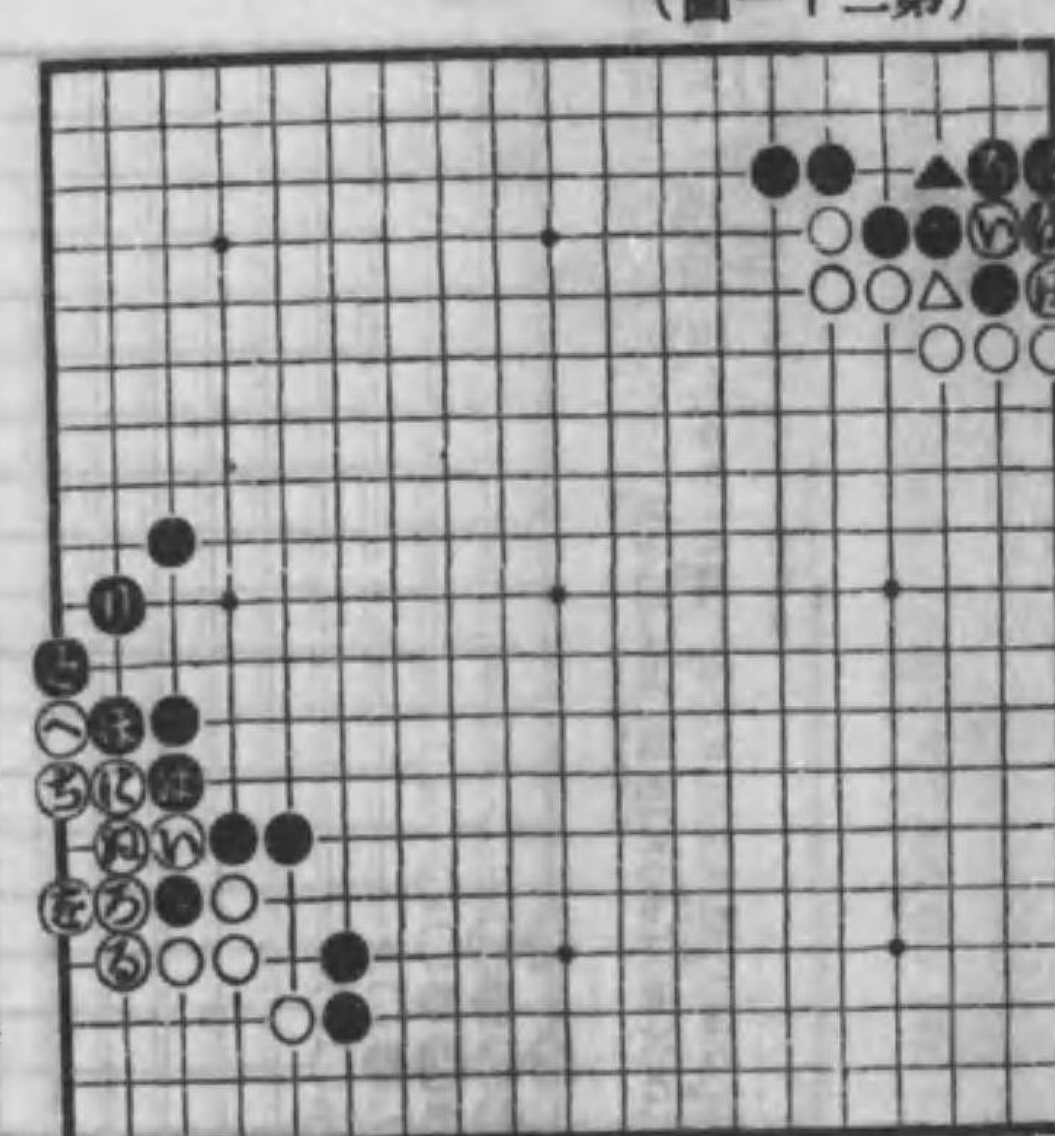


（第十九圖）

其二十一　（第二十一圖）

▲白(い)の挾みは常用の手段なり後手なれど六目の得ありとす圖の如く爲ては圖中の黒は△印につぐを得ず何となれば黒若△印につげば則ちダメ詰と爲り▲印に切られ(ろ)(に)の二子を擒にせらるゝ恐れあればなり六目の得と云ふは此一目を計算に入れたるは無論なり鍛心までに之を圖解せん黒(ほ)に押へるとすれば白△印にあて黒(い)につぐ手順と爲るべく即ち▲(ろ)(に)(は)の四眼が黒の地と爲る其上に一子の取りを免かるゝを得ん然るに白(い)に挾みて右の四眼を埋立てさせたる上一目取りたる勘定なるを以て明に六目の得たるを知り得べきなり

（第二十一圖）

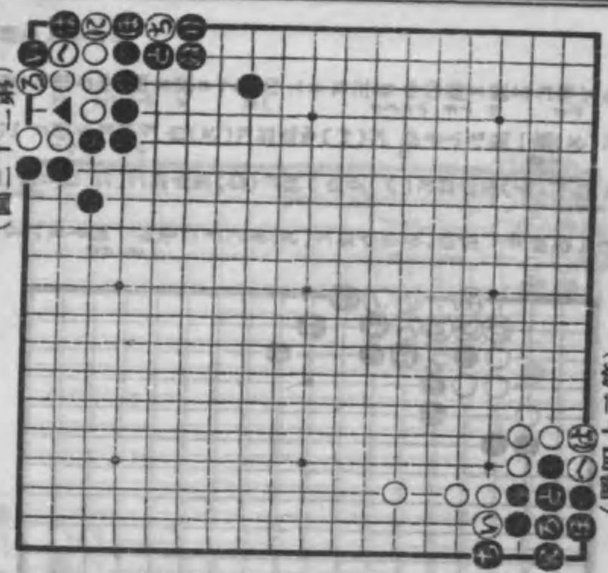


（第二十二圖）

其二十二　（第二十二圖）

▲白(い)を切るよりは(ろ)　白多くは(い)に切取りたき心地すなれども同じ後手にしても(ろ)にはねる方、得なりと知るべし黒(い)につげば打得と爲り又黒手を抜けば機を見て一目取り黒(は)に衝當り白(に)にはね黒(ほ)に押へ白又(へ)にはね黒(と)に押へ白(ち)につぎ黒(り)にかけつぐ結果と爲りて白多大の利益を占むるを得べし然るに單に白(ろ)にはねず(い)に切らんか黒一應(ろ)にのび白亦(ぬ)にのび黒(に)にこすみつけ白(る)に押へ黒(は)にあて白(を)に取る手順と爲りて前のよりは三目中の損と爲るに非ずや要するに(ろ)に切るよりは單に(い)にはねる方三目中の利益ありと心得然るべきなり

（圖四十二第）



（圖四十二第）　其の二十三

◀㊀の㊁は白の勢力圍　最も初心の戻りが多いから明せんに黒に「ぜき」の黒の㊁は白の㊀に対する場合は黒白共に十目の地に当るべく又黒の㊁は白の㊀に対する場合は黒白共に十目の地に当るべく又黒の㊁は白の㊀に対する場合は黒白共に十目の地に当るべく又黒の㊁は白の㊀に対する場合は黒白共に十目の地に当るべく

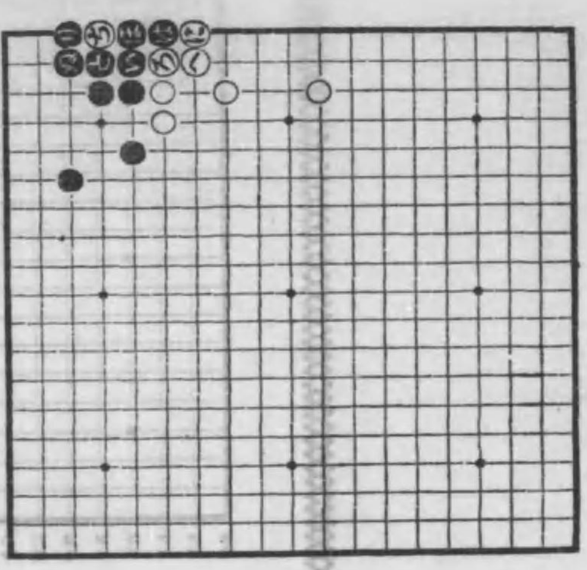
（圖四十二第）　其の二十三

◀「ぜき」は後手六目の得　黒先手なれば「ぜき」と為る注意　黒は㊀に打込むべく白は㊁に打込むべく黒は㊂に打込むべく白は㊃に打込むべく黒は㊄に打込むべく白は㊅に打込むべく黒は㊆に打込むべく白は㊇に打込むべく黒は㊈に打込むべく白は㊉に打込むべく黒は㊊に打込むべく白は㊋に打込むべく黒は㊌に打込むべく白は㊍に打込むべく黒は㊎に打込むべく白は㊏に打込むべく黒は㊐に打込むべく白は㊑に打込むべく黒は㊒に打込むべく白は㊓に打込むべく黒は㊔に打込むべく白は㊕に打込むべく黒は㊖に打込むべく白は㊗に打込むべく黒は㊘に打込むべく白は㊙に打込むべく黒は㊚に打込むべく白は㊛に打込むべく黒は㊜に打込むべく白は㊝に打込むべく黒は㊞に打込むべく白は㊟に打込むべく黒は㊠に打込むべく白は㊡に打込むべく黒は㊢に打込むべく白は㊣に打込むべく黒は㊤に打込むべく白は㊥に打込むべく黒は㊦に打込むべく白は㊧に打込むべく黒は㊨に打込むべく白は㊩に打込むべく黒は㊪に打込むべく白は㊫に打込むべく黒は㊬に打込むべく白は㊭に打込むべく黒は㊮に打込むべく白は㊯に打込むべく黒は㊰に打込むべく白は㊱に打込むべく黒は㊲に打込むべく白は㊳に打込むべく黒は㊴に打込むべく白は㊵に打込むべく黒は㊶に打込むべく白は㊷に打込むべく黒は㊸に打込むべく白は㊹に打込むべく黒は㊺に打込むべく白は㊻に打込むべく黒は㊼に打込むべく白は㊽に打込むべく黒は㊾に打込むべく白は㊿に打込むべく

（圖四十二第）　其の二十四

◀白㊀の下り一目半得　本圖の如き場合に白番なれば㊀に打込むべく黒は㊁に打込むべく白は㊂に打込むべく黒は㊃に打込むべく白は㊄に打込むべく黒は㊅に打込むべく白は㊆に打込むべく黒は㊇に打込むべく白は㊈に打込むべく黒は㊉に打込むべく白は㊊に打込むべく黒は㊋に打込むべく白は㊌に打込むべく黒は㊍に打込むべく白は㊎に打込むべく黒は㊏に打込むべく白は㊐に打込むべく黒は㊑に打込むべく白は㊒に打込むべく黒は㊓に打込むべく白は㊔に打込むべく黒は㊕に打込むべく白は㊖に打込むべく黒は㊗に打込むべく白は㊘に打込むべく黒は㊙に打込むべく白は㊚に打込むべく黒は㊛に打込むべく白は㊜に打込むべく黒は㊝に打込むべく白は㊞に打込むべく黒は㊟に打込むべく白は㊠に打込むべく黒は㊡に打込むべく白は㊢に打込むべく黒は㊣に打込むべく白は㊤に打込むべく黒は㊥に打込むべく白は㊦に打込むべく黒は㊧に打込むべく白は㊨に打込むべく黒は㊩に打込むべく白は㊪に打込むべく黒は㊫に打込むべく白は㊬に打込むべく黒は㊭に打込むべく白は㊮に打込むべく黒は㊯に打込むべく白は㊰に打込むべく黒は㊱に打込むべく白は㊲に打込むべく黒は㊳に打込むべく白は㊴に打込むべく黒は㊵に打込むべく白は㊶に打込むべく黒は㊷に打込むべく白は㊸に打込むべく黒は㊹に打込むべく白は㊺に打込むべく黒は㊻に打込むべく白は㊼に打込むべく黒は㊽に打込むべく白は㊾に打込むべく黒は㊿に打込むべく

（圖五十二第）



（圖五十二第）　其の二十五

◀黒白七目の得　黒(い)は下ざは先手七目の地より白(ろ)に打込むべく黒(は)は右白(に)に打込むべく黒(ほ)は右白又(く)に打込むべく黒(へ)は右白(と)に打込むべく黒(ち)は右白(り)に打込むべく黒(ぬ)は右白(る)に打込むべく黒(を)は右白(わ)に打込むべく黒(か)は右白(よ)に打込むべく黒(た)は右白(れ)に打込むべく黒(そ)は右白(つ)に打込むべく黒(ね)は右白(な)に打込むべく黒(ら)は右白(む)に打込むべく黒(う)は右白(ゐ)に打込むべく黒(の)は右白(お)に打込むべく黒(や)は右白(く)に打込むべく黒(ま)は右白(け)に打込むべく黒(ふ)は右白(こ)に打込むべく黒(え)は右白(て)に打込むべく黒(あ)は右白(さ)に打込むべく黒(き)は右白(ゆ)に打込むべく黒(め)は右白(み)に打込むべく黒(し)は右白(ゑ)に打込むべく黒(ひ)は右白(も)に打込むべく黒(せ)は右白(す)に打込むべく

以上黒白共に七目の地に相当すべきなり

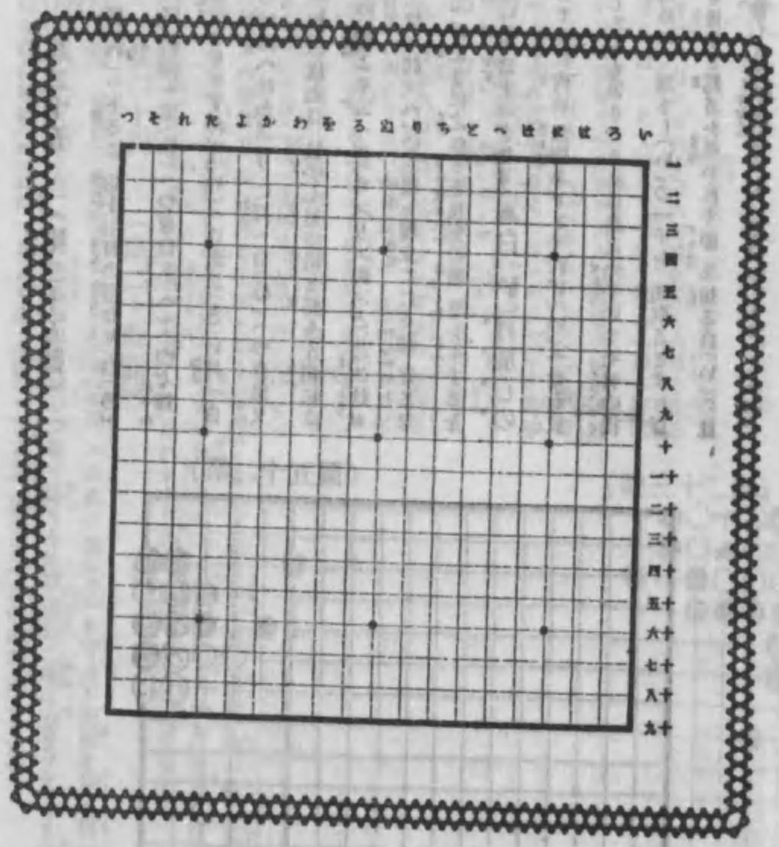
◀白(い)打放しの手段　白もし先手にて黒に角は本圖なりとすれば(い)は右段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊀は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊁は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊂は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊃は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊄は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊅は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊆は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊇は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊈は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊉は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊊は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊋は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊌は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊍は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊎は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊏は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊐は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊑は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊒は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊓は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊔は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊕は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊖は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊗は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊘は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊙は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊚は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊛は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊜は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊝は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊞は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊟は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊠は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊡は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊢は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊣は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊤は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊥は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊦は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊧は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊨は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊩は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊪は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊫は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊬は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊭は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊮は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊯は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊰は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊱は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊲は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊳は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊴は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊵は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊶は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊷は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊸は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊹は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊺は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊻は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊼は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊽は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊾は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく又白の㊿は左段しにて他に先黒より七目の得となるべく

255
235

明治四十二年十二月十七日印刷
明治四十二年十二月二十日發行
明治四十四年十一月五日再版印刷
明治四十四年十一月八日再版發行
明治四十四年十二月十一日訂正增補三版印刷
明治四十四年十二月十四日訂正增補三版發行

著作權所有

著者　雁金準
編輯兼發行者　矢野由次郎
東京市本鄉區駒込西片町拾番地
發行所　圍碁秘傳發行所
東京市芝區白金三光町四六二
印刷者　神谷岩次郎
東京市日本橋區兜町二番地
印刷所　東京印刷株式會社
東京市日本橋區兜町二番地
發賣所　東京堂
東京市神田區表神保町三番地
定價金七拾五錢



終